

富ノ森城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇二〇―六

富ノ森城跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

富ノ森城跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



2区第2面全景（北東から）



1 2区東壁 噴砂（北西から）



2 井戸44（北東から）

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、土地区画整理事業に伴う富ノ森城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

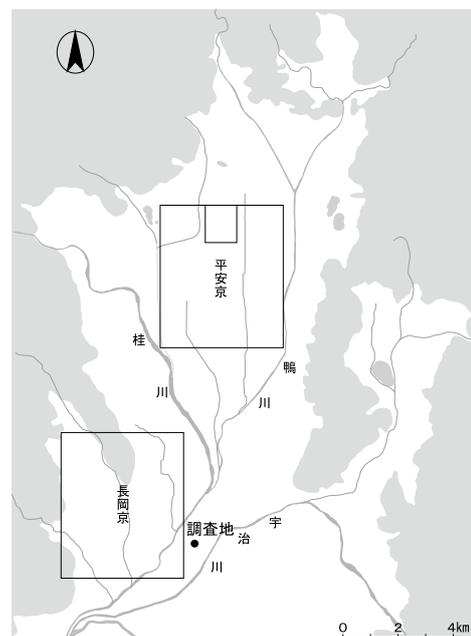
令和3年2月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 富ノ森城跡（京都市番号 19 S 141）
- 2 調査所在地 京都市伏見区横大路六反畑地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2020年1月17日～2020年7月17日
- 5 調査面積 1,652㎡
- 6 調査担当者 中谷正和・伊藤 潔・南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「向日町」・「久我」・「下鳥羽」・「長岡」・「羽束師」・「横大路」・「神足」・「納所」・「葭島新田」・「円明寺」・「淀」・「一口」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 中谷正和・伊藤 潔・南 孝雄
- 14 執筆分担 中谷正和：1～3、4－（1）・（3）～（6）、5
伊藤 潔・中谷正和：4－（2）
付章1：株式会社パレオ・ラボ
付章2：丸山真史（東海大学）・関 晃史
付章3：関 晃史
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに
本書作成には、調査業務職員及
び資料業務職員があたった。
- 16 協 力 者 調査及び報告書作成にあたり、
下記の方々のご協力を得た。
海邊博史、國下多美樹、浜中邦
弘、原 秀樹、丸山真史
（五十音順／敬称略）

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 環境と立地	3
(2) 周辺の遺跡と調査	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 遺構の概要	7
(3) 鎌倉時代後半の遺構	8
(4) 鎌倉時代末から室町時代前半の遺構	13
(5) 室町時代後半の遺構	16
(6) 安土桃山時代の遺構	18
(7) 江戸時代の遺構	20
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器類	23
(3) 瓦類	28
(4) 石器・石製品	29
(5) 木製品	30
(6) 金属製品	30
5. ま と め	31
(1) 遺構群形成以前	31
(2) 鎌倉時代後期から室町時代前期	31
(3) 室町時代後半	32
(4) 安土桃山時代	32
(5) 江戸時代	33
付章1 自然科学分析1	37
付章2 自然科学分析2	59
付章3 自然科学分析3	63

図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 2区第2面全景（北東から）
- 巻頭図版2 遺構 1 2区東壁 噴砂（北西から）
2 井戸44（北東から）
- 図版1 遺構 調査区配置図（1：600）
- 図版2 遺構 第4面〔鎌倉時代後半〕平面図（1：400）
- 図版3 遺構 第3面〔鎌倉時代末から室町時代前半〕平面図（1：400）
- 図版4 遺構 第2面〔室町時代後半〕平面図（1：400）
- 図版5 遺構 第1面〔安土桃山時代から江戸時代〕平面図（1：400）
- 図版6 遺構 調査区北壁断面図1（1：100）
- 図版7 遺構 調査区北壁断面図2（土層名）
- 図版8 遺構 調査区東壁断面図1（1：100）
- 図版9 遺構 調査区東壁断面図2（土層名）
- 図版10 遺構 建物618実測図（1：100）
- 図版11 遺構 建物363実測図（1：100）
- 図版12 遺構 水溜390実測図（1：60）
- 図版13 遺構 建物270実測図（1：100）
- 図版14 遺構 溝30・50・230・255・331断面図（1：60）
- 図版15 遺構 建物190実測図（1：100）
- 図版16 遺物 井戸44出土土器実測図（1：4）
- 図版17 遺物 土器溜100、土坑513出土土器実測図（1：4）
- 図版18 遺物 墓555・556・557、溝40、土坑400出土土器実測図（1：4）
- 図版19 遺物 土坑400・101出土土器実測図（1：4）
- 図版20 遺物 溝340・467、土坑352・275出土土器実測図（1：4）
- 図版21 遺物 整地399・401、溝424出土土器実測図（1：4）
- 図版22 遺物 墓393・402、柱穴155出土土器実測図（1：4）
- 図版23 遺物 溝331・255・256・50出土土器実測図（1：4）
- 図版24 遺物 溝97・96・230・19、墓6出土土器実測図（1：4）
- 図版25 遺物 瓦類拓影及び実測図1（1：4）
- 図版26 遺物 瓦類拓影及び実測図2（1：4、1：2）
- 図版27 遺物 石器・石製品拓影及び実測図1（1：4）
- 図版28 遺物 石製品拓影及び実測図2（1：4）

- 図版29 遺物 木製品実測図（1：8、1：4）
- 図版30 遺物 銭貨拓影（1：1）
- 図版31 遺構 1 1区第4面全景（東から）
2 建物108・土器溜100（北東から）
- 図版32 遺構 1 井戸44土器出土状況（北東から）
2 井戸44（北東から）
3 井戸44半裁状況（北東から）
- 図版33 遺構 1 墓555・556・557（北西から）
2 墓555（南東から）
3 墓556（南東から）
- 図版34 遺構 1 2区第3面全景（北東から）
2 2区第3面北東部（西から）
- 図版35 遺構 1 水溜390（南西から）
2 水溜390半裁状況（北から）
3 墓393（東から）
- 図版36 遺構 1 土坑257（北東から）
2 土坑275（東から）
3 土坑385（西から）
4 墓402半裁状況（南から）
5 建物363：柱穴458（南東から）
- 図版37 遺構 1 2区第2面全景（北東から）
2 溝230・255断面（南から）
- 図版38 遺構 1 溝50（西から）
2 溝331（南西から）
3 柱穴155（西から）
4 柱穴214（東から）
- 図版39 遺構 1 1区第1面南東部（北西から）
2 墓6（北から）
3 土坑116（北東から）
- 図版40 遺構 1 2区第1面（南東から）
2 2区第1面全景（北東から）
- 図版41 遺構 1 建物190（北から）
2 建物190：柱穴179（南から）
3 建物190：柱穴175（北から）
- 図版42 遺構 1 溝30・230合流部（北東から）

2 溝230断面（南西から）

3 集石330（北東から）

図版43 遺物 井戸44、土器溜100出土土器

図版44 遺物 土坑513、墓555・556・557出土土器

図版45 遺物 溝40、土坑400出土土器

図版46 遺物 土坑101、溝340出土土器

図版47 遺物 溝467、整地399・401出土土器

図版48 遺物 墓393・402出土土器

図版49 遺物 柱穴155、溝331出土土器

図版50 遺物 溝255・50・230・19出土土器

図版51 遺物 瓦類

図版52 遺物 石器・石製品

図版53 遺物 木製品

図版54 遺物 1 金属製品

2 銭貨

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	1区調査前全景（北西から）	2
図3	2・3区調査前全景（北東から）	2
図4	2区調査状況（北から）	2
図5	ドローンによる全景写真撮影状況	2
図6	2区東壁噴砂剥ぎ取り作業状況	2
図7	検証委員指導状況	2
図8	周辺遺跡位置図（1：25,000）	4
図9	2区東壁土層模式図	6
図10	建物108実測図（1：100）	8
図11	建物597実測図（1：100）	9
図12	井戸44実測図（1：60）	10
図13	溝340断面図（1：40）	11
図14	土器溜100実測図（1：30）	11
図15	墓555・556・557実測図（1：30）	12

図16	建物99実測図（1：100）	13
図17	建物413実測図（1：100）	14
図18	墓393・402実測図（1：30）	16
図19	柵68実測図（1：100）	17
図20	柱穴155実測図（1：20）	18
図21	柵208実測図（1：100）	18
図22	墓5・6実測図（1：50）	21
図23	平安時代以前の土器実測図（1：4）	23
図24	金属製品実測図（1：3）	30
図25	明治23年（1890）の調査区周辺地形（1：5,000）	33
図26	調査区東壁と溝試料採取地点の模式柱状図	38
図27	調査区周辺の既存ボーリングデータ	44
図28	花粉分布図	49
図29	No.3から産出した花粉化石	50
図30	堆積物中の珪藻化石分布図	55
図31	珪藻化石の顕微鏡写真	58
図32	貝類	60
図33	大型哺乳類	61
図34	シカ大腿骨（左）〔No.4〕近位部切痕	62
図35	シカ寛骨（右）〔No.5〕恥骨内側切痕	62
図36	シカ寛骨（右）〔No.5〕座骨外側叩傷	62
図37	シカ大腿骨（左）〔No.3〕後面切痕	62
図38	ウシ中足骨（右）〔No.10〕遠位部切痕	62
図39	ウシ脛骨（右）〔No.11〕遠位部前面切痕	62
図40	刀装具（兜金：金3）蛍光X線分析データ	64
図41	井戸44植物遺体の実体顕微鏡写真	66
図42	土坑385植物遺体の実体顕微鏡写真	67
図43	樹種同定 生物顕微鏡写真	69

表 目 次

表 1	遺構概要表	7
表 2	遺物概要表	22
表 3	花粉分析試料一覧表	47
表 4	産出花粉孢子一覧表	48
表 5	堆積物中の珪藻化石産出表	54
表 6	骨同定一覧表	59
表 7	土壌分析結果	65
表 8	樹種同定結果	68

付 表 目 次

附表 1	土器類一覧表	70
附表 2	瓦類一覧表	88
附表 3	石器・石製品一覧表	89
附表 4	木製品一覧表	89
附表 5	金属製品一覧表	89
附表 6	銭貨一覧表	90

富ノ森城跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市伏見区横大路六反畑地内に位置する。『京都市遺跡地図』によると、室町時代の居城跡である富ノ森城跡に該当する（図1）。伏見西部第五地区土地区画整理事業にあたり、当該地に都市計画道路（横大路淀線）が整備されることとなったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構が遺存していることが明らかとなり、発掘調査が必要と判断されたため、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施した。

(2) 調査の経過

調査区は、文化財保護課の指導に従い設定した。横大路淀線から北西側の支道部分を1区、横大路淀線側を2区・3区に分けて調査を行った（図版1）。調査面積は1,652㎡である。

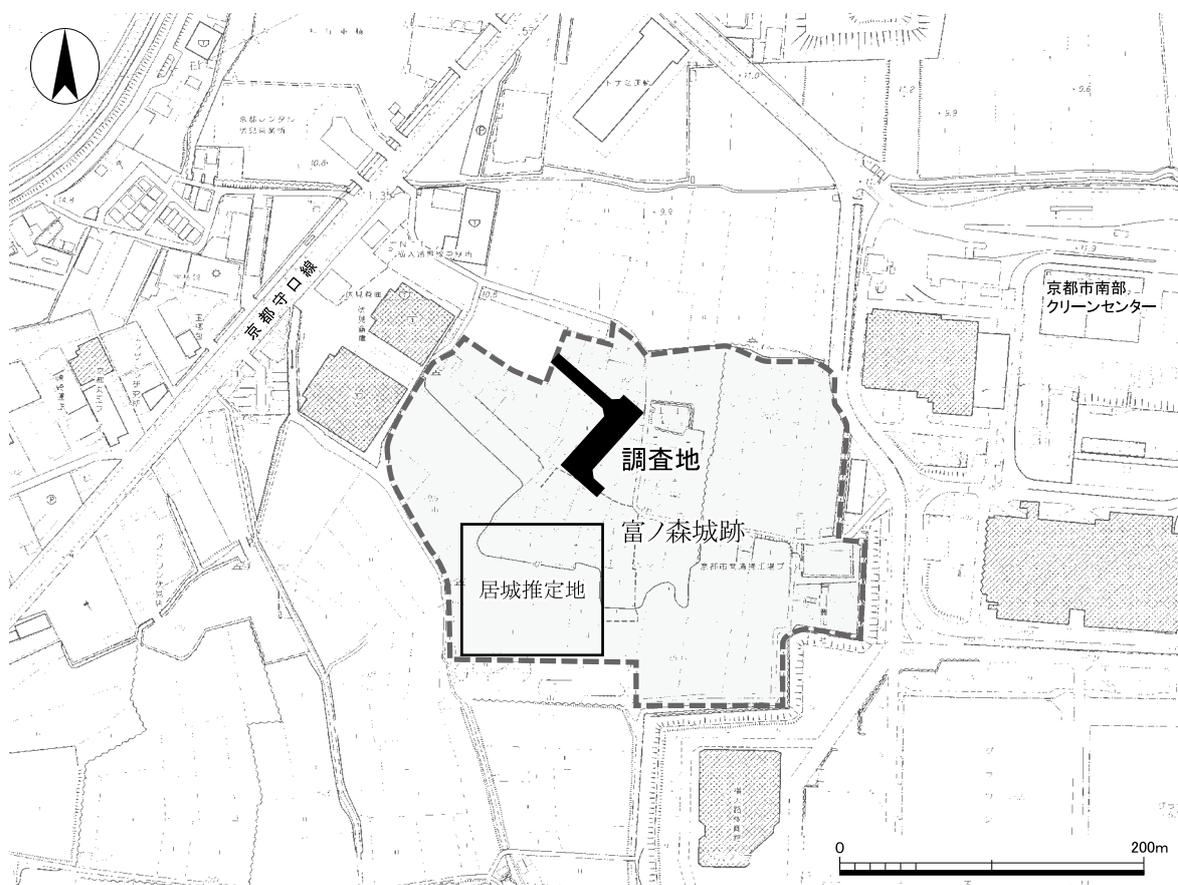


図1 調査位置図（1：5,000）

調査は2020年1月17日から開始した。調査した遺構面数は4面4時期である（第1面：安土桃山時代から江戸時代、第2面：室町時代後半、第3面：鎌倉時代末から室町時代前半、第4面：鎌倉時代後半）。

各面の掘り下げは重機を用い、遺構は人力で掘削した。遺構の図化作業は、調査担当職員と作業員による手測り及び外部委託業者によるオルソ写真測量を併用した。全景写真撮影は当研究所写真担当職員と外部委託業者によるドローン撮影（図5）、個別遺構写真は当研究所写真担当職員及び調査担当職員が適宜行った。残土は耕作土とその他掘削土を分別して調査地内に仮置きした。

また、調査では当該地の自然環境と遺跡形成とが密接に関係していることが予想されたため、堆



図2 1区調査前全景（北西から）



図3 2・3区調査前全景（北東から）



図4 2区調査状況（北から）



図5 ドローンによる全景写真撮影状況



図6 2区東壁噴砂剥ぎ取り作業状況



図7 検証委員指導状況

積土壌における花粉分析や珪藻化石分析を行った。さらに地震痕跡が明瞭な箇所について、調査区壁面の剥ぎ取りを行い資料化した（図6）。

調査では適宜、文化財保護課の（現場）検査、検証委員の國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学）両氏による指導・検証を受けた（図7）。2020年7月17日にすべての調査を終了し、撤回した。

2. 位置と環境

（1）環境と立地

京都市南西部に所在する調査地は、南西に桂川・宇治川・木津川の三川合流地帯、南東に古くは巨椋池を擁した低平な沖積地に立地しており、富ノ森城跡の北側に位置する。富ノ森城は室町幕府奉公衆のひとつである横大路被官衆が在城した平城と推定されているが、築造年代や築造者については不明である。周辺は周知の遺跡が希薄なため既応の調査事例がなく、結果として調査地の周囲1kmは遺跡の空白地にも等しい状況を呈しており、同じ後背湿地でも縄文時代中期から連綿と遺跡が形成されてきた桂川右岸域とは著しい対照をなしている（図8）。

遺跡名の由来となった富ノ森（富森）は、古くは『山槐記』治承4年（1180）8月22日条にその名が見える、山城八森のひとつであったと伝えられている。記事では中山忠親が福原から富ノ森付近を通って京へ戻ったとあり、詳細な場所は不明であるが、鳥羽と淀を繋ぐ街道沿いに位置していたものと考えられる。また『群書類従』合戦部『明德記』によると、明德2年（1391）の乱の際に、山名氏清方の軍勢の一隊が京へ攻め上ろうと、「淀ノ中島」から鳥羽の秋の山を目標に「富森」を目指したが、深田にはまって身動きがとれなくなったとある。当時は街道沿いといえども富ノ森周辺には深田が広がり、周辺の地理に疎い集団であれば移動が難しい地勢であったと考えられる。

富ノ森という呼称が、森自体としてではなく、集落を指す名称として用いられるようになった時期は判然としない。ただ室町時代後期には富ノ森（富森）が三条西家の所領として、年貢米や若菜・飯粽・芋・大根の他、庭掃除の人夫や臨時の人馬の徴発がなされたことが『実隆公記』からわかる。しかし、集落の正確な位置や範囲は明らかではなく、調査地が史料にある富ノ森の地に属していたのかは不明である。

その後、富ノ森（富森村）は慶長6年（1601）に豊国神社領となるが、同20年（1615）の神社破却に伴い領地は没収、江戸幕府の蔵入地となる。そして文久2年（1862）に京都守護職中の役知として会津藩が治めるところとなり、明治7年（1874）横大路村と合併した。

（2）周辺の遺跡と調査

調査地が立地する桂川と宇治川に挟まれた低地帯における人々の活動の痕跡は、下三栖遺跡と下三栖城跡、淀城跡で確認できる。

下三栖遺跡及び下三栖城跡の調査では、弥生時代後期から近世の遺構・遺物が確認された。古墳

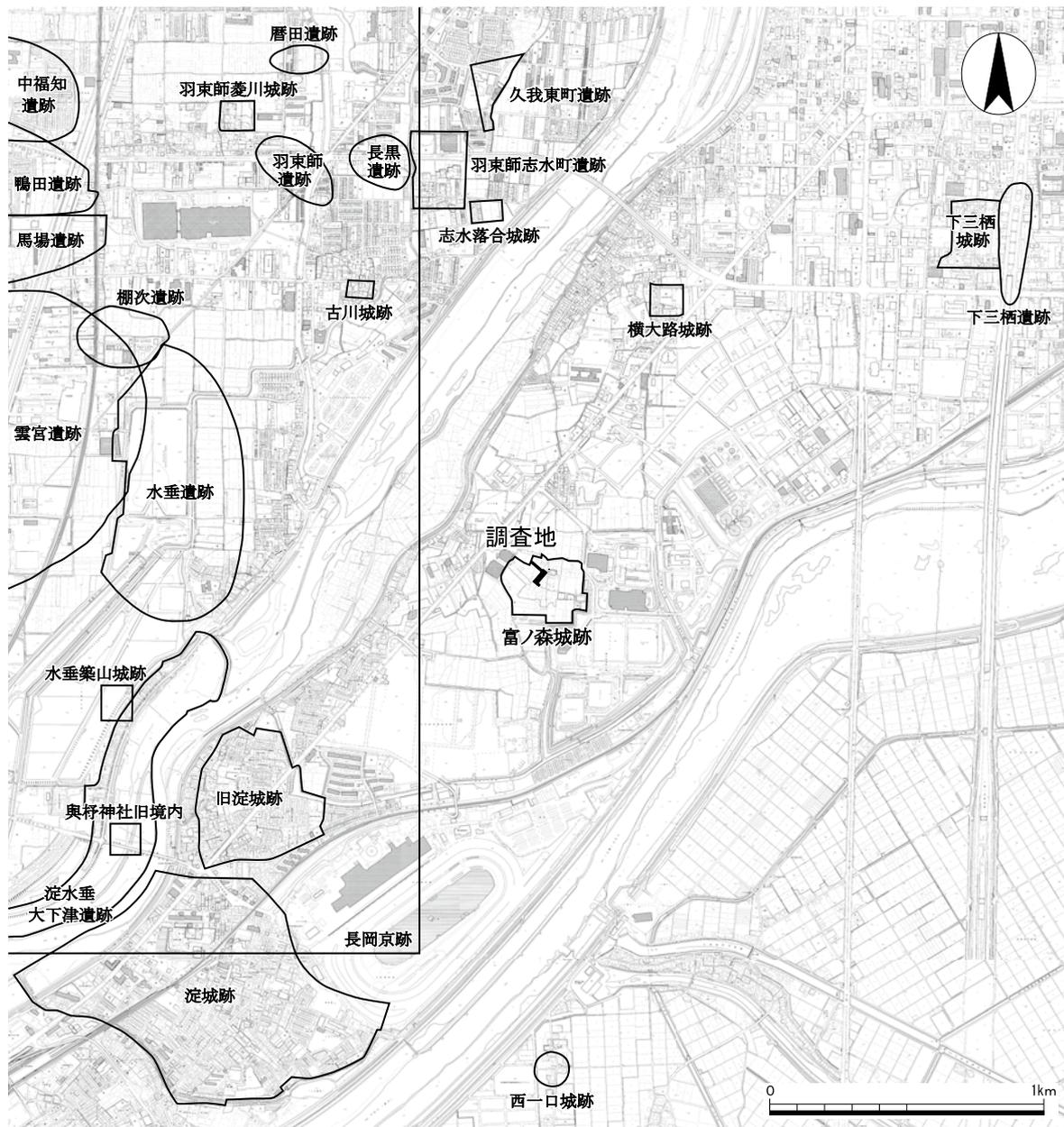


図8 周辺遺跡位置図（1：25,000）

時代後期から飛鳥時代及び平安時代後期から中世の竪穴建物や掘立柱建物を検出しており、当該期はここに集落があったと考えられている。鎌倉時代の遺構配置からは紀伊郡条里との関係が指摘されており、中世の史資料で確認できる下三栖庄²⁾に関連する遺跡と評価された。また、下三栖城跡では中世末から近世初頭の大溝を検出しており、周囲を濠で囲んだ中世の居城跡と推定されている³⁾。

淀城跡の調査では、江戸時代の淀城及び城下町に関係する遺構と、その下層から平安時代から鎌倉時代の整地層や遺物などが出土している。史資料から淀城跡の周辺域には、平安時代は平安京の外港としての淀津、鎌倉時代から室町時代後半にかけては平安京の塩・相物の卸しを掌握した淀魚市の存在が明らかとなっており、淀城期よりも下層で出土した遺構や遺物との関連が指摘されている⁴⁾。

調査地の対岸にあたる桂川右岸域では縄文時代中期以降、近世に至るまでの遺跡が各所で確認されているが、富ノ森城と同時期の遺跡としては久我東町遺跡、羽東師志水町遺跡、長岡京跡、羽東師菱川城跡などがある。

久我東町遺跡の調査では、平安時代後期から安土桃山時代の遺構・遺物が確認された。鎌倉時代後半から室町時代の遺構は、濠や溝、複数の掘立柱建物・井戸・墓などが検出された。濠内には溝で区画された敷地内に、計画的に南北方向に建物群が配置されており、東西・南北7間に及ぶ建物も確認された。環濠集落もしくは居館⁵⁾と推定されている。

羽東師志水町遺跡・長岡京跡の調査では、古墳時代から江戸時代の遺構・遺物が確認された。平安時代末から鎌倉時代にかけては建物や井戸、溝などがあり、小規模な邸宅を備えた環濠集落の存在が指摘された。室町時代の遺構としては濠や土壇墓・火葬墓などがある。溝は乙訓郡条里阿刀里十七坪と二十坪の坪境を示すものと評価されている。安土桃山時代の遺構は濠や建物・井戸・墓などがある。墓は方形の墳丘状の高まりを持ち、塚上に蔵骨器が埋納されていた。また調査では、慶長伏見地震（1596）が原因と考えられる噴砂⁶⁾も確認されている。

羽東師菱川城は、城主は不明であるが、調査によって四方に濠を備えた南北110m×東西120mの安土桃山時代から江戸時代前半頃の居城跡と推定されている。また、当該地は長岡京期以降、居住域としての土地利用がなされており、鎌倉時代から室町時代の遺構は掘立柱建物や区画溝などが検出されている。そして城跡よりも北東部の調査では、鎌倉時代・安土桃山時代から江戸時代の遺構・遺物が確認されており、洪水砂の堆積状況から室町時代頃の洪水による環境悪化が推測⁷⁾されている。

これら集落・居城跡の他にも各所に室町幕府被官衆のもの⁸⁾とされる居城推定地がある。

調査地北東に位置する横大路城は、富ノ森城と同じ横大路被官衆が在城した平城と推定されており、小川丹波守の居城であったとする伝承がある。未調査であるため詳細は不明である。

桂川右岸に位置する志水落合城跡は、西岡被官衆のひとつ志水氏の居城跡と想定されている。正確な位置は不明であるが、『辻家文書』の「老諺集（山背国乙訓郡久我里風土記）」では「落合城久我里南志水村東也 川辺今芝原年々成畑 今原岡凹凸」とあり、江戸時代頃はまだ城の痕跡が残っていたと考えられる。

桂川右岸に位置する古川城跡は、西岡被官衆のひとつ羽東師神社宮司家である古川氏の居城跡と想定されている。未調査であり詳細は不明である。

調査区対岸に位置する水垂築山城は、西岡被官衆のひとつ築山氏の居城跡と推定されている。正確な位置は不明であるが、築山氏の墓所の位置と『細川家文書』「山城国西岡御領知之地図」をもとに推定地が比定されている。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図9)

層序は地表面 (標高約11.2m) より、現代の整地・耕作土層 (I層)、江戸時代後期から近代の整地層 (II層)、江戸時代中期から後期の洪水堆積・整地層 (III層)、江戸時代前期の洪水堆積・整地層 (IV層)、安土桃山時代の洪水堆積・整地層 (V層)、室町時代後半の洪水堆積・整地層 (VI層)、鎌倉時代末から室町時代前半の整地層 (VII層)、鎌倉時代後半の整地層 (VIII層)、基盤層 (IX層) の順に堆積する (図9)。河川堆積物を主成分とする基盤層 (IX層) は、泥砂・シルト層 (15層) と礫層 (16層) からなり、礫層からは縄文時代晩期の深鉢の破片や古墳時代後期の須恵器杯身・甕の破片が出土した。

調査区内の地形は、現地表面は比較的平坦であるが、VII層以下基盤層にかけては北東側を頂点として南西方向へ向かって緩やかに傾斜している。

調査ではV層上面 (安土桃山時代：標高約9.6m) を第1面、VI層上面 (室町時代後半：標高約

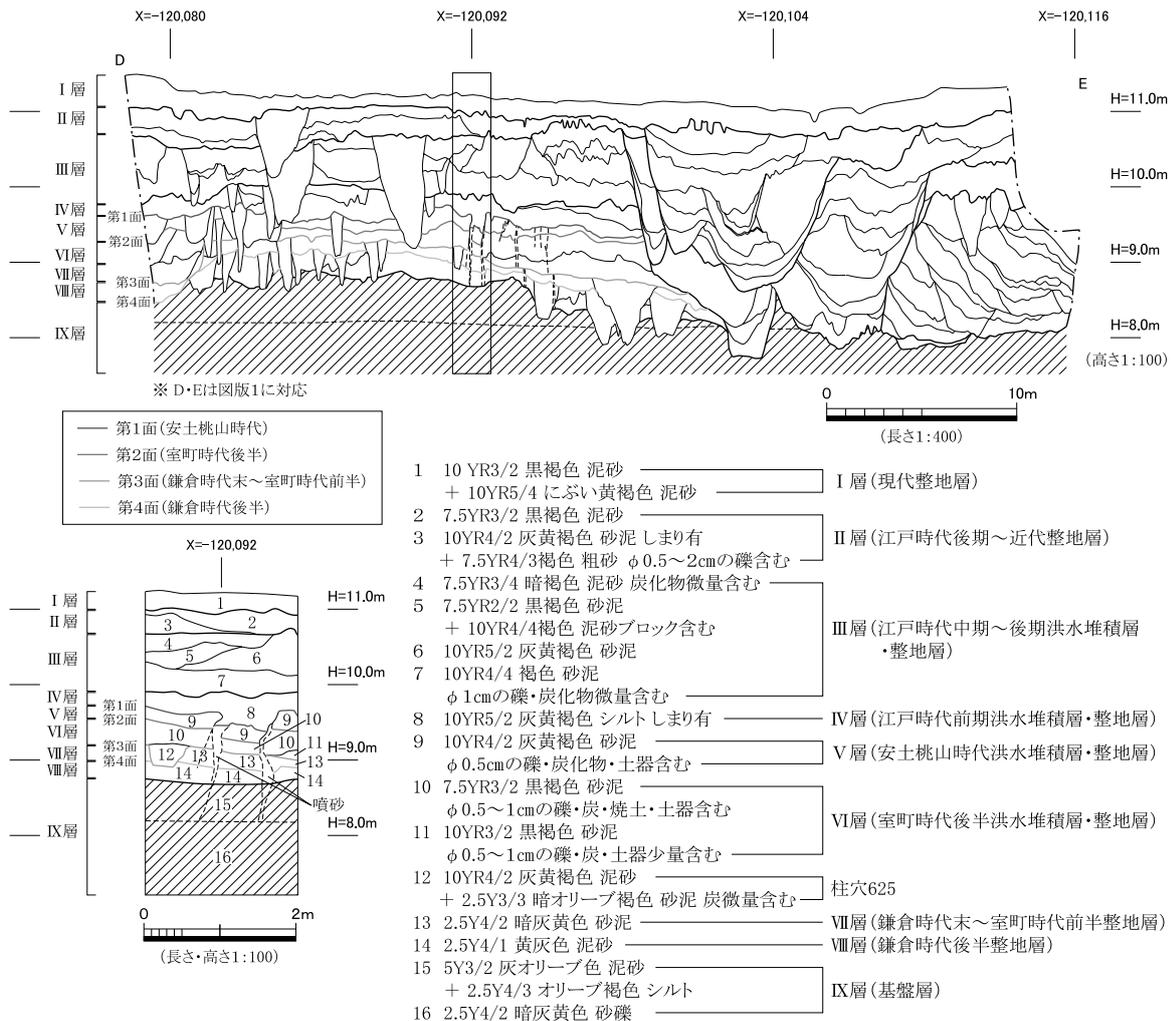


図9 2区東壁土層模式図

9.4 m) を第2面、Ⅶ層上面（鎌倉時代末から室町時代前半：標高約9.2 m）を第3面、Ⅷ・Ⅸ層上面（鎌倉時代後半・基盤層：標高約9.0 m）を第4面として調査を行った。しかし調査区北側を中心とする遺構の重複が激しい箇所については、調査時には明確に時期を捉えられなかった遺構が多数ある。そこで整理作業では遺構の重複関係や出土遺物の時期を検討し、鎌倉時代後半、鎌倉時代末から室町時代前半、室町時代後半、安土桃山時代、江戸時代の遺構として再整理を行った。

また、今回の調査区では各所で噴砂を確認した（巻頭図版2）。噴砂は基盤層（Ⅸ層）から安土桃山時代のⅤ層上面にまで及ぶ（図9）。慶長元年（1596）の慶長伏見地震を原因とする可能性が考えられる。

（2）遺構の概要

今回検出した遺構は、鎌倉時代後半から江戸時代後期のものである（表1）。総数は675基である。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を中心に、時代順に報告する⁹⁾。

鎌倉時代後半（図版2） 掘立柱建物・柱穴・溝・井戸・土坑・土器溜・墓などがある。建物や柱穴、井戸など居住域との関係を想定できる遺構は、調査区北東部から北西部にかけて分布している。調査区南西部では溝を検出したが、他の遺構は確認できなかった。

鎌倉時代末から室町時代前半（図版3） 掘立柱建物・柱穴・溝・水溜・土坑・土器溜・墓などがある。建物や柱穴、水溜などの遺構は、調査区北東部から北西部にかけて分布している。調査区南西部では溝を検出したが、他の遺構は確認できなかった。

室町時代後半（図版4） 掘立柱建物・柵・柱穴・溝などがある。建物や柱穴などの遺構は主に調査区北東部に分布している。調査区北東隅及び南西部では溝を検出した。

安土桃山時代（図版5） 掘立柱建物・柱穴・溝・耕作溝・集石などがある。建物や柱穴などの遺構は調査区北東部に分布している。調査区北東隅及び南西部では耕作溝や区画溝を検出した。

江戸時代（図版5） 溝・墓・円形土坑などがある。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
鎌倉時代後半	建物108・597・618、井戸44、溝40・70・98・340・467・626、土坑101・400・513、土器溜100、墓555・556・557
鎌倉時代末～室町時代前半	建物99・363・413、水溜390、溝71・341・424、土坑257・275・352・385・466、整地395・399・401、墓393・402
室町時代後半	建物270、柵68、溝50・97・233・255・256・289・331、柱穴155・214
安土桃山時代	建物190、柵208、溝30・96・230・246、集石330、耕作溝群、噴砂
江戸時代	溝1～4・8・9・19・58・134・217・218・235、円形土坑群(土坑7・11・12・16～18・116・229・242・250・251・283)、墓5・6

(3) 鎌倉時代後半の遺構 (図版2)

建物108 (図10) 調査区北西部で検出した掘立柱建物である。建物の南側は調査区外となる。建物規模は東西約6.1m×南北約3.8m以上を測る。北側に下屋が付く東西4間×南北2間以上の総柱建物であり、上屋の柱間は東西1.4~1.7m・南北0.5~1.8m、下屋の柱間は東西0.4~1.9m・南北0.9mを測る。上屋柱と下屋柱は柱筋が通らないものが主体を占める。方位は北に対し約36度東に振れる。上屋を構成する柱穴は長径0.2~0.4m×深さ0.1~0.5mを測る。下屋を構成する柱穴は長径0.1~0.3m×深さ0.1~0.2mのものが主体を占め、一部深さが0.6mに達するものもある。柱穴の平面形は楕円形や隅丸方形を呈する。柱痕跡の径は0.1mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。柱穴から鎌倉時代後半の土師器皿と瓦器椀・羽釜が出土している。

建物618 (図版10) 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。建物規模は東西約9.9m×南北約9.7mを測る。柱間は1.0~2.8mと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約15度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.5~0.6m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.8m程度の大きなものや、長径0.2~0.3m程度の小さなものもある。深さは0.1~0.6mを測る。柱痕跡の径は0.1~0.5mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

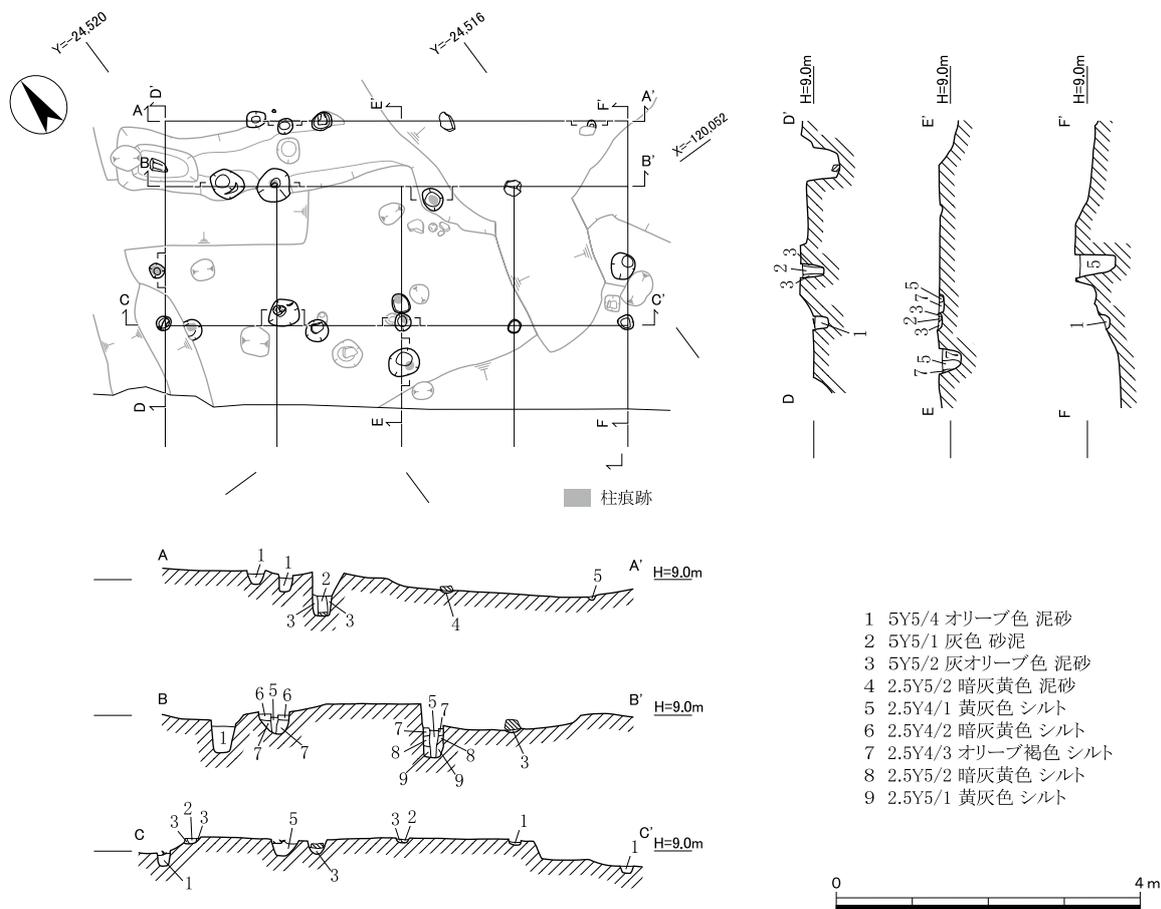


図10 建物108実測図 (1:100)

建物597 (図11) 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。建物の東側は調査区外となる。建物規模は東西5.7m以上×南北約4.5mを測る。柱間は1.0～2.7mと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約15度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.4m程度で平面楕円形を呈するものが多いが、長径0.6m程度の大きなものもある。深さは0.1～0.5mを測る。柱痕跡の径は0.1～0.2mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

井戸44 (図12、巻頭図版2、図版32) 調査区北西部で検出した井戸である。上段は方形縦板横棧組の木枠、下段は桶状木製品を井戸枠としており、底部に水溜として曲物を据える。掘形の規模は一辺約3.6m、深さは約3mを測る。Ⅸ層(基盤層)を大きく掘り抜いて

おり、水溜部底面は標高6.0mを測る。方形の木枠は幅0.25m×長さ0.65m以上の板材を隅柱と横棧が内側から支持するもので、一辺0.9mを測る。桶状木製品は胴部に幅0.1m×長さ0.5mの短冊形の板材を組み合わせて外部に箍を巻いて支持するもので、上端部径0.5m×下端部径0.4mを測る。水溜の曲物は直径約0.35m×高さ0.3mを測る。井戸枠に用いられた板材の樹種はヒノキやスギ、サワラなどの針葉樹である。埋土3層から土器が多数出土した。遺物は乙訓在地形の土師器皿が主体を占め、他に瓦器椀が認められる。井戸枠内からも土器が出土しているが、埋土3層から出土した土器との型式差は認められない。掘形埋土から卒塔婆形木製品と刀形木製品が出土した。

溝40 調査区北部で検出した南北溝である。全長3.5m×幅0.8m×深さ0.4mを測る。方位は北に対し約21度東に振れる。埋土は灰色シルトである。溝底の標高は北端部・南端部ともに標高8.6mである。遺物は土師器皿や須恵器鉢、輸入陶磁器の細片が出土している。

溝70 (図版6・7) 調査区北部で検出した南北溝である。北側は調査区外で、南側は新しい時代の溝によって壊されている。幅1.1m×深さ0.55mを測る。断面葉研形を呈する。方位は北に対し約32度東に振れる。溝底の標高は北壁際・南端部ともに標高8.5mである。遺物は瓦器羽釜の細片が出土した。

溝98 (図版6・7) 調査区北西部で検出した南北溝である。北側は調査区外である。幅0.3m

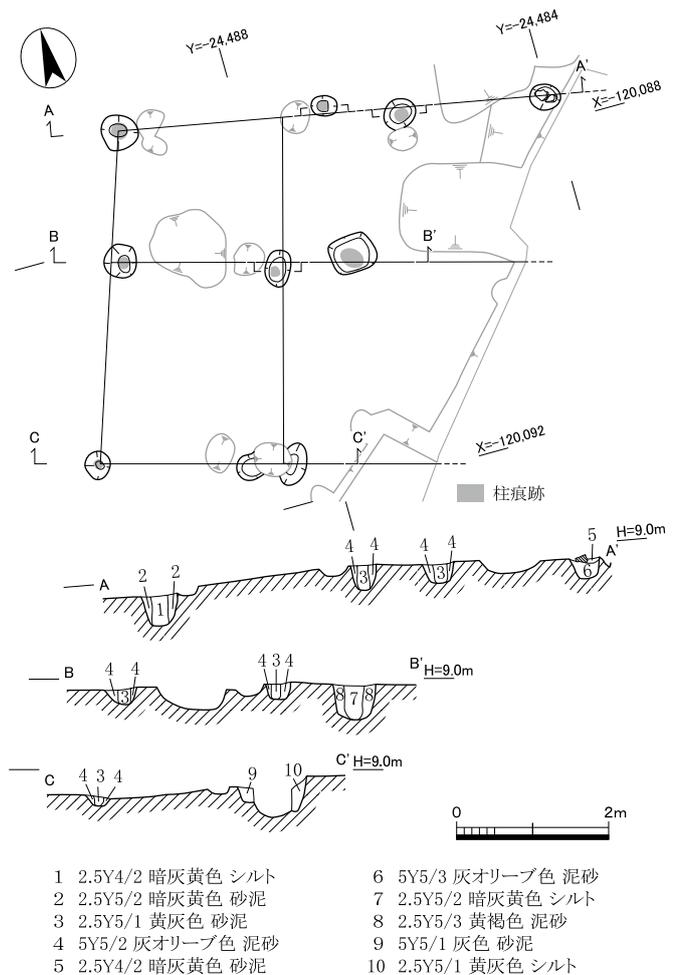


図11 建物597実測図(1:100)

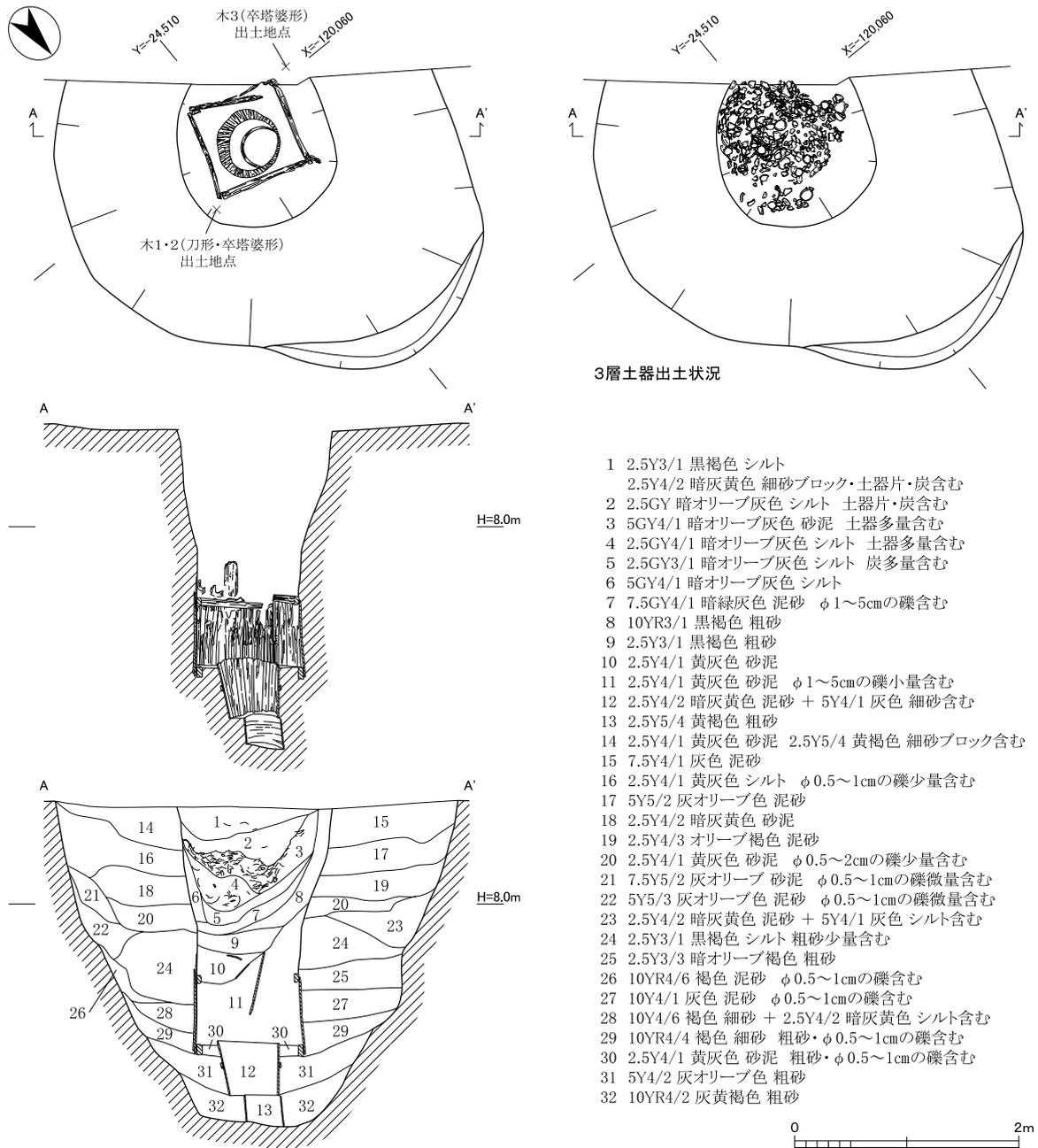


図12 井戸44実測図 (1:60)

×深さ0.2mを測る。方位は北に対し約20度東に振れる。溝底の標高は北壁際・南端部ともに標高8.9mである。遺物は土師器皿や瓦器鍋の細片が出土している。

溝340 (図13) 調査区南西部で検出した南北溝である。北側と南側は新しい時代の溝によって壊されている。幅0.7m×深さ0.4mを測る。断面薬研形を呈する。方位は北に対し約32度東に振れる。溝底の標高は北壁際で標高8.2m、南端部で標高8.0mと北東から南西に向かって低くなる。埋土上層(2層)から乙訓在地形の土師器皿と京都7C段階の土師器皿が共伴しており、ほかに瓦器などが出土した。これらの遺物は、出土状況から遺構廃絶時のものと考えられる。

溝467 (図版8・9) 調査区東部で検出した東西溝である。幅1.5m以上×深さ0.7mを測る。東側は調査区外で、西側と南肩部は新しい時代の溝で壊されている。方位は西に対し約27度北に

振れる。溝底の標高は東壁際で標高7.9m、西端部で標高7.8mと、南東側から北西側に向かって緩やかに低くなっている。埋土から乙訓在地形の土師器皿と京都7段階の土師器皿が共存しており、ほかに瓦器などが出土した。これらの遺物は、出土状況から遺構廃絶時のものと考えられる。

溝626 (図版6・7) 調査区北部で検出した南北溝である。北側は調査区外である。幅0.7m×深さ0.2mを測る。方位は北に対し約25度東に振れる。溝底の標高は北壁際で標高8.6m、南端部で標高8.3mと北東から南西に向かって低くなる。遺物は丸瓦が出土している。

土坑101 (図版6・7) 調査区北西部で検出した平面不定形の土坑である。長径3.9m×短径2m以上×深さ0.4mを測る。北西側は調査区外である。底面レベルは一定ではなく、自然地形の凹部を整地したものである可能性がある。遺物は土師器や瓦器、須恵器など土器類のほか、焼けた平瓦・軒平瓦や有孔磚などが出土した。

土坑400 調査区北東部で検出した平面隅丸方形の土坑である。長径2.8m×短径2.6m×深さ0.3mを測る。肩部から中央部に向かって緩やかに深くなっており、断面皿状を呈する。埋土は上層が暗灰黄色砂泥、下層がオリーブ褐色泥砂である。明確な掘り込みはなく、建物618の成立時に地形の凹部を整地したものの可能性がある。遺物は土師器や瓦器などの土器類が出土した。

土坑513 調査区東部で検出した平面不定形の土坑である。長径1.1m×短径0.9m×深さ0.2mを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は土師器や瓦器などの土器類が出土した。

土器溜100 (図14、図版31) 調査区北西部で検出した土器溜である。長径2.2m以上×短径約1.0m×深さ約0.3mを測る。西側を新しい時代の溝に壊されている。遺構の南西側の地形が若干高くなっており、北東に向かって傾斜が緩やかに変わる地点に土器が出土した。遺物は乙訓在地形の

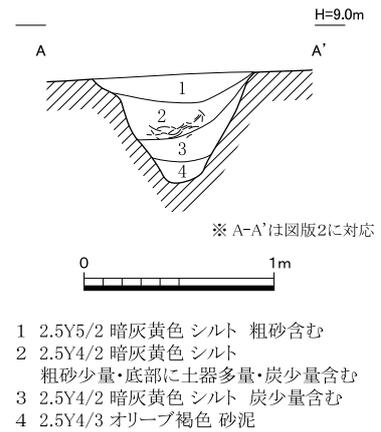


図13 溝340断面図 (1 : 40)

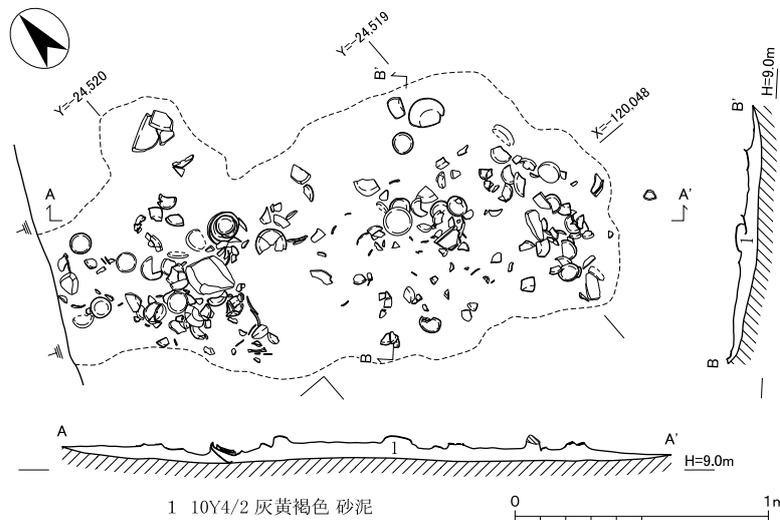


図14 土器溜100実測図 (1 : 30)

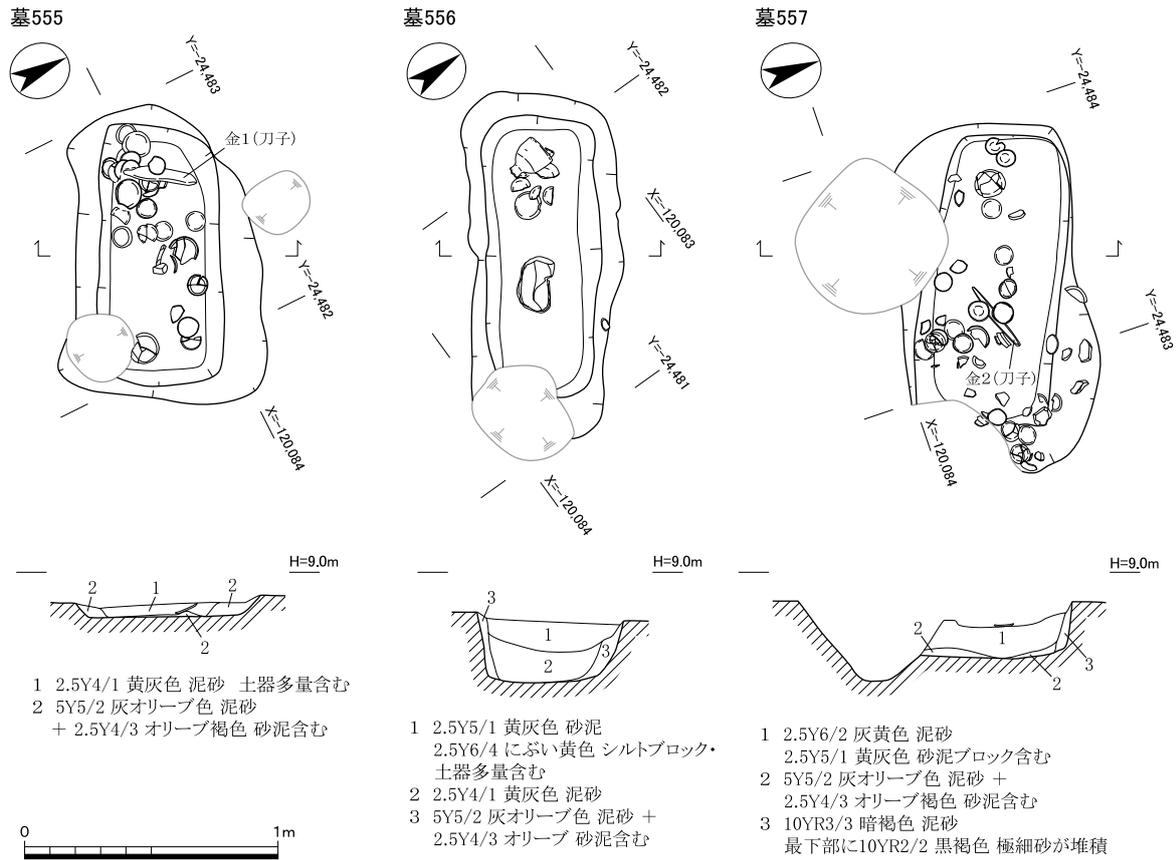


図15 墓555・556・557実測図（1：30）

土師器皿や瓦器椀、白磁皿などが出土している。

墓555（図15、図版33） 調査区北東部で検出した木棺墓である。掘形の検出規模は長径1.2m×短径0.7m×深さ0.06mを測る。南東部は新しい時期の柱穴によって壊されている。木棺部は長径1.05m×短径0.5m×深さ0.06mを測る。方位は西に対し約27度北に振れる。遺物は乙訓在地形の土師器皿や瓦器椀、鉄製刀子などがある。鉄製刀子は刀身を墓坑長軸に対して直交に、切先を北東側に向けて出土している。

墓556（図15、図版33） 調査区北東部で検出した木棺墓である。掘形の検出規模は長径1.35m×短径0.6m×深さ0.25mを測る。南東部は新しい時期の柱穴によって壊されている。木棺部は長径1.1m×短径0.45m×深さ0.25mを測る。方位は西に対し約35度北に振れる。遺物は乙訓在地形の土師器皿や瓦器椀、須恵器壺などが出土した。

墓557（図15、図版33） 調査区北東部で検出した木棺墓である。掘形の検出規模は長径1.4m×短径0.75m×深さ0.25mを測る。南部は新しい時期の柱穴、東部は墓555によって壊されている。木棺部は長径1.15m×短径0.55m×深さ0.25mを測る。方位は西に対し約24度北に振れる。遺物は乙訓在地形の土師器皿や瓦器椀、鉄製刀子などが出土した。鉄製刀子は切先を東側に向けた状態で出土している。

(4) 鎌倉時代末から室町時代前半の遺構 (図版3)

建物99 (図16) 調査区北西部で検出した掘立柱建物である。建物の南側は調査区外となる。建物規模は東西約8.4m×南北約4.0m以上を測る。柱間は2.1~3.0mで柱の並びも不揃いである。方位は北に対し約15度東に振れる。建物を構成する柱穴は長径0.2~0.5m×深さ0.1~0.4mを測り、平面楕円形や隅丸方形を呈する。柱痕跡の径は0.1~0.2mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

建物363 (図版11) 調査区北東部で検出した亀腹状の高まりの上に建つ掘立柱建物である。建物規模は東西約9.0m×南北約8.7mを測る。方位は北に対し約16度東に振れる。東西5間×南北3間の総柱建物となる可能性があり、その場合柱間は東西1.5~2.0m・南北2.7~3.0mを測る。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.4~0.5m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.2m程度の小さなものもある。深さは0.1~0.6mを測る。柱痕跡の径は0.1~0.2mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。柱穴458からは塼が出土した。亀腹状高まりは東辺と南辺の一部で裾部を確認した。高さは約0.2mを測る。土坑385は亀腹状の高まりにできた凹みを埋めた整地の可能性があり、土坑内で確認した焼土が当該建物に伴う可能性がある。

建物413 (図17、図版36) 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。建物の西側は調査区外となる。建物規模は東西約5.5m以上×南北約4.1mを測る。柱間は0.7~2.3mと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約17度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.3~0.5m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.2m程度の小

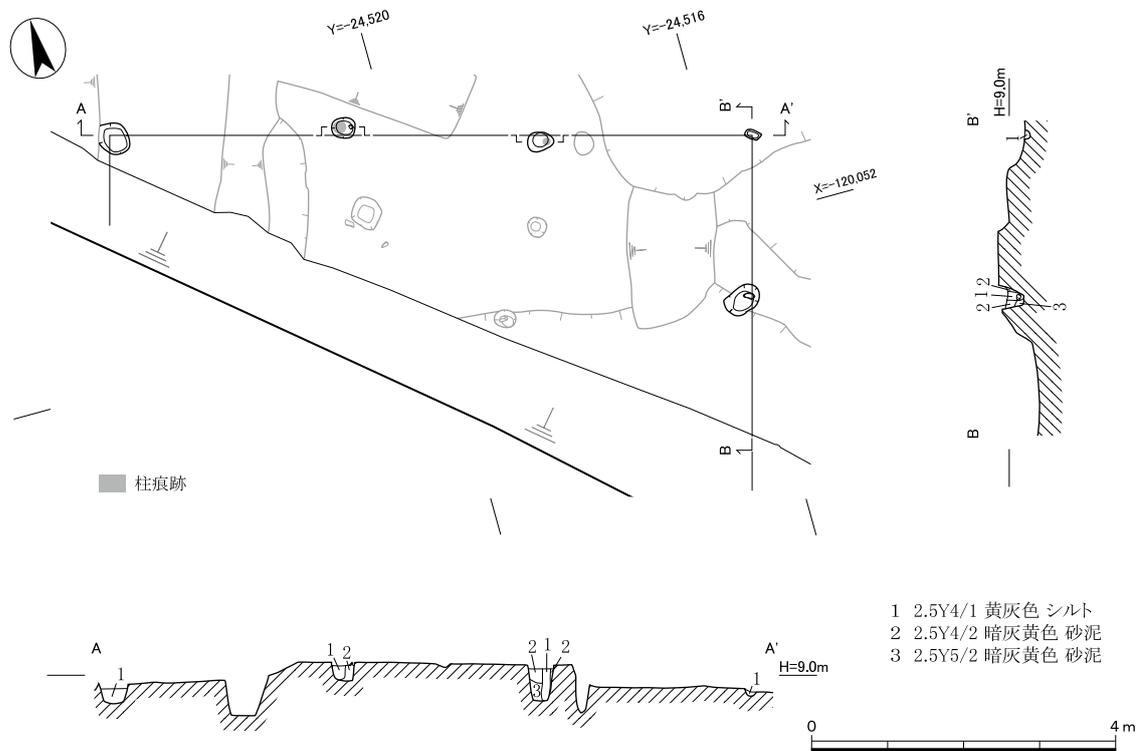


図16 建物99実測図 (1:100)

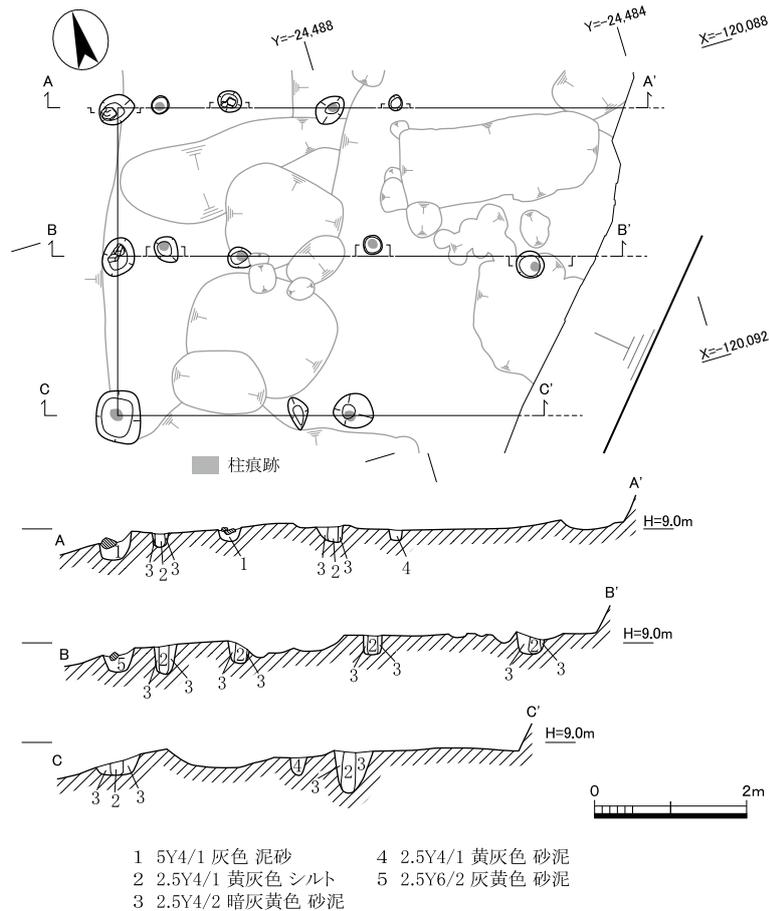


図17 建物413実測図（1：100）

さなものもある。深さは0.1～0.6mを測る。柱痕跡の径は0.1～0.2mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

水溜390（図版12・35） 調査区北東部で検出した。建物363の南西側、建物413の北西側に位置する。掘形は平面楕円形状を呈し、規模は東西4.1m×南北4.8mを測る。中央部に桶状木製品を2段重ねた水溜部があり、規模は上場で東西1.5m×南北1.7mを測る。桶状木製品は胴部に幅0.06m×長さ0.45mの薄い板材を組み合わせたもので、箍による結束はない。板材の樹種は全てスギである。木製品自体が大きく捩じれているため、正確な数値は不明であるが、上段は直径約1.3m、下段は直径約0.9mを測る。水溜部の底面は標高6.9mを測る。同時期の遺構掘削深度から底面が湧水層に達していないと考えられたため、水溜と判断した。瓦器羽釜の細片や砥石などが出土しているが、時期が判別できる遺物は出土していない。

溝71（図版6・7） 調査区北部で検出した南北溝である。南側を新しい時代の溝によって壊されている。幅1.0m×深さ0.5mを測る。断面U字形を呈する。方位は北に対し約35度東に振れる。溝底の標高は北壁際・南端部ともに標高8.6mである。遺物は瓦器羽釜の細片が出土している。

溝341 調査区南西部で検出した東西溝である。西側は調査区外になる。幅2.2m×深さ1.0mを測る。方位は西に対し約39度北に振れる。溝底の標高は西壁際で標高7.6m、東端部で標高7.7mと北西から南東に向かって緩やかに低くなる。埋土は灰色シルトである。遺物は土師器や瓦器などの

土器類が出土した。

溝424 (図版8・9) 調査区東部で検出した東西溝である。東側は調査区外、西側は新しい時代の溝によって壊されている。幅3.4m×深さ0.8mを測る。方位は西に対し約28度北に振れる。溝底の標高は東壁際・西端部ともに標高7.9mである。遺物は土師器や瓦器などの土器類が出土した。

土坑257 (図版36) 調査区北部で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.8m×短径0.8m×深さ0.4mを測る。底面は起伏があり、レベルは一定しない。地震により変形したと考えられる。埋土は黄灰色シルト・オリブ褐色細砂・細砂混じり暗灰黄色シルトの順に堆積する。遺物は土師器皿や瓦類などが出土した。遺構・遺物の状況から、墓となる可能性がある。

土坑275 (図版36) 調査区北東部で検出した平面隅丸方形の土坑である。一辺約1.5m×深さ0.5mを測る。埋土は炭混じりの暗灰黄色砂泥で、オリブ褐色・黄褐色シルトブロックを含む。遺物は土師器皿や瓦器椀、軒平瓦などが出土した。

土坑352 調査区北部で検出した平面隅丸長方形の土坑である。長径1.0m×短径0.4m×深さ0.5mを測る。埋土は炭混じりの暗灰黄色砂泥である。遺物は土師器皿や瓦器椀などが出土した。

土坑385 (図版6・7・36) 調査区北部で検出した平面不定形の土坑である。北側は調査区外、東側は他の遺構によって壊されている。長径2.6m以上×短径1.9m以上×深さ0.4mを測る。埋土は炭・シルトブロック混じりのにぶい黄色・黄褐色砂泥で、床面で焼土塊を多数検出した。遺物は瓦類や植物遺存体などが出土した。建物363に伴う亀腹状の高まりにできた凹みを埋めた整地層の可能性はある。

土坑466 調査区北東部で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.3m×短径0.8m×深さ0.4mを測る。埋土は暗灰黄色砂泥である。遺物は瓦類が出土した。

整地395 調査区北東部で検出した。長径3.5m×短径2.0m×深さ0.2mを測る。地形の凹みに暗灰黄色砂泥を充填している。遺物は瓦類が出土した。

整地399・401 調査区北東部で検出した。建物363亀腹状高まりの南裾部に位置する。長径8.3m×短径5.6mの範囲で炭混じりの暗灰黄色砂泥とともに乙訓在地形の土師器皿や瓦器椀などが出土した。土器群には二つのまとまりがあったため、それぞれ別の遺構番号を付したが、基本的に一連の遺構と想定している。

墓393 (図18、図版35) 調査区北東部で検出した木棺墓である。検出規模は掘形で長径2.0m以上×短径1.1m×深さ0.25mを測る。東部は新しい時期の遺構によって壊されている。平面隅丸長方形の木棺部は長径1.6m以上×短径0.95m×深さ0.25mを測る。方位は西に対し約7度北に振れる。炭の薄層が1層と2層の層界に狭在しており、一部噴砂によって壊されている。遺物は木棺内から土師器や瓦器、須恵器などが出土した。土師器皿は乙訓在地形の土師器皿とともに、京都8段階の土師器皿が出土している。

墓402 (図18、図版36) 調査区北東部で検出した木棺墓である。検出規模は掘形で長径2.1m×短径1.1m×深さ0.3mを測る。北部両隅は新しい時期の柱穴によって壊されている。平面隅丸長方形の木棺部は長径1.75m×短径0.7m×深さ0.3mを測る。方位は北に対し約5度東に振れる。

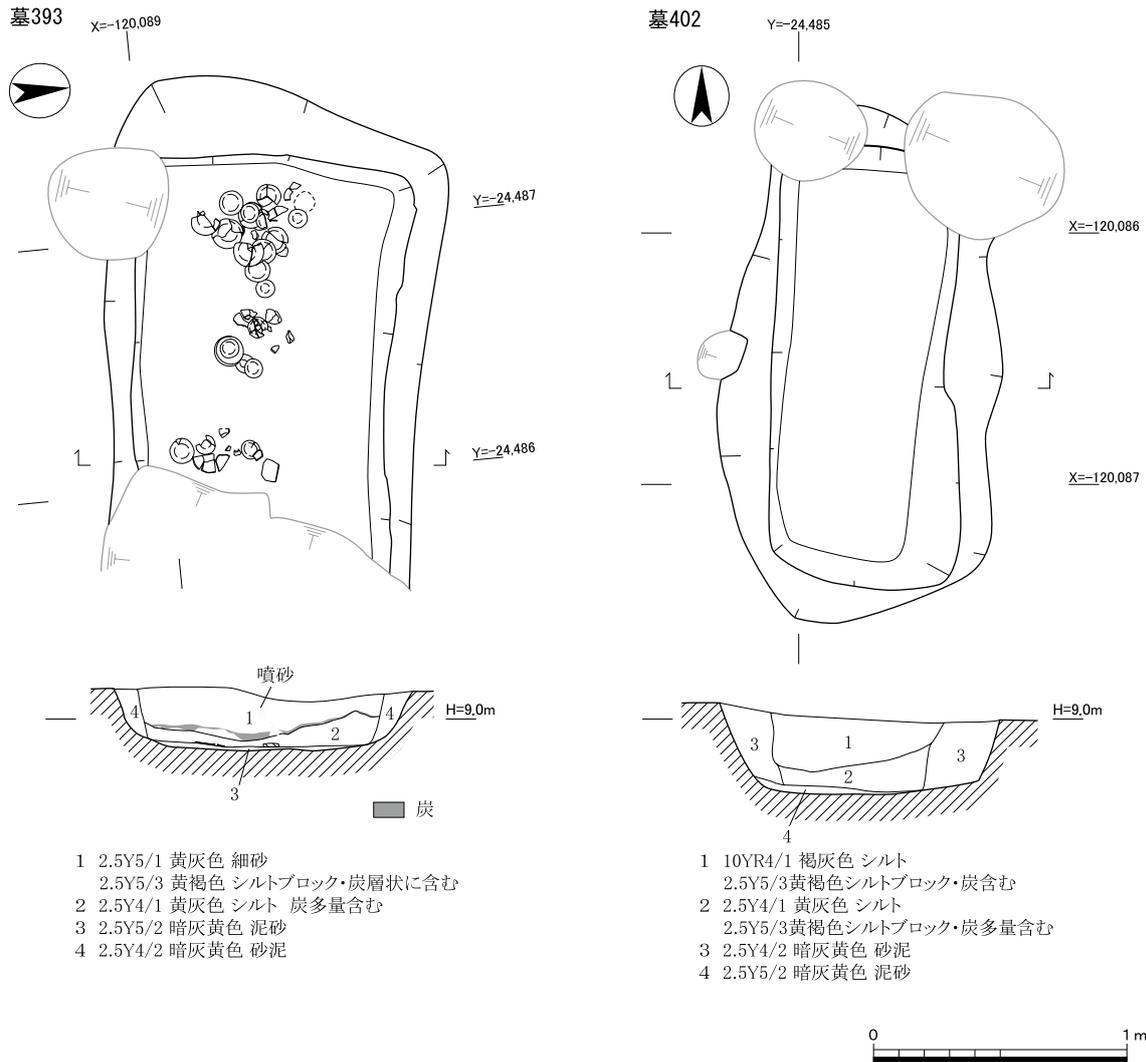


図18 墓393・402実測図（1：30）

遺物は木棺内から土師器や瓦器などが出土した。土師器皿は乙訓在地形の土師器皿とともに、京都8段階の土師器皿が出土している。

（5）室町時代後半の遺構（図版4）

建物270（図版13） 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外になる。建物規模は東西9.3m以上×南北11.2mを測る。柱間は0.7～2.5mと不等間かつ柱の並びも不揃いであり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約14度東に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.4～0.5m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.8～0.9m程度の大きなものもある。深さは0.2～1.1mを測る。柱痕跡の径は0.15～0.2mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。

柵68（図19） 調査区北西部で検出した。規模は東西10.7mで、柱間は0.9～2.3mと不等間である。方位は西に対し約20度北に振れる。柵を構成する柱穴の掘形は長径0.3～0.5m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.2m程度の小さなものもある。深さは0.1～0.6mを測

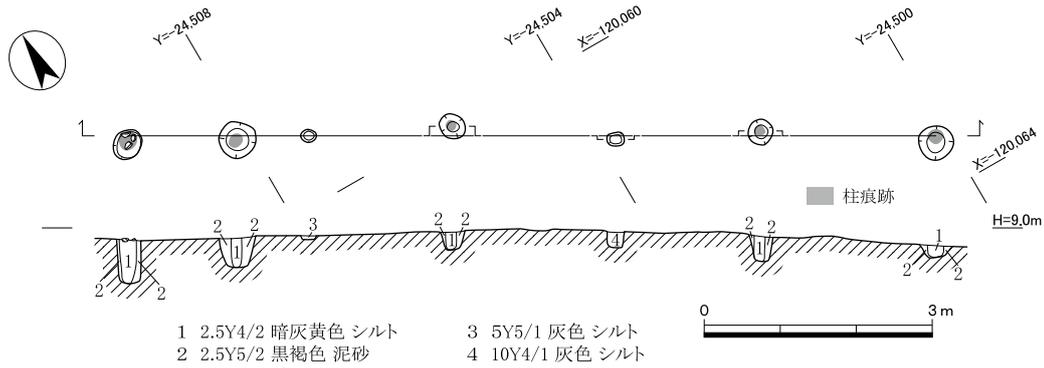


図19 柵68実測図（1：100）

る。柱痕跡の径は0.15～0.2mである。

溝50（図版14・38） 調査区北部で検出した東西溝である。東側は調査区外となり、西側は溝255と合流する。幅4.5m×深さ1.8mを測る。方位は西に対し約26度北に振れる。溝底の標高は1区南壁際で標高7.9m、溝255との合流地点で標高7.8mである。検出範囲が狭く、調査区壁も斜行しているため、傾斜方向は不明瞭である。埋土は下層にオリーブ黒色シルト・貝殻片を含むオリーブ黒色泥砂が互層をなして堆積しており、最終的には1～3cm大の礫を多量含む灰色泥砂によって一度に埋め戻されている。遺物は土師器や瓦器などの土器類や、淡水産貝類の貝殻などの動物遺存体が出土した。

溝255（図版14・37） 調査区中央部で検出した南北溝である。南側は調査区外となり、北側は溝50・溝256と合流する。幅7.4m×深さ1.7mを測る。方位は北に対し約18度東に振れる。溝底の標高は溝50・256合流地点で標高7.8m、南壁際で標高7.6mと北東から南西に向かって低くなる。埋土は下層に黒色シルト・細砂を含む灰色シルトが互層をなし、貝殻片が厚く堆積する層も認められる。最終的には1～3cm大の礫を多量含む灰色泥砂によって一度に埋め戻されている。堆積状況から判断する限り、埋め戻される以前に最低1回は掘り直しが行われた可能性が高い。遺物は土師器や瓦器などの土器類や別石五輪塔の空風輪、淡水産貝類の貝殻や大型哺乳類の獣骨などの動物遺存体が出土した。

溝256（図版6・7） 調査区北部で検出した東西溝である。北側は調査区外となり、南側は溝255と合流する。幅4.5m×深さ1.7mを測る。方位は東に対し約13度北に振れる。溝底の標高は北壁際・南端部ともに標高7.8mである。遺物は土師器や瓦器などの土器類や大型哺乳類の獣骨などの動物遺存体が出土した。

溝289（図版6・7） 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。新しい時代の溝によって上半部が壊されている。幅1.2m以上×深さ0.8mを測る。方位は北に対し約27度東に振れる。溝底の標高は北壁際・南壁際ともに標高8.4mである。

溝97（図版6・7） 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。幅0.8m×深さ0.7mを測る。方位は北に対し約23度東に振れる。溝底の標高は北壁際・南壁際ともに標高8.4mである。遺物は土師器皿や瓦器椀・鍋の細片が出土している。

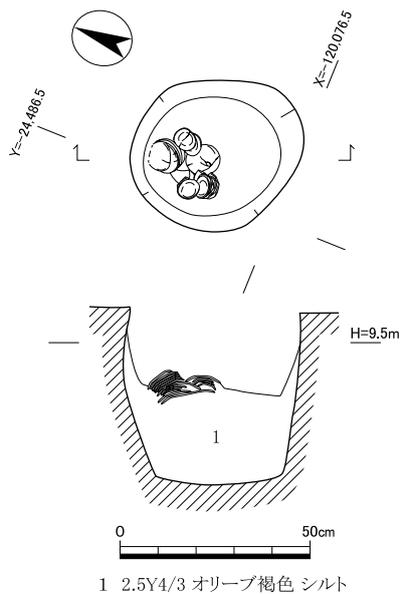


図20 柱穴155実測図（1：20）

溝233 調査区南西部で検出したL字溝である。南北部は幅2.2m×深さ0.5m、東西部は幅1.4m×深さ0.4mを測る。方位は南北部は北に対し約21度東、東西部は東に対し39度に南に振れる。溝底の標高は北端部で標高7.8m、南端部で標高8.0m、東端部で標高8.1mである。北東から南西、南東から北西に向かって緩やかに低くなる。遺物は土師器皿や瓦器羽釜、人骨などの動物遺存体が出土している。

溝331（図版14・38） 調査区南西部で検出した南北溝である。北側は調査区外になる。南端部は平面隅丸長方形の掘り込みで収束している。溝の断面は薬研形を呈し、幅0.6m×深さ0.4mを測る。南端部は幅1.3m×深さ0.9mを測る。方位は北に対し約30度東に振れる。溝底の標高は北壁際で標高8.2m、南端部で標高7.8mと北東から南西に向かって低くなる。

遺物は京都9C段階の土師器皿や瓦器羽釜、施釉陶器などが出土している。

柱穴155（図20、図版38） 調査区北部で検出した。長径0.5m×短径0.4m×深さ0.4mを測る。平面楕円形を呈する。遺物は乙訓在地形の土師器皿が多数重なった状態で出土したほか、銭貨が出土している。

柱穴214（図版38） 調査区北部で検出した。長径0.5m×短径0.4m×深さ0.5mを測る。平面楕円形を呈する。埋土は炭混じりの暗灰黄色砂泥である。遺物は地下式礎石に転用された石臼が出土している。

（6）安土桃山時代の遺構（図版5）

建物190（図版15・41） 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。北側と東側は調査区外になる。建物規模は東西6.9m以上×南北13.5m以上を測る。柱間は1.8～3.5mと不等間であり、補修か建て直しがあるものと考えられる。方位は北に対し約10度東に振れる。建物を構成する柱穴

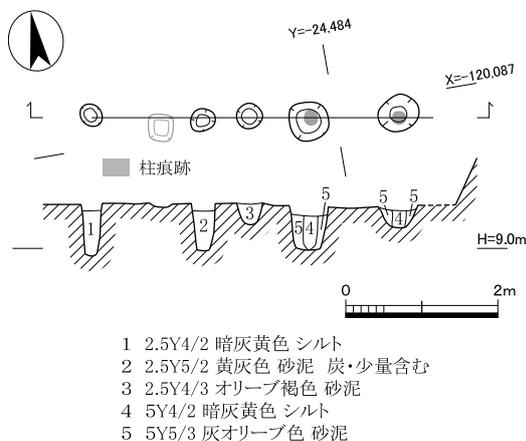


図21 柵208実測図（1：100）

の掘形は長径0.5～0.7m程度で平面隅丸方形を呈するものが多いが、長径0.3m程度の小さなものもある。深さは0.4～0.8mを測る。柱痕跡の径は0.15～0.4mである。柱を据えるための地下式礎石が残る柱穴もある。地下式礎石には長径0.3～0.4m程度の大きなものがある。柱穴169からは、地下式礎石として転用された石臼が出土した。

柵208（図21） 調査区東部で検出した。東側は調査区外になる。規模は東西4.1mで、柱間は

0.6～1.5mと不等間である。方位は東に対し約10度南に振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.25～0.5m程度で平面楕円形や隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.3～0.7mを測る。柱痕跡の径は0.2mである。

溝30 (図版14・42) 調査区北部で検出した東西溝である。東側は調査区外となり、西側は溝230と合流する。幅4.7m×深さ1.2mを測る。方位は西に対し約25度北に振れる。溝底の標高は1区南壁際で標高8.2m、溝230との合流地点で標高8.3mである。検出できた範囲が狭く、調査区壁も斜行しているため、傾斜方向は不明瞭である。溝50が埋め戻された後、ほぼ同じ場所で再掘削されている。埋土は暗灰黄色シルトと灰色シルトからなり、貝殻が厚く堆積する層がある。堆積状況から判断する限り、最低1回は掘り直しが行われた可能性が高い。遺物は土師器の細片やつぼつぼ、淡水産貝類の貝殻などの動物遺存体が出土した。

溝230 (図版14・42) 調査区中央部で検出した南北溝である。南側は新しい時代の溝によって壊されている。北側は溝30・溝246と合流する。幅3.8m×深さ0.8mを測る。方位は北に対し約17度東に振れる。溝底の標高は溝30・246合流地点で標高8.3m、南端部で標高8.6mと、北東から南西に向かって低くなる。埋土は暗灰黄色シルト・灰オリーブ色シルト・灰色シルトからなり、貝殻が厚く堆積する層がある。堆積状況から判断する限り、埋め戻される以前に最低1回は掘り直しが行われた可能性が高い。遺物は土師器・瓦器・焼締陶器などの土器類や、銅製刀装具、淡水産貝類の貝殻などの動物遺存体が出土した。

溝246 (図版6・7) 調査区北部で検出した東西溝である。北側は調査区外となり、南側は溝230と合流する。埋土は暗灰黄色シルト・灰色シルトからなり、堆積状況から3回程度の流路の移動があったと考えられる。最終的な規模は幅3.8m×深さ0.9mを測る。方位は東に対し約18度北に振れる。溝底の標高は北壁際で標高8.2m、溝30・246合流地点で標高8.3mである。検出できた範囲が狭く、調査区壁も斜行しているため、傾斜方向は不明瞭である。遺物は土師器や瓦器などの土器類が出土した。

溝96 (図版6・7) 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。幅3.3m×深さ0.9mを測る。方位は北に対し約24度東に振れる。遺物は土師器皿や瓦器椀・鍋の細片が出土している。

集石330 調査区南西部で検出した。7m×7mの範囲に0.7m以下の亜円礫が、高さ0.2mにわたって馬蹄形状に集積していた。集石間にはオリーブ褐色シルトが堆積していた。

耕作溝群 調査区南西部で検出した溝群である。全長4～7m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は灰色シルトである。方位は北に対し約37度東に振れる。

噴砂 (図9、巻頭図版2、図版8) 調査区各所で検出した。IX層(基盤層)からV層上面(安土桃山時代)にまで及ぶ。

(7) 江戸時代の遺構 (図版5)

溝1・3 (図版6・7) 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。両溝は重複しており、同一箇所でも掘削されたものと考えられる。溝1は幅2.5m×深さ1.5mを測る。溝3は溝1によって壊されており、幅は不明である。深さ1.0mを測る。両溝ともに、方位は北に対し約14度東に振れる。溝底の標高は、溝1が北壁際で標高9.2m、南壁際で標高9.1mである。溝3が北壁際で標高9.9m、南壁際で標高10.0mである。遺物は江戸時代後期の染付が多数出土している。

溝2 (図版6・7) 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。幅2.7m×深さ1.2mを測る。方位は北に対し約18度東に振れる。溝底の標高は、北壁際が標高9.7m、溝4合流地点で標高9.1mである。遺物は江戸時代後期の広東椀や志野などの染付や施釉陶器が多数出土している。

溝4 調査区北西部で検出した東西溝である。西側は調査区外になる。幅1.6m×深さ1.2mを測る。方位は西に対し約24度北に振れる。溝底の標高は、1区南壁際・東端部ともに標高9.1mである。埋土は上層がにぶい黄褐色シルトと褐色粗砂との互層であり、下層が暗緑灰色シルトである。遺物は江戸時代後期の染付や施釉陶器が出土している。

溝8・9 (図版6・7) 調査区北西部隅で検出した南北溝である。北側と南側、西側は調査区外になる。両溝は重複しており、同一箇所でも掘削されたものと考えられる。溝8は溝9によって壊されており、幅は不明である。深さ1.2mを測る。溝9は西肩部が調査区外のため幅は不明であるが、深さ1.5mを測る。方位は溝8が北に対し約10度東、溝9が北に対し約14度東に振れる。溝底の標高は、溝8が1区西壁際・南壁際ともに標高9.0mである。溝9が1区北壁際・南壁際ともに標高9.1mである。遺物は江戸時代後期の染付が多数出土している。

溝19 (図版6・7) 調査区北西部で検出した南北溝である。北側と南側は調査区外になる。幅1.0～1.9m×深さ1.1mを測る。断面は稜研形を呈する。方位は北に対し約20度東に振れる。溝底の標高は1区北壁際が標高8.9m、南壁際が標高8.7mである。遺物は染付や施釉陶器とともに、京都12段階の土師器皿が出土している。

溝58・134・235 (図版8・9) 調査区南東部で検出した南北溝群である。南東側は調査区外となる。重複が激しく規模は不明瞭であるが、溝58は幅約10.5m×深さ1.6m、溝134は約7m×深さ約1.8mを測る。方位は溝58が北に対し約17度東、溝134が北に対し約5度東、溝235が北に対し約12度東に振れる。埋土には貝殻片が堆積する堆積層が認められる。溝底の標高は、溝58は北端部が標高8.1m、南壁際が標高7.9mである。溝134は北端部が標高8.5m、東壁際が標高8.4mである。溝235は北端部が標高8.9m、南端部が標高8.8mである。全体的に、北から南に向かって標高が低くなる。遺物は溝58から染付・焼締陶器や淡水・海水産貝類と大型哺乳類の動物遺存体、溝134から江戸時代後期の染付や施釉陶器・焼締陶器、溝235から染付や施釉陶器・棧瓦などが出土している。

溝217・218（図版8・9） 調査区南部で検出した東西溝群である。東側と西側は調査区外になる。両溝は重複しており、同一箇所でも再掘削されたものと考えられる。溝217は幅7.1m×深さ1.5mを測る。溝218は溝217によって壊されており、幅は不明である。深さ1.5mを測る。両溝ともに、方位は西に対し約29度北に振れる。溝底の標高は、溝217は西壁際が標高9.0m、東壁際が標高9.1mである。溝218は西壁際・東壁際ともに標高8.6mである。遺物は江戸時代後期の染付や賽子形の木製品が出土している。

円形土坑群（図版6・7・39） 調査区の各所で円形の土坑7・11・12・16～18・116・229・242・250・251・283を検出した。規模は直径1.5～2.0m×深さ0.6～0.9mを測る。土坑7・11・12・17・251には、筒状の壁面に沿って薄く木質が残存しており、それを支える直径0.1m以下の木杭が遺存していた。焼締陶器の細片が少量出土したが、時期がわかる土器類は出土していない。土坑116からは銭貨（新寛永通寶）が出土した。遺物と層位からⅢ層堆積以前の江戸時代中期頃と考えられる。

墓5（図22） 調査区北西部で検出した。南側は調査区外になる。掘形の検出規模は長径2.5m以上×短径1.7m×深さ1.2mを測る。平面隅丸長方形を呈する。方位は北に対し約22度東に振れる。遺物は染付や施釉陶磁器・焼締陶器などとともに、京都13段階の土師器皿が出土した。

墓6（図22、図版39） 調査区北西部で検出した。南側は調査区外になる。掘形の検出規模は長径2.5m以上×短径1.7m×深さ1.2mを測る。平面隅丸長方形を呈する。方位は北に対し約22度東に振れる。遺物は江戸時代後期の土師器や染付、施釉陶器片が出土した。

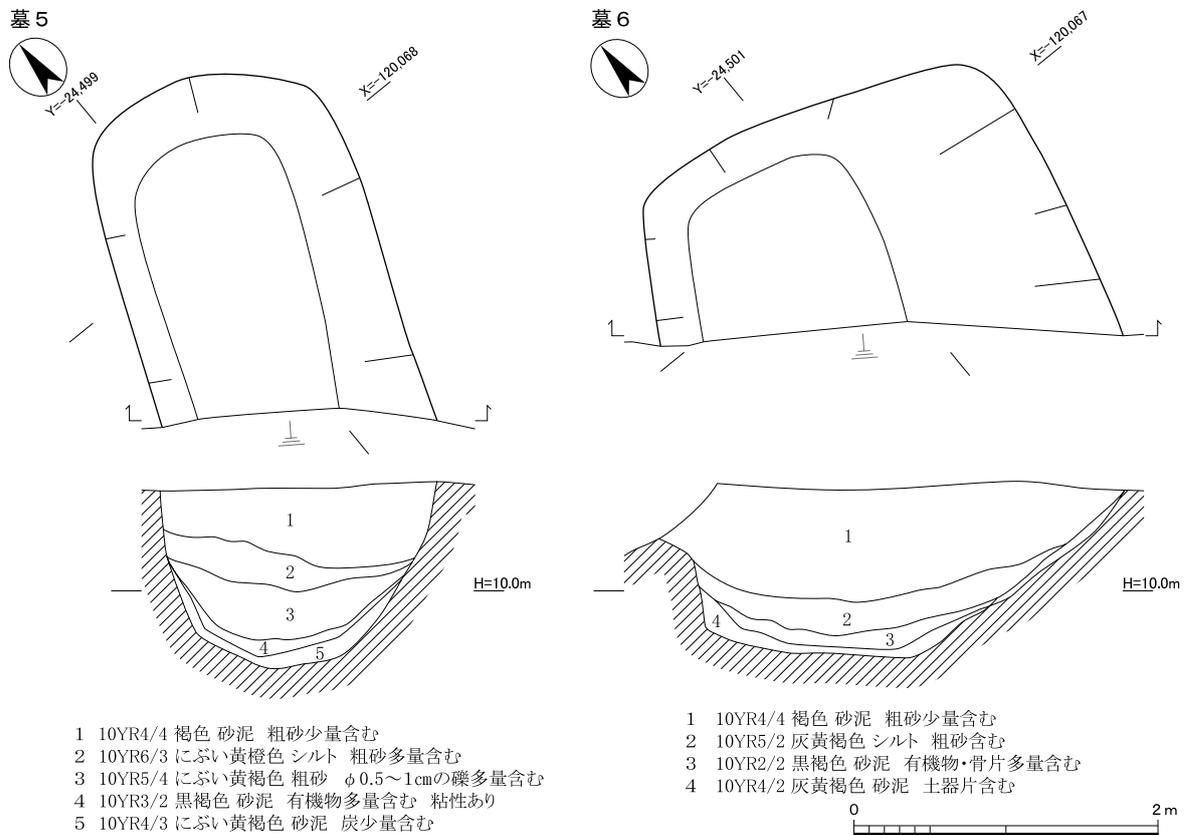


図22 墓5・6実測図（1：50）

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土遺物は整理コンテナに160箱出土した。出土遺物には土器類、瓦類、石器・石製品、木製品、金属製品、動植物遺存体などがある。出土遺物のうち土器類、瓦類が9割を占め、その他の種類の遺物はわずかである。

平安時代以前 縄文土器・弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器、瓦類、石器などがある。基盤層であるⅨ層（砂礫層）や、中世から近世にかけての遺構や整地層から出土した。調査区内で当該期の遺構は確認できなかったことから、すべて混入品と考えられる。

鎌倉時代後半 土師器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、植物遺存体などがある。土師器は乙訓在地形の皿が主体を占める。瓦器は樟葉型の椀がある。瓦類は塙がある。石製品は滑石製の石鍋がある。木製品は井戸44から刀形や卒塔婆形などの祭祀具が出土している。金属製品は鉄製刀子がある。植物遺存体は井戸44から主に草本類の種子が出土している。

鎌倉時代末から室町時代前半 土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨などがある。土師器は乙訓在地形の皿とともに、京域主流形の皿が組成する。瓦器は樟葉型の椀が主体を占めるが、大和型も少数ある。瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・塙がある。軒瓦は少ない。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代以前	縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、石器		縄文土器1点、弥生土器1点、古式土師器2点、土師器1点、須恵器7点、瓦類1点、石器1点		
鎌倉時代後半	土師器、瓦器、須恵器、灰釉系陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品		土師器239点、瓦器60点、須恵器5点、灰釉系陶器1点、輸入陶磁器8点、瓦類3点、石製品2点、木製品5点、金属製品2点		
鎌倉時代末～ 室町時代前半	土師器、瓦器、須恵器、瓦類、銭貨		土師器156点、瓦器33点、須恵器1点、瓦類13点、銭貨15点		
室町時代後半	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、石製品、銭貨		土師器44点、瓦器7点、焼締陶器1点、施釉陶器1点、輸入陶磁器3点、石製品4点、銭貨4点		
安土桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、石製品、金属製品		土師器8点、瓦器4点、焼締陶器2点、施釉陶器2点、石製品4点、金属製品1点、銭貨7点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶磁器、瓦類、石製品、木製品、銭貨		土師器6点、焼締陶器1点、施釉陶磁器1点、瓦類4点、石製品2点、木製品1点、銭貨8点		
合 計		176箱	672点 (30箱)	10箱	136箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より16箱多くなっている。

丸瓦・平瓦は2次被熱を受け、煤が付着するものが多い。石製品は滑石製石鍋や石臼がある。

室町時代後半 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、石製品、銭貨、動物遺存体などがある。土師器は乙訓在地形の皿と京域主流形の皿がある。石製品は石臼や別石五輪塔の空風輪がある。動物遺存体は解体痕を持つウシの骨や、オオタニシなど淡水産の貝殻がある。

安土桃山時代 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器、石製品、金属製品、動物遺存体などがある。石製品は別石五輪塔の空風輪や一石五輪塔の一部、砥石が出土した。金属製品は銅製の刀装具がある。動物遺存体はシカやヒトの骨がある。

江戸時代 土師器・焼締陶器・施釉陶磁器、瓦類、石製品、木製品、銭貨、動物遺存体などがある。瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦がある。石製品は一石五輪塔の一部がある。動物遺存体はシカの骨や、淡水産・海水産の貝殻がある。

以下では種類ごとに出土遺物の概要を報告する。¹¹⁾

(2) 土器類 (付表1)

1) 平安時代以前の土器

Ⅸ層(砂礫層) 出土土器 (図23) 縄文土器(1)・須恵器(2)がある。1は縄文土器の深鉢である。ヘラ状工具で刻目を加えた突帯文を施す。縄文時代晩期。2は須恵器杯身である。内外面が磨滅する。陶邑編年のTK208～TK23型式に属すると考える。

その他遺構・整地層出土土器 (図23) 弥生土器(3)・古式土師器(4・5)・土師器(6)・須恵器(7～12)がある。3は弥生土器の器台である。下方に拡張した口縁部外面に竹管文を巡らす。攪乱坑から出土した。弥生時代後期。4は古式土師器の器台である。Ⅴ層から出土した。5は古式土師器の高杯である。溝235

から出土した。6は土師器杯である。Ⅴ層から出土した。古墳時代後期に属すると考える。7は須恵器杯身である。溝3から出土した。陶邑編年のTK217型式に属すると考える。8は無蓋高杯の口縁部である。杯部下方に櫛描き波状文を巡らす。溝50から出土した。9は須恵器有蓋高杯である。内外面が激しく磨滅している。溝4から出土した。10は須恵器の甗である。胴部に櫛描き波状文を巡らす。土坑513から出土した。8・10は陶邑編

Ⅸ層(砂礫層)



その他遺構・整地層

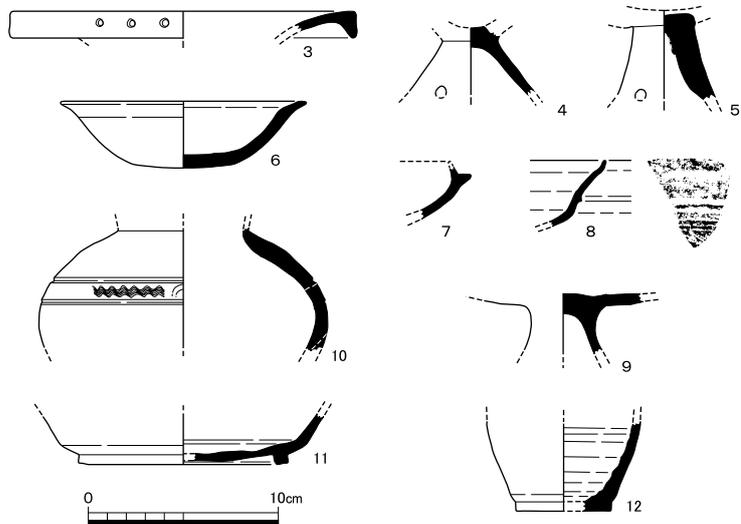


図23 平安時代以前の土器実測図(1:4)

年のTK208～TK23型式に属すると考える。11は須恵器の杯Bである。12は須恵器の瓶子である。いずれも溝4から出土した。平安時代に属する。

2) 鎌倉時代後半の土器

〔古段階〕

乙訓在地形土師器皿は、口径8cm台の小皿と口径12cm台の大皿が主体となる。樟葉型瓦器椀は口径12.0～13.0cmが主体をなす。外面にミガキは無く、内面にのみ粗いミガキを施す。口縁部内端の段は無く、簡略化された高台は断面三角形を呈するものが多い。

井戸44出土土器(図版16・43) 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.1～8.4cmの小皿(13～72)と、口径11.1～12.6cmの大皿(73～104)がある。瓦器は樟葉型の椀がある。口径10.2cmの小椀(105)と、口径約11.9～13.2cmの大椀(106～120)がある。

土器溜100出土土器(図版17・43) 土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.8～8.6cmの小皿(121～140)と、口径11.4～12.6cmの大皿(141～148)がある。瓦器は皿(149～151)・椀(152～159)・鍋(160)・羽釜(161)・盤(162)がある。椀は樟葉型がある。口径9.8・11.0cmの小椀(152・153)と、口径12.8～13.6cmの大椀(154～159)がある。須恵器は東播系の鉢(163)がある。口縁端部がわずかに上方に拡張する。輸入陶磁器は白磁皿と青磁椀がある。164は口禿の白磁皿。内面見込みに圏線を持つ。体部下端から底部外面は露胎する。165・166は龍泉窯系の青磁小椀である。いずれも内外面は無文。166は釉薬を漬け掛けしており、高台外面の一部と内面は露胎している。削出高台である。167・168は龍泉窯系の青磁椀である。いずれも体部外面に鎬蓮弁文を持つ。

土坑513出土土器(図版17・44) 土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、系統不明の皿がある。乙訓在地形の皿は、口径7.8～8.4cmの小皿(169～174)と、口径11.9～12.0cmの大皿(175～177)がある。系統不明の皿(178)は口径10.7cmを測る。口縁端部に面取りを施す。瓦器は皿(179・180)・椀がある。179は内底面に渦巻き状の暗文を持つ皿である。椀は樟葉型がある。口径10.8cm×器高3.6cmの小椀(181・182)と、口径12.1cm×器高4.1cmの大椀(183)がある。輸入陶磁器は白磁皿(184・185)がある。184は内底面が平坦をなす。185は口禿の白磁皿。全面施釉している。

〔新段階〕

乙訓在地形土師器皿は、口径7cm後半～8cm台の小皿と口径11cm台の大皿が主体となる。樟葉型瓦器椀は口径11.5～12.5cmである。高台の簡略化が進み、粘土紐を付すが高台と認識できる程度まで矮小化したものもある。

墓555出土土器(図版18・44) 土師器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.5～8.4cmの小皿(186～200)と、口径11.2～11.8cmの大皿(201～204)がある。

墓556出土土器(図版18・44) 土師器・瓦器・須恵器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、系統不明の皿がある。乙訓在地形の皿は、口径7.4～8.0cmの小皿(206～220)と、口径11.0～

12.0cmの大皿（221～228）がある。205は系統不明の皿。口縁端部が内彎気味となる。口径7.2cmである。瓦器は樟葉型の椀（229～231）がある。口径11.8～13.2cmである。内底面の暗文は229が渦巻き状、230・231がジグザグ状を呈する。須恵器は産地不明の壺（232）がある。口縁部を欠く。肩部に2～3条の沈線を巡らす。

墓557出土土器（図版18・44） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.4～8.0cmの小皿（233～248）と、口径10.4～11.6cmの大皿（249～252）がある。瓦器は皿（253～256）がある。

溝40出土土器（図版18・45） 土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.8～8.3cmの小皿（257～259）と、口径11.5～12.0cmの大皿（260～265）がある。瓦器は樟葉型の椀（266・267）がある。口径12.0・13.0cmである。267は矮小化した高台を持つ。須恵器は東播系の片口鉢（268）がある。口縁端部が上方に拡張する。輸入陶磁器は龍泉窯系の青磁杯形盤（269）がある。内面に片彫りで草花状の文様を施し、空白部に櫛目を加える。

土坑400出土土器（図版18・19・45） 土師器・瓦器・須恵器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.0～8.6cmの小皿（270～284）と、口径10.8～11.9cmの大皿（285～296）がある。294は内底面にハケメを残す。瓦器は椀・羽釜（301～303）・鍋（304）がある。椀は樟葉型がある。口径10.0cmの小椀（297）と、口径11.8～12.4cmの大椀（298～300）がある。301はやや内傾した口縁部の外面に2条の段を持つ羽釜である。303は三脚を持つ羽釜。須恵器は東播系の鉢（305）がある。口縁端部が上方に拡張して、断面「く」字状を呈する。

土坑101出土土器（図版19・46） 土師器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径7.2～8.0cmの小皿（306～311）と、口径10.7～11.6cmの大皿（312～314）がある。皿S（315）は口径12.2cmを測る。色調が灰白色を呈し、胎土は緻密で在地形に特徴的な鉱物粒は含まれない。瓦器は皿（316・317）・椀・羽釜（321～323）がある。椀は樟葉型がある。口径11.9～12.4cmのものがある。321は羽釜のミニチュア。322はやや内傾した口縁部の外面に2条の段を持つ羽釜である。須恵器は東播系の鉢（324）がある。口縁端部が上方に拡張する。灰釉系陶器は尾張型山茶椀の小皿（325）がある。

3) 鎌倉時代末から室町時代前半の土器

〔古段階〕

乙訓在地形土師器皿は、口径7cm後半の小皿と口径10～11cm台の大皿が主体となる。京都7C段階の皿Sを伴う。樟葉型瓦器椀は口径11.6～12.6cmが主体をなす。粘土紐を付すが高台と認識できる程度まで矮小化したもの、無高台のものがある。

溝340出土土器（図版20・46） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径7.5～7.9cmの小皿（326～330）と、口径10.0～11.0cmの大皿（331～336）がある。皿S（337～340）は口径11.5～11.8cmのものがある。京都7C段階。瓦器は椀（341～343）と壺（344）がある。椀は樟葉型で、口径11.6～12.5cmのものがある。高台を欠く341、高

台は付されるが矮小化して痕跡的な342・343がある。高台を欠く341は、器面の炭素の沈着が不十分で、胎土の色調はやや橙色味を帯びた灰白色を呈する。

土坑352出土土器（図版20） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径7.4～8.0cmの小皿（345～347）がある。瓦器は樟葉型の椀（348～351）がある。口径12.2～12.5cmである。349・351は内面の体部下半から底部にかけて一部ハケメが残る。

溝467出土土器（図版20・47） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径9.7～10.4cmの大皿（352～354）がある。皿S（355）は口径11.8cmを測る。瓦器は椀（356～358）・羽釜（359～361）・鍋（362）がある。椀は樟葉型がある。口径11.0～11.6cmのものがある。359は三脚を持つ羽釜であるが、脚の剥離痕にも煤の付着が認められる。360・361は直立気味の口縁部を持つ羽釜。口縁端面は外傾する。

〔新段階〕

乙訓在地形土師器皿は、口径7cm台の小皿と口径9～10cm前半の大皿が主体となる。京都8段階の皿N・皿Sh・皿Sを伴う。在地の胎土を持つ皿Sは、将来的に乙訓在地形として抽出できる可能性がある。樟葉型瓦器椀は口径10.2～11.8cmが主体をなす。高台と認識できる程度まで矮小化したものや無高台のものがある。瓦器椀自体は減少傾向にある。

土坑275出土土器（図版20） 土師器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿・壺・火鉢（367）がある。乙訓在地形の皿は、口径8.4～9.8cmの大皿（363～365）がある。366は片口の小壺である。肩部に竹管文を押捺する。

整地399出土土器（図版21・47） 整地401と一連の遺構であるが、2つの遺物のまとまりが認められたため、別々に取り上げた。一括性はやや欠ける。土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿N・皿Sh・皿S・羽釜がある。乙訓在地形の皿は、口径7.5～8.0cmの小皿（368～373）と、口径9.6～10.0cmの大皿（374～377）がある。皿N（378）は口径7.4cmの小皿がある。皿Sh（379）は口径6.4cmを測る。皿S（380）は口径11.6cmの大皿がある。381は口縁部を内傾させ、端部を外側に折り曲げた羽釜。胎土は精良で堅緻に焼成されている。瓦器は椀（382）・壺（383）・羽釜（384）がある。382は樟葉型の椀である。口径11.0cmを測る。矮小化した高台は全周せず、馬蹄形状を呈する。383は肩部に花卉状の暗文を施す小壺である。

整地401出土土器（図版21・47） 整地399と一連の遺構であるが、2つの遺物のまとまりが認められたため、別々に取り上げた。一括性はやや欠ける。土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿N・皿Sh・皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径7.1～7.9cmの小皿（385～394）と、口径9.0～11.4cmの大皿（395～402）がある。皿N（403）は口径7.7cmの小皿がある。皿Sh（404）は口径6.8cmのものがある。瓦器は皿（405～407）・椀がある。椀は大和型と樟葉型がある。408は大和型の椀で口径10.6cmである。内面にのみ粗いミガキを施し、暗文は粗い渦巻き状を呈する。口縁内端部に段を持ち、器形は半球形を呈する。矮小化した高台を持つ。樟葉型（409～414）の椀は、口径10.6～10.8cmの小椀（409・410）、口径11.6～13.0cmの大椀（411～414）がある。いずれも内底面の暗文はジグザグ状を呈する。小椀の高台は矮小化して馬蹄形状を呈する。大椀の高

台は簡略化した断面三角形で混入の可能性がある。

溝424出土土器（図版21） 土師器・瓦器が出土した。土師器は皿S（415・416）がある。口径11.6～12.2cmである。瓦器は椀（417・418）・羽釜（419）がある。椀は樟葉型で、口径10.2cmの小椀（417）と口径12.0cmの大椀（418）がある。

墓393出土土器（図版22・48） 土師器・瓦器・須恵器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿N・皿Sh・皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径7.2～7.8cmの小皿（420～433）と、口径9.3～10.2cmの大皿（434～444）がある。皿Nは口径7.2～7.6cmの小皿（445～451）と、口径9.8cmの大皿（452）がある。皿Sh（453～456）は口径6.5～7.0cmのものがある。皿Sは口径6.4cmの小皿（457）と、口径10.8～11.8cmの大皿（458～465）、口径13.8cmの特大皿（466）がある。皿Sの大皿は口縁端部がやや内彎する。458は内面に粗いハケメを残す。皿Sの胎土は雲母や赤色粒が混じる。京都8段階の特徴を持つ。瓦器は系統不明の椀の底部（467）がある。無高台。須恵器は東播系の片口鉢（468）がある。口縁端部が拡張して、断面「く」字状を呈する縁帯部を持つ。

墓402出土土器（図版22・48） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿N・皿Sh・皿Sがある。乙訓在地形の皿は、口径7.3～7.8cmの小皿（469～484）と、口径9.6～10.3cmの大皿（485～493）がある。皿Nは口径7.6cmの小皿（494～497）と、口径9.7～10.2cmの大皿（498～501）がある。皿Sh（502・503）は口径6.4～7.0cmのものがある。皿Sは口径6.6cmの小皿（504）と、口径11.1～11.7cmの大皿（505～512）、口径13.0～14.0cmの特大皿（513・514）がある。皿Sの大皿は口縁端部がやや内彎する。皿Sの胎土は雲母や赤色粒が混じる。京都8段階の特徴を持つ。瓦器は系統不明の椀（515）がある。口径約11.8×器高4.1cmである。無高台の杯形を呈する。内面にのみ粗いミガキを施し、内底面の暗文はジグザグ状である。内外面に細かな円形剥離を多数確認できる。

4) 室町時代後半の土器

柱穴155出土土器（図版22・49） 土師器・瓦器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿がある。口径6.8～7.2cmの小皿（516～530）と、口径10.2～11.2cmの大皿（531～540）、口径15.2cmの特大皿（541）がある。小皿・大皿は内面、特大皿は外面に粗いハケメを残す。大皿は口縁部のヨコナデによって口縁端部が内彎する。瓦器は羽釜（542）がある。混入の可能性がある。

溝331出土土器（図版23・49） 土師器・瓦器・施釉陶器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿Sがある。乙訓在地形の皿は口径6.0～7.0cmの小皿（543～545）と、口径13.8cmの特大皿（546）がある。皿S（547～550）は口径15.0～15.6cmである。京都9C段階。瓦器は火鉢（551～553）がある。551・552は花文スタンプを押捺している。施釉陶器は瀬戸美濃系の花瓶（554）がある。

溝255出土土器（図版23・50） 土師器・瓦器・施釉陶器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿と、皿Sbがある。乙訓在地形の皿は、口径6.6～6.7cmの小皿（555・556）と口径9.8cmの大皿（557）がある。556・557は内面に粗いハケメを残す。皿Sb（558）は口径9.7cmである。瓦器は火鉢（559）

がある。巴文スタンプを押捺している。施釉陶器には瀬戸美濃系の天目茶椀（560）と皿（561）がある。

溝256出土土器（図版23） 焼締陶器が出土した。焼締陶器は信楽産の播鉢（562）がある。櫛状具による1単位5本の摺目を持つ。

溝50出土土器（図版23・50） 土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土した。土師器は皿S（563・564）・羽釜（565）・焙烙（566）がある。皿Sは口径10.6～11.0cmである。羽釜は下膨れ気味の器形を呈し、口縁部が外反する。瓦器は羽釜（567・568）がある。568は、567と比べて口縁部の内湾が弱い。輸入陶磁器は産地不明の青磁端反椀（569）がある。

溝97出土土器（図版24） 土師器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿（570・571）がある。571は内面に粗いハケメを残す。

5) 安土桃山時代の土器

溝96出土土器（図版24） 土師器が出土した。土師器は乙訓在地形の皿（572）と皿Sb（573・574）がある。

溝230出土土器（図版24・50） 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器が出土した。土師器は皿N（575・576）・皿Sb（577）・皿S（578）・焙烙（579）がある。皿Nは口径5.6～7.0cmである。皿Sbは口径9.0cm、皿Sは口径10.8cmを測る。瓦器は羽釜（580・581）・風炉（582）・播鉢（583）がある。焼締陶器は壺（584）・甕（585）がある。584は備前産の壺。口縁端部を外に折り返し玉縁状を呈する。585は口縁部縁帯が上下に拡張された常滑産の甕である。施釉陶器には瀬戸美濃系の天目茶椀（586）と皿（587）がある。

6) 江戸時代の土器

溝19出土土器（図版24・50） 土師器・施釉陶器が出土した。土師器は皿S（588・589）がある。口径9.6～11.0cmである。京都12段階。施釉陶器は京・信楽系陶器の皿（590）がある。内底面に草花文を施す。

墓6出土土器（図版24） 土師器・焼締陶器が出土した。土師器は皿S b・皿Sがある。皿S b（591）は口径8.4cm、皿S（592～594）は口径9.4～9.6cmである。京都13B段階。焼締陶器は播鉢（595）がある。

(3) 瓦類（付表2）

軒丸瓦（図版25・51） 瓦1は巴文軒丸瓦である。外区に界線・珠文・圏線を巡らす。丸瓦凸面に粗いミガキを施す。凹面には布目を残す。土坑257から出土した。

瓦2は巴文軒丸瓦である。外区に大ぶりの珠文を巡らす。IV層から出土した。

軒平瓦（図版25・51） 瓦3は唐草文軒平瓦である。平安時代後期の兵庫県明石市林崎三本松瓦窯に同文瓦がある。播磨産。土坑101から出土した。

瓦4は唐草文軒平瓦である。外区に界線を巡らす。瓦当の頸部に凹型台の痕跡が認められる。土坑400から出土した。

瓦5は連珠文軒平瓦である。外区に界線を巡らす。瓦当の頸部に凹型台の痕跡が認められる。土坑275から出土した。

瓦6は唐草文軒棧瓦である。攪乱出土。

丸瓦・平瓦（図版26・51） 瓦11・12は丸瓦である。凸面縄叩きののちナデを施す。凹面は布目が明瞭に残り、吊り紐痕が認められる。瓦11は溝626、瓦12はⅥ層から出土した。

瓦13は平瓦である。凸面に格子目タタキ、凹面に布目を残す。Ⅴ層から出土した。

道具瓦（図版25） 瓦7は鬼瓦である。外区に珠文を巡らす。全体の成形は范型による。Ⅲ層から出土した。瓦8は鬼瓦である。全体の成形は范型による。Ⅱ層から出土した。

刻印瓦（図版26） 出土した刻印瓦はすべて平瓦である。瓦14～21は平瓦端面に施された刻印である。刻印は8種類確認した。

塼（図版25） 瓦9は有孔塼である。全面ナデ調整で、端面は一部ヘラケズリで仕上げる。表面には煤が付着する。土坑101から出土した。瓦10は塼である。全面ナデ調整。表面には煤が付着する。建物363（柱穴458）から出土した。

（4）石器・石製品（付表3）

石包丁（図版27・52） 石1は磨製の石包丁。石材は粘板岩である。表裏面に研磨痕。刃部が一部残存する。Ⅴ層から出土した。弥生時代。

石鍋（図版27・52） 石2・3は滑石製石鍋である。いずれも口縁部直下に断面台形の鏝を削り出したものである。石3は外面に煤が付着している。石2は土坑400、石3は土坑101から出土した。

砥石（図版27・52） 石4は砥石である。石材は砂岩である。溝230から出土した。

石臼（図版27・52） 石5は茶臼の上臼である。石材は深成岩である。溝255から出土した。

石6・7は石臼である。いずれも石材は深成岩（花崗岩）である。石6は柱穴214、石7は建物190（柱穴169）から出土した。いずれも地下式礎石に転用されたものである。

石塔（図版28・52） 石8～11は別石五輪塔の空風輪である。石材は深成岩（花崗岩）である。石8・9は空輪が扁平な宝珠形をなし、風輪は椀形を呈する。各部位の削り出しは精緻で空風輪境の削り込みが強い。石8は正面に梵字「𑖀（キャ）」・「𑖄（カ）」を陰刻する。石10は空輪が縦長気味の宝珠形をなし、風輪はやや腰が張る椀形を呈する。各部位の削り出しはやや甘く、空風輪境の削り込みは弱い。石11は風輪の側面が面をなし、断面台形状を呈する。石8・9は形態的特徴が古相をなし、室町時代後半の可能性がある。石8・10は溝230、石9は溝255、石11は溝217から出土した。

石12・13は一石五輪塔と考えられる。石材は深成岩である。石13は火輪の軒下端の反りが弱く、上端はわずかに反りが認められる。石12は溝230、石13は溝58から出土した。

(5) 木製品 (付表4)

祭祀具 (図版29・53) 木1は刀形である。やや反りのついた刀身と茎を板材から削り出している。刃区・棟区の表現は弱い。刀身部分は断面長方形を呈し、刃は表現されていない。木2～4は卒塔婆形である。木2・3は板材の上端を宝珠状に加工する。下端欠失。木5は人形か。断面方形を呈する棒状の材の一端を人頭状に加工している。木2と同様に側面のみを加工することから、卒塔婆形の可能性もある。下端欠失。木1・2は井戸44掘形の北東隅、木3は同南西隅から出土した。木4・5は同井戸枠の部材を構成していた。

遊戯具 (図版29・53) 木6は賽子形木製品である。墨書で描かれており、賽の目は1・3・8を確認できる。各面には文字も書かれており、西・東・南などの方位を辛うじて読み取ることができる。溝218から出土した。

(6) 金属製品 (付表5・6)

刀子 (図24、図版54) 金1・2は鉄製の刀子である。いずれも平造りで、切先と茎尻、刃側が欠損する。金1は反りが少なく、上身がやや刃側に傾く。棟区の区角は鈍角を呈す。墓555から出土した。金2は刀身が先反りで、棟区の区角は直角に近い。墓557から出土した。

刀装具 (図24、図版54) 金3は銅製の兜金である。中央部先端がやや突出する。内面に鮫皮が付着している。分析の結果、表面に鍍金などは確認できなかった。溝230から出土した。

銭貨 (図版30・54) 18種類45枚が出土した。北宋銭が26枚 (約58%)、国産銭貨 (寛永通寶のみ) 10枚 (約22%)、唐銭3枚 (約7%)、後周銭1枚 (約2%)、不明5枚 (約11%) である。遺構としては整地層399からの出土が最も多く、唐銭 (銭1)、後周銭 (銭2)、北宋銭 (銭3～12) の7種類12枚である。このうち比較的状态の良い34枚を図示した。この中では、後周銭の周通元寶 (銭2) は京都市内で出土事例が少ないものである。銭13は上月の背文がある開元通寶である。

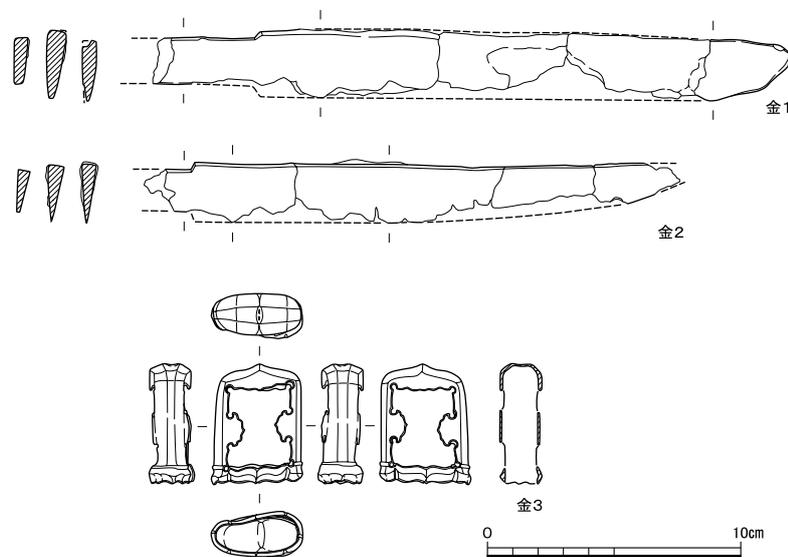


図24 金属製品実測図 (1 : 3)

5. まとめ

今回の調査では、これまで未確認であった鎌倉時代後期から江戸時代の遺構・遺物を検出した。これらは従来全く明らかになっていなかった調査地周辺の土地利用の変遷を考える上で重要な1次資料と評価できる。以下、時期ごとに調査の成果をまとめる。

(1) 遺構群形成以前

調査地における遺構群形成以前の遺物は、縄文時代晩期から平安時代の遺物がある。このうち、縄文時代晩期と古墳時代後期の遺物はⅨ層（基盤層）を構成する砂礫層から出土しており、他は鎌倉時代後期以降の遺構や洪水堆積層・整地層から出土した。層相観察に基づく分析によってⅨ層（基盤層）下層の砂礫が河床堆積物、上層の砂泥・シルトが氾濫原堆積物であることが明らかとなり、当該地が河床から氾濫原へ推移したと結論される（付章1-1）。Ⅸ層（基盤層）は南西から北東に向かって緩やかに標高が高くなることから、調査地北東側に高まりを持つ微高地が存在したと考えられる。Ⅸ層（基盤層）の砂礫から出土した遺物は、河床堆積物とともに上流域から流れ着いたものと想定されることから、当該地に微高地が形成された時期は、古墳時代後期からここに遺構群が形成される鎌倉時代後半までの間であったと考えられる。

(2) 鎌倉時代後期から室町時代前期

第4面・第3面の遺構・遺物群が該当する（図版2・3）。検出した遺構の重複関係や、両遺構面で検出した遺構の性質・配置、出土遺物の特徴に連続性が認められることから、ここではあわせて記述する。

主な遺構は調査区の北側で検出した。小規模な溝で区画された敷地内に掘立柱建物や井戸・水溜、墓などを確認した。敷地内は遺構の重複が激しく、さらに地面の凹みを埋める整地が幾重にも施されていることから、継続した土地利用があったと推察する。また、検出した井戸は標高約9.0mの遺構面から深さ3mに水溜を設置しており、その埋土からは畑や道端・空き地など開けた環境で生育する植物遺存体が多数出土した（付章3-2）。当該期、調査地周辺では地下水位が現況より低く、比較的乾燥した環境下にあった微高地上に、これら遺構群が形成されたと考えられる。

鎌倉時代後半の土器類は乙訓在地形土師器や樟葉産瓦器と少数の輸入陶磁器があり、比較的在地色の強い構成を示す。一方、室町時代前半の土器類は京域主流形の土師器皿が一定の割合を占める。土器の他には焼けた瓦類が比較的まとまって出土しており、少数ながら軒瓦や塼を確認した。調査区もしくは周辺に小規模な瓦葺きの建物が存在したと考えられる。

なお、調査地は長岡京域から東に約0.4km離れた場所に位置している（図8）。しかし今回検出した建物や溝の主軸方位は北に対し東もしくは西に大きく振っており、当該期以降も正方位を指向する遺構は認められていない。各遺構の方位を規制した要因は今回の調査では明らかにできなかったが、その解明は今後の課題である。

(3) 室町時代後半

第2面の遺構・遺物群が該当する(図版4)。当該期に幅4～5mの大溝(溝50・255・256)が掘削される。集落域を画する溝と考えられ、何度か掘り直しを行って機能の維持を図っている。また北東部の微高地上では掘立柱建物や柵などを確認したことから、調査地が居住域と生産域との境界部分に当たると考えられる。大溝内からは多量の淡水産の貝殻や解体痕を持つ大型哺乳類(ウシ)の骨が出土した。分析の結果、淡水産貝類の利用については留保されたが、哺乳類については食用や採皮など何らかの加工が行われた可能性が指摘された(付章2)。また大溝からは五輪塔の一部が出土している。調査区周辺の土地利用の性格を考える上で重要な成果と考えられる。

自然科学分析の層相観察によると、調査地は室町時代前半頃から安土桃山時代にかけて洪水による冠水頻度が急増し、氾濫原が急激に埋積されたことが指摘されている。さらに大溝埋土の珪藻化石を分析したところ、非常に緩やかながら、水の流れが恒常的に存在するような堆積環境であったことが明らかとなった(付章1-1・3)。大溝の掘削や滞水状況は、洪水など低湿地型の災害が頻繁に発生し得る環境と関連する可能性が高い¹²⁾。

なお、調査地は室町時代の居城跡と推定された富ノ森城跡に比定されており、今回の調査でもこれと関連する遺構の検出が期待された。しかし試掘および今回調査の結果、地割などから推定された当初の富ノ森城跡推定地では遺構・遺物は希薄であり、当初推定地よりも北側で室町時代の遺構群を確認した(図1)。確認した遺構は建物跡や区画溝などがあるものの、これら遺構群を囲う土塁などの防御施設は検出できていない。このように、今回の調査では当該地に居城があったことを示す明確な成果を得ることができておらず、当該遺跡の性格については、今後の調査成果を踏まえて評価することにした。

(4) 安土桃山時代

第1面の遺構・遺物群が該当する(図版5)。当該期の遺構は室町時代後期と同様、幅約3～5mの大溝(溝30・230・246)がある。集落域を画する溝と考えられ、何度か掘り直しが認められる。また北東部の微高地上に掘立柱建物や柵などを検出した。掘立柱建物の配置などは以前とは大きく異なるものではないが、柱穴の分布範囲が比較的標高が高い北東部に偏在しはじめ、南・西側では希薄となる傾向がある。調査区が集落域の縁辺部にあったと推察する。花粉分析の結果によると、大溝埋土からソバ属の花粉が検出されており、周辺での栽培が推定されている(付章1-2)。

大溝内からは解体痕がある大型哺乳類(シカ)の骨が出土しており、食用や採皮など何らかの加工が行われた可能性が指摘された(付章2)。また大溝からは石塔類が出土している。調査区南西部の溝からは人骨も出土しており、至近に墓地が存在した可能性が考えられる。

層相観察によると、調査地では当該期から江戸時代前期頃は以前と比べて堆積速度が遅く、洪水堆積物の流入量が低下した可能性が指摘された。また大溝埋土の珪藻化石分析からも、水の流量が相対的に以前より低下しており、溝内の有機汚濁が進んだ状況が復元されている(付章1-1・

3)。当該期、調査地周辺では洪水の発生頻度が低下したと考えられる。

なお、今回の調査では各所で噴砂を検出した。これら噴砂は安土桃山時代の遺構面で鎌倉時代後半から室町時代後半の遺構埋土に陥入することから、1596年の慶長伏見地震に伴う噴砂と考えられる。

(5) 江戸時代

第1面の遺構・遺物群が該当する(図版5)。溝や土坑、墓などを検出した。溝は、調査区内で途切れる南北溝58・134・235と、現在の土地境界に沿う溝1・3・4・8・9・217・218がある。

南北溝は安土桃山時代の大溝とほぼ同じ位置に掘削されている。溝底の標高は北西から南東に向かって低くなっており、調査地南側に向かって延伸する。明治23年(1890)に測量された地図(図25)によると、調査地周辺では横大路沼まで続く水路が張り巡らされており、調査地南側にも北東方向に伸びて途中で途切れる水路がある。今回検出した南北溝も同様の働きを持つ溝であったと推察する。

また、現在の土地境界にはほぼ一致する溝の多くは耕作土と推定されるⅡ層堆積後の江戸時代後期以降に成立している。またこれらの溝はⅠ層耕作土の基盤となる造成土によって埋没しているが、明治・大正期の地図類にはこれら溝の表現がないことから、埋没時期は地図が作成された明治

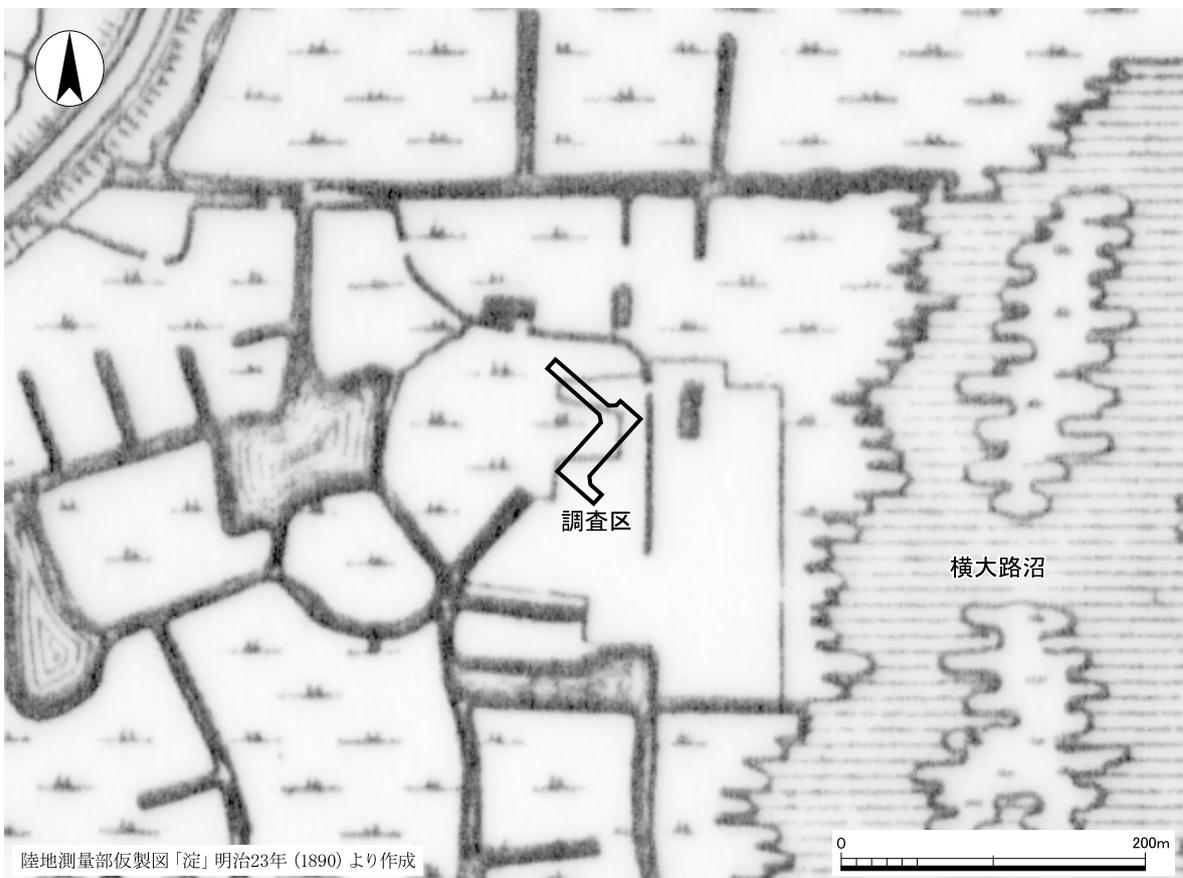


図25 明治23年(1890)の調査区周辺地形(1:5,000)

28年以前と考える。

層相観察の結果では、江戸時代中期から後期にかけて洪水堆積物の堆積が大きくなるとともに、地下水位の上昇があったと推定された（付章1-1）。安土桃山時代頃には一旦は発生頻度が低下した洪水も、18世紀頃から再び増加傾向に転じた可能性が高い。調査区内で検出した溝は、地下水位の上昇とともに低湿地型災害が増加していく環境下に成立したものと考えられる。

当該期の遺構としては円形土坑と土坑墓がある。遺物や層位から円形土坑は江戸時代前期から中期、土坑墓は江戸時代末頃の遺構と考えられる。円形土坑は野壺と考えられ、当該期に周辺で農業が営まれたと推察する。一方、土坑墓は調査区北東に現在も認められる墓地との関連が考えられる。¹³⁾現在につながる土地景観は、江戸時代後期末頃には成立していた可能性が高い。

註

- 1) 歴史的環境については、下記文献を参照した。

田良島 哲「中世淀津と石清水神人」『史林』68巻4号 史学研究会 1985年

芳賀幸四郎「中世末期における三条西家の経済的基盤とその崩壊」『日本学士院紀要』第13巻第1号 日本学士院 1955年

林屋辰三郎・村井康彦・森谷尅久編「伏見区 富森村」『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻 平凡社 1976年

新田美香「京都守護職に対する幕府の財政援助」『お茶の水史学』45号 お茶の水女子大学史学科読史会 2001年

山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭 復原図と関連資料」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号 京都大学人文科学研究所 1986年

- 2) 下三栖遺跡については下記文献を参照した。

「下三栖遺跡 (96TB183)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1996年

「下三栖遺跡 (97TB63)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1997年

「下三栖遺跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年

「下三栖遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年

「下三栖遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年

「下三栖遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年

- 3) 下三栖城跡については下記文献を参照した。

「下三栖城跡 No.106」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年

「下三栖城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年

- 4) 淀城跡については下記文献を参照した。

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2010-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年

『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2011-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

5) 久我東町遺跡については下記文献を参照した。

「久我東町遺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

「久我東町遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年

百瀬正恒「中世後期の集落から近世集落へ -向日市域における中世遺跡の動向-」『中世土器研究論集』中世土器研究会 2001年

6) 羽束師志水町遺跡・長岡京跡については下記文献を参照した。

「長岡京左京四条三・四坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年

「長岡京左京四条三・四坊、羽束師志水町遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年

「羽束師志水町遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年

7) 羽束師菱川城については下記文献を参照した。

「長岡京跡左京四条四坊三町跡 No.18」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局 2010年

「長岡京跡左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡 No.34, No.138」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

「長岡京跡左京第585次(四条三坊十三町跡)・菱川城跡(1)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年

「長岡京跡左京第586次(四条三坊十三町跡)・菱川城跡(2)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年

8) 各城跡については註1山下文献を参照した。

9) 検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平尾政幸氏による中近世の土師器皿編年とその年代観を基準とし、その他の遺物については下記文献を参照した。なお、平尾編年の1~13段階は、本文中では京都1~13段階と表記している。

平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B

九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 九州近世陶磁学会 2000年

櫻木晋一『貨幣考古学の世界』考古調査ハンドブック15 ニューサイエンス社 2016年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年

橋本久和『概論 瓦器碗研究と中世社会』 真陽社 2018年

藤澤典彦・狭川真一『石塔調べのコツとツボ -図説 採る 撮る 測るの三種の実技-』 高志書院
2017年

藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通 -研究の現状と課題-」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会 戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 -東アジアの視野から-』資料集 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2001年

藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』 高志書院 2008年

水谷侃司「信楽焼播鉢から見る中世伊賀の流通について」『金沢大学考古学紀要』37 金沢大学文学部考古学講座 2015年

山本信夫・森田レイ子・宮崎亮一『大宰府条坊跡XV -陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会 2000年

- 10) 乙訓在地形土師器皿の基準は、加納・小森・原文献をもとに次のように設定した。

①製作技法は手づくねであり、器面にナデ仕上げ前のハケメを残すものがある。

②器壁は厚手で胎土に雲母や赤色粒を含む。

③鎌倉時代から室町時代前半の器形は底部からの立ち上がりは厚手で、口縁部にヨコナデを施し、端部に向かって外反気味に薄く仕上げる。口縁端部を丸く収め、面取りは施さない。

④室町時代以降、上記①・②の特徴を備えた皿S模倣形が出現する。器形は口縁端部がわずかに内彎する傾向がある。③の系統と考えられる土師器皿は、口径6～7cm台の小皿を中心とする。

加納敬二「乙訓在地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊 第1分冊（公家町形成前）』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

小森俊寛「概説」『都城の土器集成Ⅲ』古代の土器3 古代の土器研究会 1994年

原 秀樹「第1章」『勝龍寺城跡 外郭土塁・空堀の調査』長岡京市文化財調査報告第73冊 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 2019年

なお、土師器皿における乙訓在地形・京域主流形という用語は伊藤文献に基づいている。

伊藤淳史「所謂“乙訓在地形土師器”と呼称される中世土師器皿類について」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2014年度 京都大学文化財総合研究センター 2016年

- 11) 註9参照。

- 12) 土山祐之は、東寺百合文書に残されている山城国乙訓郡上久世荘関連資料から15世紀における自然災害関連記事を抽出し、古気候学の成果とあわせて検討している。それによると、15世紀に頻出する洪水・旱魃などの自然災害記事は当該期の気候不安定化と深く関連しており、特に中葉以降（特に永享～嘉吉年間）は洪水を中心とした自然災害関連記事が頻出することを指摘している。

土山祐之「東寺領山城国上久世荘の自然災害 -古気候データと史料の検討から-」『気候変動から読み直す日本史4 気候変動と中世社会』中塚 武監修 伊藤啓介・田村憲美・水野章二編 臨川書店 2020年

- 13) 調査区北東の墓地は、昭和6年（1917）まで当該地に所在した阿弥陀寺の境内地の一部であった。現在確認できる墓石は幕末以降のものが主体を占め、少数ながら中世の石塔類も確認できる。『京都府寺院明細帳』（明治16年）によると、阿弥陀寺は下鳥羽の法傳寺の末寺で創建が正喜元年（1257）とされている。なお、阿弥陀寺の寺伝については中路敏治氏（横大路連合自治協議会特別会計・横大路まちづくり協議会副会長）からご教示をいただいた。

付章1 自然科学分析1

株式会社パレオ・ラボ

(1) 層相観察

1) はじめに

本調査区では、鎌倉時代の遺構確認面の上位に約2.0mの堆積層の被覆が認められた。被覆層では、層内に挟在する遺構や遺物により、詳細な堆積時期の決定がなされた。また、今回の発掘調査では、深い攪乱坑の壁面や深掘断面調査により、鎌倉時代の遺構確認面の下位約-1.0mまでの基盤層の層相観察が可能となった。このように本調査区では、現地表面下約3.0m付近までの堆積層の連続的な観察と記載にもとづき、遺跡付近の詳細な堆積環境変遷の検討が行える状況であった。

本報告では、現地調査による調査区壁面を中心とした層相観察と記載にもとづき、遺跡の埋没環境について検討した。

2) 堆積層の記載

堆積層の記載は、調査区東壁の南半部を中心に行った。図26に観察地点での堆積状況を示した模式柱状図を示す。また、現地調査では、層相観察に併せて、溝の埋没環境や周辺古植生復元を目的として、溝230・255から堆積物試料の採取を行った。この溝の柱状図も図26に併せて示す。

調査区東壁の南半部の堆積層については、層相観察および提供受けた断面図とオルソ画像の断面写真を参照して、I～IXの9つ堆積ユニットへの区分を試みた。I～IXまでの堆積ユニット名のローマ数字は、調査区の基本層序名に対応する。

以下に、堆積ユニットごとの記載を示す。なお、層相観察地点では、安土桃山時代以降の遺構と考えられている井路（溝）が繰り返し掘削される。堆積ユニットについては、氾濫原の構成層をなす基本層序部分を「a」、同時期の井路の埋積層を「b」として細分する。

堆積ユニットIX

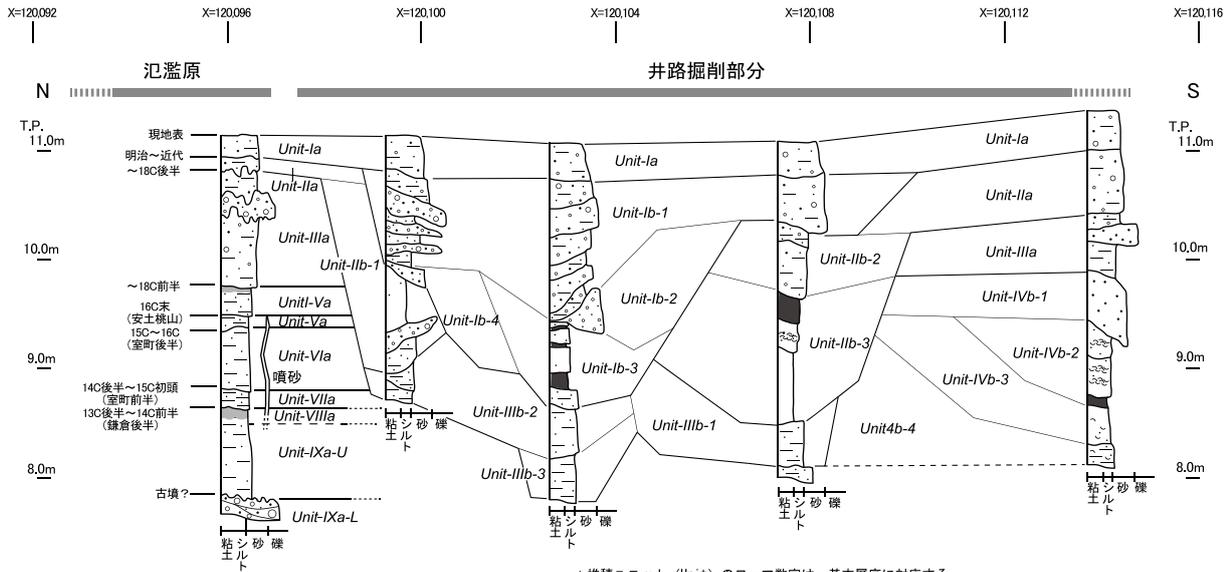
ユニットIX aは、調査区を構成する基本層序の最下部に位置する基盤層をなす堆積ユニットである。岩相から、本ユニットは、ユニットIX a上部（Unit IX-U）とユニットIX a下部（Unit IX-L）に細分される。

ユニットIX a下部は、粗粒の中礫（16-32mm）までの礫を多く含む、トラフ型斜行葉理をなす礫支持の砂礫層である。砂礫層は、調査区の基底のほぼ全域に層状に分布する。礫層上面の高度は平坦ではなく、凹凸がある。湧水が激しく、ユニットIX a下部の基底部は確認できていないが、断片的な深掘調査から層厚が1.0m以上あると推定される。

層相と堆積状況から、ユニットIX a下部は、網状河川の河床堆積物を中心した構成層からなると解釈される。

現段階で堆積時期は確定できないが、ユニットIX a下部内からは、縄文時代や古墳時代の遺物が回収されている。遺物の包含状況をふまえると、ユニットIX a下部は、古墳時代に堆積した可能性

・調査区東壁南半部

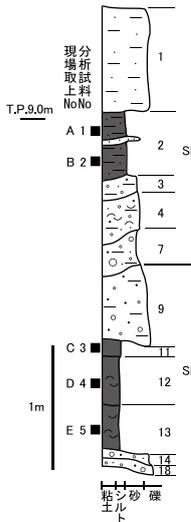


* 堆積ユニット (Unit) のローマ数字は、基本層序に対応する。
 * 室町時代前半と表記しているUnit-VIIaは、実際には鎌倉時代末～室町時代の遺物を含む。

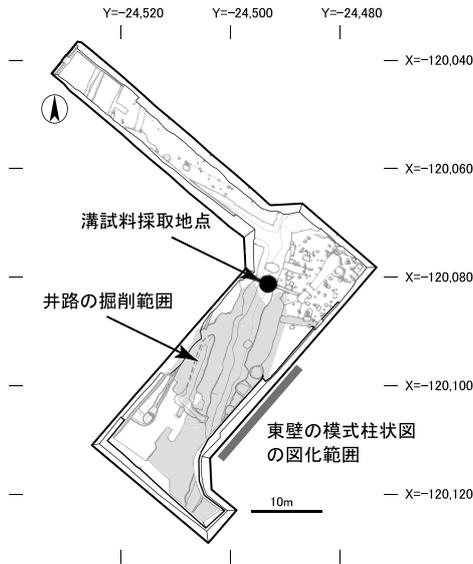
・基本層序

- I 層 (現代) III 層 (江戸時代中期～後期) V 層 (安土桃山時代) VII 層 (鎌倉時代末～室町時代前半) IX 層 (基盤層)
- II 層 (江戸時代後期～近代) IV 層 (江戸時代前期) VI 層 (室町時代後半) VIII 層 (鎌倉時代後半)

・溝の分析試料採取地点



・調査区平面図



凡例

- 粘土・シルト
- シルト混じり
- 砂
- 細礫～中礫
- 土壌化
- 腐植質
- 貝化石
- 葉理

図26 調査区東壁と溝試料採取地点の模式柱状図

がある。

ユニットIXa上部は、塊状無層理のシルト混じりの細粒砂～中粒砂を主体とする。上方細粒化を示す。本ユニット表層部には、ユニットVIIIに相当する砂質シルトからなる土壌化層準が載る。

層相から、ユニットIXa上部は、下位のユニットIXa下部の砂礫を埋積する、泥混じり砂層主体の浮遊洪水堆積物と考えられる。ユニットIXa下部の砂礫が高まりをなす部分では、相対的な層厚が薄い。ユニットIXa上部は、河床堆積物と考えられるユニットIXa下部が形成した凹凸を埋積して、平坦化するように堆積している。ユニットIXa上部は、調査区内に存在していた流路が移動し

た後、付近に存在した活動的な流路から供給された洪水堆積物と推定される。

ユニットⅨa上部の堆積時期は、本ユニット表層部の土壌化層準のユニットⅧで鎌倉時代後半の遺構が検出されており、下位のユニットⅨa下部に含まれる遺物の時期をふまえると、古墳時代頃から鎌倉時代後半以前と捉えられる。

堆積ユニットⅧ

ユニットⅧaは、ユニットⅨa上部を母材とする土壌化が顕著な顕著な砂質シルトである。ただし、中世の人間活動により削平や擾乱を受け、土壌層位の最上部に形成されるA層に相当する腐植の蓄積層準は認められない。場所によっては、本ユニットに対応する整地土などが存在する。

ユニットⅧの堆積時期は、ユニットⅧa上面で鎌倉時代後半の遺構が検出されており、対比される整地土などに含まれる遺物から、鎌倉時代後半と捉えられる。

堆積ユニットⅦ

ユニットⅦaは、塊状無層理の砂質シルトで構成される。層内には偽礫が多く含まれ、堆積層は人為的に擾乱されていると考えられる。層相から、ユニットⅦaは、泥質砂主体の浮遊洪水堆積物を母材とした整地土と推定される。

ユニットⅦの堆積時期は、下位のユニットⅧa上面の鎌倉時代後半の遺構を被覆しており、ユニットⅦa上面で鎌倉時代末から室町時代前半の遺構が検出されているため、鎌倉時代後半以降から室町時代前半までに形成されたと判断できる。

堆積ユニットⅥ

ユニットⅥaは、塊状無層理のシルト質極細粒砂～細粒砂で構成される。層相から、ユニットⅥaは、泥質砂主体の浮遊洪水堆積物と考えられる。層内では、耕作土などの人為的に擾乱された痕跡が観察されない。よって、ユニットⅥaでは、洪水による冠水による浮遊洪水堆積物の沈積と、その後水が引いた状態が維持された期間での土壌化が繰り返されて形成されたと解釈される。

ユニットⅥの堆積時期は、下位のユニットⅦa上面の鎌倉時代末から室町時代前半の遺構を被覆しており、ユニットⅥa上面で室町時代後半の遺構が検出されているため、鎌倉時代末から室町時代前半以降から室町時代後半までに形成されたと判断できる。

堆積ユニットⅤ

ユニットⅤaは、塊状無層理のシルト質極細粒砂～細粒砂で構成される。層相から、ユニットⅤaは、土壌化した泥質砂主体の浮遊洪水堆積物と考えられる。

ユニットⅤの堆積時期は、下位のユニットⅥa上面の室町時代後半の遺構を被覆しており、ユニットⅤ上面で安土桃山時代の遺構が検出されているため、室町時代後半以降から安土桃山時代までに形成されたと判断できる。

堆積ユニットⅣ

本ユニット以降では、氾濫原を構成する堆積層を深く掘削して、井路が連綿と形成されるようになる。以下の記載では、氾濫原の基本層序部分 (a) と井路埋積層 (b) に分けて記述する。

基本層序部分を構成するユニットⅣaの層相は、下位と大きく変わらず、塊状無層理のシルト混

じりの極細粒砂～細粒砂で構成される。層相から、ユニットⅣaは土壌化した泥混じり砂主体の浮遊洪水堆積物と考えられる。

井路埋土のユニットⅣbは、調査区の南端部に存在する。初期段階の井路は、調査区南端付近がまず掘削されたとみられる。井路底を埋積するユニットⅣb-4～Ⅳb-2は、下位のユニットⅣb-4が砂質泥～泥質砂、その上部が静水域の堆積環境で形成された腐植質泥を挟在する泥で構成されており、人間が投棄したとみられるタニシ類を主体とする貝化石を多く含む。堆積層の傾斜から、ユニットⅣb-4～Ⅳb-2では、井路の埋没が南側に向かって進行していった状況が確認できる。井路埋土の最上部のユニットⅣb-1は、掃流性の洪水砂もしくは洪水砂を母材とする礫質砂層である。調査区南端部では、ユニットⅣb-1が南側に向けて凹地となった部分を埋積する。

層相から、ユニットⅣb-4～Ⅳb-2の堆積段階には、井路内が常時滞水しており、水域が形成されていたと捉えられる。ユニットⅣ段階の井路は、最上部が洪水砂によって埋積される。

ユニットⅣは、基本層序部分のユニットⅣbでの遺物の包含状況と下位のユニットⅤa上面で安土桃山時代の遺構が形成されている点から、安土桃山時代以降から江戸時代前半の18世紀前半までに形成されたとされる。

堆積ユニットⅢ

基本層序部分のユニットⅢaは、下半部から上半部において、塊状無層理のシルト混じりの細粒砂からシルト混じりの中粒砂へ上方粗粒化する。最上部には、粗粒の中礫までの礫を多く含む塊状無層理の砂礫と、その直上に淘汰不良の礫が混在する塊状無層理のシルト混じりの細粒砂～極粗粒砂が堆積する。

層相にもとづくと、下半部から上半部へと上方粗粒化する泥混じり砂層は、耕作土などの人為的に擾乱された痕跡に乏しく、土壌化した浮遊洪水堆積物と考えられる。最上部の層準のうち、砂礫層については、人為的に擾乱されていると推定される。ただし、調査区壁面の別の地点では、同層準において葉理が残る砂礫層が確認できる。よって、観察地点の砂礫層は、調査区に流入した掃流性の粗粒洪水堆積物を母材としていていると考えられる。この砂礫層上部の淘汰不良の泥混じり砂は、耕作土と推定される。

井路部分のⅢbでは、上位の堆積ユニット段階における井路の再掘削により、ユニットⅢbの井路埋土が大きく壊されており、下半部のみが残存する状況である。残存部分の埋土のユニットⅢb-3～Ⅲb-1は、層相から、浮遊砂主体の洪水堆積物と考えられる塊状無層理の砂質泥～泥質砂で埋積される。

ユニットⅢの堆積時期は、遺物の包含状況などから、18世紀前半以降から18世紀後半までの江戸時代中期から後期の範疇に収まるとされる。

堆積ユニットⅡ

基本層序部分のユニットⅡaは、淘汰不良の礫が混在する塊状無層理のシルト混じりの細粒砂～極粗粒砂からなる耕作土である。

井路埋土のユニットⅡbは、井路底に、滞水域で形成された腐植質に富む泥層を挟在する砂混じ

りの泥層から泥層のユニットⅡ b-3が堆積する。上部には、人間が投棄したとみられるタニシ類を主体とする貝化石を多く含む層準が挟在する。井路埋没が進んだユニットⅡ b-2には、浮遊洪水堆積物とみられる砂質泥～泥質砂が堆積する。ユニットⅡ bはユニットⅠ bの井路によって壊されており、層序関係は不明であるが、ユニットⅡ b段階の井路肩部には、周囲から流入した砂礫が挟在する砂質泥～泥質砂のユニットⅡ b-1が存在する。

ユニットⅡの堆積時期は、遺物の包含状況などから、18世紀後半以降の江戸時代後期から近代とされる。

堆積ユニットⅠ

基本層序部分のユニットⅠ aは、淘汰不良の礫が混在する塊状無層理のシルト混じりの細粒砂～極粗粒砂からなる耕作土である。

井路埋土のユニットⅠ bは、井路底については下位の堆積ユニットと同様に、滞水域で形成された腐植質に富む泥層を挟在する砂混じりの泥層から泥層（ユニットⅠ b-3）が堆積している。ユニットⅠ b-3の上部には、礫質砂層からなる粗粒の洪水堆積物のユニットⅠ b-2が流入している。なお、ユニットⅠ b-3は、下部に浮遊洪水堆積物もしくは滞水域で形成された砂質泥～泥質砂が堆積しており、上部に洪水砂層が載るユニットⅠ b-4を切って形成されている。このような堆積状況は、井路部分の浚渫などと関連した再掘削によると推定される。凹地をなす井路部分の上部は、礫を多く含む非常に淘汰不良の泥混じり砂のユニットⅠ b-1が厚く埋積する。ユニットⅠ b-1とユニットⅠ aが、発掘調査前の現地表面を構成する。層相から、ユニットⅠ b-1は、埋没が進んだ井路を埋め立てた客土と考えられる。

溝230・255埋土

溝255埋土の下部には、タニシ類などの貝化石を含む腐植質の粘土質シルト層が堆積する。底部には、側壁や周囲からの流入堆積物および遺構掘削時の擾乱層である砂礫層が存在する。腐植質粘土質シルト層の上部には、礫混じりの泥を多く含む淘汰不良の砂層が載る。溝230埋土は、底部が溝255から続いている礫混じりの泥を多く含む淘汰不良の砂層が堆積する。この砂層の凹み部分には、腐植質の泥質砂層が充填する。そして、溝230埋土の最上部は、凹みを完全に埋積した砂質シルト層が堆積している。

3) 調査区の埋没過程

(1) 堆積環境の変遷

上述の調査区壁面での層相観察結果から、調査区は、古墳時代頃には網状流路の河床（ユニットⅨ a下部）であったと考えられる。流路埋没後には、近傍の流路から供給された洪水堆積物（ユニットⅨ a上部）が堆積しており、河川堆積地形が氾濫原へと変化する。河床から氾濫原への層相変化は連続的であり、大きな時間間隙は存在していなかったと解釈される。したがって、ユニットⅨ a下部の河床堆積物の堆積が古墳時代であった場合には、ユニットⅨ a上部の氾濫原堆積物の時期も古墳時代から大きな隔たりはなかったと推定される。ユニットⅨ a上部の氾濫原堆積物は砂質であり、河岸周辺を構成する高まり部分に堆積した層準と考えられる。ユニットⅨ a下部の河床堆

積物は、網状流路で形成されたと解釈され、全体的には砂礫層が上に凸型をなして盛り上がるようにして累重する。

ユニットⅨの堆積状況にもとづくと、調査区では、古墳時代頃から鎌倉時代以前に、流路と河岸付近に堆積した洪水堆積物によって、微高地が形成されたと考えられる。ユニットⅨは、鎌倉時代後半の遺構確認面の基盤層をなしており、この時期の人間活動は氾濫原の微高地上に展開した可能性が高い。ユニットⅨa上部の堆積時期の詳細は不明なため、微高地が形成され安定した時期については特定できない。したがって、遺構が形成された鎌倉時代後半よりもかなり以前に安定した微高地になっていたかどうかなど、人間の土地利用過程に関する検討は、現段階では十分に行えない。

明治期の地形図に示された等高線では、本調査区が桂川沿いにおいて東側にやや張り出した微高地の可能性のある地形上に立地する状況が読みとれる（図27）。また、公開されているボーリングデータによると、桂川沿いでは、②では表層部にシルトが厚く堆積しているものの、②と③のボーリングデータから、埋立の客土を除き、現地表面から深部までの層準において礫層主体の堆積が確認できる（図27）。今回の発掘調査結果とボーリングデータから、鎌倉時代後半の遺構が載る微高地は、桂川の流路と微高地を形成するような比較的粗粒の洪水堆積物によって形成された可能性が指摘できる。

土壌化および整地土で構成されるユニットⅧで検出される鎌倉時代後半の遺構は、上面で鎌倉時代末～室町時代前半の遺構が形成されるユニットⅦに被覆される。ユニットⅦは整地層の可能性があり、さらに層厚も薄い。したがって、鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての調査区付近では、洪水堆積物の流入が少なく、安定した堆積環境が維持されていたと考えられる。このため、室町時代前半までの中世の時期には、調査区付近において地下水位が低く高燥な地表環境であったと推定される。この点については、溝230・255の埋土において、深い滞水状態が確認されない状況からもうかがえる。

調査区の氾濫原は、ユニットⅦを境として大きく変化する。鎌倉時代後半から室町時代前半に堆積したユニットⅦは、上面で室町時代後半の遺構が検出されるユニットⅥおよびその直上の安土桃山時代の遺構が検出されるユニットⅤによって厚く埋積される。層相から、ユニットⅥとⅤは、浮遊洪水堆積物と判断される。よって、本調査区では、室町時代前半から安土桃山時代の15世紀初頭から16世紀末にかけて、洪水による冠水頻度が急増し、氾濫原が急激に埋積された状況が確認できる。

遺跡周辺での河川の堆積史は存在していないものの、鴨川では、河角（2004）により、16世紀頃から起こっていた氾濫原への土砂の流入堆積の活発化や顕著な天井川化が生じた地形変化が明らかにされている。また、既往の考古遺跡での花粉分析結果の集成にもとづいて、平安京や長岡京の周辺の山地・丘陵での植生変化について検討した佐々木ほか（2011）の研究によると、中世には人間の強い植生攪乱によりアカマツ林が増加したと指摘されている。平安京とその周辺における河川堆積地形と古植生に関する研究をふまえると、本調査区で認められた15世紀初頭から16世紀末

にかけての洪水堆積物による氾濫原の顕著な埋積は、周辺山地、丘陵や台地部分での森林破壊によるハゲ山化による下流域への土砂供給量の増大が大きな要因の一つであると推測される。調査区で認められるユニットⅥ、Ⅴでの洪水堆積物による急激な氾濫原の埋没については、本遺跡周辺の地形をふまえると、流域からの土砂流入の急増にともなう桂川もしくは宇治川ないし北側から流下してくる諸河川の河床上昇に伴う可能性がある。この点については、桂川や宇治川などの流域の遺跡における河川堆積史や植生変化にもとづき、詳細を検討していく必要がある。

なお、安土桃山時代の地表面では、この層準で停止する噴砂が多数形成されている。この噴砂は、それ以前の鎌倉時代などの遺構埋土を明瞭に切っており、噴砂は、1596年9月5日に発生した有馬-高槻構造線などを起動断層とする慶長伏見地震に伴う可能性が極めて高いと判断できる。

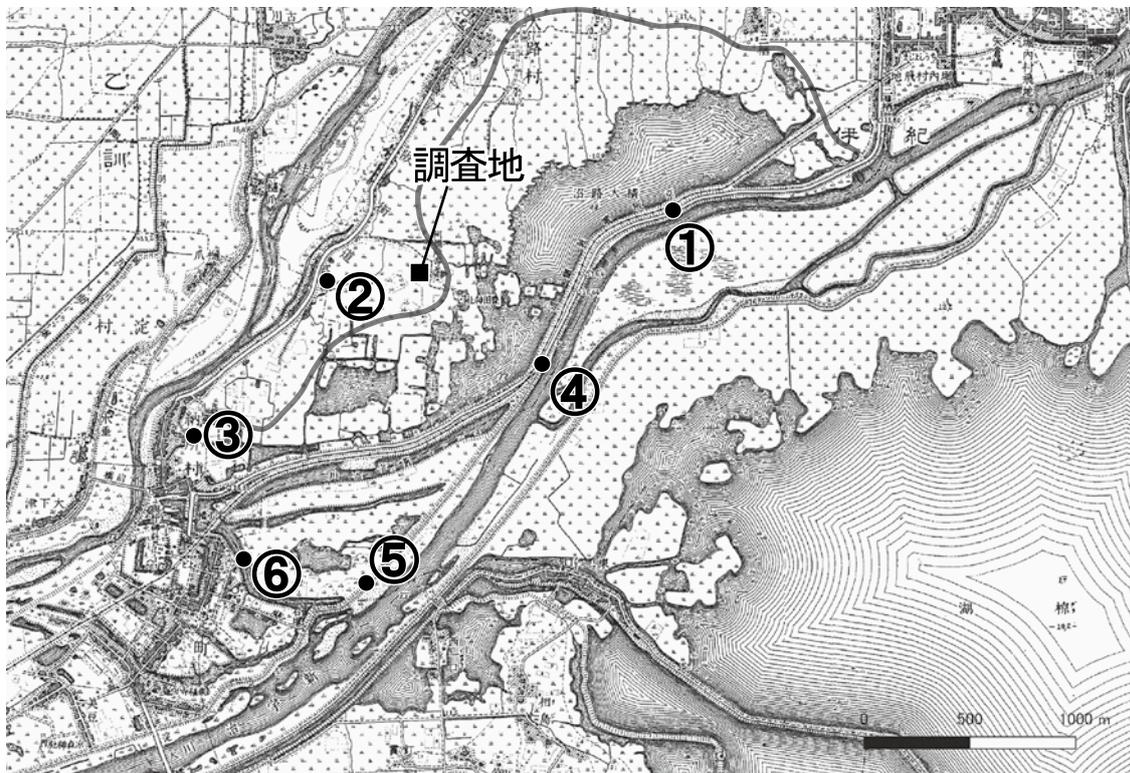
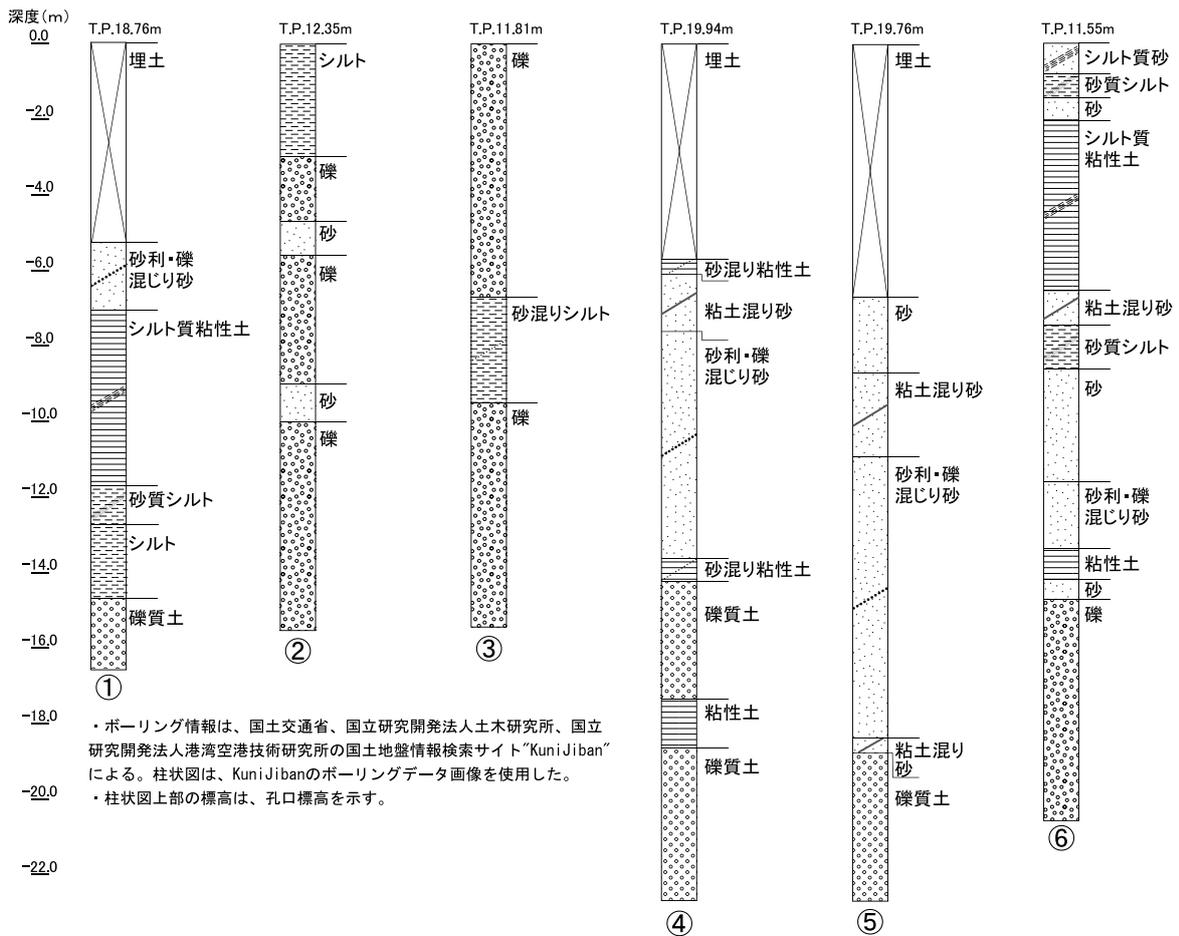
16世紀末の安土桃山時代の地表面をなすユニットⅤは、18世紀前半の地表面をなす浮遊洪水堆積物のユニットⅣに覆われる。ただし、ユニットⅣの層厚は、堆積期間をふまえてもユニットⅥ、Ⅴよりも明らかに薄い。一方で、ユニットⅦからユニットⅣでは、層相がほぼ変化しておらず、浮遊洪水堆積物によって構成される。このような堆積層の特徴をふまえると、ユニットⅣとユニットⅥ、Ⅴでの層厚の違いを生じさせる大きな要因の一つとして、堆積速度があげられる。すなわち、安土桃山時代以降から18世紀前半までの江戸時代には、室町時代前半から安土桃山時代よりも洪水の発生頻度や洪水堆積物の流入量が低下したとみられる。

本遺跡は、桂川と宇治川ないしその分流路に挟まれた狭隘な氾濫原上に位置している。この部分の氾濫原では、文禄3年(1594年)に淀堤が構築される(足利, 1998)。なお、足利(1998)では、桂川と宇治川に挟まれた本遺跡が立地する氾濫原の周囲に堤防が構築されたとする復元図が描かれているが、このような輪中が形成されたかどうかについてはさらに検討を要する課題と思われる。

本遺跡付近で安土桃山時代に堤防と考えられる淀堤が構築された歴史的環境をふまえると、ユニットⅤからユニットⅣの16世紀末から18世紀前半における洪水による氾濫原の埋積速度の減少の要因の一つとして、淀堤による治水効果が挙げられる。

ただし、ユニットⅢになると、非常に厚い浮遊洪水堆積物で埋積されるようになり、18世紀前半～後半にかけては、洪水堆積物による氾濫原の埋積が激化したと捉えられる。ユニットⅣ段階の安土桃山時代～18世紀前半には、調査区において深い井路が掘削されるようになる。井路は泥で埋積されており、井路内に一定の水深のある水域が常時存在していたと判断される。そして、このような井路は、井路の掘削状況と明治期などの地形図から、現代近くまで存在したとみられる。井路内には、掃流性の砂礫からなる粗粒洪水堆積物の挟在が認められる。このような砂礫は、クレバススプレーやクレバスチャネルなど、堤防を破堤して流入した洪水堆積物と考えられる。また、粗粒洪水堆積物は、低い井路内だけでなく、氾濫原部分のユニットⅢa上部にも挟在する。18世紀後半には、破堤も頻繁に生じていたと推測される。

また、井路内の滞水状況から、18世紀前半以降には、調査区付近の地下水位がかなり高い状態になっていたと推定される。18世紀前半以降から近現代までは、調査区付近の地下水位はかなり高



・基図の地形図(1892~1910年)は、埼玉大学の谷謙二氏のホームページの「今昔マップ」サイトのタイルマップをQGISに読み込み使用した。

図27 調査区周辺の既存ボーリングデータ

く、排水不良の状態になっていたとみられる。今後は、18世紀前半頃から井路が埋積を繰り返しながら何度も掘削される要因や、その土地利用に関して、さらに検討を行っていく必要がある。

(2) 調査区付近の景観形成

本遺跡は、明治期の地形図などにみられるように、横大路沼に近く、その近傍の低湿地であったとの景観的なイメージもあると思われる。ただし、今回の発掘調査結果から、少なくとも鎌倉時代後半から室町時代前半には、調査区周辺が氾濫原の微高地上の高燥な環境下にあったとみられる。既往のボーリングデータでは、横大路沼部分(①)において、湿地や池沼ないし湖沼性と推測される泥層が連続的に堆積している(図27)。①のボーリング柱状図での泥層の堆積は、これまでに確認されてきた伏見下水処理場での地質調査結果などに対応する巨椋池の湖沼堆積物(関西地盤活用協議会地盤研究委員会編, 2002; 増田編著, 2019)に対比される。今回の調査区は、横大路沼に近い地点であるものの、湿地や湖沼性の泥層の堆積が認められない。横大路沼(①)の南西の新宇治川沿いの④でも、湖沼性の粘土層の累重が認められず、表層部分が砂層で構成される(図27)。さらに下流側の南西部分(⑤、⑥)では、⑥で表層部分に泥層が厚く堆積しているものの、全体的には砂質堆積物が卓越する(図27)。⑤地点の砂層は、増田編著(2019)で示されたボーリング柱状図と分布図から、木津川由来の「三川合流砂碛」の末端付近とみられる。一方で、④地点の砂層の堆積は、「三川合流砂碛」と連続するものなのか、現段階で不明である。

上記の遺跡付近の既存ボーリングデータと地質学的研究をふまえると、微高地上に位置する富ノ森城の周囲では、特に文禄年間の淀堤構築などによる氾濫原の分断や、流路付け替え以前に、東ないし北東側に巨椋池に起因する低地や湿地もしくは巨椋池と連続する池沼や湖沼が存在していた可能性がある。遺跡の西方や南方には、砂質や礫質の表層地質が広がっており、低湿地ではなかったと推測される。

15世紀初頭頃の室町時代前半以降には、人為的な環境変化による桂川など周辺河川の河床上昇により、洪水による急激な氾濫原の埋積が進んだと考えられる。このような氾濫原の環境下において、文禄年間に、本遺跡が存在する地形面では淀堤の構築が行われる。この堤防構築によって、調査区付近では、いったん洪水の影響が弱まった可能性がある。ただし、18世紀後半の江戸時代には、洪水が激化して、氾濫原の埋没が進行した。当該期の洪水被害などは、歴史史料などからも今後さらに検討していく必要がある。また、洪水が激化する以前の18世紀前半から、調査区付近では、井路が繰り返し掘削されるようになる。明治期の地形図からも明らかのように、横大路沼は、輪中堤に閉塞された北側からの流入河川による湛水化を引き起こしている(図27)。16世紀末の淀堤構築以降の18世紀前半～後半には、本調査区付近では、内水氾濫や破堤などの洪水被害が増加したと推測される。井路の構築は、このような淀堤の構築が引き起こした氾濫原の環境変化とも関係している可能性がある。

以上、調査区の層相観察結果にもとづく、古墳時代頃から近現代までの堆積環境変遷についてみてきた。今回詳細な検討が行えたのは、本地域の特色である平安京とその周辺での詳細な遺物編年の確立と、断面写真のオルソ化や詳細な断面図作成によるところが大きい。これらの点があって初

めて、中世以降の詳細な時期区分にもとづく地質学的な検討が可能となった。この点を最後に付記しておきたい。

参考引用文献

足利健亮（1998）景観から歴史を読む：地図を解く楽しみ（NHKライブラリー91）. 314p, 日本放送出版協会.

関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編（2002）新関西地盤 京都盆地. 196p, 関西地盤情報活用協議会.

河角龍典（2004）歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－. 京都歴史災害研究, 1, 13～23.

増田富士雄編著（2019）ダイナミック地層学:大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析. 219p, 近未来社.

佐々木尚子・高原 光・湯本貴和（2011）堆積物中の花粉組成からみた京都盆地周辺における「里山」林の成立過程. 地球環境研究, 16, 115-127.

(2) 溝230・255堆積物中の花粉分析

1) はじめに

調査区付近の古環境を検討するために、溝230・255の堆積物が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている（珪藻分析の項参照）。

2) 分析試料および方法

分析試料は、溝230・255の埋土から採取された堆積物5点（試料No.1～5）である（表3）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、No.2については、樹木花粉の含有量が少なく、200を計数するのが困難であったため、検鏡は樹木花粉100を超えるに留めた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC. 3098～3104）を作製し、写真を図29に載せた。

3) 結果

5試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉35、草本花粉29、形態分類を含むシダ植物胞子3の、総計67である。これらの花粉・胞子の一覧表を表4に、分布図を図28に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やバラ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れている。

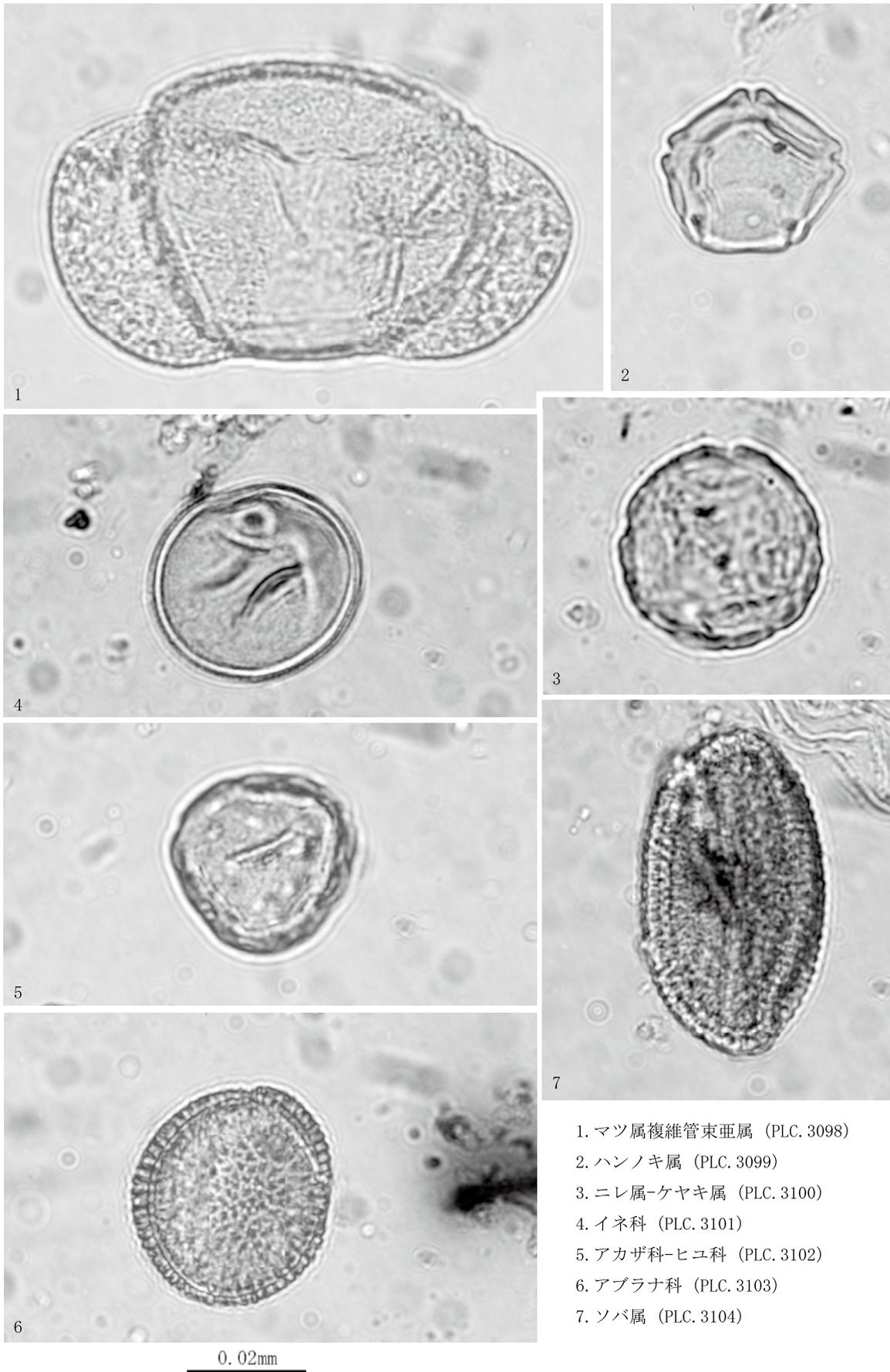
全ての試料において草本花粉の産出割合が高く、樹木花粉の産出割合は低い。草本花粉では、全ての試料においてイネ科が多く産出している。また、便宜的に草本花粉にしたクワ科がNo.3～5で、アカザ科-ヒユ科はNo.2、4、5で、アブラナ科はNo.1とNo.3で、ヨモギ属はNo.1とNo.4で産

表3 花粉分析試料一覧表

調査区	遺構面	時期	遺構名	試料No.	岩質
2区	第1面	安土桃山時代	溝230	1	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細砂粒
				2	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質細砂粒
	第2面	室町時代後半	溝255	3	オリーブ黒色(5Y3/1)腐食質粘土質シルト
				4	灰色(5Y4/1)腐食質粘土質シルト
				5	灰色(7.5Y4/1)腐食質粘土質シルト

表4 産出花粉孢子一覽表

学名	和名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5
樹木						
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	-	2	-	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	9	3	-	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	81	46	80	62	53
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属	-	-	1	-	2
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	2	-	-	2	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	7	11	16	43	37
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	-	-	-	-
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	-	-	-	1	-
<i>Pterocarya</i> — <i>Juglans</i>	サログルミ属—クルミ属	-	1	1	-	1
<i>Carpinus</i> — <i>Ostrya</i>	クマンデ属—アサダ属	2	2	3	2	7
<i>Betula</i>	カバノキ属	4	1	3	2	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	27	3	30	19	17
<i>Fagus</i>	ブナ属	4	-	-	3	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	30	10	18	20	27
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	6	5	17	12	14
<i>Castanea</i>	クリ属	4	1	5	2	4
<i>Castanopsis</i> — <i>Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	1	-	-	-	-
<i>Ulmus</i> — <i>Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	11	7	12	22	17
<i>Celtis</i> — <i>Aphananthe</i>	エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	-	3
<i>Melia</i>	センダン属	8	1	4	2	2
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	-	-	9	-	2
<i>Rhus</i> — <i>Toxicodendron</i>	ヌルデ属—ウルシ属	-	2	1	3	1
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	1	-
Celastraceae	ニシキギ科	-	-	1	1	1
<i>Acer</i>	カエデ属	1	-	-	-	3
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	1	-	-	-	-
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1	-	2	2	-
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	-	-	-	2	-
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	-	-	2	8	-
<i>Camellia</i>	ツバキ属	2	-	-	-	-
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	-	-	1	-	-
Araliaceae	ウコギ科	2	2	1	-	6
Ericaceae	ツツジ科	-	-	-	1	1
<i>Weigela</i>	タニウツギ属	-	-	-	-	1
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	1	-	-	-	-
草本						
<i>Typha</i>	ガマ属	6	1	1	3	3
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	2	1	2	2	-
Gramineae	イネ科	882	961	558	323	257
Cyperaceae	カヤツリグサ科	14	10	6	4	5
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1	-	-	-	-
Moraceae	クワ科	7	1	67	125	108
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	-	-	3	3	6
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> — <i>Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	4	3	-	1	1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	2	-	16	6	3
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	21	90	14	-	6
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	116	439	75	220	170
Caryophyllaceae	ナデシコ科	97	11	14	15	16
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	-	-	-	-	5
Brassicaceae	アブラナ科	257	26	334	16	11
Rosaceae	バラ科	1	-	-	1	-
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属	-	-	-	-	1
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	-	-	-	-	1
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	6	1	-	-	-
<i>Epilobium</i> — <i>Ludwigia</i>	アカバナ属—ミズユキノシタ属	-	-	1	-	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	-	-	1	1	-
Apiaceae	セリ科	1	-	1	1	2
Labiatae	シソ科	-	-	-	8	1
<i>Justicia</i>	キツネノマゴ属	1	-	-	-	-
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2	6	-	-	-
<i>Actinostemma</i> — <i>Gynostemma</i>	ゴキツル属—アマチャヅル属	-	1	1	-	-
<i>Ambrosia</i> — <i>Xanthium</i>	ブタクサ属—オナモミ属	-	1	-	1	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	436	10	13	530	64
Tubuliflorae	キク亜科	8	20	2	43	7
Liguliflorae	タンポポ亜科	7	2	4	1	6
シダ植物						
<i>Salviaia</i>	サンショウモ属	1	-	2	2	-
monolete type spore	単条溝孢子	-	-	1	5	6
trilete type spore	三条溝孢子	5	11	13	5	13
Arboreal pollen	樹木花粉	200	101	212	210	202
Nonarboreal pollen	草本花粉	1871	1584	1113	1304	673
Spores	シダ植物孢子	6	11	16	12	19
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	2077	1696	1341	1526	894
unknown	不明	8	0	9	6	37



1. マツ属複維管束亜属 (PLC. 3098)
2. ハンノキ属 (PLC. 3099)
3. ニレ属-ケヤキ属 (PLC. 3100)
4. イネ科 (PLC. 3101)
5. アカザ科-ヒユ科 (PLC. 3102)
6. アブラナ科 (PLC. 3103)
7. ソバ属 (PLC. 3104)

図29 No.3から産出した花粉化石

ていた場所があったと考えられる。

樹木花粉については、溝255埋土のNo.3とNo.4において、ブドウ属やツタ属、マタタビ属といったつる性植物が産出している。溝255の埋没が進行したと考えられるNo.3とNo.4の堆積時には、溝周辺において、これらのつる性植物が生育していた可能性がある。

一方で、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ゴキヅル属-アマチャヅル属、サンショウモ属といった好湿性植物の産出が見られる層準もあるため、溝内や周辺には湿潤的環境も存在していたと考えられる。なお、珪藻分析の結果においても、溝255と溝230の溝内では湿性の環境下であったと考えられている。

以上は溝周辺の古植生について述べたが、遺跡周辺のより広範囲の古植生に目を向けると、全ての試料においてマツ属複雑管束亜属やコナラ属コナラ亜属といった二次林要素の分類群の産出が目立つ。層位的な変化に着目すると、マツ属複雑管束亜属は、室町時代後半の溝255埋土から安土桃山時代の溝230埋土の上位に向かって増加傾向を示している。遺跡周辺の京都盆地を取り巻く山地や丘陵および台地にはニヨウマツ類やコナラなどからなる二次林が広がっていたと思われ、そのような傾向は室町時代から安土桃山時代にかけて強まった可能性がある。その他にも、コナラ属アカガシ亜属やハンノキ属の産出も見られ、カシ類の照葉樹林やハンノキ属の湿地林なども遺跡周辺の氾濫原に分布していたと考えられる。

上記以外の木本類の層位的変化に注目すると、温帯性針葉樹のスギ属は下位層準（No.4、5）で産出率が高く、上位層準（No.1～3）で産出率が減少する。代わって上位層準（No.1～3）で産出率が増加するのがツガ属である。よって、京都盆地を取り巻く山地や丘陵において、スギやツガなどの温帯性針葉樹は層位によって分布状況が異なっていた可能性がある。

(3) 溝230・255堆積物中の珪藻化石群集

1) はじめに

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉，1988；安藤，1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、富ノ森城跡から採取された溝230・255埋土の堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

2) 試料と方法

試料は、調査区東壁から採取された土層堆積物5点である。各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。なお、同一試料を用いて花粉分析を行っている（詳細は、花粉分析の項参照）。

(1) 処理重量約1.0 gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を15回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下600～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1 g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真を図31に載せた。

3) 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定し、千葉・澤井（2014）により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種(?)として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種(?)として、汽水種は汽水不定・不明種(?)として、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した海水～汽水域における環境指標種群のうち海水域における環境指標種群と、安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群 (A)]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[上流性河川指標種群 (J)]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻

面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群 (K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)]：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群 (P)]：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群 (Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

[陸生珪藻A群 (Qa)]：耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群 (Qb)]：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4) 結果

堆積物から検出された珪藻化石は、海水種が1分類群1属1種、海～汽水種が1分類群1属1種、汽水種が1分類群1属1種、淡水種が50分類群28属34種1変種であった（表5）。これらの珪藻化石は、海水域における1環境指標種群 (A)、淡水域における7環境指標種群 (J、K、N、O、P、Qa、Qb) に分類された（表5）。また、珪藻分布図を図30に示した。以下では、試料ごとにおける珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。なお、汽水種の *Navicula veneta* (?) が一部の試料で特徴的に検出されたが、年代観や地形・地質から判断して、今回は淡水種として扱った（たとえば、渡辺ほか，2005；福島・木村，2018など）。

[溝255 (分析No.5～3)]

分析No.5

堆積物1g中の珪藻殻数は 2.0×10^7 個、完形殻の出現率は69.9%である。おもに淡水種からなり、汽水種を伴う。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群 (K) が多く、陸生珪藻A群 (Qa) や陸生珪藻B群 (Qb) などをわずかに伴う。なお、第一位優占種は *Achnanthes hungarica* (K)、第二位優占種は *Navicula veneta* (?) であった。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域を伴う中～下流性河川環境が推定される。

分析No.4

堆積物1g中の珪藻殻数は 1.9×10^7 個、完形殻の出現率は81.6%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群 (K) が多く、上流性河川指標種群 (J)、陸生珪藻A群 (Qa)、沼沢湿地付着生指標種群 (O)、陸生珪藻B群 (Qb) などをわずかに伴う。なお、第一位優占種は *Achnanthes hungarica* (K)、第二位優占種群は

表5 堆積物中の珪藻化石産出表

※ 種群は、千葉・澤井 (2014) による

No.	分類群	種群	1	2	3	4	5
1	<i>Thalassionema</i>	<i>nitzschioides</i>	A	1			
2	<i>Navicula</i>	<i>peregrina</i>	?	1			
3	<i>Navicula</i>	<i>veneta</i>	?	45	39		30
4	<i>Achnanthes</i>	<i>hungarica</i>	K		1	95	116
5	A.	spp.	?	10	25	17	20
6	<i>Achnantheidium</i>	<i>convergens</i>	J				8
7	A.	<i>minutissimum</i>	Qb				4
8	<i>Amphora</i>	<i>copulata</i>	W	1			
9	A.	<i>montana</i>	Qa	9	11	5	1
10	A.	spp.	?	1	1		
11	<i>Cocconeis</i>	<i>placentula</i>	W		2	1	
12	<i>Cymbella</i>	<i>turgidula</i>	K				
13	C.	<i>silesiaca</i>	W		1		
14	C.	spp.	?	3	2		
15	<i>Diadesmis</i>	<i>confervacea</i>	Qb	3	1		
16	D.	<i>contenta</i>	Qa	6	9	2	4
17	<i>Epithemia</i>	spp.	?				
18	<i>Eunotia</i>	spp.	?		1		1
19	<i>Fragilaria</i>	<i>brevistriata</i>	N	1			
20	F.	<i>capucina</i>	N				
21	F.	spp.	?		7		
22	<i>Frustulia</i>	spp.	?	1	2		1
23	<i>Gomphonema</i>	<i>gracile</i>	O			9	6
24	G.	<i>parvulum</i>	W			3	
25	G.	spp.	?	2		21	2
26	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Qa	15	12	1	2
27	<i>Luticola</i>	<i>mutica</i>	Qa	13	15		1
28	<i>Martyana</i>	<i>martyi</i>	W		1		
29	<i>Navicula</i>	<i>cuspidata</i>	W				
30	N.	<i>elginensis</i>	O		2	2	1
31	N.	<i>laevissima</i>	W				
32	N.	spp.	?	22	16	10	9
33	<i>Neidium</i>	<i>ampliatum</i>	P				
34	N.	spp.	?		1		1
35	<i>Nitzschia</i>	<i>nana</i>	Qb	2			
36	N.	spp.	?	20	29	9	15
37	<i>Pinnularia</i>	<i>acrosphaeria</i>	O			1	
38	P.	<i>borealis</i>	Qa				
39	P.	<i>gibba</i>	O	1		1	
40	P.	<i>subcapitata</i>	Qb	9	5	5	1
41	P.	<i>subcapitata</i> v ar. <i>elongata</i>	P	4	1	4	2
42	P.	spp.	?	19	10	6	5
43	<i>Planothidium</i>	<i>lanceolatum</i>	K				
44	<i>Reimeria</i>	<i>sinuata</i>	K		1		
45	<i>Rhopalodia</i>	<i>gibba</i>	W	1			
46	<i>Sellaphora</i>	<i>pupula</i>	W		1		
47	<i>Stauroneis</i>	spp.	?	1			5
48	<i>Staurosira</i>	<i>construens</i>	N	1			
49	<i>Staurosirella</i>	<i>pinnata</i>	N		6		1
50	<i>Suirella</i>	spp.	?	1		5	1
51	<i>Synedra</i>	<i>ulna</i>	W			3	
52	<i>Tryblionella</i>	<i>debilis</i>	Qb	2			
53		Unknown	?	5	10	6	4
	外洋	A		1			
	海～汽水不定・不明種	?		1			
	汽水不定・不明種	?	45	39			30
	上流性河川	J					8
	中～下流性河川	K		2	95		116
	湖沼沼沢湿地	N	2	6			1
	沼沢湿地付着生	O	1	2	13		7
	高層湿原	P	4	1	4		2
	陸生A群	Qa	43	47	8		8
	陸生B群	Qb	16	6	5		6
	広布種	W	2	5	7		5
	淡水不定・不明種	?	80	94	68		60
	その他不明種	?	5	10	6		4
	海水種		1				
	海～汽水種		1				
	汽水種		45	39			30
	淡水種		148	163	200		208
	合計		200	212	206		212
	完形殻の出現率(%)		74.0	59.9	77.7		81.6
	堆積物1g中の殻数(個)		1.8E+06	1.4E+06	8.7E+06		1.9E+07
							2.0E+07

Nitzschia 属であった。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や沼沢湿地を伴う中～下流性河川環境が推定される。

分析No.3

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 8.7×10^6 個、完形殻の出現率は 77.7% である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に多い。環境指標種群では、中～下流性河川指標種群 (K) が多く、沼沢湿地付着生指標種群 (O)、陸生珪藻 A 群 (Qa)、陸生珪藻 B 群 (Qb) などをおもに伴う。なお、第一位優占種は *Achnanthes hungarica* (K)、第二位優占種群は *Gomphonema* 属であった。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域や沼沢湿地を伴う中～下流性河川環境が推定される。

[溝230 (分析No.2・1)]

分析No.2

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 1.4×10^6 個、完形殻の出現率は 59.9% である。おもに淡水種からなり、汽水種を伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻 A 群 (Qa) が多く、湖沼沼沢湿地指標種群 (N)、陸生珪藻 B 群 (Qb)、中～下流性河川指標種群 (K) などをおもに伴う。なお、第一位優占種は *Navicula veneta* (?), 第二位優占種群は陸生珪藻 A 群 (Qa) であった。

環境指標種群の特徴から、中～下流性河川や沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される。

分析No.1

堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 1.8×10^6 個、完形殻の出現率は 74.0% である。おもに淡水種からなり、汽水種を伴い、海水種と海～汽水種をおもに伴う。堆積物中の珪藻殻数は多い。環境指標種群では、陸生珪藻 A 群 (Qa) が多く、陸生珪藻 B 群 (Qb) を伴い、高層湿原指標種群 (P) や湖沼沼沢湿地指標種群 (N) などをおもに伴う。なお、第一位優占種は *Navicula veneta* (?), 第二位優占種群は陸生珪藻 A 群 (Qa) であった。

環境指標種群の特徴から、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される。

5) 考察

溝255の3試料からは、いずれも流水環境下に生息する中～下流性河川指標種群が多産する。溝255の埋土は、いずれも腐植質の泥層であり、人間が投棄したと思われるタニシ類などの貝化石を含む。層相からは、静水域の堆積環境が推定された。層相と珪藻分析結果にもとづくと、溝255埋土の下部では、非常に緩やかながら、水の流れが恒常的に存在するような堆積環境が形成されていたと考えられる。また、水の流れが停止して、湛水に近い状態になる期間も存在しており、分析層準である溝埋土の泥層は、このような段階に主に溝底に沈積して形成されたと推測される。

ここで、溝255における優占種に着目すると、いずれの試料も *Achnanthes hungarica* (K) が第一位優占種であった。渡辺ほか (2005) によると、*A. hungarica* は好アルカリ性種で、有機汚濁に関しては広適応性種である。また、渡辺・浅井 (1992) によれば、*Achnanthes* 属を第一位優占種

とする群集の多くは、極貧腐水性～貧腐水性水域の清浄水域に出現する。第二位優占種は、分析No.5は*Navicula veneta*、分析No.4では*Nitzschia*属、分析No.3では*Gomphonema*属であった。*N. veneta*は、pHに関しては好アルカリ性種で、有機汚濁に関しては広適応性種、*Nitzschia*属と*Gomphonema*属については、種によって生態情報が異なるため、特定の水質環境は示さないと考えられる。第一位優占種の生態情報を支持すれば、比較的清浄な水質を維持していた可能性がある。したがって、溝255埋土の下部泥層堆積時には、基本的に溝内が閉鎖的でなく、流入する水の循環が良好であったと考えられる。このような状況は、上述の中～下流性河川指標種群の多産から推定される溝255埋土の下部の流況とも調和的とみなされる。

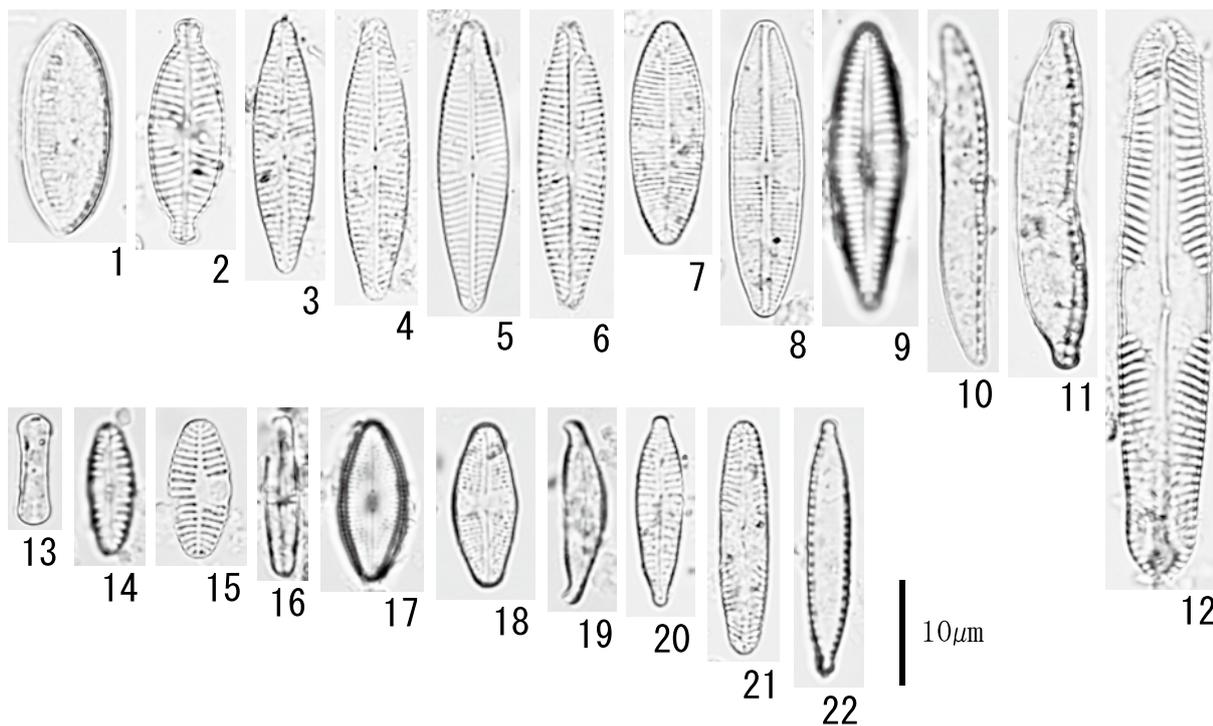
一方、溝230埋土の下部の砂混じり泥層の2点試料の珪藻化石群集では、下部の溝255で多産する中～下流性河川指標種群がほぼ産出せず、陸生珪藻A群が多産傾向にある。溝230埋土では、陸生珪藻A群以外の珪藻化石も多く産出している。よって、溝230の分析層準の堆積時には、好氣的な土壌環境が維持されるような状態ではなかったと考えられる。このような珪藻化石の産状と随伴する陸生珪藻B群、高層湿原指標種群、湖沼沼沢湿地指標種群の生態性をふまえると、溝230埋土の下部では、ジメジメとした湿地的環境が維持されていたと推察される。

なお、溝230での優占種に着目すると、第一位優占種は*N. veneta*で、同種が第一位優占種として出現した水域環境はβ貧腐水性の流水域で、しばしば、汚濁の進んだ水域でも優占種になることが報告されている（渡辺ほか，2005）。また、国内の多くの河川や小流、ため池などからも出現報告されている（福島・木村，2018）。したがって、溝230の水質は、わずかな流れがあった可能性があるものの、溝255に比べて有機汚濁が進んだ水域環境であった可能性が考えられる。このため、溝255よりも、溝内が相対的に閉鎖的な状態への変化や、周囲から人為物を含む有機物の流入量が増加した可能性がある。

以上から、溝230と溝255では、ともに溝内が堀のような閉鎖的な滞水域が形成されておらず、かなり弱いながら普段は水の流れが生じるような状況であったと考えられる。

参考引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- 千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.
- 福島 博・木村 努（2018）珪藻*Navicula*図鑑. 571p, 内田老鶴圃.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 渡辺仁治・浅井一視（1992）高優占度珪藻による有機汚濁度の判定（1）. *Achnanthes*, *Anomoeoneis*, *Aulacoseira*, *Melosira*を第1位種とする群集. Diatom, 7, 13-19.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子（2005）淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 784p, 内田老鶴圃.



1. *Tryblionella debilis* (No.1) 2. *Navicula elginensis* (No.2) 3. *Navicula veneta* (No.1)
 4. *Navicula veneta* (No.1) 5. *Navicula veneta* (No.2) 6. *Navicula veneta* (No.5)
 7. *Achnanthes hungarica* (No.4) 8. *Achnanthes hungarica* (No.5) 9. *Gomphonema gracile* (No.3)
 10. *Nitzschia nana* (No.1) 11. *Hantzschia amphioxys* (No.2) 12. *Pinnularia gibba* (No.5)
 13. *Diademesmia contenta* (No.2) 14. *Reimeria sinuata* (No.2) 15. *Planothidium lanceolatum* (No.5)
 16. *Achnanthis minutissimum* (No.4) 17. *Diademesmia confervacea* (No.5) 18. *Luticola mutica* (No.1)
 19. *Amphora montana* (No.3) 20. *Gomphonema* spp. (No.3) 21. *Pinnularia subcapitata* (No.1)
 22. *Nitzschia* spp. (No.4)

図31 珪藻化石の顕微鏡写真

付章2 自然科学分析2

丸山真史・関 晃史

1) 動物遺存体の概要

動物遺存体は、1区溝50、2区溝58・246・255・256、3区溝233などから出土している。出土したものは貝類と哺乳類であり、貝類は中世と近世の溝で大量に検出した一部をサンプルとして採取したもの、哺乳類は中世と近世の溝から出土した計10点である。

2) 同定結果 (表6、図32～39)

貝類 1区溝50からオオタニシ6個体、マツカサガイ(左7右4、左右合弁3)10個体、計16個体が出土している。いずれも淡水産である。また、2区溝58からイタヤガイ(右1)1個体〔No.1〕、オオタニシ28個体〔No.2〕、イシガイ科(左右不明破片)1個体、計30個体が出土している。オオタニシの1個体には殻体に円形の孔が穿たれているが、人為的なものであるか定かではない。オオタニシ、イシガイ科は淡水産であるが、イタヤガイは海水産である。

哺乳類 2区溝58からシカ大腿骨(左)〔No.4〕と寛骨(左右結合)〔No.5〕が1点ずつ、計2点¹⁾が出土しており、同一個体のものである。大腿骨はBp67.3mm、SD21.7mm、寛骨はLA37.1mmを測る。大腿骨は近位部に切傷がみられ(図34)、寛骨には右の恥骨内側に複数の切傷と座骨外側に大きめの刃物による叩傷がある(図35・36)。溝246ではシカの大腿骨(左)〔No.3〕が1点、種類が判明しない骨1点の計2点が出土している。シカ大腿骨は解体の際の切傷がみられ(図37)、Bp53.8mm、SD18.2mm、Bd48.4mmを測る。溝255は11～16層(図版14)から、ウシ中足骨(右)〔No.10〕、脛骨

表6 骨同定一覧表

出土遺構	同定結果(最小個体数)	計測(mm)	備考
溝50	オオタニシ6、マツカサガイ(左7右4、左右合弁3)10	マツカサガイ殻長40～65	マツカサガイはInversidens属が適切か。
溝58	イタヤガイ(右1)1〔No.1〕、オオタニシ28〔No.2〕、イシガイ科(左右不明破片)1	オオタニシ(殻長35.68～59.82、殻幅24.90～39.46)	
溝58	シカ大腿骨(左)〔No.4〕、シカ寛骨(左右)〔No.5〕	大腿骨(Bp67.25, SD21.67) 寛骨LA(左37.10, 右37.04)	大腿骨は遠位関節部を欠き、近位部に切傷。 寛骨は左右融合、恥骨(右)内側に複数の切傷: 内臓を取り出す?、座骨外側に叩傷。同一個体。
溝246	シカ大腿骨(左)〔No.3〕、不明骨(大型哺乳類(シカ・イノシシ・ヒト以上))	大腿骨(Bp53.83, Bd48.40, SD18.21)	大腿骨は切痕あり。
溝255	ウシ中足骨(右)〔No.10〕、ウシ脛骨(右)〔No.11〕	中足骨(GL約211, Bp50.30, Bd53.31, SD26.28) 脛骨(Bd58.58, SD38.11)	中足骨は遠位部外側に肉削ぎor皮剥ぎ痕。 脛骨は遠位部前位～外側に切傷(肉削ぎ?)、 近位関節部を約1/3欠く。
溝255	ウシ?肩甲骨(右)〔No.7〕	不可	
溝255・256 (合流地点)	ウシ上腕骨(右)〔No.8〕	SD35.57	近位関節部を欠き、遠位側も約半部を欠く。
溝255・256 (合流地点)	ウシ中手骨(右)〔No.9〕	SD34.79	遠位側関節部を欠き、近位側端部に切断痕があり大部分を欠く(掘削時に切断?)。
溝233	ヒト大腿骨(左)〔No.6〕		両端部を欠く。

*GL:最大長、Bp:近位端最大幅、Bd:遠位端最大幅、SD:骨幹部最小幅、LA:寛骨臼最大径を示す。



1. イタヤガイ 2. オオタニシ

図32 貝類

(右) [No.11] が1点ずつ、計2点が出土している。中足骨はGL約211mm、Bp50.3mm、SD26.3mm、Bd53.3mm、脛骨はSD38.1mm、Bd58.6mmを測る。中足骨の遠位部外側には切傷があり(図38)、脛骨には遠位部前位から外側にかけて切傷がみられる(図39)。ほか、同溝からウシと思われる肩甲骨(右) [No.7] が1点出土している。溝255・256合流地点では、ウシの上腕骨(右) [No.8] と中手骨(右) [No.9] が1点ずつ、計2点が出土しており、それぞれSD35.6mm、SD34.8mmを測る。

また、3区溝233からヒトの大腿骨(左) [No.6] 1点が出土しており、両骨端は破損している。

3) 小結

中世から近世の溝で出土した動物遺存体は、貝類と哺乳類である。貝類の大部分は淡水産であり、1点のみ海水産のイタヤガイである。淡水産貝類が自然状態で埋没した可能性もあるが、海水産貝類があることから食料残滓も含まれている可能性がある。哺乳類はウシ、シカといった大型家畜ないし野生獣である。野生のシカは狩猟が行われたことを示唆しており、また明瞭な解体痕がみられることから食用になったと考えられる。また、ウシは役畜として重要な家畜であるが、脛骨に肉を削いだ痕跡がみられ、食用にされたと考えられる。また、付着する筋肉が少ないウシの中足骨にも切傷がみられ、皮をとった可能性もある。中近世の遺跡で肉食を示す獣骨の出土は京都市内でも珍しくないが、ウシを食用にしていることを直接知ることができる資料は稀であり、本資料は中近世の肉食の実態を明らかにしていく上で重要である。

註

- 1) 計測部分は、GL：最大長、Bp：近位端最大幅、Bd：遠位端最大幅、SD：骨幹部最小幅、LA：寛臼最大径を示す。



3~5. シカ 6. ヒト 7. ウシ? 8~11. ウシ

図33 大型哺乳類



図34 シカ大腿骨(左)〔No.4〕近位部切痕

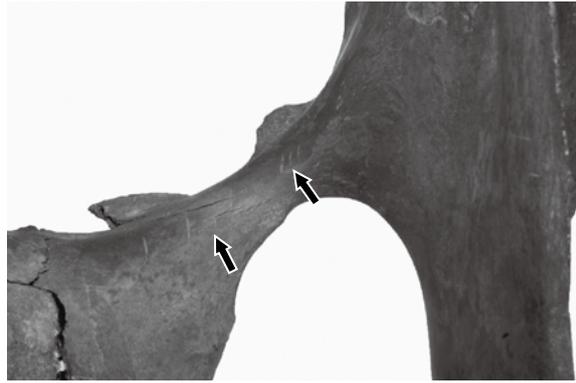


図35 シカ寛骨(右)〔No.5〕恥骨内側切痕



図36 シカ寛骨(右)〔No.5〕座骨外側叩傷



図37 シカ大腿骨(左)〔No.3〕後面切痕



図38 ウシ中足骨(右)〔No.10〕遠位部切痕



図39 ウシ脛骨(右)〔No.11〕遠位部前面切痕

付章3 自然科学分析3

関 晃史

本稿では富ノ森城跡から検出した遺構と遺物について、実施した分析結果を示す。本遺跡については、今回の発掘調査で新たに確認した中世の集落跡であり、本稿は基礎データの蓄積を目的としたものである。分析対象は溝230（安土桃山時代）から出土した兜金（金3）と呼ばれる刀装具の材質分析、井戸44（鎌倉時代後半）及び、土坑385（鎌倉時代末から室町時代前半）の被熱土の土壤分析、出土木製品の樹種同定である。

（1）金属材質分析

1）分析方法

対象としたのは上述の兜金1点である。材質分析には、龍谷大学文学部歴史学科文化財科学室の協力により、同学科設置の蛍光X線分析装置〔(株)日立ハイテクサイエンス製EA1000VX〕を使用し、定性分析を行った。

2）材質分析結果

測定条件と分析結果を図40に示し、概要を以下に述べる。

検出した元素は顕著なCu（銅）とわずかなAs（ヒ素）、Fe（鉄）である。Feは土に由来のものと思われ、兜金の主な材質はAsを少量含むCuである。加飾に伴うAu（金）やHg（水銀）などは検出していない。

（2）土壤分析

1）土壤分析試料と分析方法

試料としたのは上述の遺構からサンプリングした試料1（井戸44：約300ml）及び、試料2（土坑385：約966ml）である。これらの試料は5mm→2mm→1mmの篩と0.25mmのシルクスクリーンを用いて水洗選別し、主にフローテーション法による抽出作業を行い、実体顕微鏡を用いて同定を行った。また、試料2は被熱土壌のため、上記抽出作業の後は乾燥させ、磁石を用いた抽出作業も行った。

2）土壤分析結果

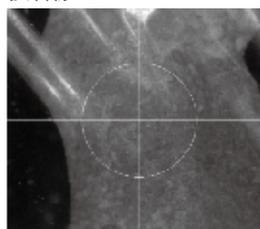
得られた結果を表7に、顕微鏡写真を図41・42に示し、概要を以下に述べる。

試料1は大型植物遺体の検出が主である。検出点数や生育環境からみると木本類はわずかであり、畑や道端、野原といった乾燥環境に生育する草本類が多く、湿地など湿潤な土地に生育する草本は少ない傾向が表れている。栽培の可能性を有するものにはマメ類、ウリ類（モモルディカメロン型）、シソ属、イネ、オオムギを含むムギ類や穀類がある。同定では、端部が欠如しオオムギと

測定条件

測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	100
有効時間(秒)	69
コリメータ	φ 3.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	34
フィルタ	OFF
マイラー	ON
コメント	

試料像



検出元素

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	3323.704	6.21 - 6.59
29	Cu	銅	K α	115732.495	7.83 - 8.24
33	As	ヒ素	K α	149.618	10.30 - 10.75

スペクトル

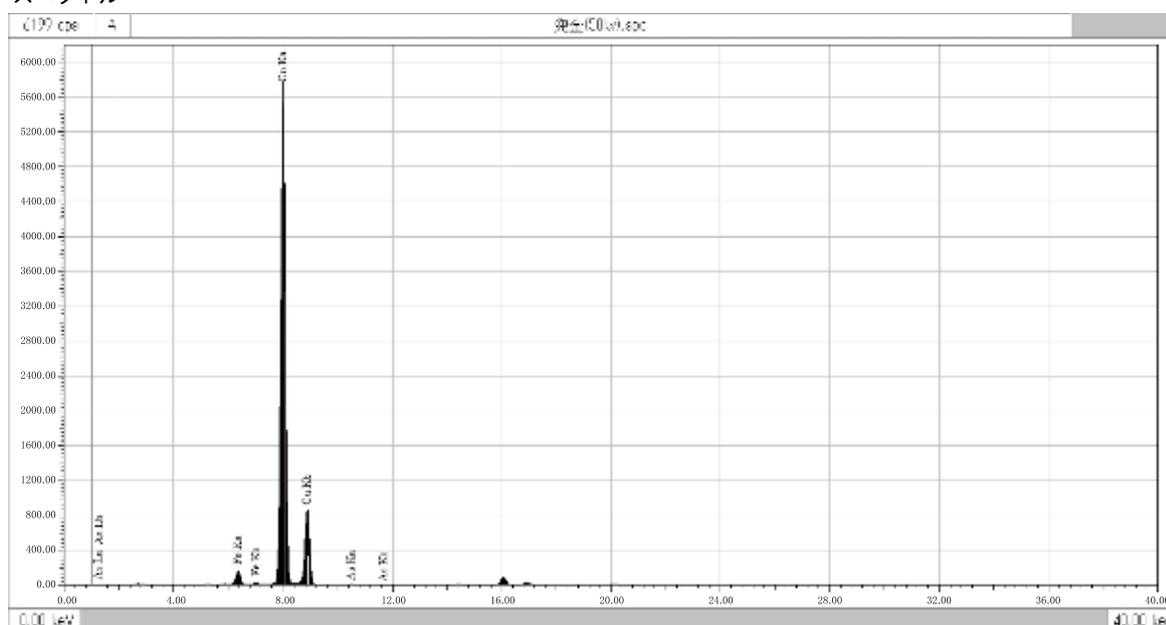


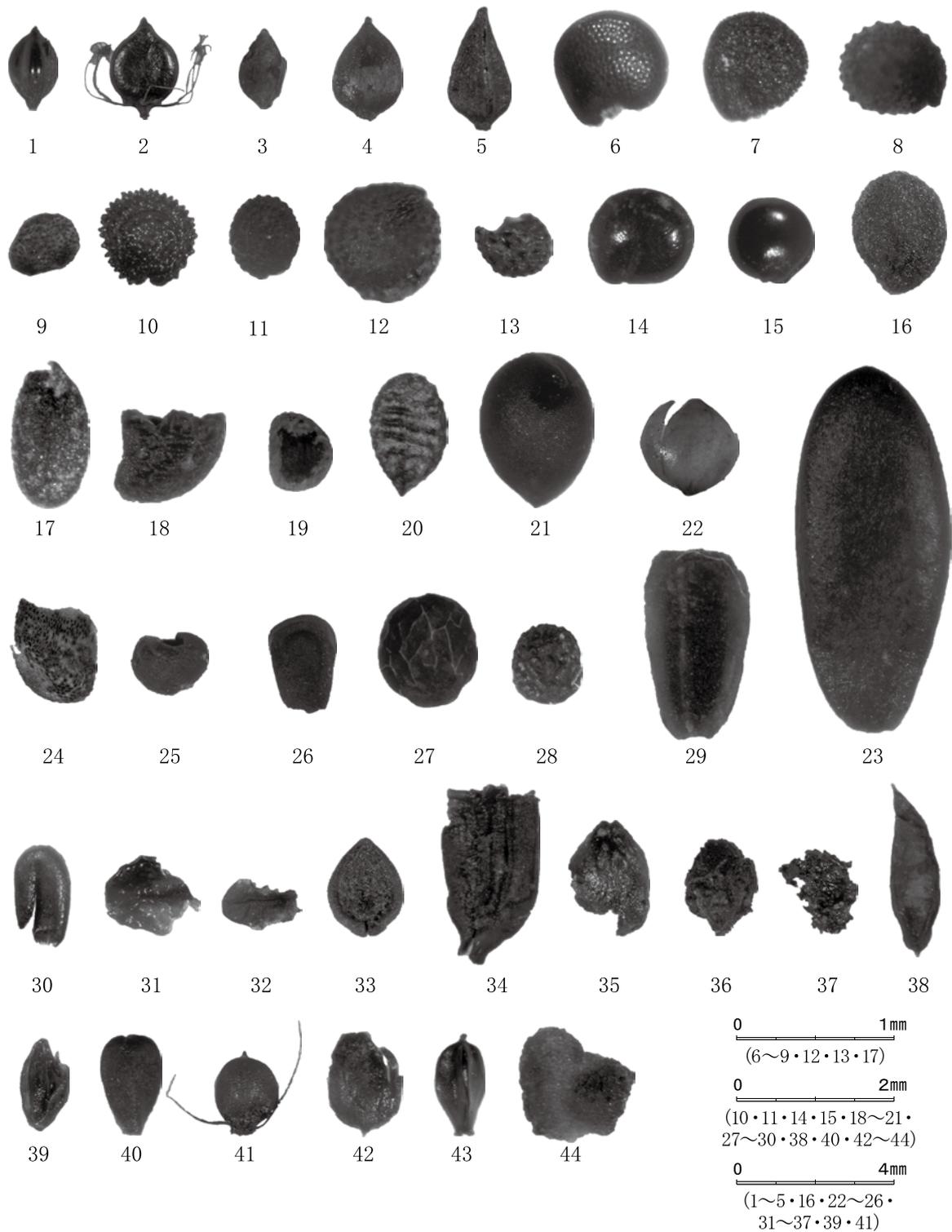
図40 刀装具（兜金：金3）蛍光X線分析データ

コムギの区別ができなかったものをムギ類とし、表面を欠失し、被熱により泡状を呈しているものを穀類として暫定的に分類した。

試料2で検出した植物遺体は全て炭化した状態での検出である。食用となるオオムギ、コムギが多く、多数含まれていた炭化木材からは広葉樹環孔材、タケ類、マツ属を確認している。マツ属は、倍率が及ばず図に示せなかったが、窓状分野壁孔を根拠とした分類である。また、磁石による抽出法では、鍛造剥片の可能性のある鉄片と粒状滓の可能性のある粒をいずれもわずかながら検出した。これらの結果から、土坑385の性格については竈もしくは鍛冶など火に関連する作業を行った遺構の可能性はある。この遺構は今回の調査区際に位置しているため、今後の調査で周囲の遺構状況と併せて判断していく必要がある。

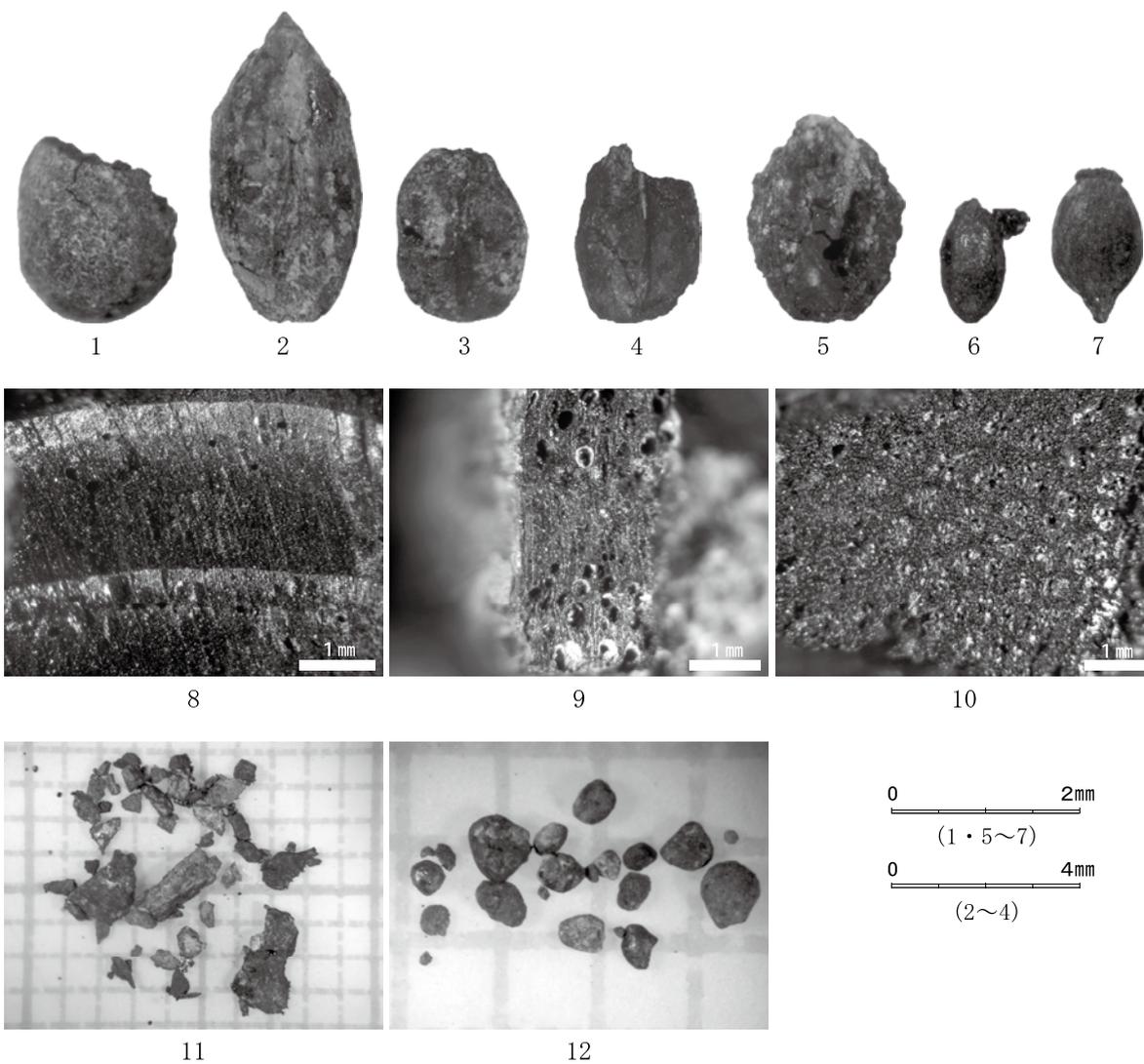
表7 土壌分析結果

	和名	部位	科名	生育場所	検出数(最小個体数)	
					試料No.1 (井戸44)	試料No.2 (土坑385)
木本	キイチゴ属	核	バラ	山野・道端	1	
	スノキ属?	種子	ツツジ	山地・高山・沿海地	?1	
	ムラサキシキブ属?(炭化)	核	クマツヅラ	山野・庭木	1 (シロネ属?)	
草本	イヌタデ近似種	果実	タデ	道端・野原	8	
	サナエタデ近似種	果実	タデ	道端・畑	9	
	ギシギシ属	果実	タデ	田畑の畔・道端・湿地・水辺	1	
	タデ科(扁平形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端	3	
	タデ科(三稜形)	果実	タデ	水辺・湿地・道端	7	
	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	道端・畑	17	
	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	畑・道端	16	
	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	水田・畑・野原	18	
	ツメクサ	種子	ナデシコ	道端	11	
	ハコベ属	種子	ナデシコ	道端・畑	7	
	ナデシコ科A	種子	ナデシコ		1	
	ナデシコ科B	種子	ナデシコ		1	
	ナデシコ科C	種子	ナデシコ		2	
	アカザ属	種子	アカザ	道端・荒地	10	
	ヒユ属	種子	ヒユ	畑・道端	80	
	キンボウゲ属	果実	キンボウゲ	山野・道端	1	
	アブラナ科	種子	アブラナ	水田・水辺・道端	1	
	キジムシロ属	果実	バラ	野原・河原	1	
	マメ類(炭化)	種子	マメ	栽培		1
	カタバミ属	種子	カタバミ	道端・畑	3	
	エノキグサ	種子	トウダイグサ	道端・畑	12	
	スマレ科?	種子	スマレ	道端・山野	1	
	ウリ類(モモルディカメロン型)	種子	ウリ	栽培	1	
	ヤエムグラ属	果実	アカネ	山野・道端・湿地	1	
	シソ属	果実	シソ	道端・野原・山地・栽培	2	
	イヌコウジュ属	果実	シソ	山野	1	
	タカサブロウ	果実	キク	湿地・水田	6	
	オモダカ科	種子	オモダカ	水田・溝	1	
	ツユクサ属	種子	ツユクサ	道端・畑	1	
	イボクサ	種子	ツユクサ	水田・沼	1	
	エノコログサ属	穎	イネ	道端・荒地・野原	11	
	イネ	穎	イネ	栽培	11	
	オオムギ(炭化)	果実	イネ	栽培	1	10
	コムギ(炭化)	果実	イネ	栽培		21
	ムギ類(炭化)	果実	イネ	栽培	1	17
	穀類(炭化)	果実	イネ	栽培	2	
	イネ科A	穎	イネ	道端・野原	5	
	イネ科B	穎	イネ	道端・野原	11	
	イネ科C(炭化)	穎・果実	イネ	道端・野原		1
	イネ科D(炭化)	穎・果実	イネ	道端・野原		1
スゲ属	果実	カヤツリグサ	湿地・水田・山地	1		
スゲ属?	果実	カヤツリグサ	湿地・水田・山地		1	
ホタルイ属	果実	カヤツリグサ	水田・溝・湿地	12		
カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ	湿地・山野	2		
カヤツリグサ科(扁平形)?	果実	カヤツリグサ	湿地・山野	3		
カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ	湿地・山野	13		
その他	不明種実類				6種	
	炭化木材					多(マツ属・広葉樹・環孔材・タケ類)
	昆虫	各部			多	
	鉄片					少
	粒状滓?					少
	不明葉				3	



1. イヌタデ近似種 2. サナエタデ近似種 3. ギシギシ属 4. タデ科扁平形 5. タデ科三稜形 6. ザクロソウ
7. スベリヒユ 8. ノミノフスマ 9. ツメクサ 10. ハコベ属 11. ナデシコ科A 12. ナデシコ科B 13. ナデシコ科C
14. アカザ属 15. ヒユ属 16. キンボウグ属 17. アブラナ科 18. キイチゴ属 19. キジムシロ属 20. カタバミ属
21. エノキグサ 22. スミレ科? 23. ウリ類(モモルディカメロン型) 24. スノキ属? 25. ヤエムグラ属
26. ムラサキシキブ属?(炭化) 27. シソ属 28. イヌコウジュ属 29. タカサブロウ 30. オモダカ科 31. ツユクサ属
32. イボクサ 33. エノログサ属 34. イネ 35. オオムギ(炭化) 36. ムギ類(炭化) 37. 穀類(炭化) 38. イネ科A
39. イネ科B 40. スゲ属 41. ホタルイ属 42. カヤツリグサ科扁平形 43. カヤツリグサ科三稜形 44. 不明種実片

図41 井戸44植物遺体の実体顕微鏡写真



1. マメ類 2. オオムギ 3. コムギ 4. ムギ類 5. イネ科A 6. イネ科B 7. カヤツリグサ科(スゲ属?) 8. マツ属木口面
 9. 広葉樹(環孔材)木口面 10. タケ類木口面 11. 鉄片 12. 粒状滓?

図42 土坑385植物遺体の実体顕微鏡写真

(3) 樹種同定

1) 樹種同定試料と分析方法

試料としたのは、井戸44（鎌倉時代後半）の構成材69点（卒塔婆形（木4）、人形か（木5）を含む）、同遺構から出土した木製品6点（刀形（木1）、卒塔婆形（木2・3）、曲物底板、曲物側板、不明部材）、水溜390（鎌倉時代末から室町時代前半）に据えられた桶材4点、溝218（江戸時代）から出土した賽子形木製品（木6）の計80点である。試料は木口、柁目、板目の各面から剃刀を用いて切片を採取し、生物顕微鏡で同定した。同定に用いた切片はガムクロールに包埋し、永久プレパラートとして保管している。

表8 樹種同定結果

試料No.	試料名	出土遺構	同定結果	備考	試料No.	試料名	出土遺構	同定結果	備考
1	刀形	井戸44掘形	ヒノキ	報告No.木1	41	横棧2	井戸44	ヒノキ属	丸太半裁材 端部凸
2	卒塔婆形	井戸44掘形	ヒノキ	報告No.木2	42	横棧3	井戸44	ヒノキ属	丸太半裁材 端部凹
3	卒塔婆形	井戸44掘形	ヒノキ	報告No.木3	43	横棧4	井戸44	ヒノキ属	丸太半裁材 端部凹
4	卒塔婆形(縦板)	井戸44	ヒノキ	報告No.木4	44	横棧5	井戸44	ヒノキ	芯持ち材 端部凸
5	人形か(縦板?)	井戸44	ヒノキ	報告No.木5	45	横棧6	井戸44	ヒノキ	芯持ち材 端部凸
6	賽子形	溝218	ヒノキ属	報告No.木6	46	横棧7	井戸44	ヒノキ	端部不明
7	不明部材	井戸44	ヒノキ		47	横棧8	井戸44	モミ属	端部凸
8	曲物底板	井戸44	スギ		48	横棧?	井戸44	モミ属	端部不明 隅柱?
9	曲物側板片	井戸44	ヒノキ科		49	隅柱1	井戸44	ヒノキ	
10	縦板1	井戸44	ヒノキ		50	隅柱2	井戸44	ヒノキ	
11	縦板2	井戸44	モミ属		51	隅柱3	井戸44	ヒノキ	
12	縦板3	井戸44	ヒノキ属		52	隅柱4	井戸44	ヒノキ属	
13	縦板4	井戸44	モミ属		53	隅柱5	井戸44	ヒノキ	
14	縦板5	井戸44	サワラ		54	隅柱6	井戸44	ヒノキ	
15	縦板6	井戸44	モミ属		55	隅柱7	井戸44	スギ	
16	縦板7	井戸44	モミ属		56	隅柱8	井戸44	ヒノキ	
17	縦板8	井戸44	モミ属		57	隅柱9	井戸44	ヒノキ属	
18	縦板9	井戸44	モミ属		58	隅柱10	井戸44	サワラ	
19	縦板10	井戸44	モミ属		59	隅柱11	井戸44	ヒノキ	
20	縦板11	井戸44	モミ属		60	桶側板1	井戸44	スギ	
21	縦板12	井戸44	ヒノキ		61	桶側板2	井戸44	スギ	
22	縦板13	井戸44	モミ属		62	桶側板3	井戸44	スギ	
23	縦板14	井戸44	モミ属		63	桶側板4	井戸44	スギ	
24	縦板15	井戸44	モミ属		64	桶側板5	井戸44	スギ	
25	縦板16	井戸44	ヒノキ		65	桶側板6	井戸44	スギ	
26	縦板17	井戸44	モミ属		66	桶側板7	井戸44	スギ	
27	縦板18	井戸44	サワラ		67	桶側板8	井戸44	スギ	
28	縦板19	井戸44	サワラ		68	桶側板9	井戸44	スギ	
29	縦板20	井戸44	モミ属		69	桶側板10	井戸44	スギ	
30	縦板21	井戸44	モミ属		70	桶側板11	井戸44	スギ	
31	縦板22	井戸44	モミ属		71	桶側板12	井戸44	スギ	
32	縦板23	井戸44	モミ属		72	桶側板13	井戸44	スギ	
33	縦板24	井戸44	モミ属		73	桶側板14	井戸44	スギ	
34	縦板25	井戸44	モミ属		74	桶側板15	井戸44	スギ	
35	縦板26	井戸44	モミ属		75	桶側板16	井戸44	スギ	
36	縦板27	井戸44	ヒノキ属		76	桶側板17	井戸44	スギ	
37	縦板28	井戸44	ヒノキ		77	桶側板1	水溜390	スギ	
38	縦板29	井戸44	マツ属復雑 管束亜属		78	桶側板2	水溜390	スギ	
39	縦板30	井戸44	ヒノキ		79	桶側板3	水溜390	スギ	
40	横棧1	井戸44	ヒノキ属	丸太半裁材 端部凸	80	桶側板4	水溜390	スギ	

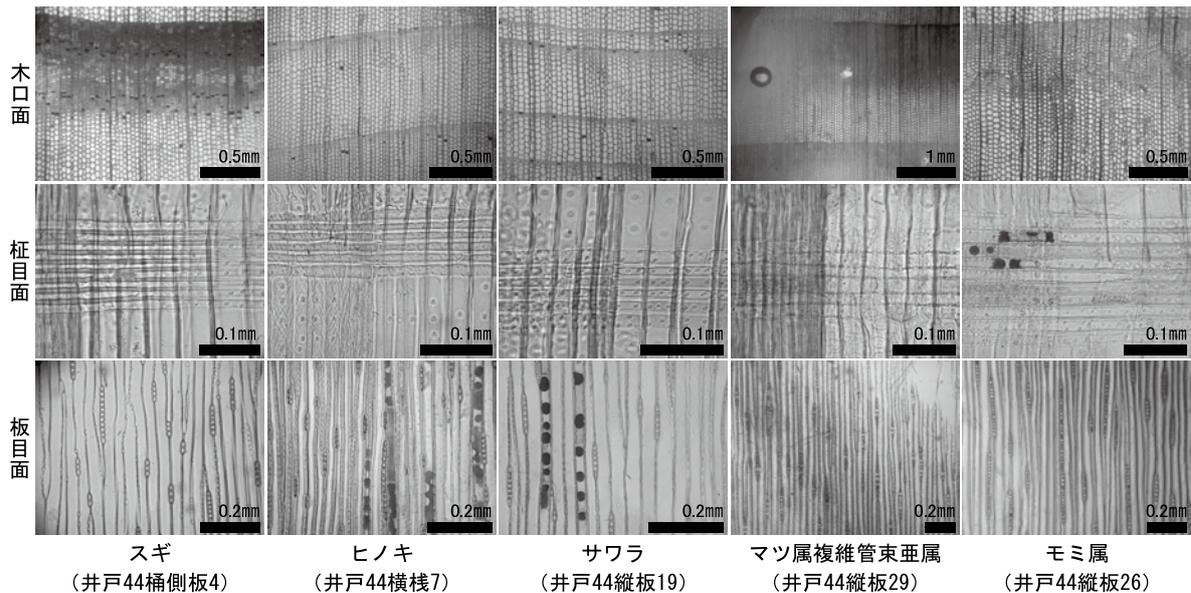


図43 樹種同定 生物顕微鏡写真

2) 樹種同定結果

得られた結果を表8に、樹種の同定根拠となる顕微鏡写真を図43に示し、以下には遺構の構成材について述べる。

水溜390の構成材は、据えられた桶の側板のみである。対象としたのは多数の桶側板から無作為に抽出した4点のみだが、全てスギである。

井戸44の確かな構成材は、縦板31点、横棧8点、隅柱11点、最下に据えられた桶の側板17点からなる。縦板はヒノキ6点、サワラ3点、モミ属19点、マツ属複維管束亜属1点、ヒノキ属2点である。横棧はヒノキ3点、ヒノキ属4点、モミ属1点である。隅柱はヒノキ7点、ヒノキ属2点、サワラ1点、スギ1点である。桶の側板は全てスギである。この井戸44は桶を除いて樹種の選択に統一性がみられず、構成材の多くが様々な部材からの転用と考えられる。

参考引用文献

- 中山至大・井之口希秀、南谷忠志「日本植物種子図鑑」東北大学出版会 2000年
- 石川茂雄「原色日本植物種子写真図鑑」石川茂雄図鑑刊行委員会 1995年
- 林 弥栄 編「山溪カラー名鑑 日本の野草」(株)山と溪谷社 1986
- 林 弥栄 編「山溪カラー名鑑 日本の樹木」(株)山と溪谷社 1986
- 島地 謙・伊藤隆夫「図説木材組織」(株)地球社 1982年
- IAWA委員会 編「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」海青社 2006年
- 原田 浩ほか「木材の科学・1 木材の構造」文永堂出版(株) 1985年

付表1 土器類一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
1	縄文土器	深鉢	IX層		(2.8)		10YR7/2	φ~2mmのチャート、長石、石英	刻目突帯文
2	須恵器	杯身	IX層	11.4	(3.2)		7.5YR7/1		TK208~23型式
3	弥生土器	器台	攪乱坑	18.0	(1.4)		10YR7/4		弥生時代後期
4	古式土師器	器台	V層		(3.5)		5YR8/4	チャート、赤色粒	古墳時代初頭
5	古式土師器	高杯	溝235		(4.5)		2.5YR6/4	φ1~3mmの長石、石英	古墳時代初頭
6	土師器	杯	V層	13.0	3.6		5YR6/4	雲母	古墳時代後期か
7	須恵器	杯身	溝3		(2.8)		N6/1		TK217型式
8	須恵器	無蓋高杯	溝50		(3.5)		7.5R4/1		TK208~23型式
9	須恵器	有蓋高杯	溝4		(3.2)		N6/1		田辺編年I期
10	須恵器	壺	土坑513		(6.5)		5YR5/1~N6/1		TK208~23型式
11	須恵器	杯B	溝4		(2.7)	9.8	5Y6/1		
12	須恵器	瓶子	溝4		(4.8)	5.0	N6/1	φ1mmの長石	
13	土師器	皿	井戸44	7.1	1.1		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
14	土師器	皿	井戸44	7.4	0.9		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
15	土師器	皿	井戸44	7.4	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
16	土師器	皿	井戸44	7.4	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
17	土師器	皿	井戸44	7.4	1.1		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
18	土師器	皿	井戸44	7.4	1.2		10YR7/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
19	土師器	皿	井戸44	7.4	1.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
20	土師器	皿	井戸44	7.5	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
21	土師器	皿	井戸44	7.5	1.4		10YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
22	土師器	皿	井戸44	7.5	1.4		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
23	土師器	皿	井戸44	7.6	1.1		7.5YR8/2	雲母	乙訓在地形
24	土師器	皿	井戸44	7.6	1.1		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
25	土師器	皿	井戸44	7.6	1.2		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
26	土師器	皿	井戸44	7.6	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
27	土師器	皿	井戸44	7.6	1.4		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
28	土師器	皿	井戸44	7.6	1.3		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
29	土師器	皿	井戸44	7.7	1.1		5YR8/4	赤色粒	乙訓在地形
30	土師器	皿	井戸44	7.7	1.1		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
31	土師器	皿	井戸44	7.7	1.1		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
32	土師器	皿	井戸44	7.7	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
33	土師器	皿	井戸44	7.7	1.2		7.5YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
34	土師器	皿	井戸44	7.8	1.0		10YR8/1	雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
35	土師器	皿	井戸44	7.8	1.0		10YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
36	土師器	皿	井戸44	7.8	1.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
37	土師器	皿	井戸44	7.8 ~8.3	1.2		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
38	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
39	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
40	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		10YR7/3	雲母	乙訓在地形
41	土師器	皿	井戸44	7.8	1.2		10YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
42	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
43	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
44	土師器	皿	井戸44	7.8	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形 タール付着
45	土師器	皿	井戸44	7.8	1.3		7.5YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
46	土師器	皿	井戸44	7.9	1.0		10YR8/1	雲母	乙訓在地形
47	土師器	皿	井戸44	7.9	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
48	土師器	皿	井戸44	7.9	1.1		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
49	土師器	皿	井戸44	7.9	1.2		5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
50	土師器	皿	井戸44	7.9	1.3		7.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
51	土師器	皿	井戸44	7.9	1.2		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
52	土師器	皿	井戸44	7.9	1.3		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
53	土師器	皿	井戸44	7.9	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
54	土師器	皿	井戸44	7.9	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
55	土師器	皿	井戸44	7.9	1.6		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
56	土師器	皿	井戸44	8.0	1.2		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
57	土師器	皿	井戸44	8.0	1.2		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
58	土師器	皿	井戸44	8.0	1.5		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
59	土師器	皿	井戸44	8.0	1.6		7.5YR7/2	雲母	乙訓在地形
60	土師器	皿	井戸44	8.1	0.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
61	土師器	皿	井戸44	8.1	1.2		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
62	土師器	皿	井戸44	8.1	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
63	土師器	皿	井戸44	8.2	1.1		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
64	土師器	皿	井戸44	8.2	1.4		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
65	土師器	皿	井戸44	8.2	1.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
66	土師器	皿	井戸44	8.2	1.4		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
67	土師器	皿	井戸44	8.3	1.2		10YR8/1	赤色粒	乙訓在地形
68	土師器	皿	井戸44	8.3	1.3		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
69	土師器	皿	井戸44	8.3	1.5		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
70	土師器	皿	井戸44	8.3	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
71	土師器	皿	井戸44	8.4	1.5		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
72	土師器	皿	井戸44	8.4	1.5		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
73	土師器	皿	井戸44	11.0 ~11.5	2.0		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
74	土師器	皿	井戸44	11.4	1.9		5YR7/6	雲母 焼成良	乙訓在地形
75	土師器	皿	井戸44	11.4	2.0		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
76	土師器	皿	井戸44	11.4	2.2		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
77	土師器	皿	井戸44	11.9	2.5		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
78	土師器	皿	井戸44	11.8	2.2		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
79	土師器	皿	井戸44	11.8	2.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
80	土師器	皿	井戸44	11.8	2.3		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
81	土師器	皿	井戸44	11.8	2.5		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
82	土師器	皿	井戸44	11.8	2.4		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
83	土師器	皿	井戸44	11.9	2.1		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
84	土師器	皿	井戸44	11.9	2.3		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
85	土師器	皿	井戸44	11.9	2.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
86	土師器	皿	井戸44	11.9	2.4		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
87	土師器	皿	井戸44	12.6	2.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
88	土師器	皿	井戸44	12.0	2.3		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
89	土師器	皿	井戸44	11.1	2.2		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
90	土師器	皿	井戸44	11.4	2.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
91	土師器	皿	井戸44	11.5	2.2		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
92	土師器	皿	井戸44	11.6	2.0		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
93	土師器	皿	井戸44	11.6	2.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
94	土師器	皿	井戸44	11.6	2.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
95	土師器	皿	井戸44	11.7	2.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
96	土師器	皿	井戸44	11.7	2.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
97	土師器	皿	井戸44	11.8	2.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
98	土師器	皿	井戸44	11.8	2.5		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
99	土師器	皿	井戸44	11.8	2.5		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
100	土師器	皿	井戸44	12.0	2.1		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
101	土師器	皿	井戸44	12.2	2.1		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
102	土師器	皿	井戸44	12.3	2.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
103	土師器	皿	井戸44	12.4	2.4		10YR8/1	赤色粒	乙訓在地形
104	土師器	皿	井戸44	12.5	2.0		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
105	瓦器	椀	井戸44	10.2	3.4	3.3	N6/1		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
106	瓦器	椀	井戸44	12.2 ~12.6	4.2	5.1	N5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
107	瓦器	椀	井戸44	12.4	4.5	5.0	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
108	瓦器	椀	井戸44	12.6	4.0	4.8	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
109	瓦器	椀	井戸44	12.5	4.1	4.4	N6/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
110	瓦器	椀	井戸44	11.7	3.7	3.2 ~3.9	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
111	瓦器	椀	井戸44	12.0 ~12.8	4.2	4.7	N5/0~8/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
112	瓦器	椀	井戸44	12.2 ~13.1	4.1	4.2	N6/1~5/1		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
113	瓦器	椀	井戸44	12.4	4.0	4.3	N6/1~5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
114	瓦器	椀	井戸44	13.2	4.4	4.5	N6/1		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
115	瓦器	椀	井戸44	11.6 ~12.2	4.3	3.8	N7/0~5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
116	瓦器	椀	井戸44	12.3	4.2	5.4	N6/1~5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
117	瓦器	椀	井戸44	12.6 ~13.6	4.4	4.6	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状 穿孔
118	瓦器	椀	井戸44	12.2	4.1		N6/1~5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
119	瓦器	椀	井戸44	12.6	4.4	4.1	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
120	瓦器	椀	井戸44	13.2	4.7	4.6	N6/1~5/1		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
121	土師器	皿	土器溜100	7.8	1.4		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
122	土師器	皿	土器溜100	8.0	1.5		7.5YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
123	土師器	皿	土器溜100	8.1 ~8.4	1.5		7.5YR8/1	雲母	乙訓在地形
124	土師器	皿	土器溜100	8.2	1.3		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
125	土師器	皿	土器溜100	8.4	1.3		10YR8/2	φ~1mmの長石、石英、 雲母	乙訓在地形
126	土師器	皿	土器溜100	7.8	1.1		7.5YR8/3	φ~1mmのチャート、長石	乙訓在地形
127	土師器	皿	土器溜100	8.0	1.3		7.5YR7/3	長石、赤色粒	乙訓在地形
128	土師器	皿	土器溜100	8.2	1.4		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
129	土師器	皿	土器溜100	8.3	1.1		7.5YR7/3	φ~1mmの長石、雲母	乙訓在地形
130	土師器	皿	土器溜100	8.2 ~8.4	1.4		7.5YR8/2~8/1		乙訓在地形
131	土師器	皿	土器溜100	7.9	1.2		7.5YR7/3	φ~2mmの長石、雲母	乙訓在地形
132	土師器	皿	土器溜100	8.0	1.4		7.5YR8/2	長石、赤色粒	乙訓在地形
133	土師器	皿	土器溜100	8.3 ~8.5	1.5		7.5YR8/2	φ~5mmのチャート、長 石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
134	土師器	皿	土器溜100	8.2	1.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
135	土師器	皿	土器溜100	8.4 ~8.6	1.1		7.5YR8/2~8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
136	土師器	皿	土器溜100	7.9	1.2		7.5YR8/3	長石、雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
137	土師器	皿	土器溜100	8.1	1.4		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
138	土師器	皿	土器溜100	8.2	1.2		7.5YR7/4	チャート、赤色粒	乙訓在地形
139	土師器	皿	土器溜100	8.4	1.1		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
140	土師器	皿	土器溜100	8.6	1.6		7.5YR7/3	長石、赤色粒	乙訓在地形
141	土師器	皿	土器溜100	11.4	2.4		5YR8/3		乙訓在地形
142	土師器	皿	土器溜100	12.0 ~12.3	2.3		7.5YR8/3	φ~1mmのチャート、 赤色粒	乙訓在地形
143	土師器	皿	土器溜100	12.2	2.0		7.5YR8/3	φ~1mmの長石、雲母	乙訓在地形 タール付着
144	土師器	皿	土器溜100	12.4	2.4		7.5YR8/4	φ~1mmのチャート、長 石、雲母	乙訓在地形
145	土師器	皿	土器溜100	11.6 ~12.1	2.7		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
146	土師器	皿	土器溜100	12.0 ~12.6	2.2		5YR7/6	φ~1mmのチャート、長 石、赤色粒	乙訓在地形
147	土師器	皿	土器溜100	12.6	2.5		7.5YR7/4		乙訓在地形
148	土師器	皿	土器溜100	12.0	2.0		7.5YR7/4	φ~1mmのチャート、長 石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
149	瓦器	皿	土器溜100	8.4 ~8.6	1.7		N5/0		
150	瓦器	皿	土器溜100	8.6	1.6		N5/0	φ~1mmの長石	
151	瓦器	皿	土器溜100	8.1 ~8.8	1.8		N4/0	φ~1mmのチャート、長石	
152	瓦器	椀	土器溜100	9.8	3.9	3.4	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
153	瓦器	椀	土器溜100	11.0	3.6	3.7	N7/0	φ~1mmの長石	樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
154	瓦器	椀	土器溜100	13.2	4.3	4.5	N6/0~5/0	φ~1mmの長石	樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
155	瓦器	椀	土器溜100	13.2	4.4	4.2	N4/0~5/0	φ~1mmの礫	樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
156	瓦器	椀	土器溜100	12.8	4.5	4.7	N4/0~5/0	φ~1mmの長石	樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
157	瓦器	椀	土器溜100	13.1	4.2	5.0	N5/0	φ~1mmの長石	樟葉型 高台潰れ 暗文ジグザグ状
158	瓦器	椀	土器溜100	13.4	4.4	5.0	N4/0	φ~1mmの長石	樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
159	瓦器	椀	土器溜100	13.6	4.8	4.8	N4/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
160	瓦器	鍋	土器溜100	21.2	(6.4)		N8/0		
161	瓦器	羽釜	土器溜100	23.6	(13.6)		N5/0 ~2.5Y8/2	φ~1mmのチャート、長石	
162	瓦器	盤	土器溜100	29.0	(7.9)		N4/0	φ~1mmのチャート、長 石、雲母	
163	須恵器	鉢	土器溜100	27.2	(8.2)		N4/0~5Y7/1	φ~3mmのチャート、長石	東播系
164	輸入白磁	皿	土器溜100	10.0	2.3		胎10YR8/3 釉2.5GY8/1		
165	輸入青磁	小椀	土器溜100	9.8	(4.0)		胎2.5Y6/1 釉10GY7/1		龍泉窯系
166	輸入青磁	小椀	土器溜100	9.6	4.1	2.8	胎2.5Y8/1 釉7.5Y5.2		龍泉窯系
167	輸入青磁	椀	土器溜100	14.0	(5.2)		胎N8/0 釉10GY7/1		龍泉窯系
168	輸入青磁	椀	土器溜100	16.2	(5.1)		胎2.5Y7/1 釉10Y6/2		龍泉窯系
169	土師器	皿	土坑513	7.8	1.2		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
170	土師器	皿	土坑513	8.0	1.1		10YR7/3	雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
171	土師器	皿	土坑513	8.2	1.2		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
172	土師器	皿	土坑513	7.8	1.3		7.5YR7/3	雲母	乙訓在地形
173	土師器	皿	土坑513	8.0	1.4		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
174	土師器	皿	土坑513	8.4	1.5		5YR7/6	雲母、φ3mmの赤色粒	乙訓在地形
175	土師器	皿	土坑513	11.9	2.5		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
176	土師器	皿	土坑513	12.0	2.6		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
177	土師器	皿	土坑513	12.0	2.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
178	土師器	皿	土坑513	10.7	2.3		10YR8/3	雲母	系統不明
179	瓦器	皿	土坑513	8.2	1.5		N5/0		暗文渦巻き状
180	瓦器	皿	土坑513	9.6	1.5		N5/0 ~2.5Y7/1		
181	瓦器	椀	土坑513	10.8	3.6	3.4	N4/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
182	瓦器	椀	土坑513	10.8	3.6	4.3	N5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
183	瓦器	椀	土坑513	12.1	4.1	3.1	N4/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
184	輸入白磁	皿	土坑513	8.2	1.7	5.5	胎10YR6/3 釉5Y7/1		
185	輸入白磁	皿	土坑513	10.0	2.0		胎7.5YR6/4 釉7.5Y6/1		
186	土師器	皿	墓555	7.5	1.1		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
187	土師器	皿	墓555	7.6 ~7.8	1.1		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
188	土師器	皿	墓555	7.6	1.1		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
189	土師器	皿	墓555	7.6	1.2		5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
190	土師器	皿	墓555	7.7	1.5		5YR8/3	雲母	乙訓在地形
191	土師器	皿	墓555	7.7	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
192	土師器	皿	墓555	7.8	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
193	土師器	皿	墓555	7.9	1.6		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
194	土師器	皿	墓555	7.9	1.4		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
195	土師器	皿	墓555	7.8 ~8.0	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
196	土師器	皿	墓555	8.0	1.2		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
197	土師器	皿	墓555	8.0	1.2		7.5YR8/3	φ~1mmの長石、雲母	乙訓在地形
198	土師器	皿	墓555	8.2	1.4		10YR8/2	雲母	乙訓在地形
199	土師器	皿	墓555	8.3	1.4		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
200	土師器	皿	墓555	8.4	1.3		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
201	土師器	皿	墓555	11.4	1.9		7.5YR8/1	φ~1mmの石英、雲母	乙訓在地形
202	土師器	皿	墓555	11.2 ~11.6	2.1		7.5YR8/4~8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
203	土師器	皿	墓555	11.4 ~11.6	2.1		5YR7/4	φ~1mmのチャート、長 石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
204	土師器	皿	墓555	11.5 ~11.8	2.1		7.5YR8/1	φ~1mmの石英、雲母、 赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
205	土師器	皿	墓556	7.2	1.5		10YR7/2	雲母、赤色粒	系統不明
206	土師器	皿	墓556	7.6	1.3		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
207	土師器	皿	墓556	7.8	1.2		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
208	土師器	皿	墓556	7.9	1.2		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
209	土師器	皿	墓556	7.4	1.1		5YR8/4	赤色粒	乙訓在地形
210	土師器	皿	墓556	7.6	1.4		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
211	土師器	皿	墓556	7.9	1.3		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
212	土師器	皿	墓556	7.9	1.2		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
213	土師器	皿	墓556	7.6	1.2		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
214	土師器	皿	墓556	7.6	1.1		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
215	土師器	皿	墓556	7.9	1.4		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
216	土師器	皿	墓556	7.9	1.6		5YR8/4	雲母	乙訓在地形
217	土師器	皿	墓556	7.6	1.0		5YR8/4	雲母	乙訓在地形
218	土師器	皿	墓556	7.7	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
219	土師器	皿	墓556	8.0	1.4		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
220	土師器	皿	墓556	8.0	1.2		10YR7/1	雲母	乙訓在地形
221	土師器	皿	墓556	11.0	2.5		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
222	土師器	皿	墓556	11.0	2.4		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
223	土師器	皿	墓556	11.2	2.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
224	土師器	皿	墓556	11.2 ~11.4	2.4		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
225	土師器	皿	墓556	11.6	2.2		5YR8/3		乙訓在地形
226	土師器	皿	墓556	11.6	1.8		10YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
227	土師器	皿	墓556	11.6 ~12.0	2.2		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
228	土師器	皿	墓556	12.0	2.0		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
229	瓦器	椀	墓556	12.1	3.8	3.9	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文渦巻き状
230	瓦器	椀	墓556	11.8	3.8	4.0	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
231	瓦器	椀	墓556	13.2	4.4	5.8	2.5Y8/1		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
232	須恵器	壺	墓556		(15.4)	12.2	5Y4/1		産地不明
233	土師器	皿	墓557	7.4	1.0		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
234	土師器	皿	墓557	7.5 ~7.8	1.1		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
235	土師器	皿	墓557	7.6 ~7.8	1.3		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
236	土師器	皿	墓557	7.7	1.4		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
237	土師器	皿	墓557	7.6	1.3		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
238	土師器	皿	墓557	7.7	1.1		10YR8/3	φ3mmの石英、雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
239	土師器	皿	墓557	7.6 ~7.8	1.2		5YR8/3	雲母	乙訓在地形
240	土師器	皿	墓557	7.8	1.2		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
241	土師器	皿	墓557	7.6 ~7.8	1.3		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
242	土師器	皿	墓557	7.8	1.2		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
243	土師器	皿	墓557	7.8	1.2		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
244	土師器	皿	墓557	7.8	1.4		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
245	土師器	皿	墓557	7.7	1.2		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
246	土師器	皿	墓557	7.9	1.2		10YR7/2	雲母	乙訓在地形
247	土師器	皿	墓557	7.7 ~8.0	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
248	土師器	皿	墓557	7.9	1.3		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
249	土師器	皿	墓557	10.4	1.6		7.5YR8/2	赤色粒	乙訓在地形
250	土師器	皿	墓557	10.8	1.9		5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
251	土師器	皿	墓557	11.4 ~11.6	2.1		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
252	土師器	皿	墓557	11.0	2.2		10YR8/1~8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
253	瓦器	皿	墓557	8.2	1.8		N4/0~6/1		
254	瓦器	皿	墓557	8.2	1.9		N4/0~8/0	雲母	
255	瓦器	皿	墓557	8.4	1.6		N4/0~8/0	φ~1mmの長石	
256	瓦器	皿	墓557	8.6	1.7		N4/0~6/1		
257	土師器	皿	溝40	7.8	1.3		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
258	土師器	皿	溝40	8.0	1.4		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
259	土師器	皿	溝40	8.3	1.1		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
260	土師器	皿	溝40	11.5	1.8		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
261	土師器	皿	溝40	11.8	1.5		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
262	土師器	皿	溝40	11.8	1.9		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
263	土師器	皿	溝40	11.5	1.9		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
264	土師器	皿	溝40	11.8	2.3		10YR7/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
265	土師器	皿	溝40	12.0	2.0		7.5YR7/4 ~10YR7/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
266	瓦器	椀	溝40	12.6 ~13.0	4.0	4.0	N5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
267	瓦器	椀	溝40	12.0	4.2	3.9	N4/0		樟葉型 高台矮小 暗文ジグザグ状
268	須恵器	片口鉢	溝40	27.6	10.3		5Y5/1	φ~3mmの礫	東播系
269	輸入青磁	盤	溝40		(4.2)		胎N8/0 釉5GY6/1		龍泉窯系
270	土師器	皿	土坑400	7.3	1.4		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
271	土師器	皿	土坑400	7.4 ~7.9	1.1		5YR7/6~8/4	雲母	乙訓在地形
272	土師器	皿	土坑400	7.6	1.4		10YR7/2	雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
273	土師器	皿	土坑400	7.6	1.0		7.5YR8/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
274	土師器	皿	土坑400	7.6	1.2		7.5YR8/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
275	土師器	皿	土坑400	7.7	1.2		10YR8/2		乙訓在地形
276	土師器	皿	土坑400	7.8	1.1		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
277	土師器	皿	土坑400	7.8	1.1		10YR8/1	雲母	乙訓在地形
278	土師器	皿	土坑400	7.8	1.5		5YR8/4		乙訓在地形
279	土師器	皿	土坑400	7.8	1.0		7.5YR8/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
280	土師器	皿	土坑400	8.0	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
281	土師器	皿	土坑400	8.1	1.1		7.5YR7/2	雲母	乙訓在地形 タール付着
282	土師器	皿	土坑400	8.2	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
283	土師器	皿	土坑400	8.3	1.3		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
284	土師器	皿	土坑400	8.6	1.5		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
285	土師器	皿	土坑400	10.8	2.0		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
286	土師器	皿	土坑400	10.8	2.1		7.5YR7/3	赤色粒	乙訓在地形
287	土師器	皿	土坑400	10.9	2.3		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
288	土師器	皿	土坑400	11.0	2.2		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
289	土師器	皿	土坑400	11.3	2.0		7.5YR7/2		乙訓在地形
290	土師器	皿	土坑400	11.5	2.0		5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
291	土師器	皿	土坑400	11.3	2.3		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
292	土師器	皿	土坑400	11.8	1.6		5YR8/2	雲母	乙訓在地形
293	土師器	皿	土坑400	11.8	2.2		7.5YR8/3		乙訓在地形
294	土師器	皿	土坑400	11.9	2.6		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
295	土師器	皿	土坑400	11.2	2.0		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
296	土師器	皿	土坑400	11.4	2.0		5YR8/3	雲母	乙訓在地形 タール付着
297	瓦器	椀	土坑400	10.0	(3.0)		N5/0		樟葉型 暗文ジグザグ状
298	瓦器	椀	土坑400	12.0	4.1	4.7	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
299	瓦器	椀	土坑400	12.4	4.1	4.1	N4/0~5/0		樟葉型 高台矮小 暗文ジグザグ状
300	瓦器	椀	土坑400	12.4	3.9	4.8	N5/0		樟葉型 高台矮小 暗文ジグザグ状
301	瓦器	羽釜	土坑400	30.4	(22.3)		N4/0~5/0		
302	瓦器	羽釜	土坑400	26.8	(11.9)		N4/0~2.5Y8/1		
303	瓦器	三足羽釜	土坑400	17.6	(18.5)		N4/0		
304	瓦器	鍋	土坑400	27.4	(10.0)		2.5Y8/2		
305	須恵器	鉢	土坑400	25.0	(7.7)		N4/0~2.5Y7/1		東播系
306	土師器	皿	土坑101	7.2	1.1		7.5YR8/1	赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
307	土師器	皿	土坑101	7.5	1.0		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
308	土師器	皿	土坑101	7.6	1.2		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
309	土師器	皿	土坑101	7.4	1.0		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
310	土師器	皿	土坑101	7.6	0.8		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
311	土師器	皿	土坑101	8.0	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
312	土師器	皿	土坑101	10.7	1.9		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
313	土師器	皿	土坑101	10.7	2.2		5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
314	土師器	皿	土坑101	11.6	2.2		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
315	土師器	皿S	土坑101	12.2	3.0		2.5Y8/1		
316	瓦器	皿	土坑101	9.2	1.6		N5/0		
317	瓦器	皿	土坑101	9.4	1.3		N4/0		
318	瓦器	椀	土坑101	12.2 ~12.4	3.9	4.9	N5/0		樟葉型 高台三角形 暗文ジグザグ状
319	瓦器	椀	土坑101	11.9 ~12.5	4.2	4.0	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
320	瓦器	椀	土坑101	12.0	3.9	4.0	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
321	瓦器	ミニチュア 羽釜	土坑101	4.0	(2.2)		N4/0		
322	瓦器	羽釜	土坑101	25.4	21.3		N6/0~8/0		
323	瓦器	羽釜	土坑101	19.2	(8.1)		N6/0~8/0		
324	須恵器	鉢	土坑101	29.0	(6.0)		N5/0~6/0		東播系
325	灰釉系陶器	小皿	土坑101	7.8	7.8	4.8	5Y7/1	粗肌手	尾張型山茶椀
326	土師器	皿	溝340	7.5	1.3		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
327	土師器	皿	溝340	7.6	1.0		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
328	土師器	皿	溝340	7.8	1.3		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
329	土師器	皿	溝340	7.8	1.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
330	土師器	皿	溝340	7.9	1.0		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
331	土師器	皿	溝340	10.2	1.7		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
332	土師器	皿	溝340	10.4	1.9		7.5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
333	土師器	皿	溝340	10.4	1.8		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
334	土師器	皿	溝340	10.6	2.1		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
335	土師器	皿	溝340	11.0	2.7		7.5YR8/1 ~5YR7/4	赤色粒	乙訓在地形
336	土師器	皿	溝340	10.0	2.1		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
337	土師器	皿S	溝340	11.5	2.9		2.5Y8/2		
338	土師器	皿S	溝340	11.6	2.9		2.5Y8/2		
339	土師器	皿S	溝340	11.8	2.7		2.5Y8/2		
340	土師器	皿S	溝340	11.8	2.8		2.5Y8/2		

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
341	瓦器	椀	溝340	12.0	4.3		2.5Y8/1		樟葉型 無高台 暗文不明瞭
342	瓦器	椀	溝340	12.1 ~12.5	4.9	3.4	N5/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
343	瓦器	椀	溝340	11.6 ~11.8	4.4		N5/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
344	瓦器	壺	溝340	5.8	18.0	6.4	N4/0		
345	土師器	皿	土坑352	7.4	1.2		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
346	土師器	皿	土坑352	7.4	1.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
347	土師器	皿	土坑352	8.0	1.2		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
348	瓦器	椀	土坑352	12.2	3.8	4.4	N4/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
349	瓦器	椀	土坑352	12.2	3.8	5.1	N5/0		樟葉型 高台矮小 暗文ジグザグ状
350	瓦器	椀	土坑352	12.3	3.7	5.4	N5/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
351	瓦器	椀	土坑352	12.5 ~13.2	4.3	3.6	N5/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
352	土師器	皿	溝467	9.7	1.9		7.5YR8/4	赤色粒	乙訓在地形 タール付着
353	土師器	皿	溝467	10.4	2.1		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
354	土師器	皿	溝467	10.4	2.0		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
355	土師器	皿S	溝467	11.8	3.0		10YR8/1		
356	瓦器	椀	溝467	11.0	3.9	2.4	N4/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
357	瓦器	椀	溝467	11.8	3.9		N3/0~8/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
358	瓦器	椀	溝467	11.6	3.9		N4/0~7/0		樟葉型 高台矮小 暗文ジグザグ状
359	瓦器	三足羽釜	溝467	18.0	(14.1)		N4/0		三足剥離面に煤付着
360	瓦器	羽釜	溝467	22.4	(16.8)		N5/0		
361	瓦器	羽釜	溝467	35.0	(8.7)		2.5Y7/1~N6/0		
362	瓦器	鍋	溝467	19.8	(8.5)		N4/0~2.5Y7/1		
363	土師器	皿	土坑275	8.4	1.8		5Y8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
364	土師器	皿	土坑275	9.8	1.8		5Y8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
365	土師器	皿	土坑275	9.5 ~9.8	1.7		5Y8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
366	土師器	片口小壺	土坑275	2.4	(2.4)		2.5Y8/1		
367	土師器	火鉢	土坑275		(11.9)		5YR7/3	φ~3mmの長石、石英、 雲母	
368	土師器	皿	整地399	7.5	1.3		10YR8/1	雲母	乙訓在地形
369	土師器	皿	整地399	7.6	1.1		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
370	土師器	皿	整地399	7.7	1.0		10YR8/2	雲母	乙訓在地形
371	土師器	皿	整地399	7.8	1.2		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
372	土師器	皿	整地399	7.8	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
373	土師器	皿	整地399	8.0	1.2		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
374	土師器	皿	整地399	9.6	1.8		5YR7/4	雲母	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
375	土師器	皿	整地399	9.8	1.7		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
376	土師器	皿	整地399	9.8	2.0		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
377	土師器	皿	整地399	10.0	1.5		5YR7/4	雲母	乙訓在地形
378	土師器	皿N	整地399	7.4	1.5		5YR7/6		
379	土師器	皿Sh	整地399	6.4	2.0		2.5Y8/1		
380	土師器	皿S	整地399	11.6	3.0		2.5Y8/2		
381	土師器	羽釜	整地399	25.6	(9.7)		10YR8/4		
382	瓦器	椀	整地399	11.0	3.2	(2.8)	N5/0		樟葉型 高台矮小・馬蹄形 暗文ジグザグ状
383	瓦器	小壺	整地399	4.6	(3.3)		N4/0		
384	瓦器	羽釜	整地399	15.2	(5.4)		2.5Y8/1~6/1		
385	土師器	皿	整地401	7.1	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
386	土師器	皿	整地401	7.2	1.2		10YR8/1	雲母	乙訓在地形
387	土師器	皿	整地401	7.2	1.2		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
388	土師器	皿	整地401	7.4	1.0		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
389	土師器	皿	整地401	7.5	1.2		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
390	土師器	皿	整地401	7.6	1.5		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
391	土師器	皿	整地401	7.6	1.0		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
392	土師器	皿	整地401	7.6	1.0		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
393	土師器	皿	整地401	7.8	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
394	土師器	皿	整地401	7.9	1.3		7.5YR8/3	雲母	乙訓在地形
395	土師器	皿	整地401	9.0	2.1		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
396	土師器	皿	整地401	9.2	1.5		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
397	土師器	皿	整地401	10.0	1.4		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
398	土師器	皿	整地401	11.0	1.8		7.5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
399	土師器	皿	整地401	11.0	1.4		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
400	土師器	皿	整地401	11.2	2.0		2.5Y7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
401	土師器	皿	整地401	11.2	2.1		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
402	土師器	皿	整地401	11.4	2.0		7.5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
403	土師器	皿N	整地401	7.7	1.9		5YR8/4	赤色粒	
404	土師器	皿Sh	整地401	6.8	2.0		10YR8/2		
405	瓦器	皿	整地401	8.7	2.0		N4/0		
406	瓦器	皿	整地401	8.9	1.5		N5/0~8/0		
407	瓦器	皿	整地401	9.4	1.5		N4/0		
408	瓦器	椀	整地401	10.6	3.5	4.2	N6/1		大和型 口縁内端部に段 高台矮小 暗文渦巻き状

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
409	瓦器	椀	整地401	10.6	3.5	3.4 ~3.9	N5/0		樟葉型 高台痕跡的・馬蹄形 暗文ジグザグ状
410	瓦器	椀	整地401	10.8	3.7	(3.8)	N6/1		樟葉型 高台痕跡的・馬蹄形 暗文ジグザグ状
411	瓦器	椀	整地401	11.6	3.8	4.6	N6/1		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
412	瓦器	椀	整地401	13.0	4.2	(4.2)	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
413	瓦器	椀	整地401	11.6	3.8	3.2	N5/0		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
414	瓦器	椀	整地401	12.3	4.2	3.7	N6/1		樟葉型 高台矮小三角形 暗文ジグザグ状
415	土師器	皿S	溝424	11.6	(2.3)		10YR8/1		
416	土師器	皿S	溝424	12.2	(2.5)		2.5Y8/1		
417	瓦器	椀	溝424	10.2	(3.1)		N5/0		樟葉型 高台痕跡的
418	瓦器	椀	溝424	12.0	4.1	3.9	N5/0		樟葉型 高台痕跡的 暗文ジグザグ状
419	瓦器	羽釜	溝424	19.4	(11.5)		10YR4/1		
420	土師器	皿	墓393	7.5	1.0		5YR7/4	雲母	乙訓在地形
421	土師器	皿	墓393	7.5	1.2		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
422	土師器	皿	墓393	7.5 ~7.8	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
423	土師器	皿	墓393	7.5	1.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
424	土師器	皿	墓393	7.5	1.2		5YR8/3	雲母	乙訓在地形
425	土師器	皿	墓393	7.4 ~7.6	1.3		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
426	土師器	皿	墓393	7.8	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
427	土師器	皿	墓393	7.2 ~7.4	1.1		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
428	土師器	皿	墓393	7.0 ~7.6	1.2		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
429	土師器	皿	墓393	7.2	1.0		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
430	土師器	皿	墓393	7.2	1.1		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
431	土師器	皿	墓393	7.4	1.2		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
432	土師器	皿	墓393	7.4	1.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
433	土師器	皿	墓393	7.5	1.2		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
434	土師器	皿	墓393	9.5	1.5		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
435	土師器	皿	墓393	9.6	1.6		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
436	土師器	皿	墓393	9.6	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
437	土師器	皿	墓393	9.6	1.8		7.5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
438	土師器	皿	墓393	9.3	1.9		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
439	土師器	皿	墓393	9.7	2.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
440	土師器	皿	墓393	9.7	1.7		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
441	土師器	皿	墓393	9.7	1.9		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
442	土師器	皿	墓393	9.9	1.6		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
443	土師器	皿	墓393	9.9 ~10.2	1.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
444	土師器	皿	墓393	10.0 ~10.2	1.8		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
445	土師器	皿N	墓393	7.2	1.6		5YR7/3	雲母、赤色粒	
446	土師器	皿N	墓393	7.4	1.5		5YR7/4	赤色粒	
447	土師器	皿N	墓393	7.4	1.3		5YR7/3	雲母、赤色粒	
448	土師器	皿N	墓393	7.4	1.6		5YR7/3	赤色粒	
449	土師器	皿N	墓393	7.4	1.4		5YR7/3	雲母、赤色粒	
450	土師器	皿N	墓393	7.5	1.6		5YR7/4	赤色粒	
451	土師器	皿N	墓393	7.6	1.4		5YR8/3	雲母、赤色粒	
452	土師器	皿N	墓393	9.8	2.0		5YR7/4	φ~1mmの長石、石英、 雲母、赤色粒	
453	土師器	皿Sh	墓393	6.8	2.0		7.5YR8/2		
454	土師器	皿Sh	墓393	6.5	1.9		7.5YR8/3		
455	土師器	皿Sh	墓393	6.7	1.7		5YR8/4		
456	土師器	皿Sh	墓393	6.8 ~7.0	2.0		7.5YR8/2	φ~1mmの長石	
457	土師器	皿Sh	墓393	6.4	1.8		10YR8/1		
458	土師器	皿S	墓393	11.0	3.3		10YR8/1	赤色粒	
459	土師器	皿S	墓393	10.8	2.8		5YR8/3	雲母、赤色粒	
460	土師器	皿S	墓393	11.5	3.2		5YR8/3	雲母、赤色粒	
461	土師器	皿S	墓393	11.1	3.0		5YR8/3	雲母、赤色粒	
462	土師器	皿S	墓393	11.6	3.0		5YR8/3	雲母、赤色粒	
463	土師器	皿S	墓393	11.5	3.0		7.5YR8/4	φ2mmの長石、石英、 赤色粒	
464	土師器	皿S	墓393	11.4	3.1		5YR8/3	φ~1mmのチャート、石英	
465	土師器	皿S	墓393	11.8	3.0		7.5YR8/3	φ~2mmの長石	
466	土師器	皿S	墓393	13.8	3.4		7.5YR7/4	φ~1mmの長石、赤色粒	
467	瓦器	椀	墓393		(1.8)		N4/0		系統不明 無高台 暗文ジグザグ状
468	須恵器	片口鉢	墓393	24.0	9.0	8.1	10Y5/1	長石、石英	東播系
469	土師器	皿	墓402	7.3	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
470	土師器	皿	墓402	7.4	1.2		10YR8/2	雲母	乙訓在地形
471	土師器	皿	墓402	7.4	1.3		7.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
472	土師器	皿	墓402	7.4	1.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
473	土師器	皿	墓402	7.2 ~7.7	1.3		5YR7/6	雲母	乙訓在地形
474	土師器	皿	墓402	7.5	1.0		2.5YR7/4	雲母	乙訓在地形
475	土師器	皿	墓402	7.5	1.1		5YR7/4 ~10YR8/1	雲母	乙訓在地形
476	土師器	皿	墓402	7.6	1.0		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
477	土師器	皿	墓402	7.6	1.2		2.5YR6/6	雲母	乙訓在地形
478	土師器	皿	墓402	7.6	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
479	土師器	皿	墓402	7.6	1.2		2.5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
480	土師器	皿	墓402	7.7	1.1		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
481	土師器	皿	墓402	7.7	1.1		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
482	土師器	皿	墓402	7.7	1.2		10YR8/1	雲母、赤色粒	乙訓在地形
483	土師器	皿	墓402	7.8	1.2		7.5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
484	土師器	皿	墓402	7.8	1.3		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
485	土師器	皿	墓402	9.6	2.0		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
486	土師器	皿	墓402	9.7	1.8		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
487	土師器	皿	墓402	10.0	1.9		5YR8/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
488	土師器	皿	墓402	9.7	1.8		5YR8/4	赤色粒	乙訓在地形
489	土師器	皿	墓402	10.0	1.7		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
490	土師器	皿	墓402	10.1	1.8		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
491	土師器	皿	墓402	10.1	1.7		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
492	土師器	皿	墓402	10.2	1.8		5YR8/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
493	土師器	皿	墓402	10.3	2.1		7.5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
494	土師器	皿N	墓402	7.6	1.6		5YR7/6	赤色粒	
495	土師器	皿N	墓402	7.6	1.5		5YR7/6	赤色粒	
496	土師器	皿N	墓402	7.6	1.6		5YR7/6	赤色粒	
497	土師器	皿N	墓402	7.6	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	
498	土師器	皿N	墓402	9.7	1.9		10YR8/2 ~2.5YR7/4	φ~1mmの長石、石英	
499	土師器	皿N	墓402	10.1	1.9		5YR8/4	φ~1mmの長石、赤色粒	
500	土師器	皿N	墓402	10.2	10.2		5YR7/6	赤色粒	
501	土師器	皿N	墓402	10.2	10.2		5YR7/4	赤色粒	
502	土師器	皿Sh	墓402	7.0	1.9		5YR8/3		
503	土師器	皿Sh	墓402	6.4	2.2		10YR8/1		
504	土師器	皿S	墓402	6.6	1.9		5YR8/2		
505	土師器	皿S	墓402	11.1	3.1		7.5YR8/4	赤色粒	
506	土師器	皿S	墓402	11.6	3.2		5YR8/4	赤色粒	
507	土師器	皿S	墓402	11.7	3.3		7.5YR8/2	赤色粒	
508	土師器	皿S	墓402	11.2	3.2		7.5YR8/2		
509	土師器	皿S	墓402	11.4	2.9		5YR8/2		
510	土師器	皿S	墓402	11.4	3.1		7.5YR8/3		

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
511	土師器	皿S	墓402	11.3	3.4		7.5YR8/2		
512	土師器	皿S	墓402	11.6	2.9		5YR8/3		
513	土師器	皿S	墓402	13.0	3.2		7.5YR8/3		
514	土師器	皿S	墓402	14.0	3.3		7.5YR8/2		
515	瓦器	椀	墓402	11.6 ~11.9	4.1		N3/0		系統不明 無高台 暗文ジグザグ状
516	土師器	皿	柱穴155	6.8	1.4		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
517	土師器	皿	柱穴155	6.8 ~7.3	1.5		5YR7/6	φ~1mmの長石、赤色粒	乙訓在地形
518	土師器	皿	柱穴155	7.1	1.3		5YR7/6	φ~1mmのチャート、長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
519	土師器	皿	柱穴155	7.0 ~7.2	1.4		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
520	土師器	皿	柱穴155	7.2	1.4		5YR7/6	φ~1mmのチャート、長石、赤色粒	乙訓在地形
521	土師器	皿	柱穴155	6.9 ~7.2	1.4		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
522	土師器	皿	柱穴155	6.8 ~7.0	1.4		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
523	土師器	皿	柱穴155	7.0	1.3		5YR7/6	φ~1mmの長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
524	土師器	皿	柱穴155	7.2	1.6		5YR7/4	φ~1mmのチャート、長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
525	土師器	皿	柱穴155	7.2	1.4		5YR7/4	φ~1mmのチャート、雲母、赤色粒	乙訓在地形
526	土師器	皿	柱穴155	6.8	1.4		5YR7/6	赤色粒	乙訓在地形
527	土師器	皿	柱穴155	6.8 ~7.0	1.6		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
528	土師器	皿	柱穴155	7.1	1.5		5YR7/4	雲母、赤色粒	乙訓在地形
529	土師器	皿	柱穴155	7.0 ~7.2	1.4		5YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
530	土師器	皿	柱穴155	7.2	1.5		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
531	土師器	皿	柱穴155	10.2 ~10.5	2.2		5YR7/4	φ~1mmの長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
532	土師器	皿	柱穴155	10.5	2.1		5YR7.6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
533	土師器	皿	柱穴155	10.3 ~10.6	2.2		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
534	土師器	皿	柱穴155	10.7	2.1		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
535	土師器	皿	柱穴155	10.7 ~11.0	2.2		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
536	土師器	皿	柱穴155	10.5	2.0		5YR7/6	雲母、赤色粒	乙訓在地形
537	土師器	皿	柱穴155	10.6	2.2		5YR7/6	φ~1mmのチャート、雲母、赤色粒	乙訓在地形
538	土師器	皿	柱穴155	10.8	2.3		5YR7/6	φ~2mmのチャート、長石、雲母、赤色粒	乙訓在地形
539	土師器	皿	柱穴155	10.9	2.3		5YR7/6	φ~1mmのチャート、雲母、赤色粒	乙訓在地形
540	土師器	皿	柱穴155	11.2	2.4		5YR7/6	φ~1mmのチャート、雲母、赤色粒	乙訓在地形
541	土師器	皿	柱穴155	15.2	2.5		5YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
542	瓦器	羽釜	柱穴155	18.0	(3.8)		N4/0		混入か
543	土師器	皿	溝331	6.0	1.5		5YR8/3	赤色粒	乙訓在地形
544	土師器	皿	溝331	7.0	1.4		5YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
545	土師器	皿	溝331	7.0	1.4		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
546	土師器	皿	溝331	13.8	3.0		7.5YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
547	土師器	皿S	溝331	15.0	2.7		7.5YR8/2	赤色粒	
548	土師器	皿S	溝331	15.4	2.3		2.5Y7/2	φ~1mmの長石、雲母、赤色粒	
549	土師器	皿S	溝331	15.6	2.6		2.5Y7/1	φ~1mmの長石、雲母、赤色粒	
550	土師器	皿S	溝331	15.6	2.3		10YR8/2	雲母、赤色粒	
551	瓦器	火鉢	溝331		(7.8)		N4/0		
552	瓦器	火鉢	溝331		(4.9)		内N5/0 外2.5Y8/1		
553	瓦器	火鉢	溝331	40.8	16.3		N4/0		
554	施釉陶器	花瓶	溝331	4.2	9.3	4.4	胎2.5Y8/1 釉5Y8/2		瀬戸美濃系
555	土師器	皿	溝255	6.6	1.3		10YR8/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
556	土師器	皿	溝255	6.7	1.4		10YR8/2	雲母	乙訓在地形
557	土師器	皿	溝255	9.8	2.1		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
558	土師器	皿S	溝255	9.7	1.9		10YR6/2 ~2.5Y6/3		
559	瓦器	火鉢	溝255	22.8	(8.3)		2.5Y4/1		
560	施釉陶器	天目椀	溝255	10.8	(4.3)		釉10YR2/2		瀬戸美濃系(大窯)
561	施釉陶器	皿	溝255	10.6	2.2	6.0	胎7.5YR7/4 釉5Y6/4		瀬戸美濃系(大窯)
562	焼締陶器	播鉢	溝256		(7.9)		10YR8/2		信楽産
563	土師器	皿S	溝50	10.6	1.8		10YR8/2		
564	土師器	皿S	溝50	11.0	1.9		2.5Y8/2		溝30からの混入か
565	土師器	羽釜	溝50	21.4	(16.0)		10YR8/2		
566	土師器	焙烙	溝50	28.8	(5.4)		7.5YR7/4	φ~1mmの長石、雲母	
567	瓦器	羽釜	溝50	27.4	(8.1)		内7.5Y6/1 外N5/0	φ~1mmのチャート、長石	
568	瓦器	羽釜	溝50	28.2	21.2	21.0	N5/0	φ~1mmのチャート、長石、石英	溝30からの混入か
569	輸入青磁	椀	溝50	12.0	7.0	7.0	胎N8/0 釉2.5GY8/1		産地不明
570	土師器	皿	溝97	7.3	1.5		5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
571	土師器	皿	溝97	8.0	1.1		7.5YR7/3	雲母、赤色粒	乙訓在地形
572	土師器	皿	溝96	7.2	1.4		10YR7/2	雲母、赤色粒	乙訓在地形
573	土師器	皿Sb	溝96	9.0	1.8		10YR8/2		
574	土師器	皿Sb	溝96	9.6	(1.7)		10YR8/2		
575	土師器	皿N	溝230	5.6	1.4		10YR8/3	雲母	
576	土師器	皿N	溝230	7.0	1.1		7.5YR7/3	雲母	
577	土師器	皿Sb	溝230	9.0	1.9		10YR8/2	φ~1mmの長石	
578	土師器	皿S	溝230	10.8	2.2		5YR7/3	赤色粒	

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	色調	胎土	備考
579	土師器	焙烙	溝230	31.0	(7.2)		7.5YR7/3		
580	瓦器	羽釜	溝230	24.2	(8.2)		N5/0		
581	瓦器	羽釜	溝230	22.4	12.5		N5/0		
582	瓦器	風炉	溝230		(8.0)	26.0	N5/0		
583	瓦器	播鉢	溝230		(8.7)	11.0	内10YR7/2 外N5/0		
584	焼締陶器	壺	溝230	11.2	(9.5)		10YR5/1		備前産
585	焼締陶器	甕	溝230		(8.2)		10YR4/2	φ～3mmのチャート、石英	常滑産
586	施釉陶器	天目椀	溝230	11.2	(4.7)		胎10Y8/2 釉5YR7/1～4/3		瀬戸美濃系(大窯)
587	施釉陶器	皿	溝230	10.2	2.1	5.3	胎2.5Y8/2 釉5Y7/3		瀬戸美濃系(大窯)
588	土師器	皿S	溝19	9.6	1.7		10YR8/2		タール付着
589	土師器	皿S	溝19	11.0	2.0		10YR8/1		タール付着
590	施釉陶器	皿	溝19	12.6	2.4	5.4	胎10YR5/3 釉2.5Y6/1		京・信楽系
591	土師器	皿Sb	墓6	8.4	1.5		7.5YR7/4		
592	土師器	皿S	墓6	9.4	1.7		5YR7/4		
593	土師器	皿S	墓6	9.4	1.6		7.5YR7/4		タール付着
594	土師器	皿S	墓6	9.6	1.7		7.5YR8/4		
595	焼締陶器	播鉢	墓6	35.2	13.0		7.5YR4/6		丹波産？ 混入か

付表2 瓦類一覧表

No.	種類	遺構名	文 様	成形技法等	備 考
瓦1	軒丸瓦	土坑257	左三巴文。頭部・尾部離れる。外区は界線・密な珠文・圏線。	瓦当:裏面ナデ 丸瓦:凸面縦ミガキ、凹面布目	
瓦2	軒丸瓦	Ⅳ層	右三巴文。頭部・尾部離れる。外区は珠文。	瓦当:裏面・側面ナデ	
瓦3	軒平瓦	土坑101	外行唐草文。	瓦当:裏面・側面ナデ 包込み技法	播磨産。 林崎三本松窯に同文(NH-09) ※1
瓦4	軒平瓦	土坑400	外行唐草文。外区は界線。	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ、凹面ケズリ 頸部に凹型台の痕跡 平瓦:凸面縦ケズリ、凹面布目	東福寺に同文 ※2
瓦5	軒平瓦	土坑275	連珠文。外区は界線。	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ 頸部に凹型台の痕跡 平瓦:凸面縦ケズリ、凹面布目	
瓦6	軒棧瓦	攪乱	唐草文。中心文は宝珠。	瓦当:段顎、裏面・側面ナデ 平瓦:凸面・凹面ナデ	
瓦7	鬼瓦	Ⅲ層	外区に珠文。	范型による成形後、ナデ	
瓦8	鬼瓦	Ⅱ層		范型による成形後、ナデ	
瓦9	有孔埴	土坑101		全面ナデ、端面一部ケズリ	煤付着
瓦10	埴	建物363 (柱穴458)		全面ナデ	煤付着
瓦11	丸瓦	溝626		凸面縄叩き後ナデ 凹面布目・吊り紐痕	
瓦12	丸瓦	Ⅵ層		凸面縄叩き後ナデ 凹面布目・吊り紐痕、側縁にケズリ	煤付着
瓦13	平瓦	Ⅴ層		凸面格子目タタキ 凹面布目	
瓦14	刻印瓦	土坑101	平瓦端面に刻印(円形の圏線に+と×)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	
瓦15	刻印瓦	溝340	平瓦端面に刻印(円形の圏線)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	
瓦16	刻印瓦	攪乱	平瓦端面に刻印(円形の圏線)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	
瓦17	刻印瓦	整地401	平瓦端面に刻印(菱形の圏線に×)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	煤付着
瓦18	刻印瓦	土坑466	平瓦端面に刻印。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	煤付着
瓦19	刻印瓦	Ⅵ層	平瓦端面に刻印(円形の圏線に花文)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	煤付着
瓦20	刻印瓦	土坑385	平瓦端面に刻印(円形の圏線に×とIの組み合わせ記号)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	煤付着
瓦21	刻印瓦	整地395	平瓦端面に刻印(円形の圏線に花文)。	凸面ナデ 凹面ナデ、端面ケズリ	煤付着

※1 『林崎三本松瓦窯跡群発掘調査報告書』明石市文化財調査報告6 明石市文化・スポーツ部文化振興課 2017年

※2 『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』大本山東福寺 1990年

付表3 石器・石製品一覧表

()は残存値、長さ・幅・厚さの単位はcm

No.	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	備考
石1	石包丁	V層	(3.3)	(5.6)	0.5	13.8	粘板岩	刃部残存
石2	石鍋	土坑400		口径24.8	器高(6.9)	227	滑石	煤付着
石3	石鍋	土坑101		口径24.8	器高(9.1)	652	滑石	煤付着
石4	砥石	溝230	(7.9)	5.4	2.8	171	砂岩	
石5	石臼	溝255		17.7	(9.4)	2000	深成岩(花崗岩)	
石6	石臼	柱穴214		26.4	9.4	6000	深成岩(花崗岩)	
石7	石臼	柱穴169		(21.1)	14.5	5000	深成岩(花崗岩)	
石8	別石五輪塔	溝230	19.7	14.0		5000	深成岩(花崗岩)	空風輪 正面に梵字
石9	別石五輪塔	溝255	19.7	14.8		5000	深成岩(花崗岩)	空風輪
石10	別石五輪塔	溝230	(22.2)	15.8		7000	深成岩(花崗岩)	空風輪
石11	別石五輪塔	溝217	17.3	11.4		2000	深成岩(花崗岩)	空風輪
石12	一石五輪塔	溝230	(12.1)	(10.7)		2000	深成岩(花崗岩)	空風輪残存
石13	一石五輪塔	溝58	(21.1)	14.4	14.8	5000	深成岩	空風火輪残存

付表4 木製品一覧表

()は残存値、長さ・幅・厚さの単位はcm

No.	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	樹種	備考
木1	刀形	井戸44	(88.7)	4.6	1.2	ヒノキ	掘形出土
木2	卒塔婆形	井戸44	(98.6)	13.0	4.7	ヒノキ	掘形出土
木3	卒塔婆形	井戸44	(92.8)	12.8	6.3	ヒノキ	掘形出土
木4	卒塔婆形	井戸44	(93.5)	(13.4)	3.2	ヒノキ	井戸枠部材(?)
木5	人形	井戸44	(33.4)	3.2	2.4	ヒノキ	井戸枠部材(?) 卒塔婆形可能性
木6	賽子形	溝218	6.9	6.6	7.0	ヒノキ属	

付表5 金属製品一覧表

()は残存値、長さ・幅・厚さの単位はcm

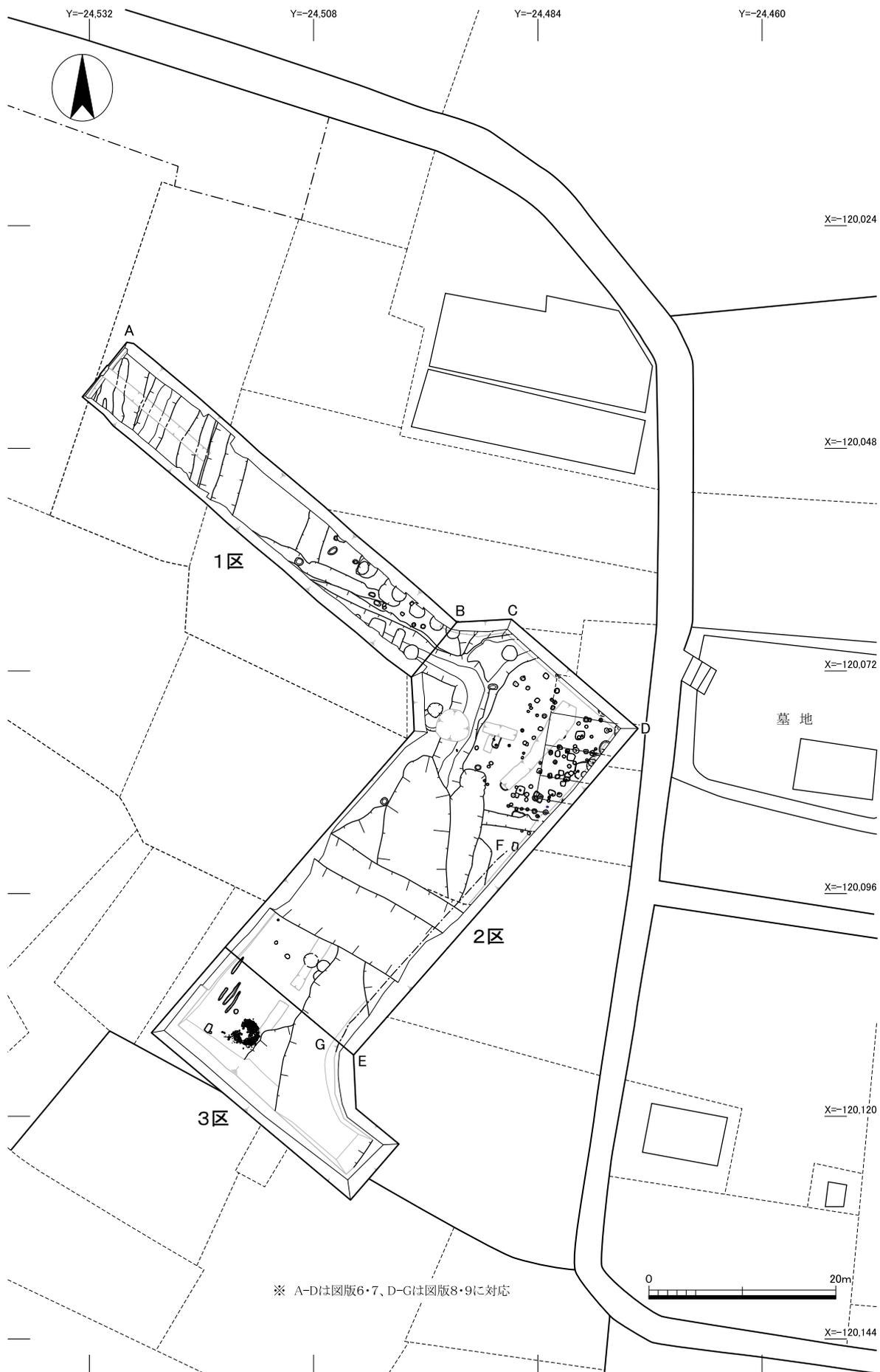
No.	種類	遺構名	長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
金1	刀子	墓555	(25.2)	(2.7)	0.8	37.8	鉄製 平造り
金2	刀子	墓557	(21.1)	2.5	0.7	24.5	鉄製 平造り
金3	兜金	溝230	4.8	3.6	0.2	19.1	銅製

付表6 錢貨一覧表

外径・孔径・厚さの単位はcm

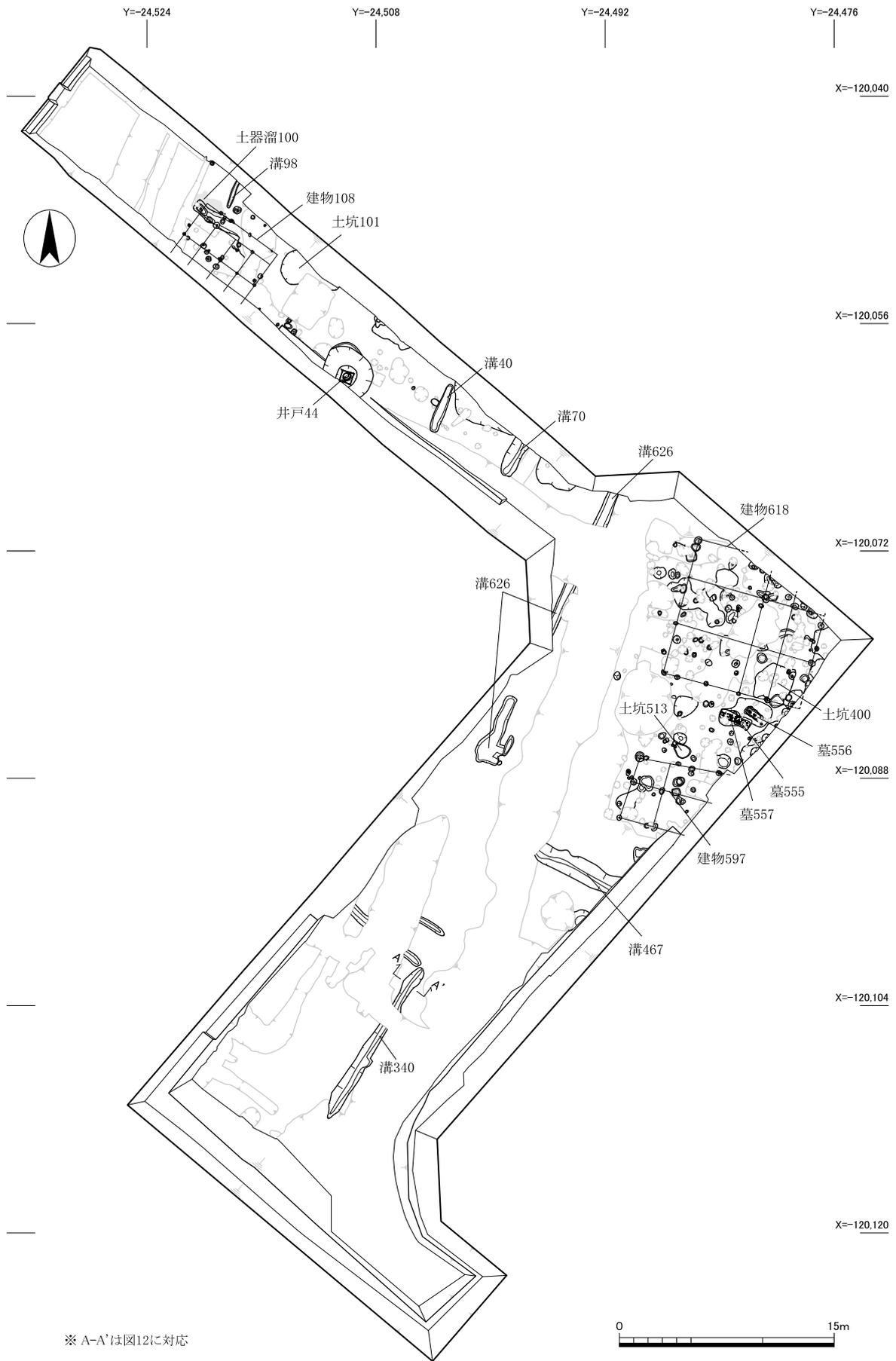
No.	種類	遺構名	外形	孔径	厚さ	重量(g)	初鋳年	備考
錢1	開元通寶	整地399	2.48	0.70	0.13	3.177	621	
錢2	周通元寶	整地399	2.44	0.58	0.14	3.945	955	
錢3	祥符元寶	整地399	2.62	0.56	0.13	2.216	1008	
錢4	熙寧元寶	整地399	2.51	0.70	0.13	2.441	1068	篆書体
錢5	熙寧元寶	整地399	2.38	0.66	0.16	2.681	1068	篆書体
錢6	元豐通寶	整地399	2.46	0.67	0.14	2.775	1078	篆書体
錢7	元豐通寶	整地399	2.46	0.67	0.13	3.503	1078	篆書体
錢8	元祐通寶	整地399	2.43	0.73	0.11	2.475	1086	真書体
錢9	元祐通寶	整地399	2.42	0.64	0.16	3.742	1086	篆書体
錢10	元祐通寶	整地399	2.47	0.55	0.14	3.733	1086	篆書体
錢11	聖宋元寶	整地399	2.40	0.65	0.17	3.902	1101	篆書体
錢12	聖宋元寶	整地399	2.48	0.65	0.14	3.796	1101	真書体
錢13	開元通寶	Ⅶ層	2.50	0.68	0.14	2.554	621	背月
錢14	嘉祐通寶	Ⅶ層	2.17	0.71	0.12	1.193	1056	篆書体
錢15	聖宋元寶	Ⅶ層	2.40	0.66	0.15	3.146	1101	真書体
錢16	大觀通寶	柱穴155	2.52	0.58	0.16	2.890	1107	真書体
錢17	皇宋通寶	Ⅵ層	2.48	0.72	0.12	2.688	1038	篆書体
錢18	熙寧元寶	Ⅵ層	2.34	0.58	0.20	2.889	1068	篆書体
錢19	元祐通寶	Ⅵ層	2.50	0.54	0.13	2.779	1086	真書体
錢20	景德元寶	溝230	2.50	0.56	0.14	2.857	1004	
錢21	淳化元寶	Ⅴ層	2.44	0.58	0.12	2.739	990	行書体
錢22	嘉祐通寶	Ⅴ層	2.49	0.63	0.11	2.718	1056	篆書体
錢23	元祐通寶	Ⅴ層	2.48	0.69	0.14	2.836	1086	真書体
錢24	紹聖元寶	Ⅴ層	2.37	0.72	0.12	2.798	1094	篆書体
錢25	大觀通寶	Ⅴ層	2.48	0.63	0.15	2.610	1107	真書体
錢26	元□□寶	Ⅴ層	2.20	0.64	0.14	2.019		篆書体
錢27	古寬永通寶	溝4	2.42	0.56	0.14	3.159	1636	
錢28	新寬永通寶	土坑12	2.31	0.63	0.12	2.416	1668	
錢29	寬永通寶?	土坑12	2.42	0.48	0.17	2.213	1636	
錢30	新寬永通寶	土坑116	2.42	0.64	0.10	2.039	1668	
錢31	天聖元寶	I～Ⅲ層	2.48	0.62	0.12	2.811	1023	真書体
錢32	治平元寶	I～Ⅲ層	2.78	0.60	0.12	2.274	1064	真書体
錢33	紹聖元寶	I～Ⅲ層	2.42	0.61	0.14	2.912	1094	篆書体
錢34	至和元寶	攪乱坑	2.45	0.78	0.12	2.271	1054	真書体

圖 版



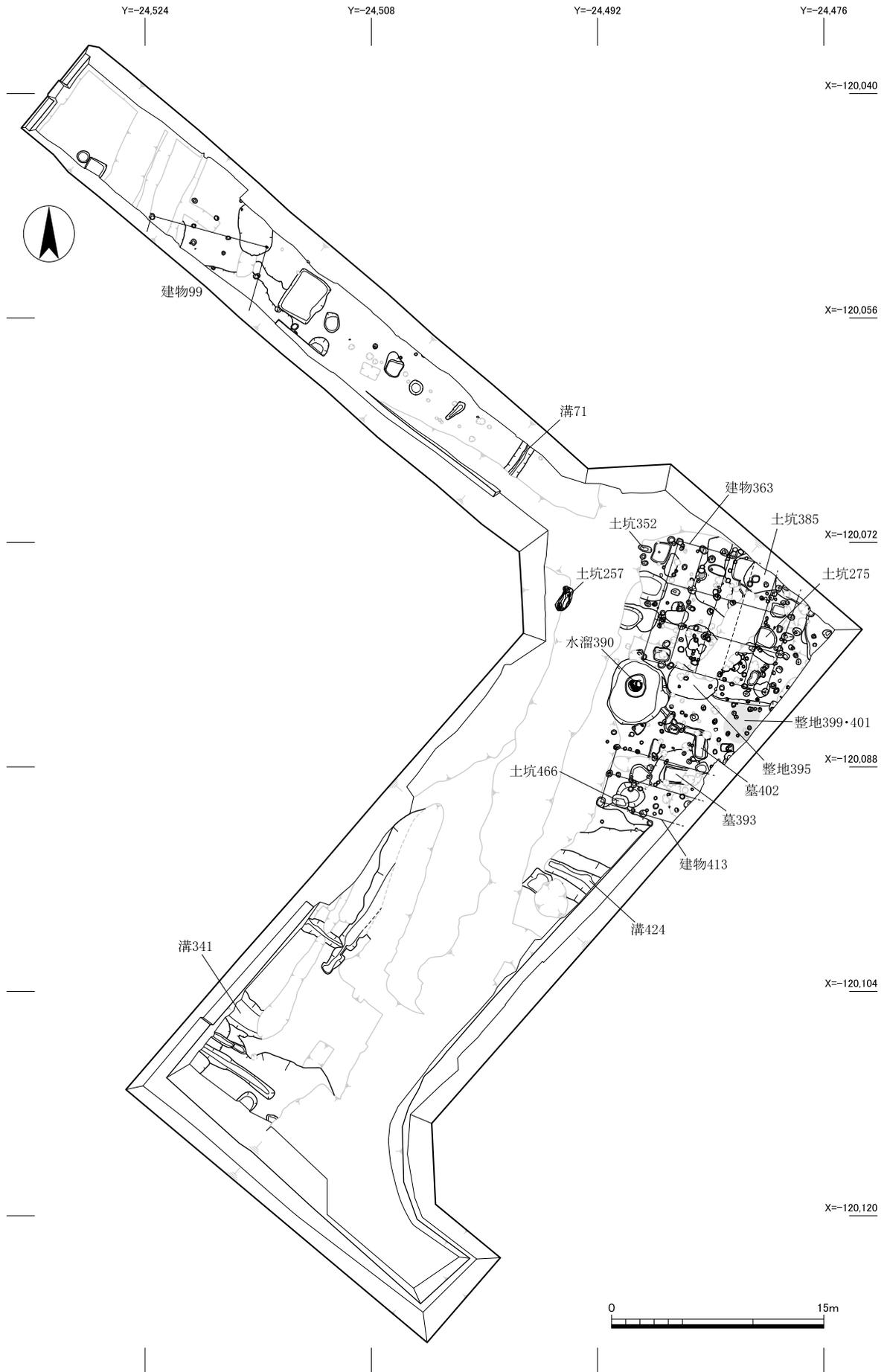
調査区配置図 (1 : 600)

図版2
遺構



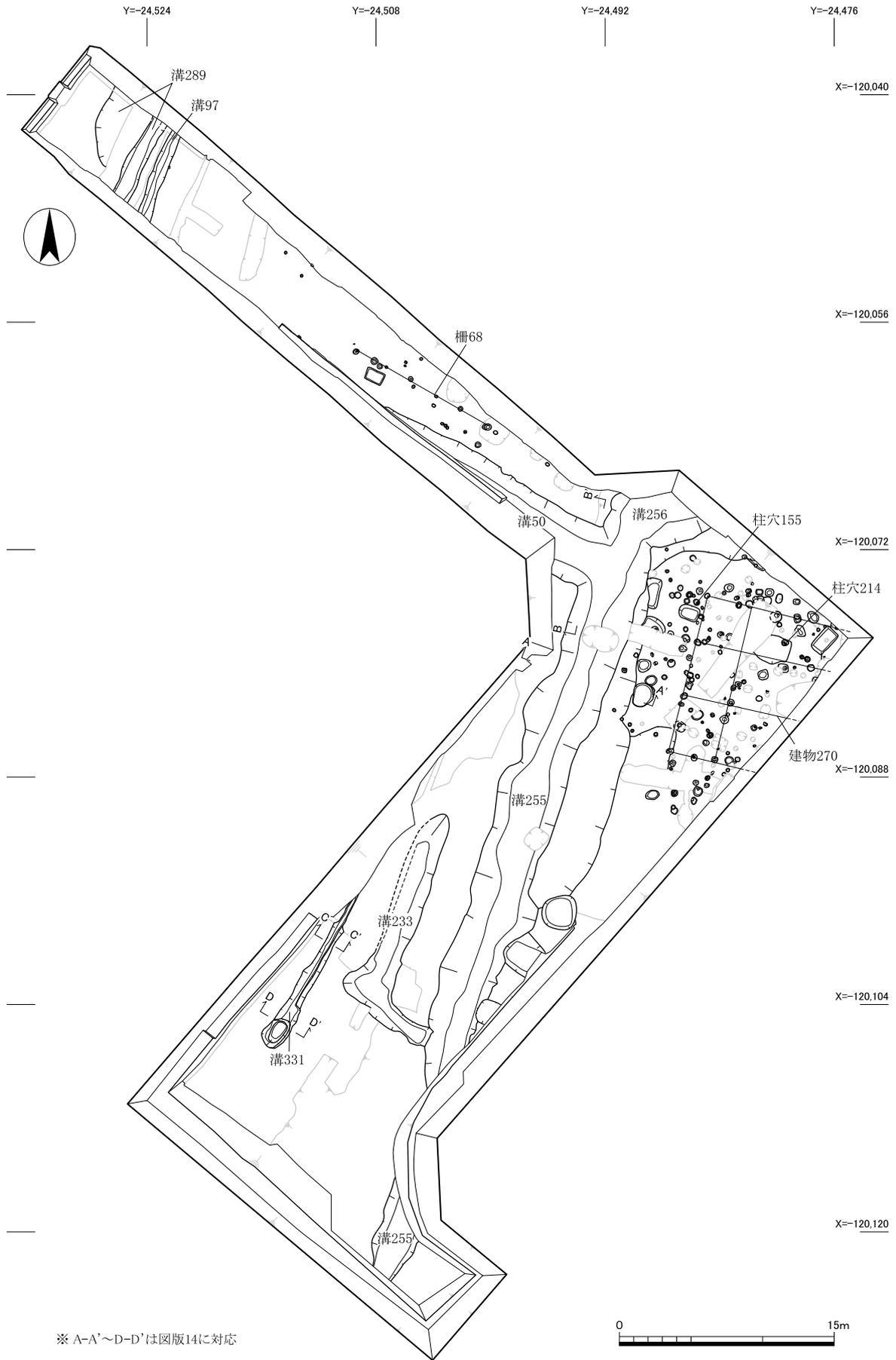
※ A-A'は図12に対応

第4面〔鎌倉時代後半〕平面図（1：400）

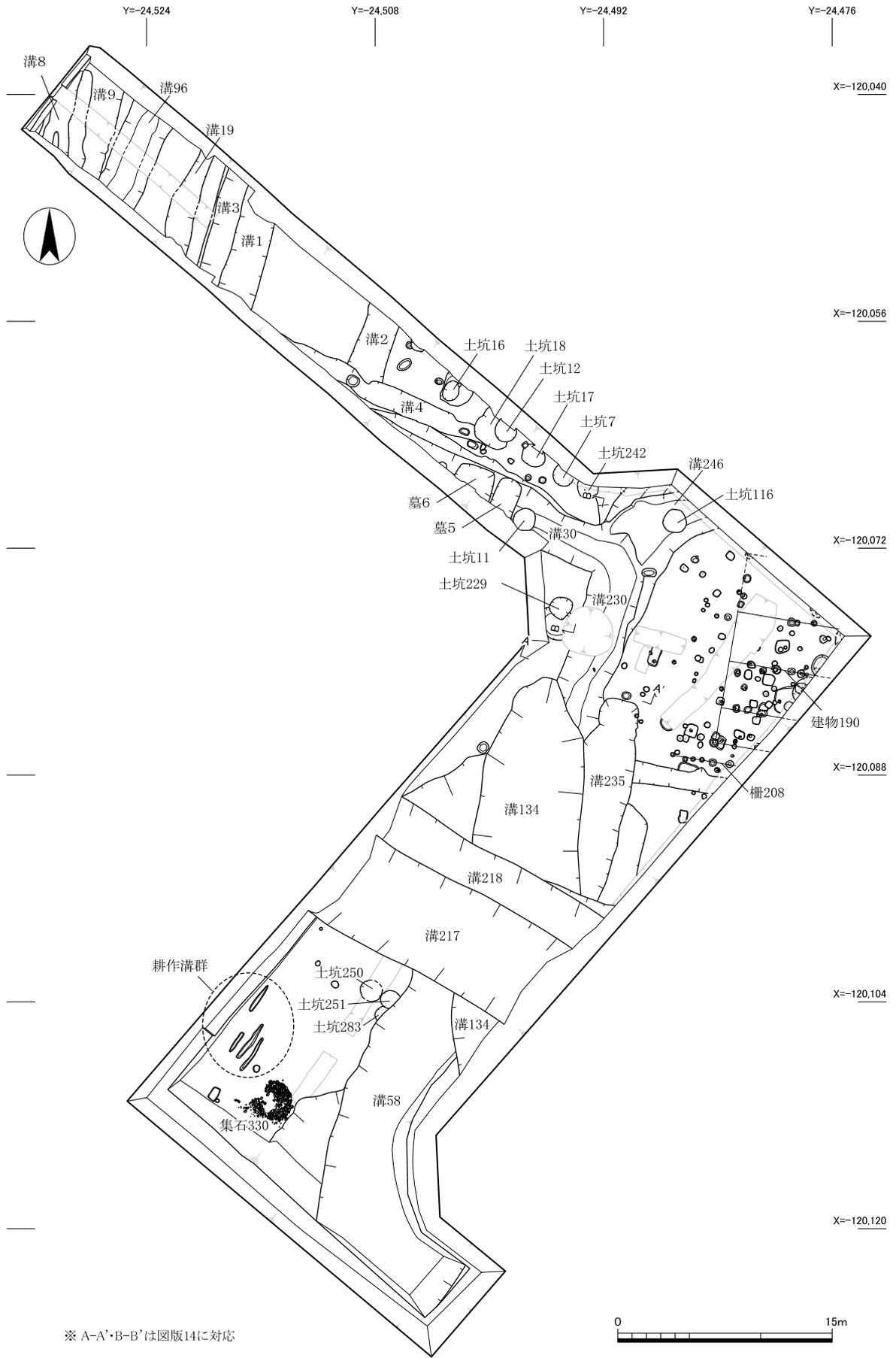


第3面〔鎌倉時代末から室町時代前半〕平面図（1：400）

図版4
遺構

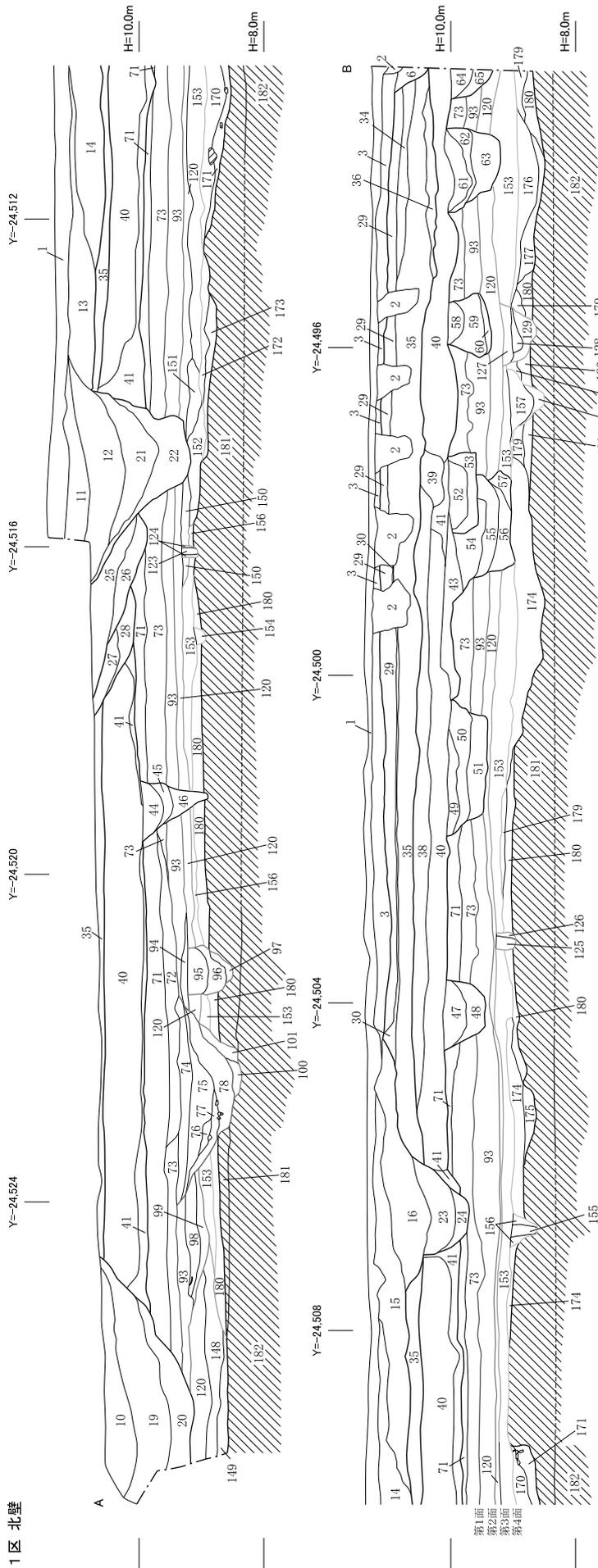


第2面〔室町時代後半〕平面図（1：400）



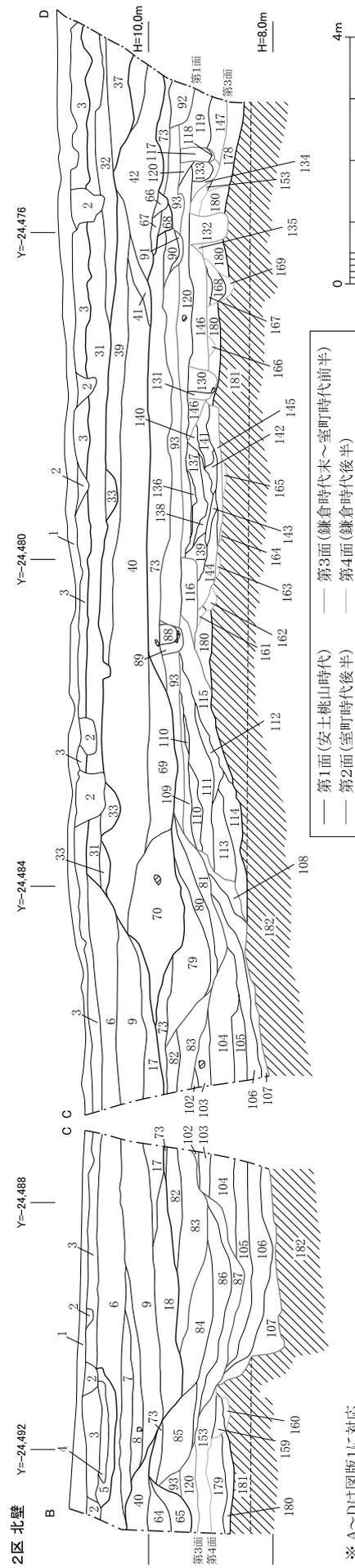
第1面〔安土桃山時代から江戸時代〕平面図（1：400）

1区北壁



調査区北壁断面図1 (1:100)

2区北壁



※ A~Dは図版1に対応

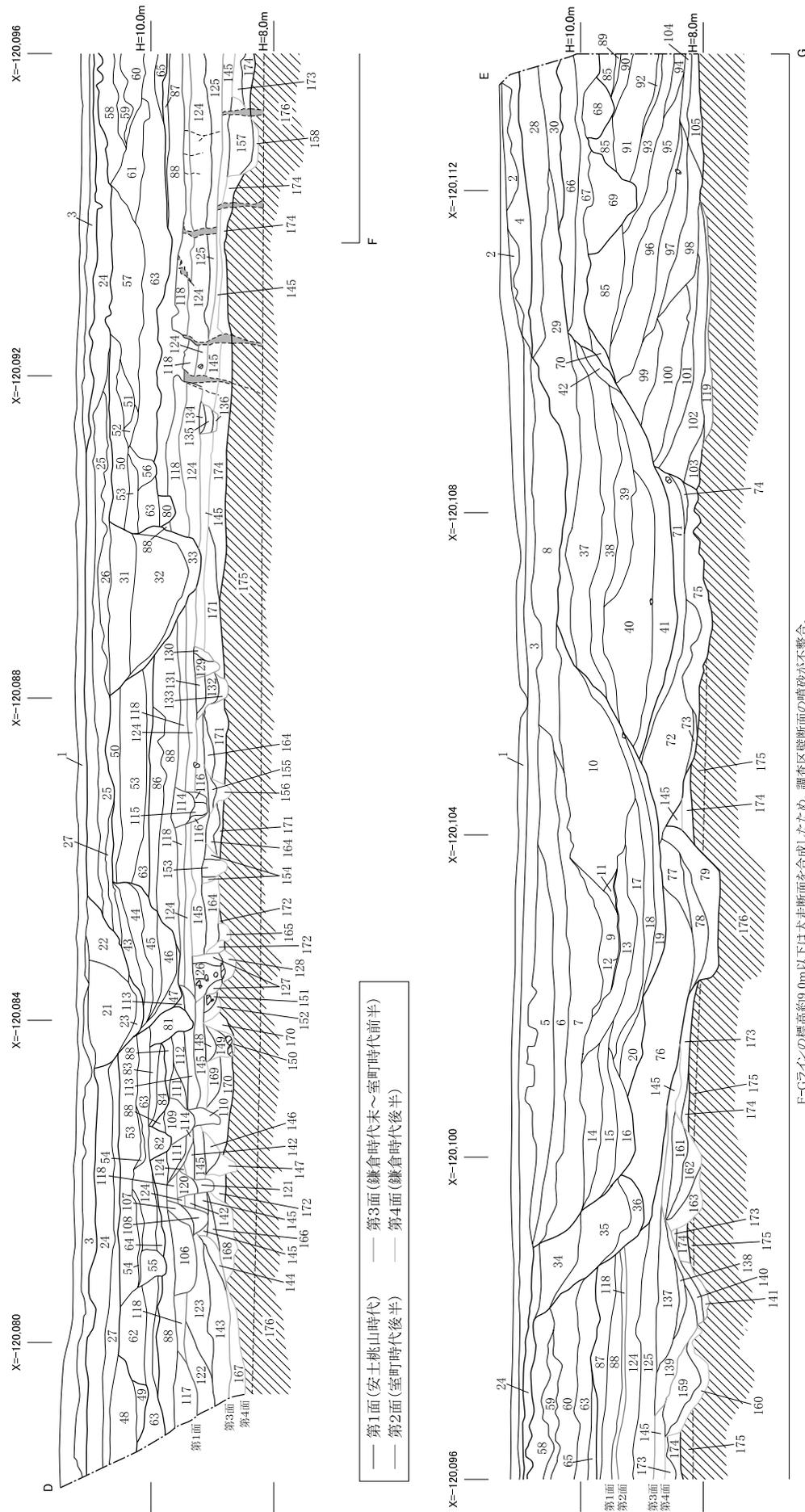
—— 第1面(安土桃山時代) —— 第3面(鎌倉時代末~室町時代前半)
 —— 第2面(室町時代後半) —— 第4面(鎌倉時代後半)

1	10YR3/3 黒褐色 泥砂 粗砂・細砂多量含む(表土・耕作土)	58	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 炭少量含む	121	5Y2/2 オリーブ黒色 砂泥	柱穴
2	2.5Y6/1 黄灰色 砂礫 φ0.5~3cmの礫少量含む	59	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト φ0.5~3cmの礫少量含む	122	5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂	柱穴
3	10YR4/6 褐色 細砂	60	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~3cmの礫少量含む	123	2.5Y4/1 黄灰色 シルト 炭少量含む	柱穴
4	10YR6/2 灰黄褐色 砂泥	61	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 炭少量含む	124	5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥	柱穴
5	10YR8/3 浅黄褐色 漆喰	62	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂礫 φ0.5~1cmの礫少量含む	125	2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 炭少量含む	柱穴
6	7.5YR2/3 暗褐色 泥砂	63	2.5Y4/1 黄灰色 シルト	126	2.5Y4/4 オリーブ褐色 泥砂 炭少量含む	柱穴
7	7.5YR3/2 黒褐色 粗砂 φ0.5~10cmの礫多量含む	64	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 炭少量含む	127	5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥	溝71
8	10YR4/2 灰黄褐色 シルト	65	2.5Y4/1 黄灰色 泥砂 炭少量含む	128	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 細砂含む	
9	10YR4/3 黄褐色 シルト + 7.5YR4/4 褐色 粗砂 φ0.5~10cmの礫多量含むの互層	66	10YR3/4 暗褐色 シルト 炭少量含む	129	5Y3/1 オリーブ黒色 シルト	
10	10YR5/6 黄褐色 粗砂	67	10YR3/3 暗褐色 泥砂 φ0.5~3cmの礫少量含む	130	2.5Y6/3 黄褐色 砂泥	柱穴
11	10YR4/4 褐色 細砂 φ0.5~1cmの礫少量含む	68	10YR4/4 褐色 砂泥 炭少量含む	131	2.5Y6/3 にぶい黄褐色	柱穴
12	10YR4/4 褐色 粗砂 + 5Y4/4 暗オリーブ色 細砂 φ0.5~3cmの礫少量含む	69	10YR5/2 灰黄褐色 砂泥	132	2.5Y4/1 黄灰色 シルト 炭少量含む	柱穴
13	10YR4/4 褐色 粗砂 φ0.5~3cmの礫少量含む	70	7.5YR4/2 灰褐色 砂泥	133	2.5Y4/1 黄灰色 シルト 炭少量含む	柱穴
14	10YR5/6 黄褐色 泥砂 + 2.5Y4/1 黄灰色 砂礫 φ0.5~3cmの礫多量含む	71	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥	134	5Y4/2 灰オリーブ色 シルト	溝71
15	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 + 2.5Y4/1 黄灰色 砂礫 φ0.5~3cmの礫多量含む	72	10YR4/4 褐色 砂泥 φ0.5~2cmの礫少量含む	135	2.5Y6/2 灰黄色 砂泥 10YR5/6 黄褐色 シルト + 建物363電線状蓋土	
16	10YR4/4 褐色 泥砂	73	10YR4/2 暗灰黄色 砂泥 φ6~10cmの礫少量含む	136	2.5Y6/2 灰黄色 砂泥 + 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト	
17	2.5Y4/1 暗オリーブ色 砂泥 φ0.5~1cmの礫少量含む	74	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	137	10YR5/2 灰黄褐色 泥砂 + 10YR5/6 黄褐色 シルト	
18	7.5YR4/3 暗緑灰色 シルト	75	5Y4/1 灰色 シルト φ0.5~1cmの礫少量含む	138	2.5Y6/2 灰黄色 泥砂 + 2.5Y5/1 黄褐色 シルト	
19	10YR4/3 暗緑灰色 シルト	76	7.5YR3/3 暗褐色 粗砂 φ1~5cmの礫含む	139	2.5Y6/2 暗灰黄色 砂泥 + 2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト	
20	2.5YR4/4 オリーブ褐色 シルト φ0.5~5cmの礫少量含む	77	7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ6~10cmの礫少量・炭微少量含む	140	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥	
21	2.5Y4/3 暗灰黄色 砂礫 φ0.5~3cmの礫多量含む	78	7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト 粗砂・φ1~5cmの礫少量・炭微少量含む	141	2.5Y6/2 灰黄色 砂泥 + 5Y6/3 オリーブ黄色 シルト	
22	10YR3/4 暗褐色 シルト + 2.5Y3/1 黒褐色 シルト 細砂がラマナ状に入る有機物多量含む	79	5Y4/1 灰色 シルト	142	2.5Y6/4 黄褐色 砂泥 + 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 焼土・炭含む	
23	10YR4/1 褐灰色 シルト φ2cmの礫少量含む	80	5Y4/1 灰色 砂泥	143	2.5Y6/4 にぶい黄色 砂泥 + 2.5Y5/2 暗灰黄褐色 シルト 焼土・炭含む	
24	10YR5/2 灰黄褐色 砂泥 + 10YR4/1 褐灰色 シルト φ0.5~2cmの礫少量含む	81	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥	144	2.5Y6/3 にぶい黄褐色 砂泥 + 2.5Y5/2 暗灰黄褐色 シルト	
25	10YR5/6 黄褐色 泥砂 + 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂 φ0.5~5cmの礫少量含む	82	7.5Y4/1 灰色 シルト 5Y5/3 灰オリーブ シルト + プロック含む	145	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 φ1~5cmの礫・炭・土器片少量含む	土坑
26	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 φ0.5~5cmの礫少量含む	83	2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト	146	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 φ1~5cmの礫・炭・土器片少量含む	土坑
27	10YR5/4 にぶい黄褐色 泥砂 粗砂多量含む	84	5Y5/2 灰オリーブ色 シルト	147	5Y4/1 暗オリーブ色 泥砂 φ0.5~1cmの礫・炭微少量含む	
28	10YR3/4 暗褐色 粗砂	85	2.5Y5/1 黄褐色 砂泥 φ0.5~1cmの礫含む	148	5Y4/3 暗オリーブ色 泥砂 φ0.5~1cmの礫・炭微少量含む	
29	10YR3/4 暗褐色 粗砂 + 10YR4/4 褐色 シルト	86	5Y5/3 灰オリーブ色 砂泥 φ0.5~1cmの礫含む	149	5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂 粗砂・φ2~10cmの礫・炭少量含む	
30	10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト	87	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~1cmの礫含む	150	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 粗砂・φ2~10cmの礫・炭少量含む	
31	7.5YR4/4 褐色 泥砂 焼土・炭微少量含む	88	10YR3/1 褐灰色 砂泥	151	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 粗砂・φ2~10cmの礫・炭少量含む	
32	7.5YR4/3 褐色 泥砂	89	2.5Y5/2 黄灰色 砂泥	152	5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂少量含む	
33	10YR3/3 暗褐色 砂泥 炭多量含む	90	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 炭少量含む	153	7.5Y3/2 オリーブ黒色 砂泥	
34	10YR3/4 暗褐色 砂泥	91	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 2.5Y5/3 黄褐色 シルト + プロック・炭含む	154	5Y3/1 オリーブ黒色 砂泥	溝98
35	10YR4/4 褐色 砂泥 φ0.5~5cmの礫少量含む	92	2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルト 2.5Y5/3 黄褐色 シルト + プロック・炭含む	155	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 炭・土器片少量含む	柱穴
36	10YR3/4 暗褐色 泥砂 φ0.5~3cmの礫多量含む	93	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 + 2.5Y5/4 黄褐色 砂泥 炭・土器片少量含む	156	2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 粗砂少量含む	
37	10YR3/4 暗褐色 泥砂 + 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂 φ0.5~1cmの礫多量含む	94	5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂 粗砂・φ0.5~1cmの礫少量含む	157	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 細砂・粗砂含む	溝70
38	10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 炭少量含む	95	7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト φ1~3cmの礫・炭少量含む	158	5Y3/1 オリーブ黒色 シルト	
39	2.5Y6/3 にぶい黄褐色 シルト φ0.5~3cmの礫含む	96	10Y3/1 オリーブ黒色 シルト 炭少量含む	159	7.5Y4/1 灰色 シルト	溝626
40	10YR4/4 褐色 砂泥	97	7.5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂 細砂多量含む	160	7.5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂	
41	2.5Y5/3 黄褐色 シルト	98	5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂 炭少量含む	161	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥	柱穴
42	7.5YR6/3 にぶい黄褐色 砂泥 しまり有	99	5Y4/1 灰色 シルト 粗砂・炭少量含む	162	2.5Y4/1 黄灰色 砂泥	柱穴
43	10YR6/3 にぶい黄褐色 砂泥 φ0.5~1cmの礫・炭少量含む	100	7.5Y2/1 黒色 シルト 粗砂・炭少量含む	163	2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂	柱穴
44	2.5Y4/1 黄灰色 シルト 粗砂・φ0.5~2cmの礫・炭少量含む	101	7.5Y4/2 暗灰オリーブ色 泥砂 粗砂・φ0.5cmの礫少量含む	164	2.5Y7/3 浅黄褐色 泥砂 焼土・炭少量含む	柱穴
45	2.5Y3/1 黒褐色 シルト 粗砂がラマナ状に入る	102	5Y4/2 灰オリーブ色 シルト	165	5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂	柱穴
46	2.5Y3/2 黒褐色 シルト 粗砂・炭・有機物少量含む	103	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト	166	2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト + 2.5Y4/4 オリーブ褐色 炭少量含む	柱穴
47	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 φ0.5~5cmの礫少量含む	104	N3/1 暗灰色 シルト	167	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 炭少量含む	柱穴
48	10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 φ0.5~2cmの礫少量含む	105	N4/1 灰色 シルト	168	10YR4/2 黄褐色 砂泥 炭少量含む	柱穴
49	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 炭少量含む	106	7.5Y4/1 灰色 砂泥 φ3~10cmの礫微少量含む	169	2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂	建物618柱穴
50	10YR5/2 灰黄褐色 シルト 炭少量含む	107	2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 粗砂・φ0.5~1cmの礫多量含む	170	2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 粗砂・φ1~10cmの礫・土器片少量含む	土坑101
51	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~2cmの礫・炭含む	108	7.5Y4/1 灰色 砂礫 φ0.5~2cmの礫多量含む	171	5Y4/1 灰色 シルト 細砂・粗砂・φ10cmの礫・炭少量含む	
52	2.5Y5/3 黄褐色 シルト 粗砂・φ0.5~2cmの礫少量含む	109	10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 炭・土器片少量含む	172	5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 粗砂少量含む	
53	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~3cmの礫・炭少量含む	110	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂礫 φ0.5~2cmの礫多量含む	173	2.5Y3/2 黒褐色 シルト 細砂・粗砂・炭少量含む	
54	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~5cmの礫少量含む	111	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 しまり有	174	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂・プロック含む	
55	5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 φ0.5~1cmの礫少量含む	112	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫 φ0.5~2cmの礫多量含む	175	5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂	
56	5Y4/1 灰色 泥砂 φ0.5~1cmの礫・炭少量含む	113	2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 φ0.5~2cmの礫少量含む	176	10YR3/1 オリーブ黒色 泥砂	
57	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~2cmの礫・炭少量含む	114	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~2cmの礫少量含む	177	7.5Y2/1 黒色 シルト	
		115	2.5Y4/1 黄灰色 シルト φ0.5~15cmの礫少量含む	178	2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂	
		116	2.5Y6/4 にぶい黄色 シルト	179	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂泥	
		117	2.5Y3/1 黒褐色 シルト φ1~3cmの礫少量含む	180	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 土器・炭少量含む	
		118	2.5Y3/1 黒褐色 シルト φ1~3cmの礫少量含む	181	5Y3/2 灰オリーブ色 泥砂 + 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト	
		119	2.5Y4/1 黄灰色 シルト 炭少量含む	182	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫	
		120	10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 炭・土器片少量含む			

調査区北壁断面図2 (土層名)

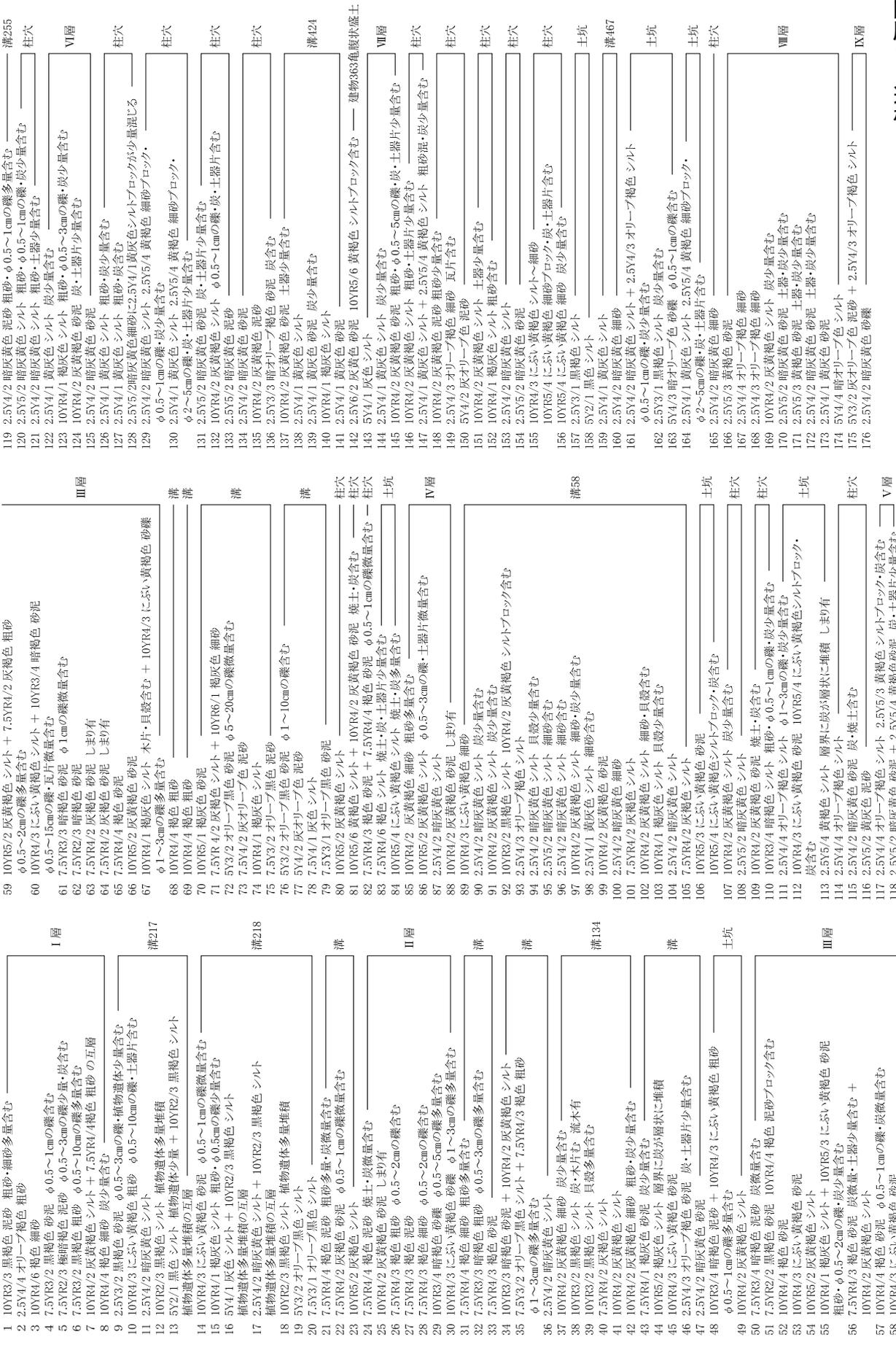
2区 東壁

調査区東壁断面図1 (1:100)



F-Cラインの標高が9.0m以下は大走断面を合成したため、調査区東壁断面の噴砂が不整合。

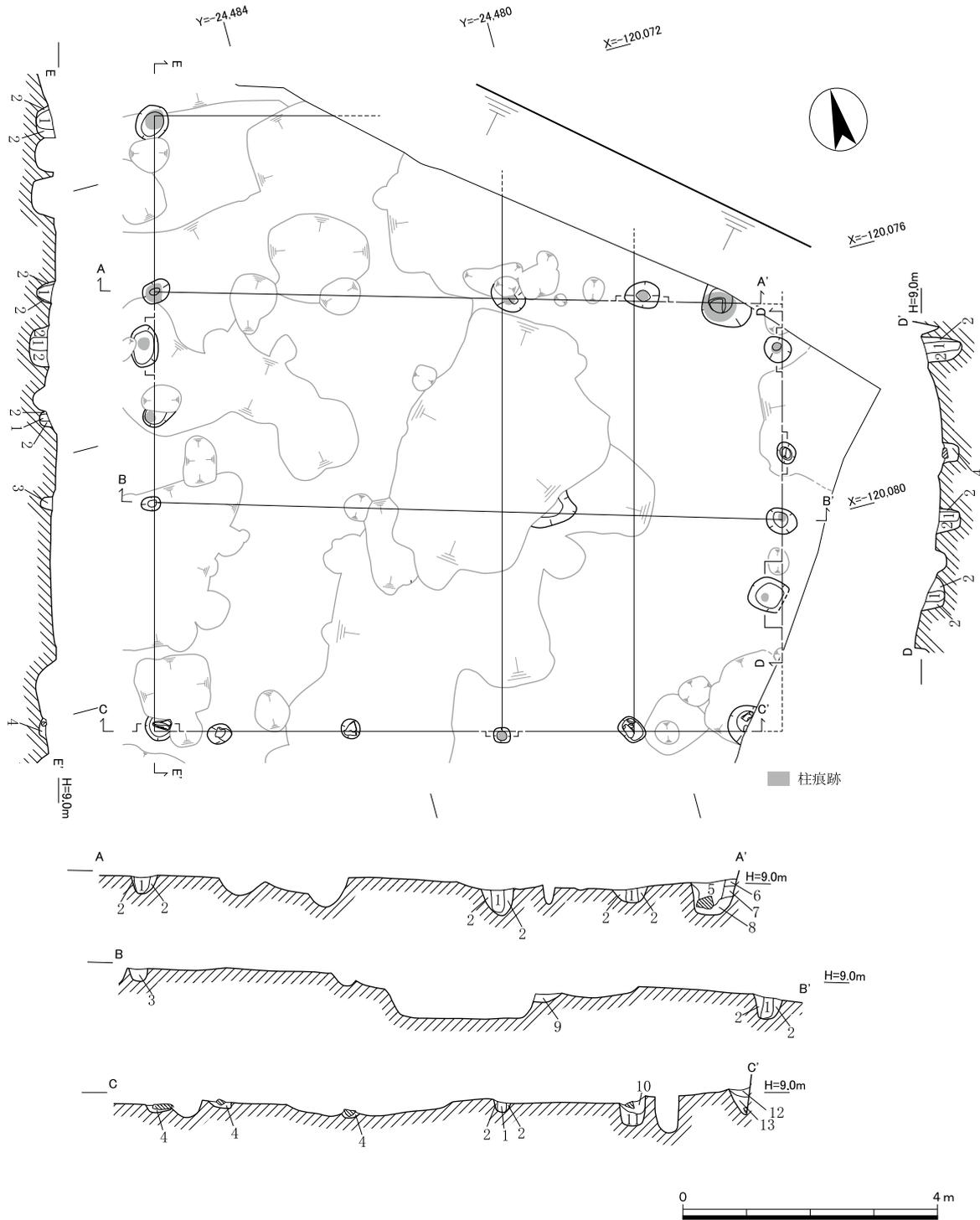
※ D~Gは図版1に対応



調査区東壁断面図2 (土層名)

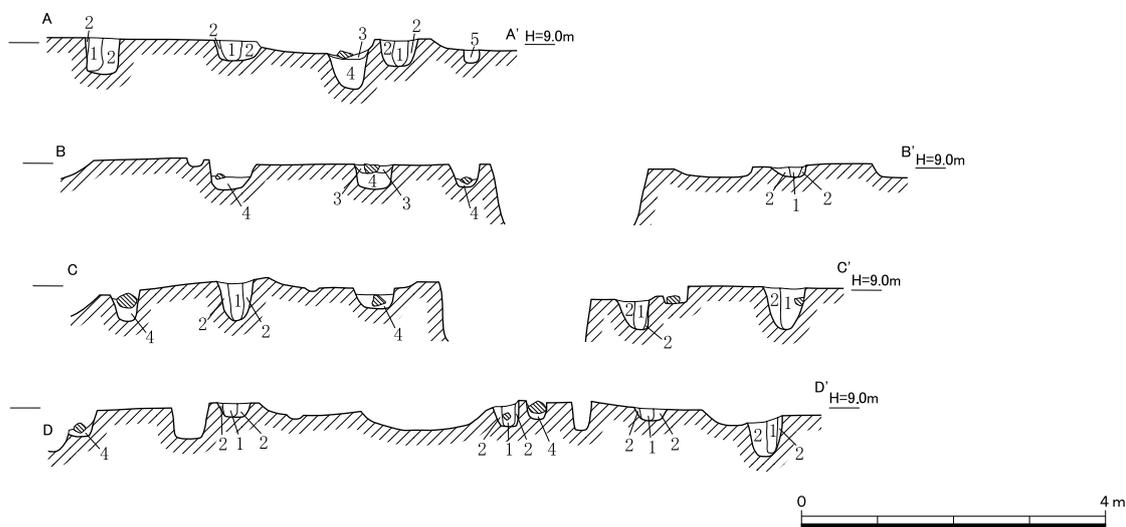
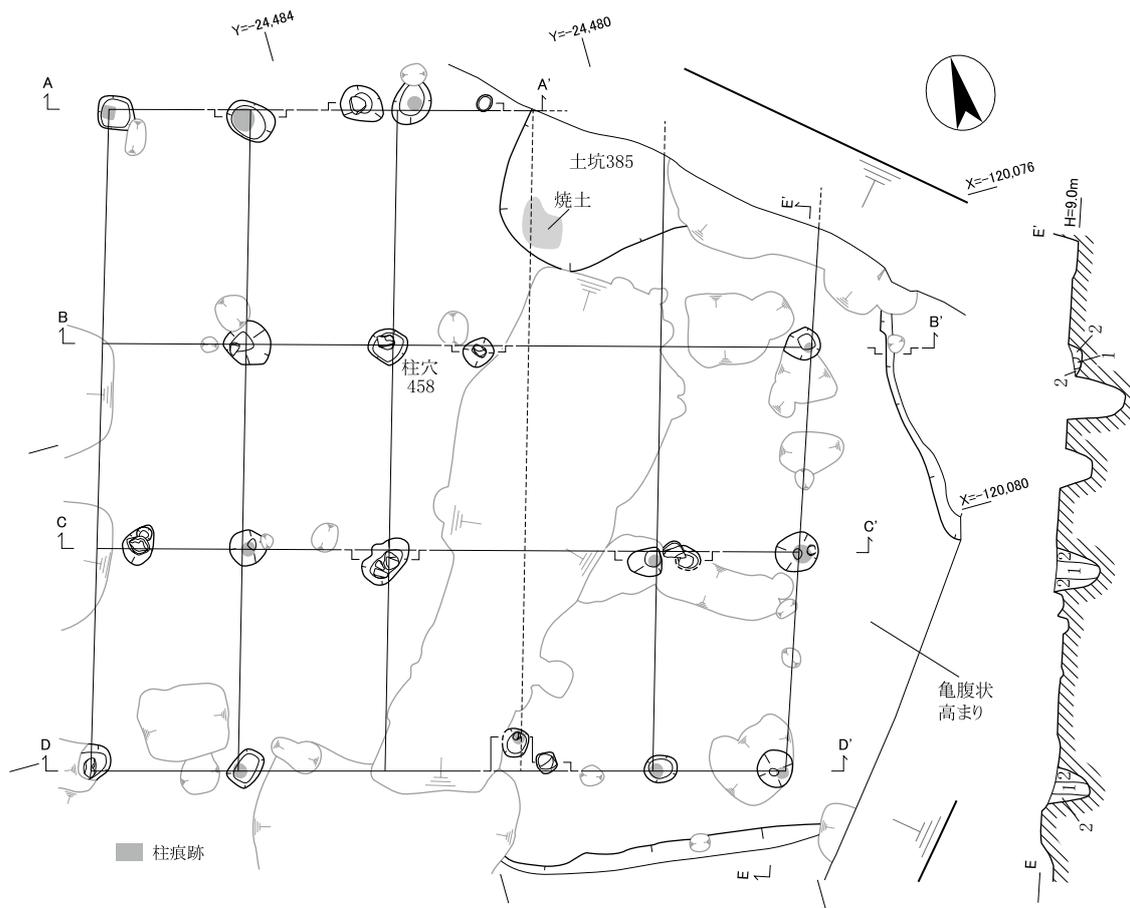
1	10YR3/3 黒褐色 泥砂 粗砂・細砂多量含む	溝255
2	2.5Y4/1 オリーブ褐色 粗砂	柱穴
3	10YR4/4 褐色 細砂	
4	7.5YR3/2 黒褐色 砂泥 φ0.5~1cmの礫含む	
5	7.5YR2/3 暗褐色 泥砂 φ0.5~3cmの礫少量・炭含む	
6	7.5YR3/2 黒褐色 粗砂 φ0.5~10cmの礫多量含む	
7	10YR4/4 褐色 粗砂 炭・土器片少量含む	
8	10YR4/4 褐色 粗砂 炭・土器片少量含む	
9	2.5Y3/2 黒褐色 砂泥 φ0.5~3cmの礫・植物遺体少量含む	
10	10YR4/3 暗褐色 泥砂 φ0.5~10cmの礫・土器片少量含む	
11	2.5Y4/2 暗褐色 泥砂 φ0.5~10cmの礫・土器片少量含む	
12	10YR2/3 黒褐色 シルト 植物遺体多量堆積	
13	5Y2/1 黒色 シルト 植物遺体少量 + 10YR2/3 黒褐色 シルト	
14	10YR4/3 暗褐色 シルト 植物遺体多量堆積	
15	10YR4/1 褐色 泥砂 φ0.5~1cmの礫少量含む	
16	10YR4/2 暗褐色 泥砂 φ0.5~1cmの礫少量含む	
17	2.5Y4/2 暗褐色 シルト φ0.5~2cmの礫含む	
18	10YR2/3 黒褐色 シルト 植物遺体多量堆積	
19	5Y3/2 オリーブ黒色 シルト	
20	7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト	
21	7.5YR4/4 褐色 泥砂 粗砂多量・炭微量含む	
22	7.5YR4/2 褐色 泥砂 φ0.5~2cmの礫含む	
23	10YR4/2 暗褐色 シルト	
24	10YR4/4 褐色 泥砂 炭・炭微量含む	
25	10YR4/2 暗褐色 泥砂 φ0.5~2cmの礫含む	
26	7.5YR4/3 褐色 粗砂	
27	7.5YR4/3 褐色 泥砂	
28	7.5YR4/3 褐色 粗砂 φ0.5~2cmの礫含む	
29	10YR3/4 暗褐色 砂泥 φ0.5~5cmの礫多量含む	
30	10YR4/3 暗褐色 砂泥 φ1~3cmの礫多量含む	
31	7.5YR4/4 褐色 粗砂 粗砂多量含む	
32	7.5YR3/3 暗褐色 粗砂 φ0.5~3cmの礫多量含む	
33	7.5YR4/3 褐色 砂泥	
34	10YR3/3 暗褐色 泥砂 + 10YR4/2 暗褐色 シルト	
35	7.5Y3/2 オリーブ黒色 シルト + 7.5YR4/3 褐色 粗砂 φ1~3cmの礫多量含む	
36	2.5Y4/2 暗褐色 泥砂	
37	10YR4/2 暗褐色 泥砂 炭少量含む	
38	10YR3/2 黒褐色 シルト 炭・木片む 流木有	
39	10YR3/2 黒褐色 シルト 貝殻多量含む	
40	7.5YR4/2 暗褐色 シルト	
41	10YR4/2 暗褐色 泥砂 粗砂・炭少量含む	
42	10YR4/2 暗褐色 泥砂 炭少量含む	
43	7.5YR4/1 褐色 泥砂 炭少量含む	
44	10YR5/2 暗褐色 シルト 層界に炭が層状に堆積	
45	10YR4/3 暗褐色 泥砂 炭・土器片少量含む	
46	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥	
47	2.5Y4/2 暗褐色 泥砂	
48	10YR3/4 暗褐色 泥砂 + 10YR4/3 暗褐色 粗砂 φ0.5~1cmの礫多量含む	
49	10YR4/2 暗褐色 シルト	
50	7.5YR3/4 暗褐色 泥砂 炭微量含む	
51	7.5YR2/2 暗褐色 泥砂 10YR4/4 褐色 泥砂ブロック含む	
52	10YR4/4 褐色 泥砂	
53	10YR4/3 暗褐色 泥砂	
54	10YR5/2 暗褐色 シルト	
55	10YR4/1 褐色 シルト + 10YR5/3 暗褐色 泥砂 粗砂・炭少量含む	
56	7.5YR4/3 褐色 泥砂 炭微量・土器片少量含む + 10YR4/2 暗褐色 シルト	
57	10YR4/4 褐色 泥砂 φ0.5~1cmの礫・炭微量含む	
58	10YR4/3 暗褐色 泥砂	

図版 10
遺構

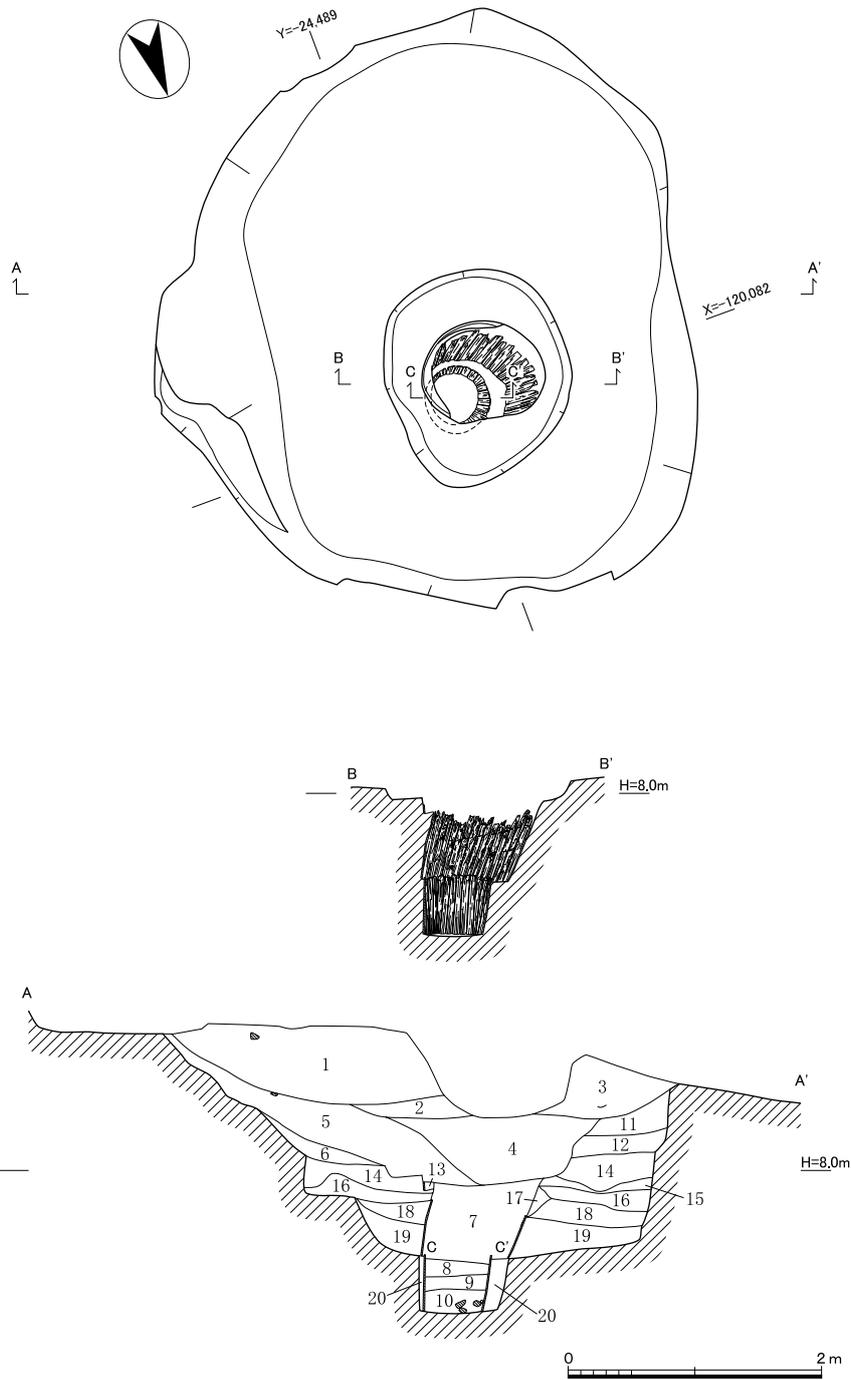


- | | |
|---------------------------|--|
| 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト | 8 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂 |
| 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 | 9 5Y4/2 灰オリーブ色 砂泥 炭少量含む |
| 3 2.5Y5/3 黄褐色 泥砂 | 10 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 + 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト含む |
| 4 5Y5/2 灰オリーブ色 泥砂 | 11 5Y4/2 灰オリーブ色 泥砂 |
| 5 2.5Y5/1 黄灰色 シルト | 12 10YR4/2 灰黄褐色 泥砂 粗砂少量含む |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 炭少量含む | 13 2.5Y4/3 オリーブ褐色 細砂 瓦片含む |
| 7 10YR4/2 黄褐色 砂泥 炭少量含む | |

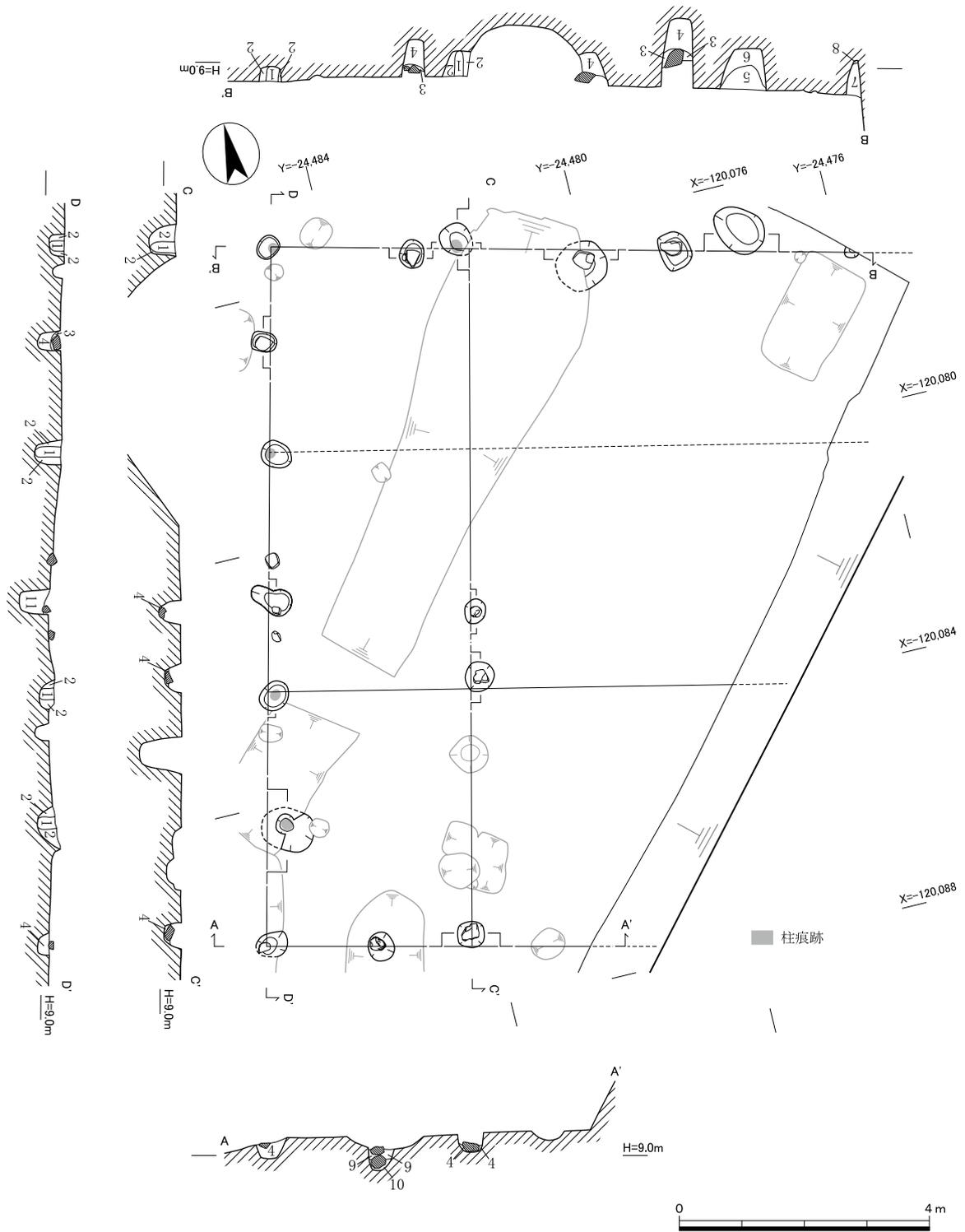
建物618実測図 (1 : 100)



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
- 3 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色 泥砂
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥



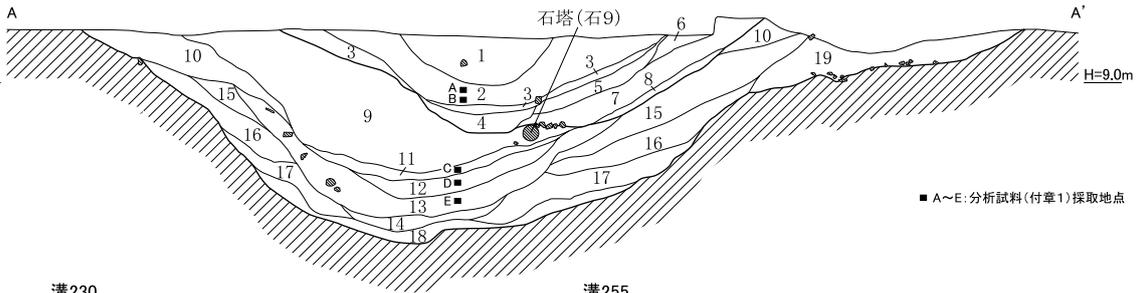
- | | |
|---|--|
| 1 5Y5/1 灰色 砂泥 2.5Y5/3 黄褐色 シルトブロック含む | 12 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト + 10YR5/6 黄褐色 シルト |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥
10YR5/4 にぶい黄褐色 シルトブロック含む | 13 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂 |
| 3 2.5Y4/1 黄褐色 砂泥 | 14 2.5Y4/3 オリーブ褐色 泥砂
+ 10YR4/6 褐色 粗砂 φ0.5~1cmの礫少量含む |
| 4 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 酸化鉄含む | 15 10YR4/4 褐色 粗砂 φ0.5~1cmの礫含む |
| 5 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥
2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルトブロック含む | 16 10YR4/4 褐色 粗砂
7.5YR4/4 褐色 シルトブロック・φ0.5~1cmの礫含む |
| 6 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 | 17 2.5Y3/2 黒褐色 砂泥 + 10YR4/4 褐色 粗砂 |
| 7 5Y4/1 灰色 砂泥 | 18 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粗砂
2.5Y4/1 黄灰色 シルトブロック含む |
| 8 5Y4/2 灰オリーブ色 細砂 粗砂含む | 19 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂 φ0.5~1cmの礫含む |
| 9 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂 + 7.5YR4/4 褐色 粗砂 | 20 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 |
| 10 10YR3/3 暗褐色 粗砂 φ1~10cmの礫含む | |
| 11 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト | |



- | | |
|-------------------|---------------------------------|
| 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト | 7 2.5Y3/1 黒褐色シルト φ1~3cmの礫・炭少量含む |
| 2 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 | 8 2.5Y5/1 黄灰色シルト |
| 3 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト |
| 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 10 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥 |
| 5 2.5Y5/1 黄灰色シルト | 11 5Y5/3 灰オリーブ色砂泥 |
| 6 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 | |

建物270実測図 (1 : 100)

溝230・255東西セクション



溝230

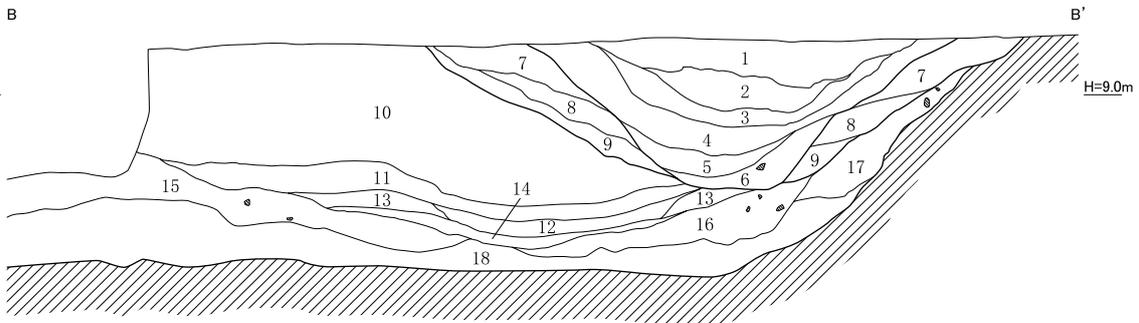
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト + 2.5Y7/2 灰黄色 シルト
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト φ5~8cmの礫・貝殻微量含む
- 3 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥 φ1~3cmの礫微量含む
- 4 5Y4/1 灰色 シルト 貝殻多量含む
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
- 7 5Y5/2 灰オリーブ色 砂泥 φ2~10cmの礫微量含む
- 8 5Y4/1 灰色 シルト

溝255

- 9 7.5Y4/1 灰色 泥砂 φ1~3cmの礫多量含む しまり有
- 10 7.5Y4/1 灰色 砂泥 φ4~8cmの礫含む
- 11 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
- 12 5Y4/1 灰色 シルト
- 13 7.5Y4/1 灰色 シルト 貝殻含む
- 14 7.5Y4/1 灰色 シルト
- 15 10Y5/1 灰色 砂泥 φ1~3cmの礫微量含む
- 16 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 φ1~3cmの礫微量含む
- 17 7.5Y5/1 灰色 シルト
- 18 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 粗砂・φ0.5~1cmの礫多量含む
- 19 5Y4/1 灰色 シルト φ3~5cmの礫微量含む

※ A-A'は図版4・5に対応

溝30・50・255南北セクション



溝30

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト + 2.5Y4/4 オリーブ褐色 シルトを斑状に含む
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 貝殻多量含む
- 3 5Y4/1 灰色 シルト
- 4 7.5Y4/1 灰色 シルト 5Y5/3 灰オリーブ シルトブロック含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 シルト φ0.5~5cmの礫少量含む
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト 貝殻少量含む

溝50

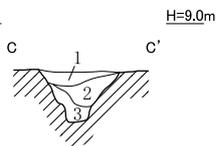
- 7 2.5Y5/1 黄褐色 砂泥 φ0.5~1cmの礫含む
- 8 5Y5/3 灰オリーブ色 シルト
- 9 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥

溝255

- 10 7.5Y4/1 灰色 泥砂 φ0.5~2cmの礫多量含む しまり有
- 11 N3/1 暗灰色 シルト
- 12 N4/1 灰色 シルト
- 13 7.5Y4/1 灰色 シルト φ0.5~1cmの礫少量含む
- 14 7.5Y4/1 灰色 シルト
- 15 7.5Y4/1 灰色 砂泥 φ0.5~1cmの礫少量含む
- 16 7.5Y4/1 灰色 砂泥 φ3~10cmの礫・貝殻微量含む
- 17 10YR4/1 灰色 砂泥
- 18 2.5Y4/2 暗灰黄色 泥砂 粗砂・φ0.5~1cmの礫多量含む

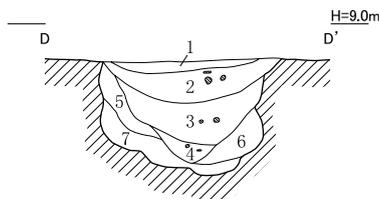
※ B-B'は図版4・5に対応

溝331北セクション



- 1 2.5Y4/1 暗灰黄色 砂泥 炭少量含む
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 炭少量含む
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 シルト

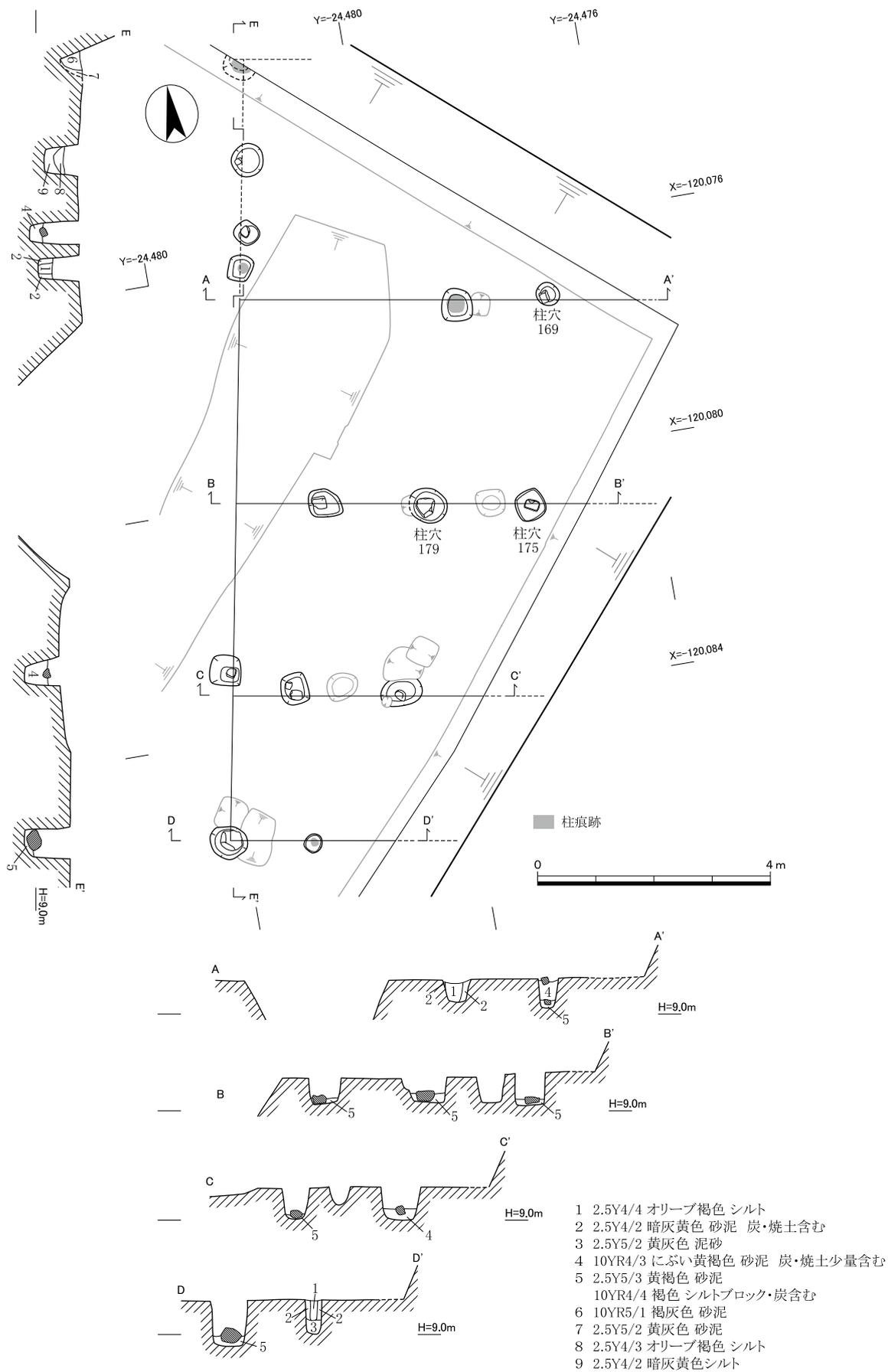
溝331南セクション



- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 φ0.5~5cmの礫・土器片少量含む
- 3 2.5Y4/1 黄灰色 シルト φ0.5~5cmの礫・土器片少量含む
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 シルト φ0.5~3cmの礫・土器片少量含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 炭少量含む
- 6 2.5Y3/2 黒褐色 シルト
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂 + 2.5Y4/1 黄灰色 シルト含む

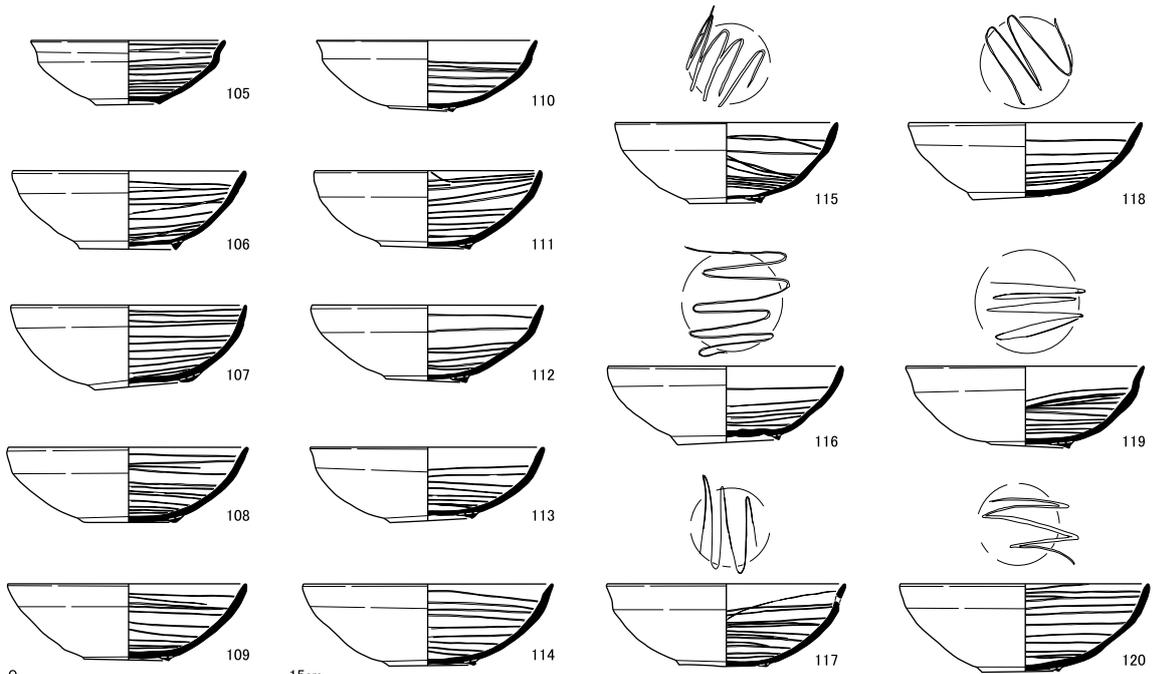
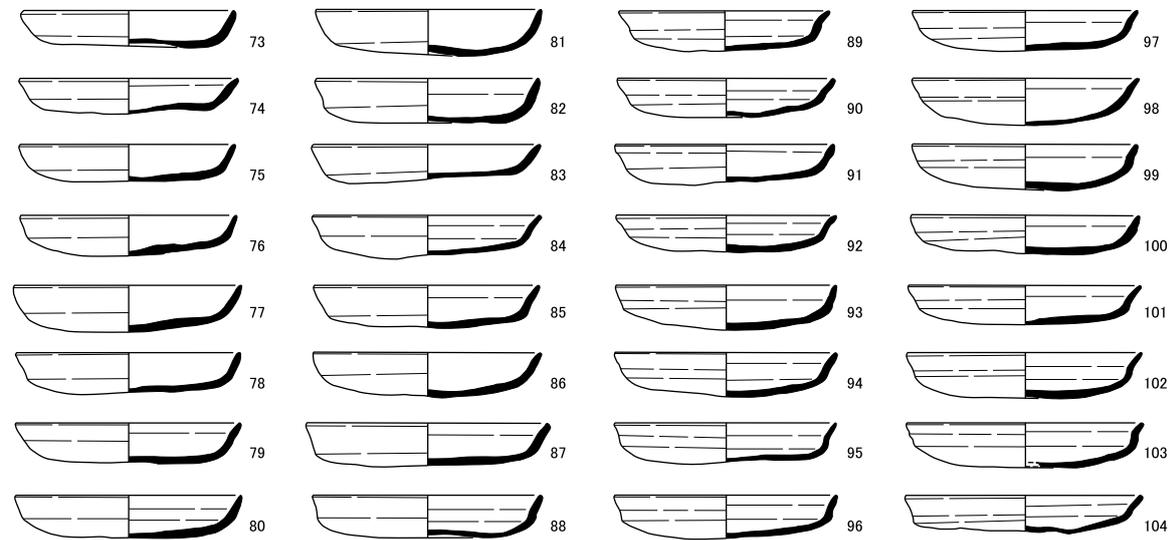
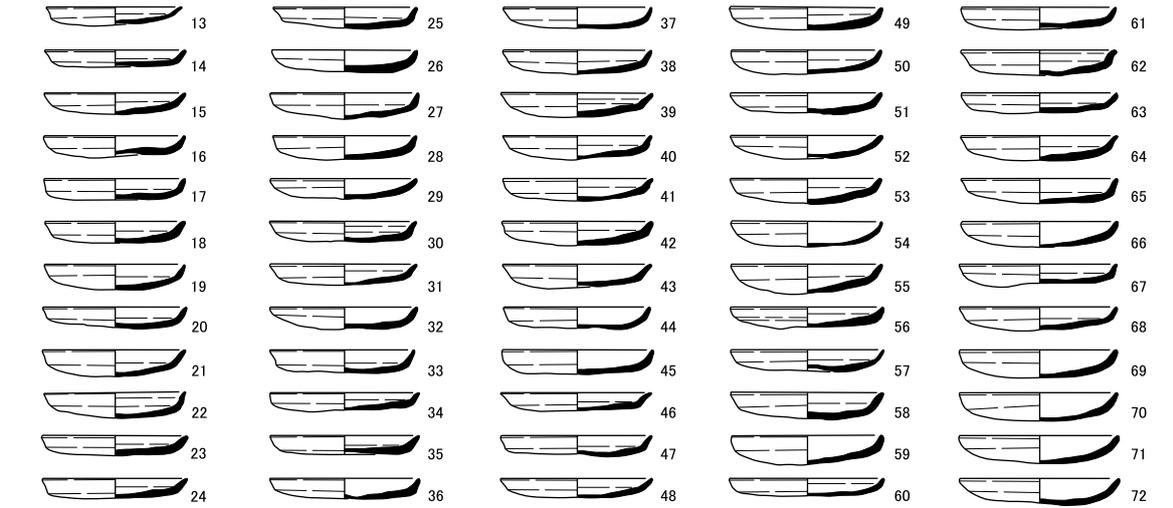
※ C-C'・D-D'は図版4に対応





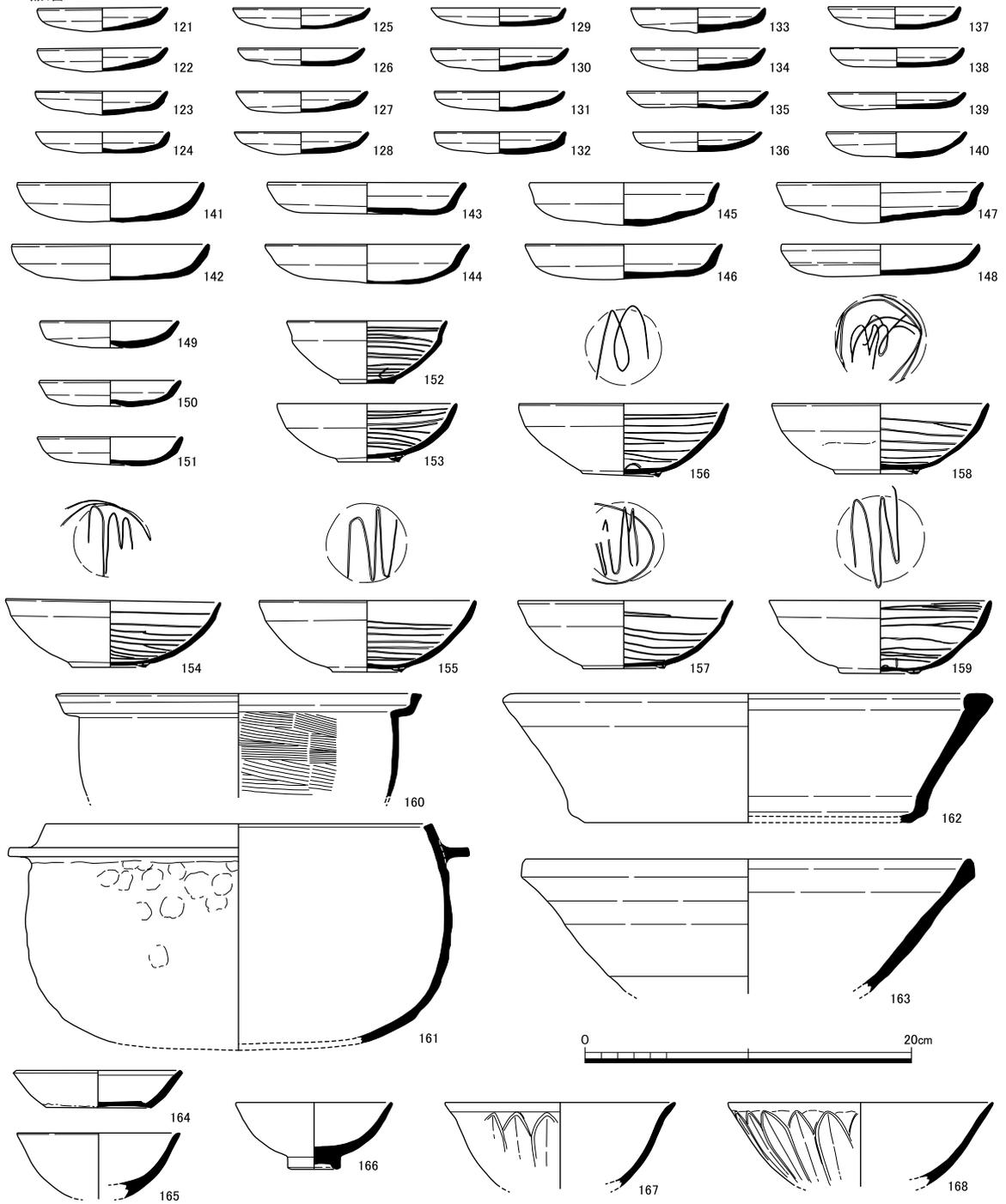
建物190実測図 (1 : 100)

井戸44

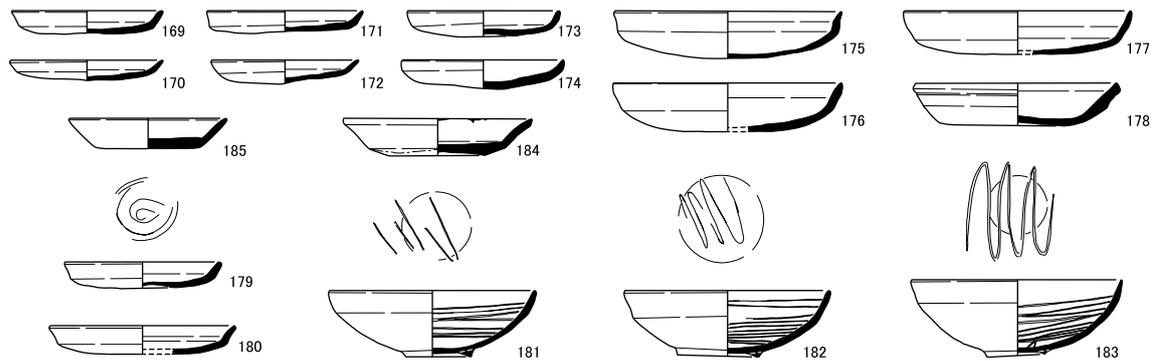


井戸44出土土器実測図 (1 : 4)

土器溜100

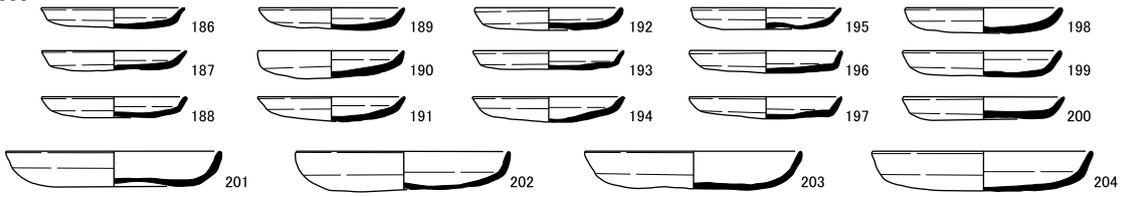


土坑513

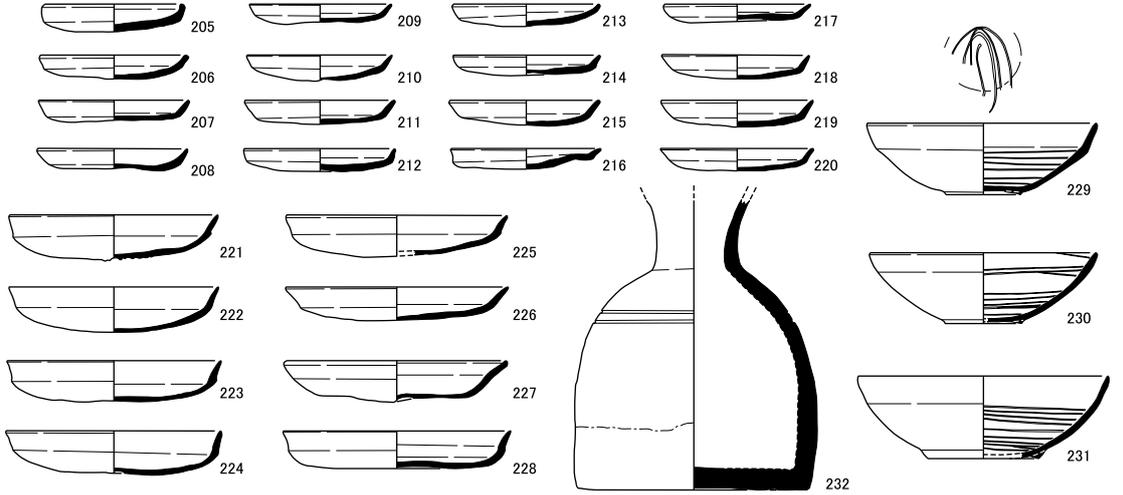


土器溜100、土坑513出土土器実測図(1:4)

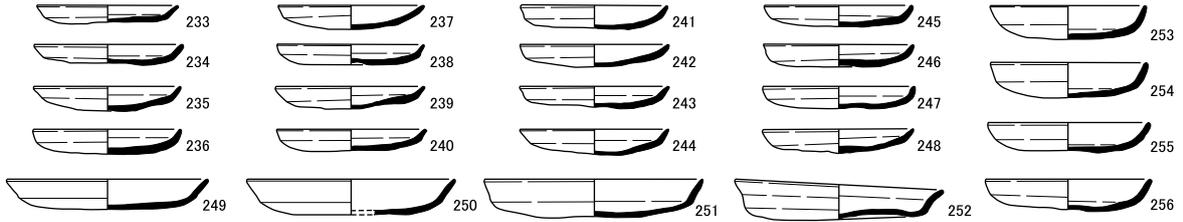
墓555



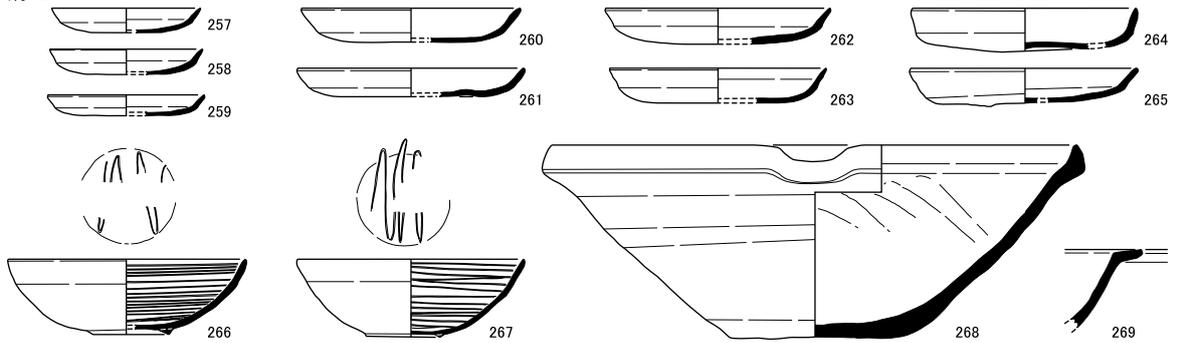
墓556



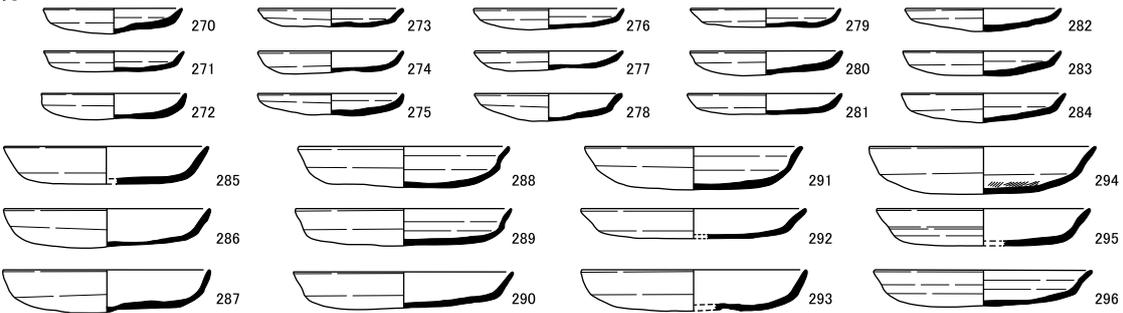
墓557



溝40

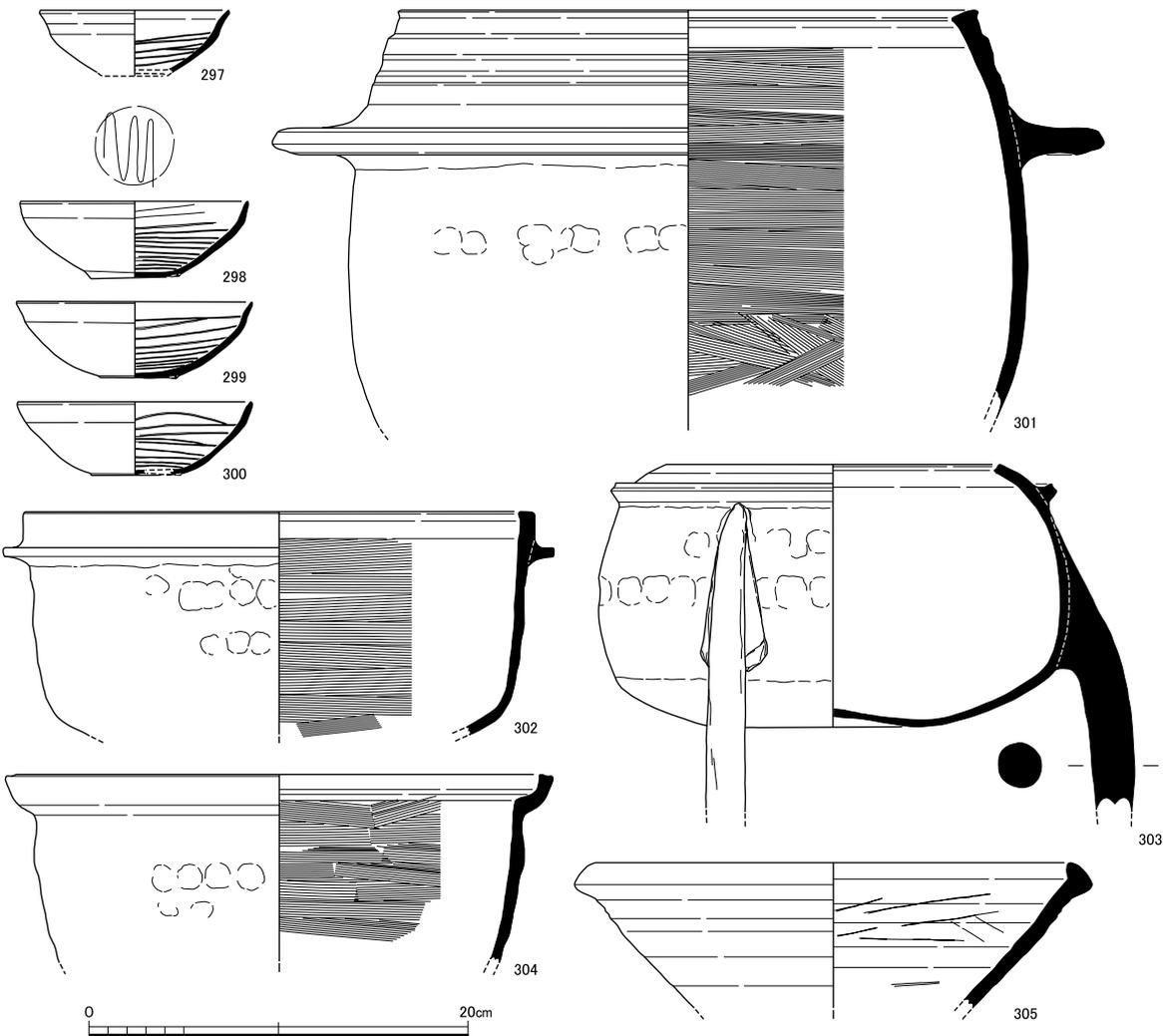


土坑400

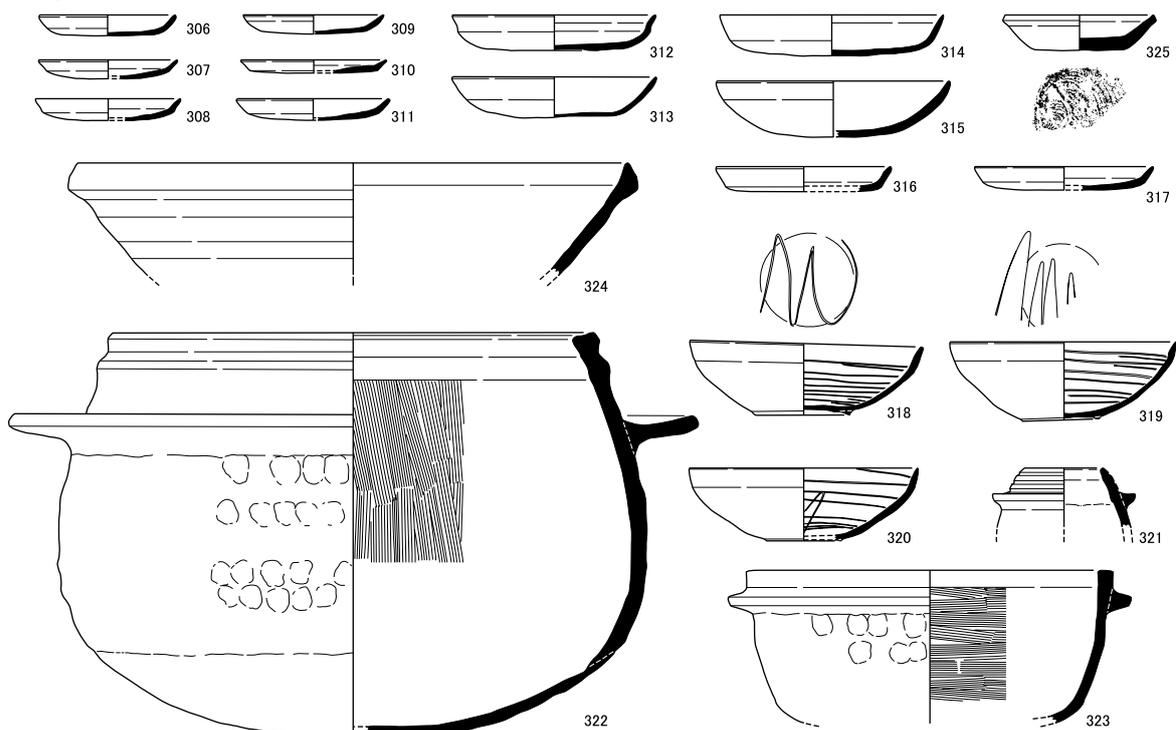


墓555·556·557、溝40、土坑400出土土器实测图（1：4）

土坑400

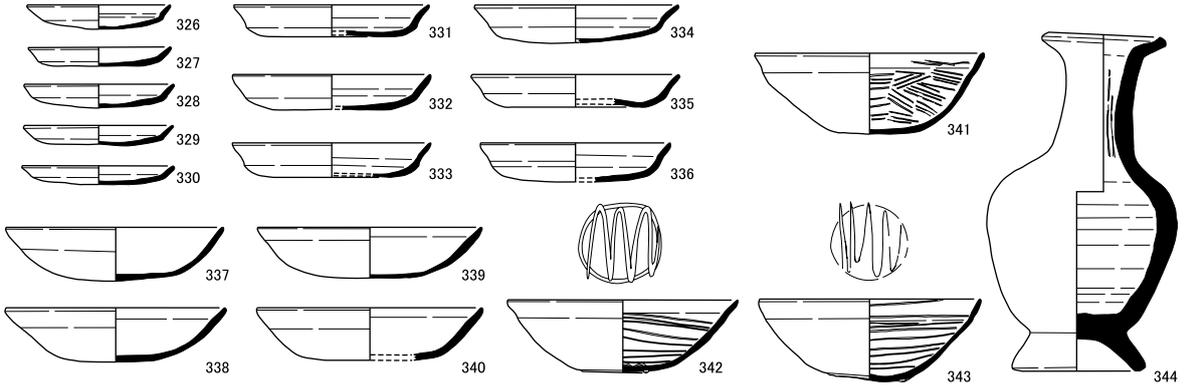


土坑101

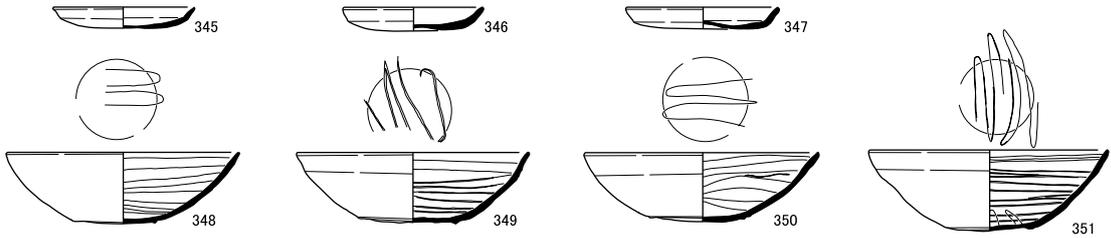


土坑400·101出土土器实测图(1:4)

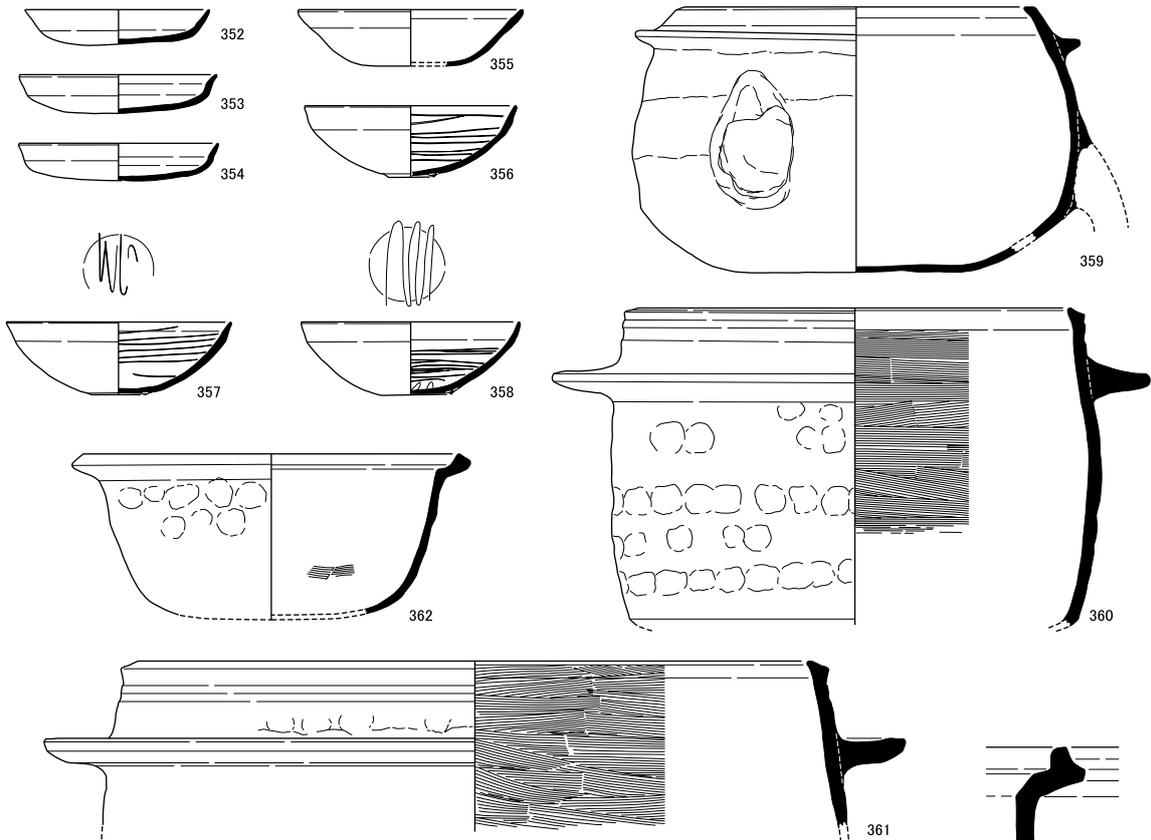
溝340



土坑352



溝467

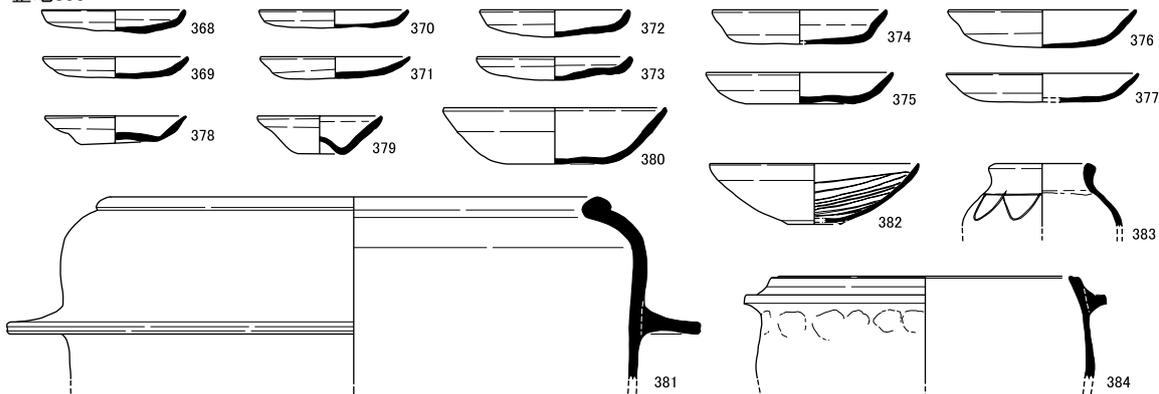


土坑275

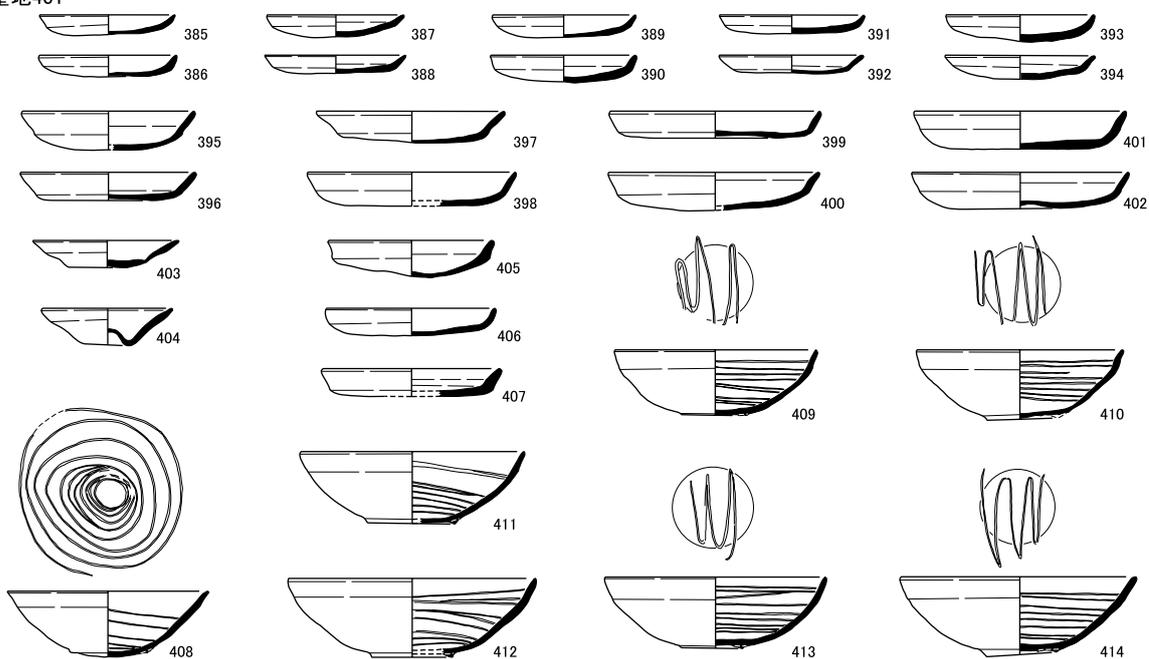


溝340・467、土坑352・275出土土器実測図（1：4）

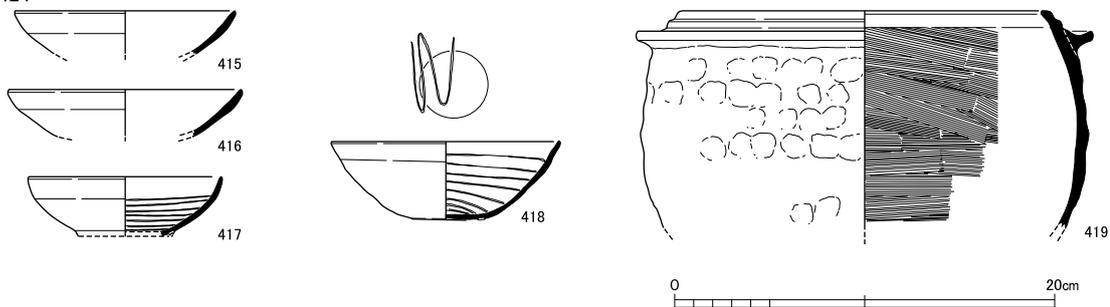
整地399



整地401

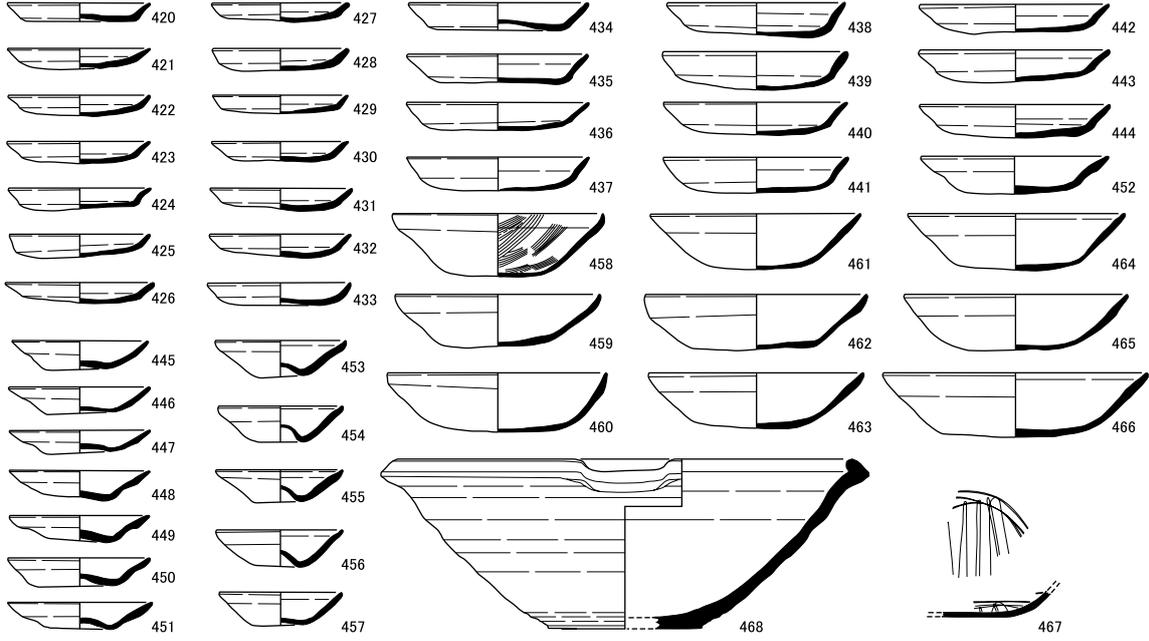


溝424

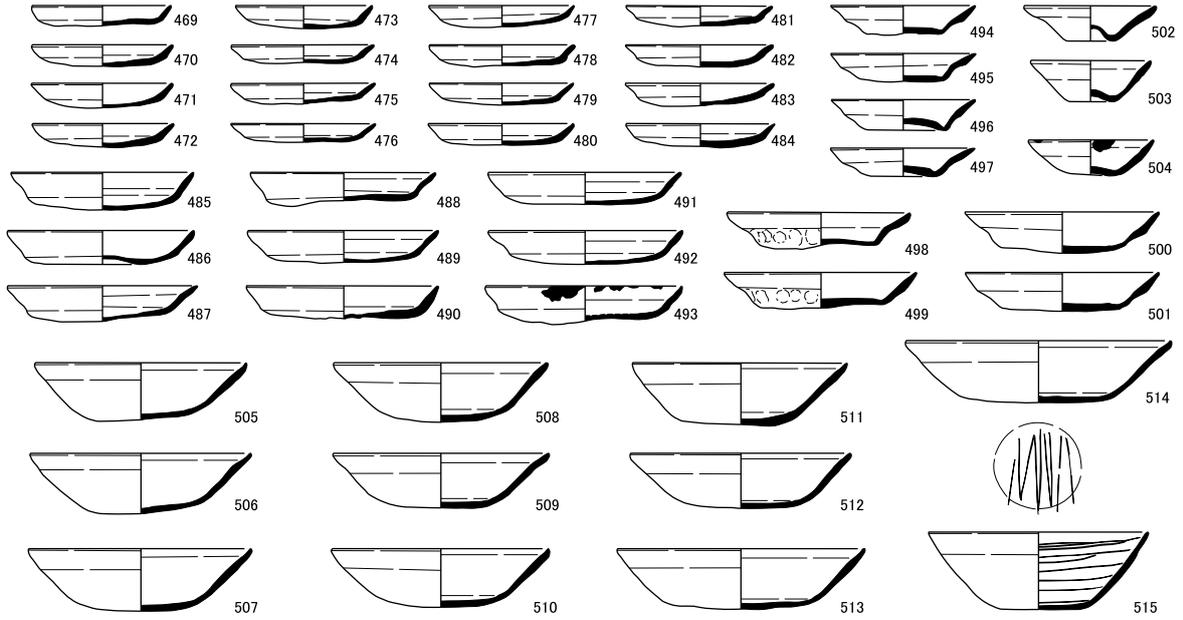


整地399・401、溝424出土土器実測図（1：4）

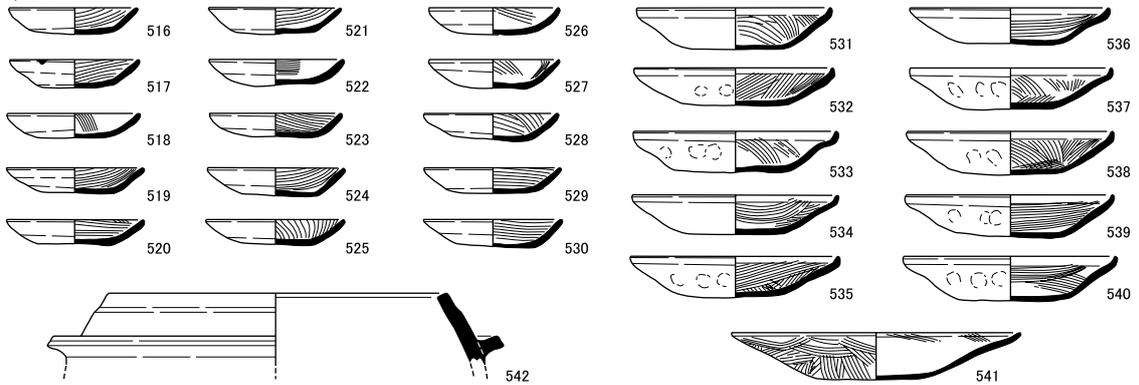
墓393



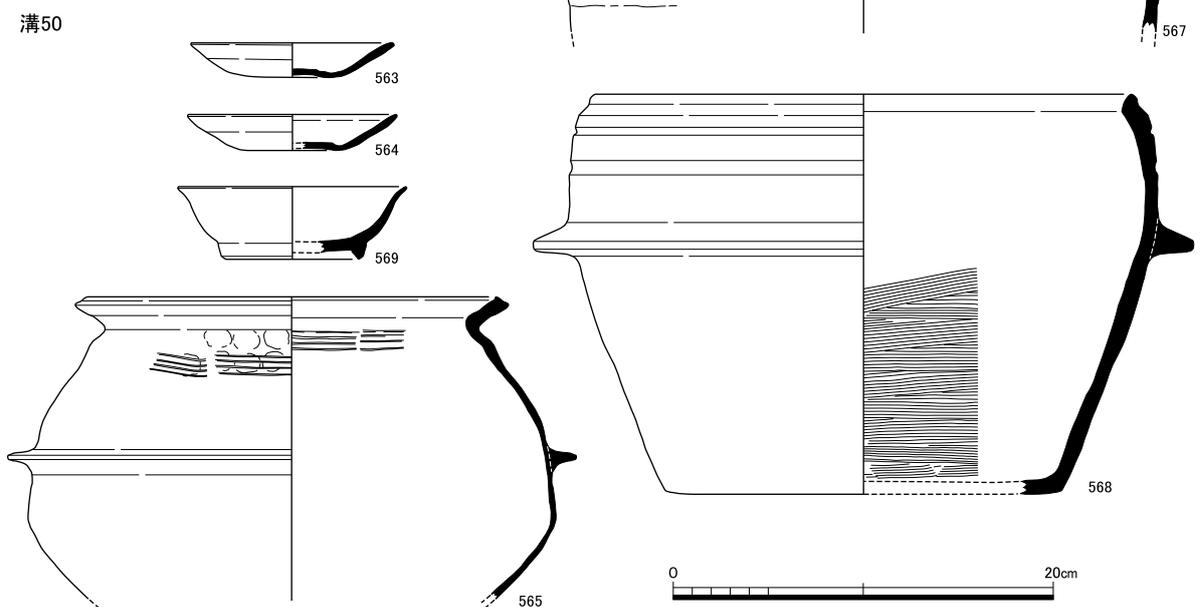
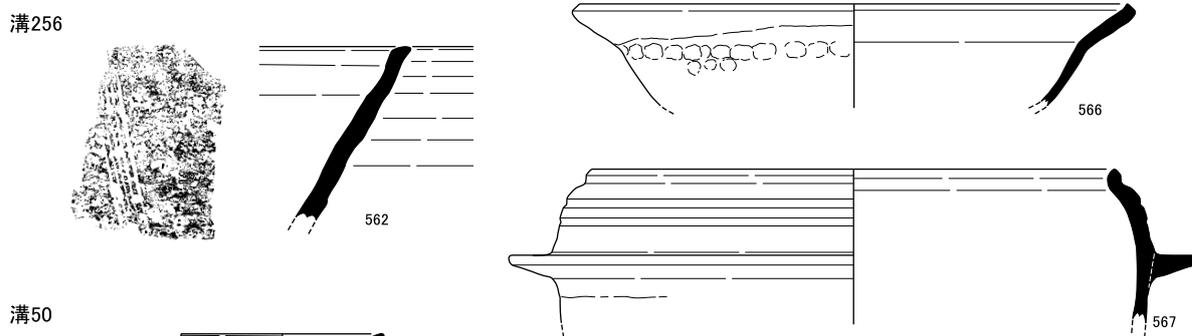
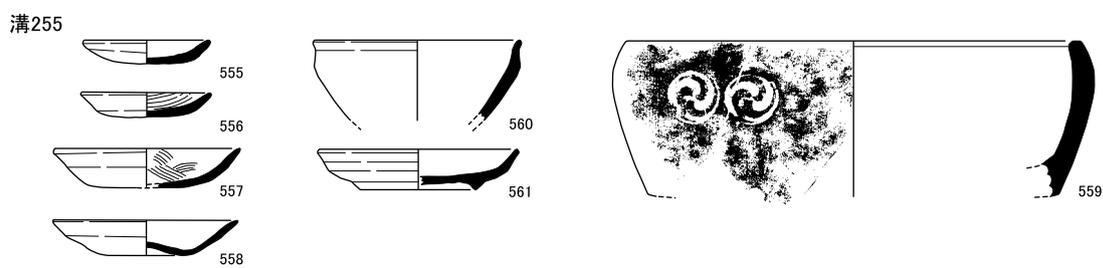
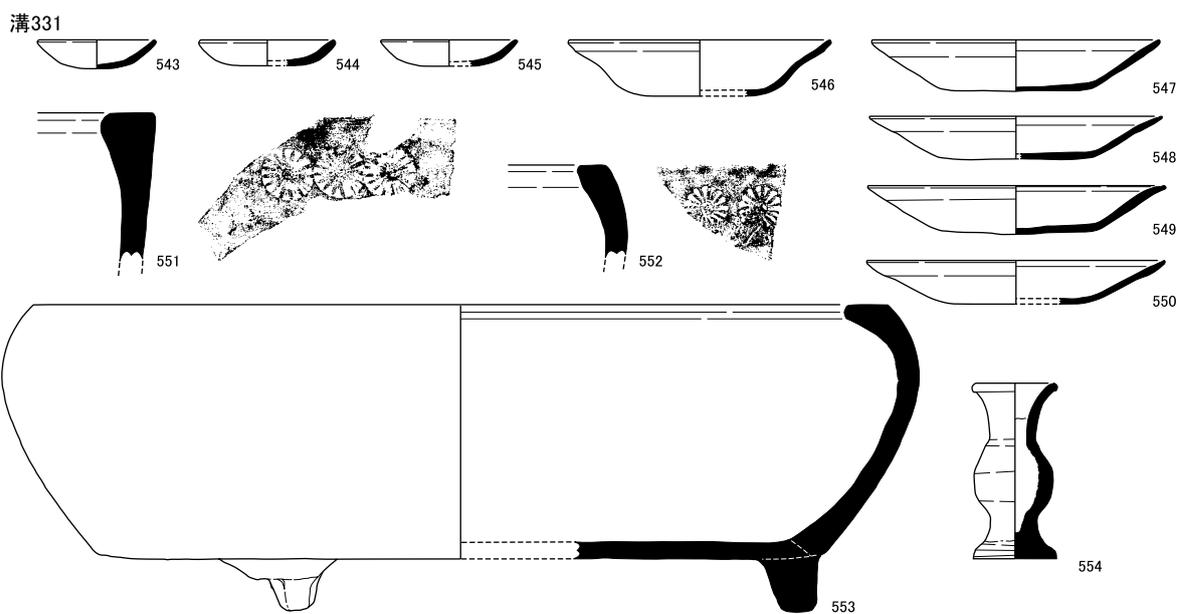
墓402



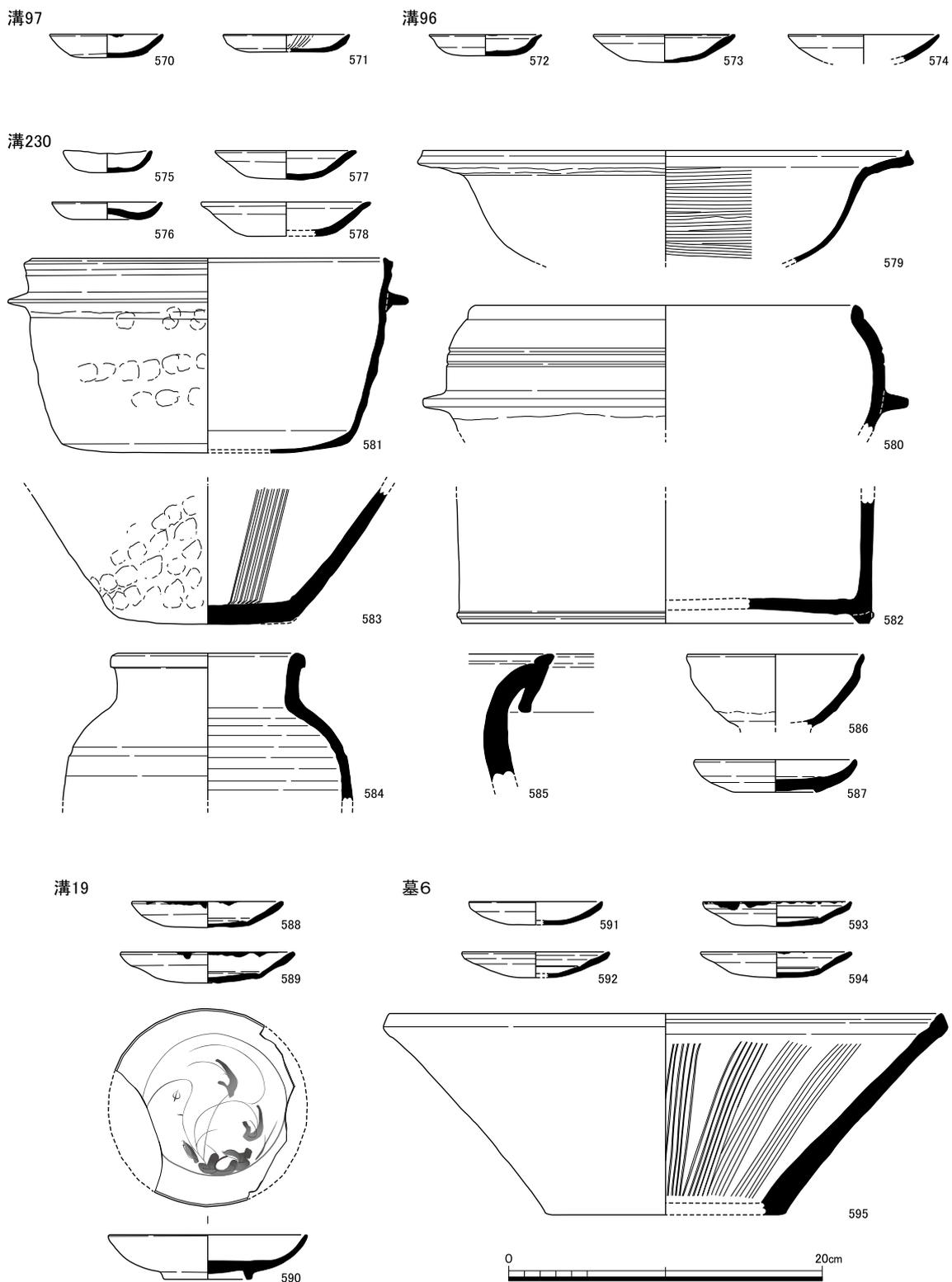
柱穴155



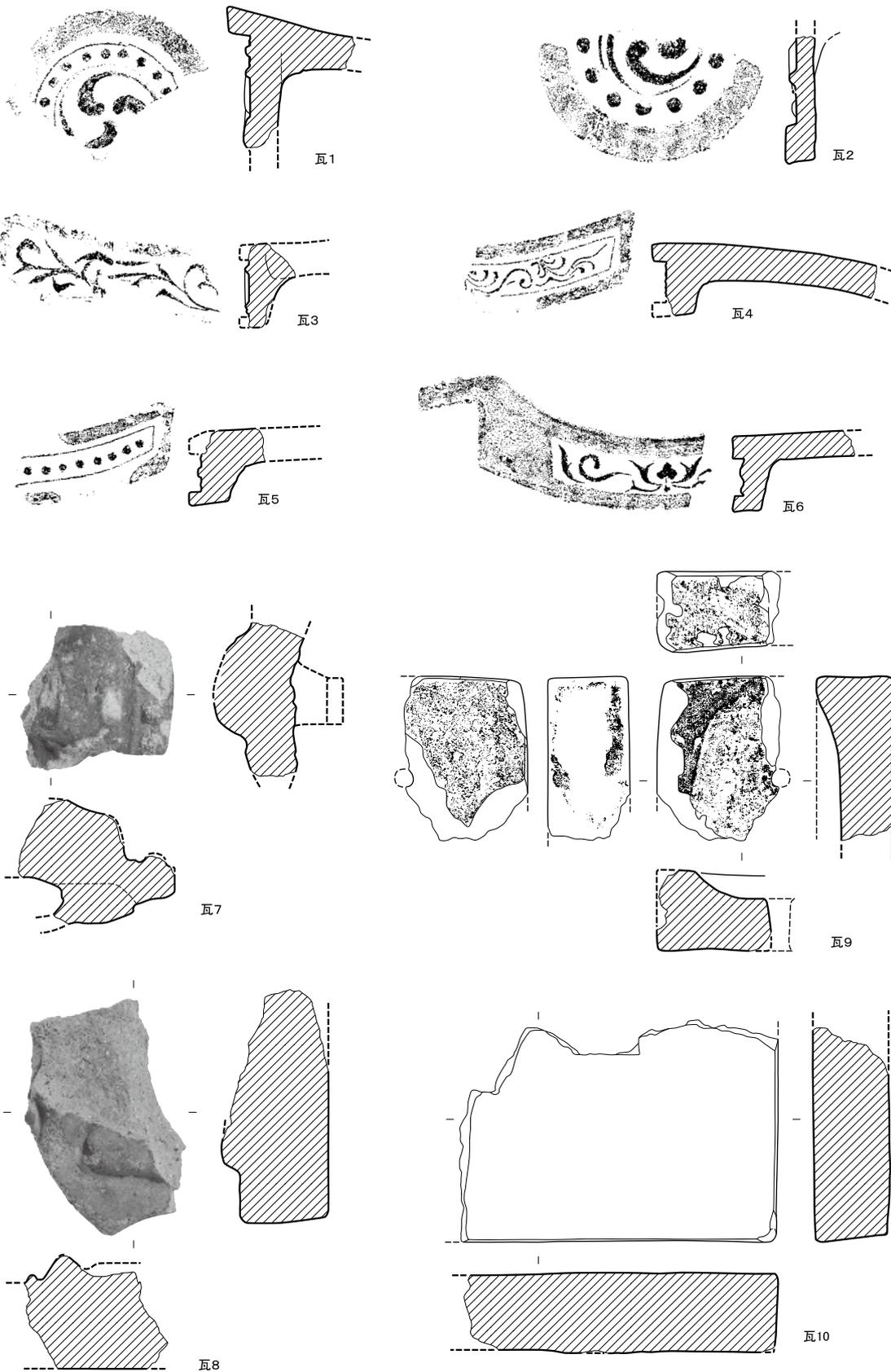
墓393·402、柱穴155出土土器实测图（1：4）



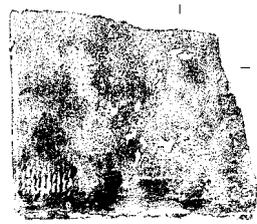
溝331・255・256・50出土土器実測図(1:4)



溝97・96・230・19、墓6出土土器実測図（1：4）



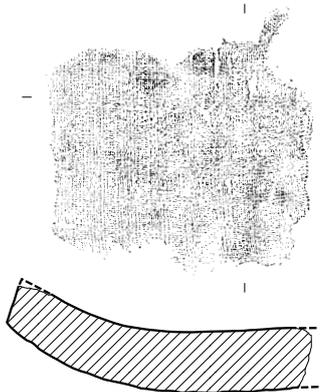
瓦類拓影及び実測図1 (1 : 4)



瓦11



瓦12



瓦13



瓦11~13(1:4)



瓦14



瓦15



瓦16



瓦17



瓦18



瓦19



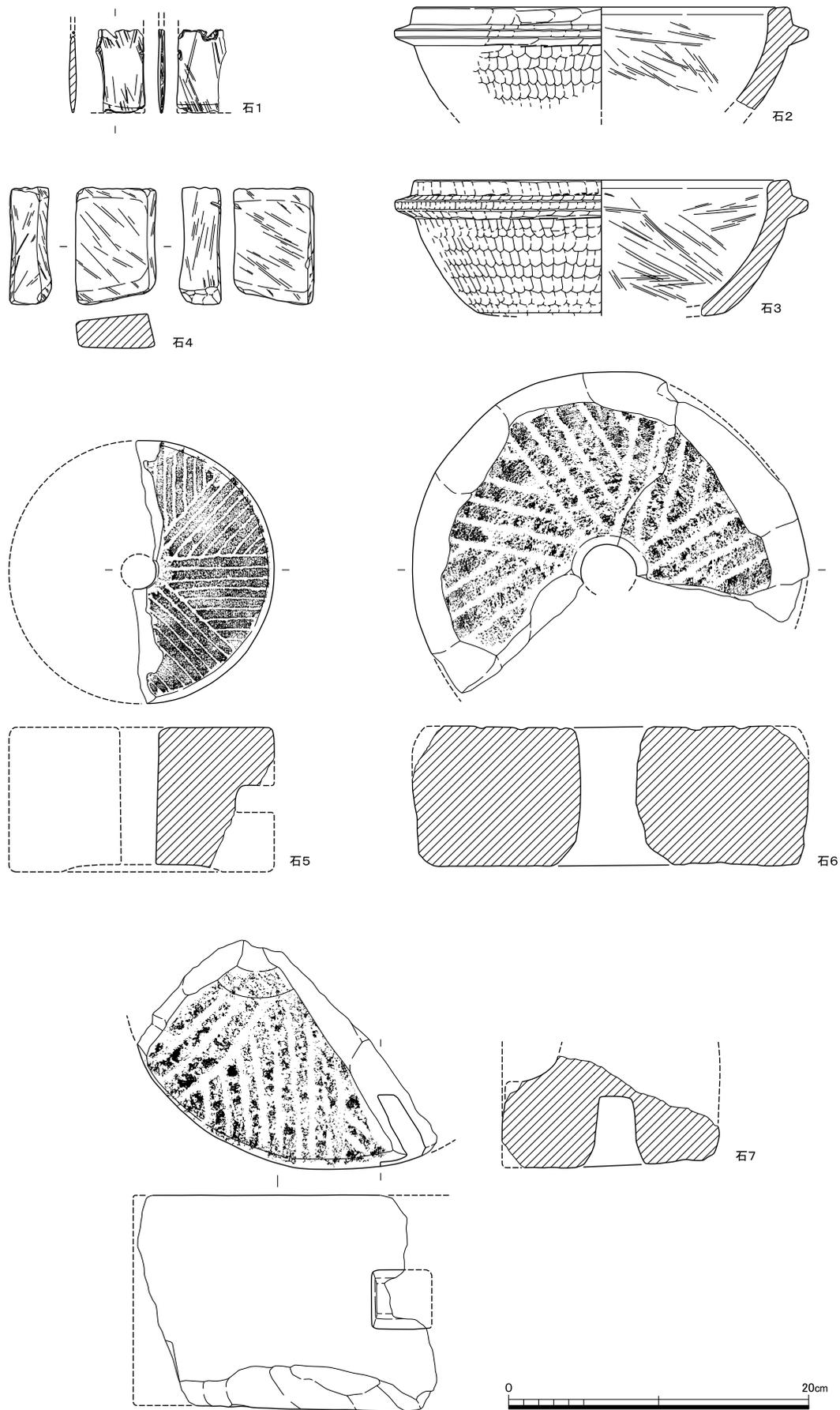
瓦20



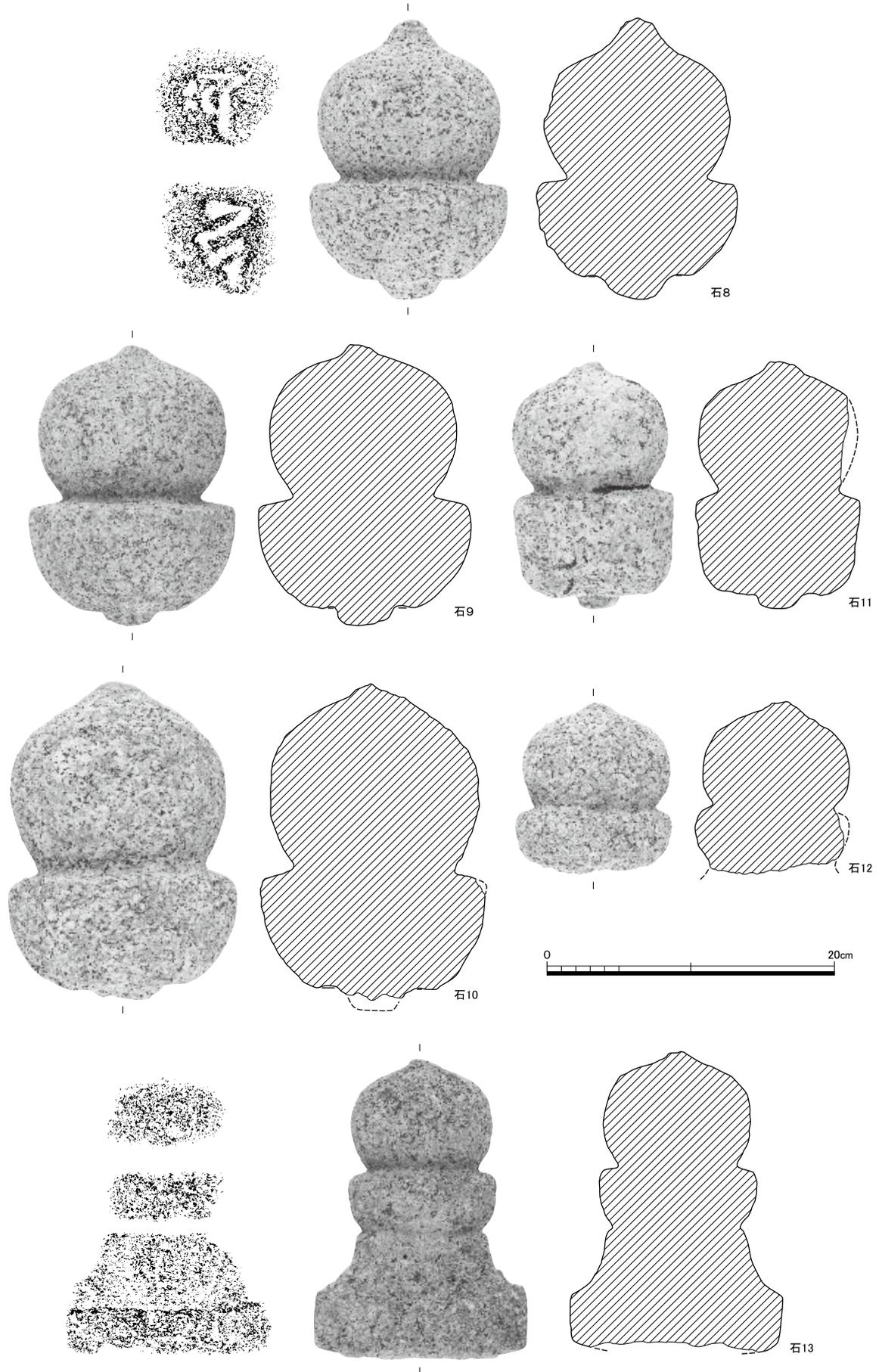
瓦21



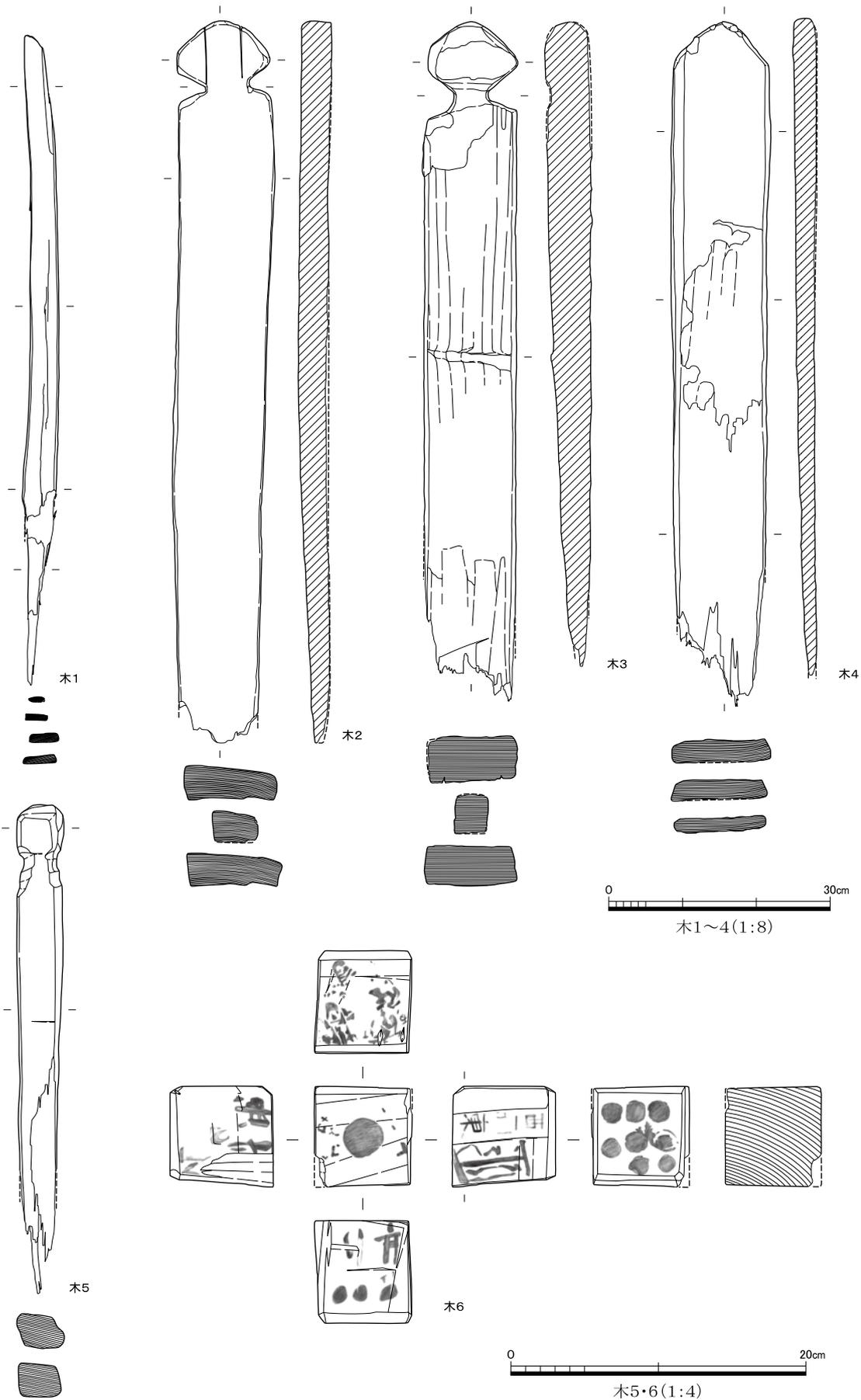
瓦14~21(1:2)



石器・石製品拓影及び実測図1 (1 : 4)



石製品拓影及び実測図2 (1 : 4)



木製品実測図 (1 : 8、1 : 4)



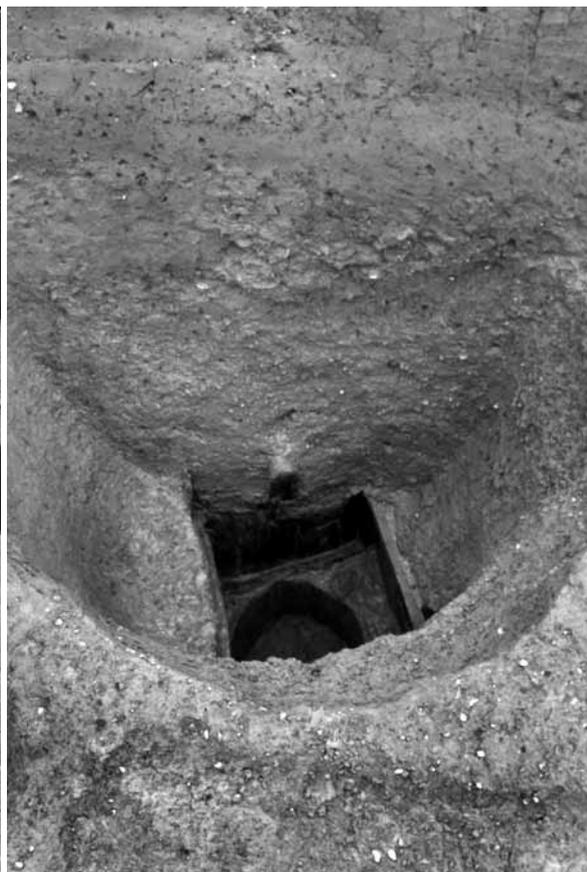
1 1区第4面全景（東から）



2 建物108・土器溜100（北東から）



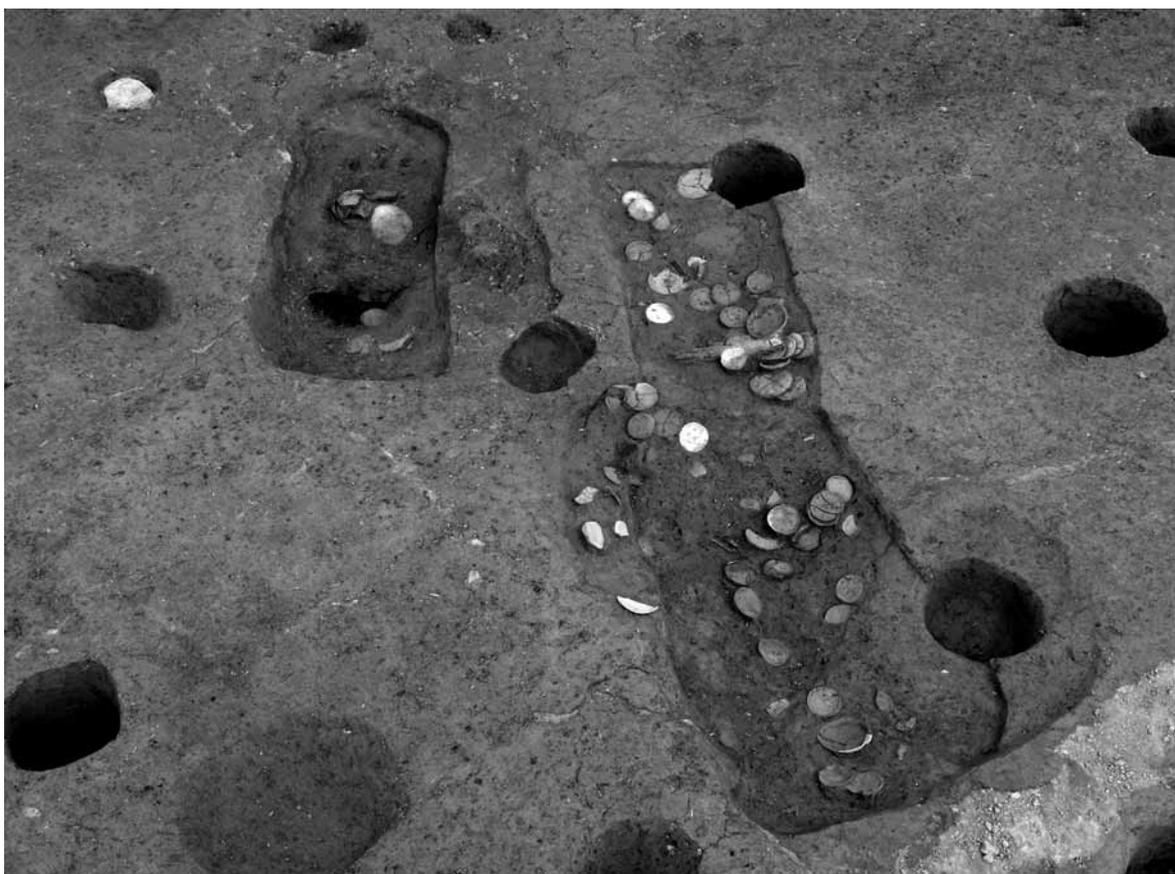
1 井戸44土器出土状況（北東から）



2 井戸44（北東から）



3 井戸44半截状況（北東から）



1 墓555・556・557（北西から）



2 墓555（南東から）



3 墓556（南東から）



1 2区第3面全景（北東から）



2 2区第3面北東部（西から）



1 水溜390 (南西から)



2 水溜390半裁状況 (北から)



3 墓393 (東から)



1 土坑257 (北東から)



2 土坑275 (東から)



3 土坑385 (西から)



4 墓402半裁状況 (南から)



5 建物363:柱穴458 (南東から)



1 2区第2面全景（北東から）



2 溝230・255断面（南から）



1 溝50 (西から)



2 溝331 (南西から)



3 柱穴155 (西から)



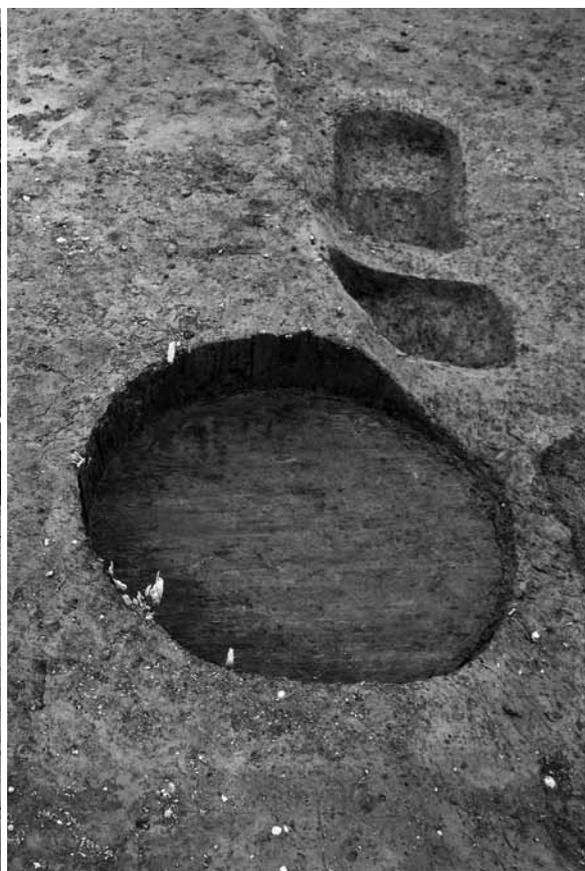
4 柱穴214 (東から)



1 1区第1面南東部（北西から）



2 墓6（北から）



3 土坑116（北東から）



1 2区第1面（南東から）



2 2区第1面全景（北東から）



1 建物190 (北から)



2 建物190：柱穴179 (南から)



3 建物190：柱穴175 (北から)



1 溝30・230合流部（北東から）



2 溝230断面（南西から）



3 集石330（北東から）



井戸44、土器溜100出土土器



土坑513、墓555·556·557出土土器



溝40、土坑400出土土器



342



344



341



338



325



318



322

土坑101、溝340出土土器



溝467、整地399・401出土土器



墓393・402出土土器



525



534



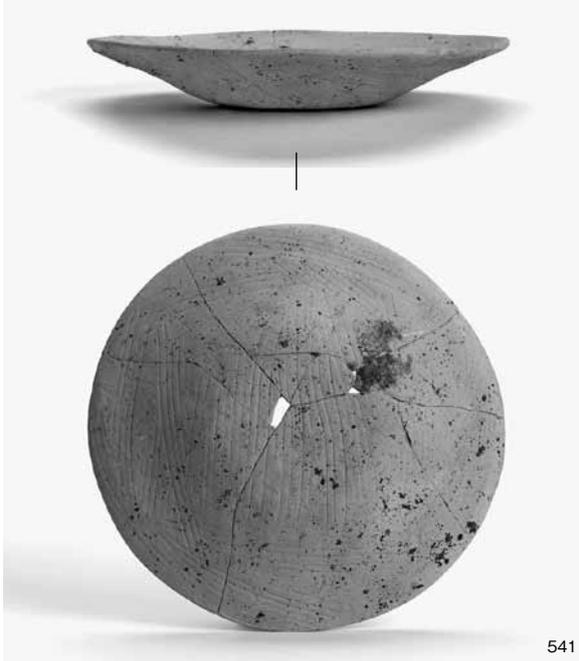
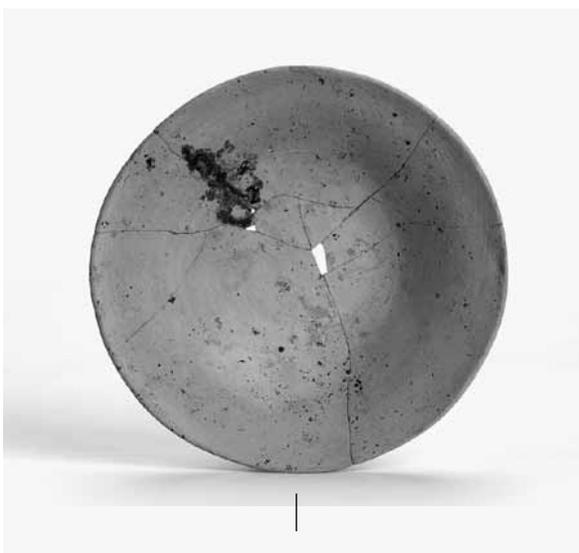
540



547



549



541



543

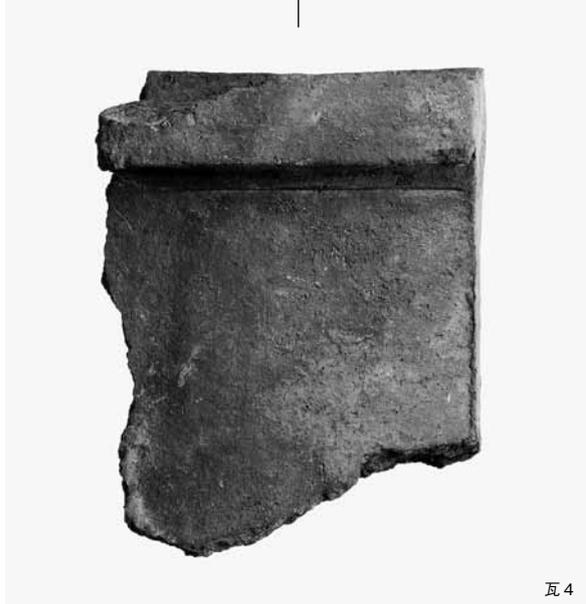


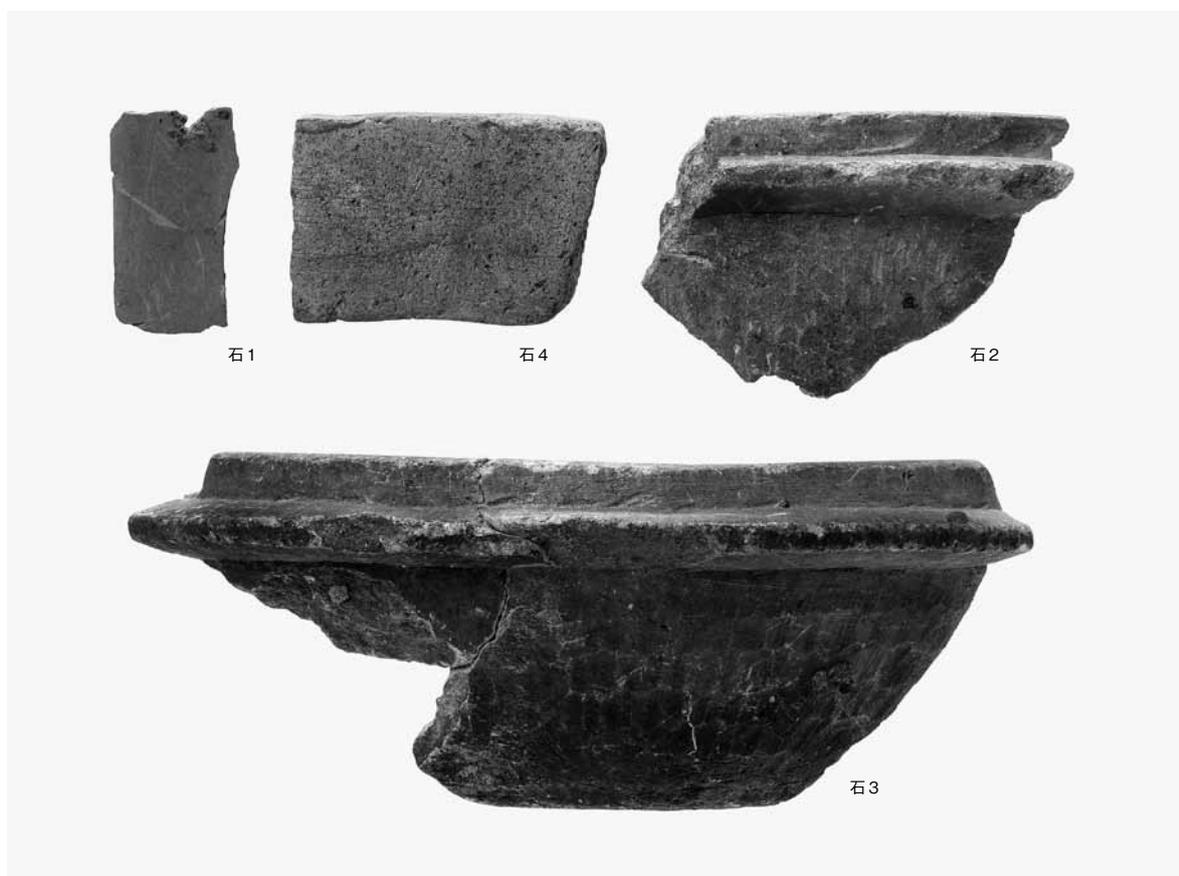
554

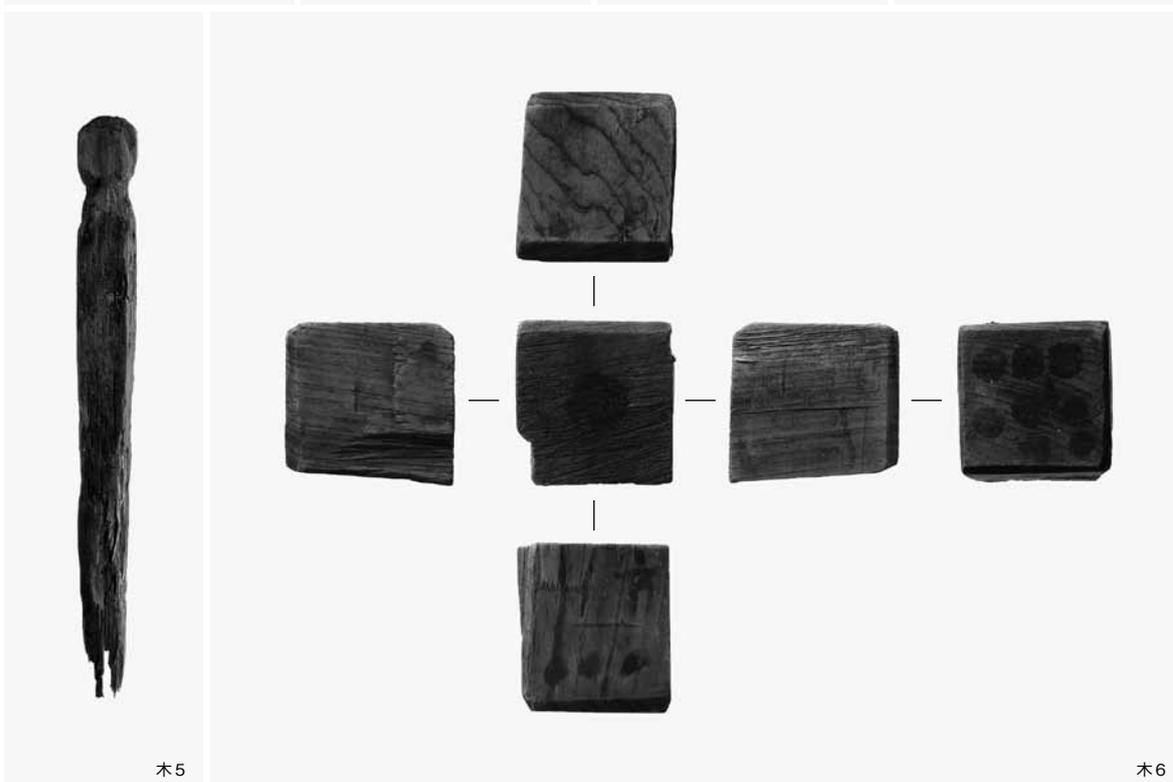
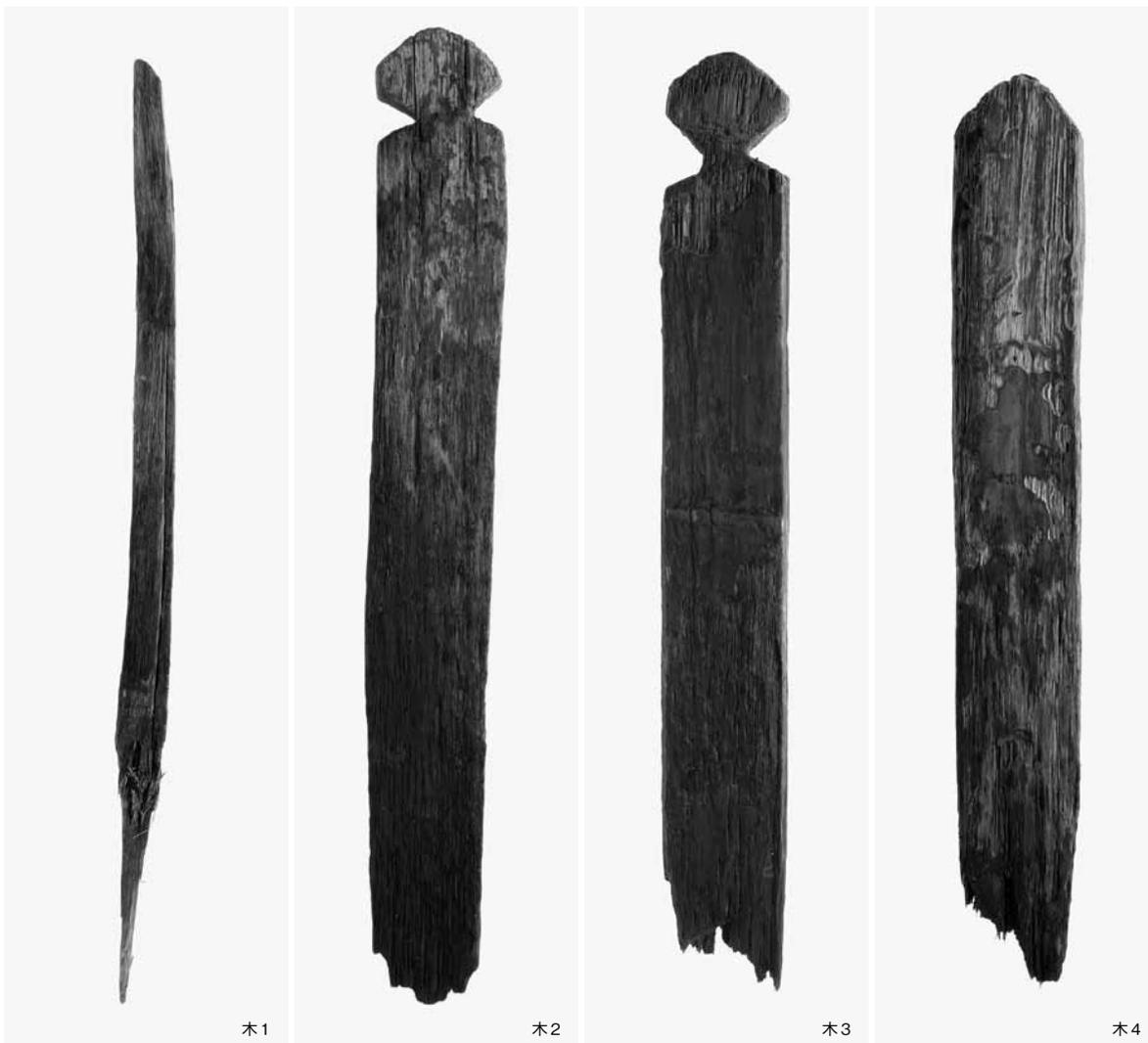
柱穴155、溝331出土土器



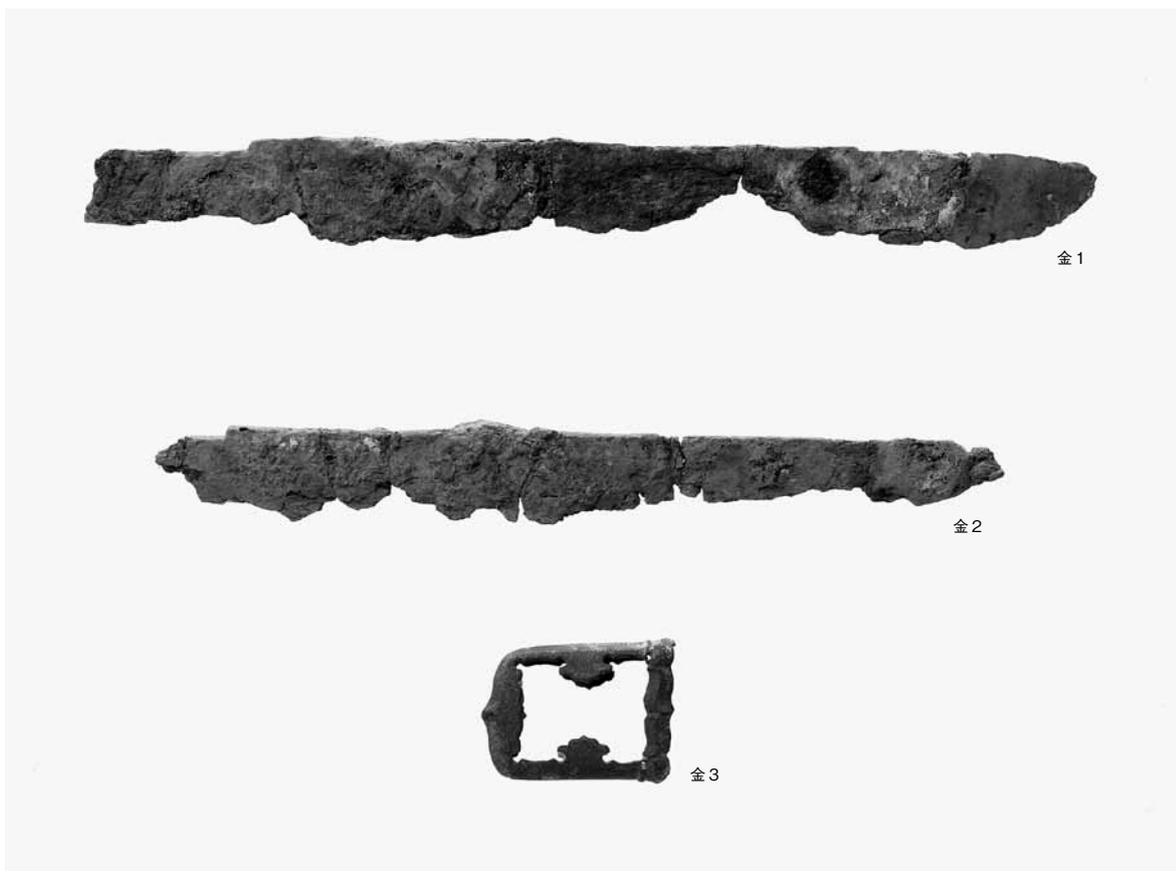
溝255・50・230・19出土土器



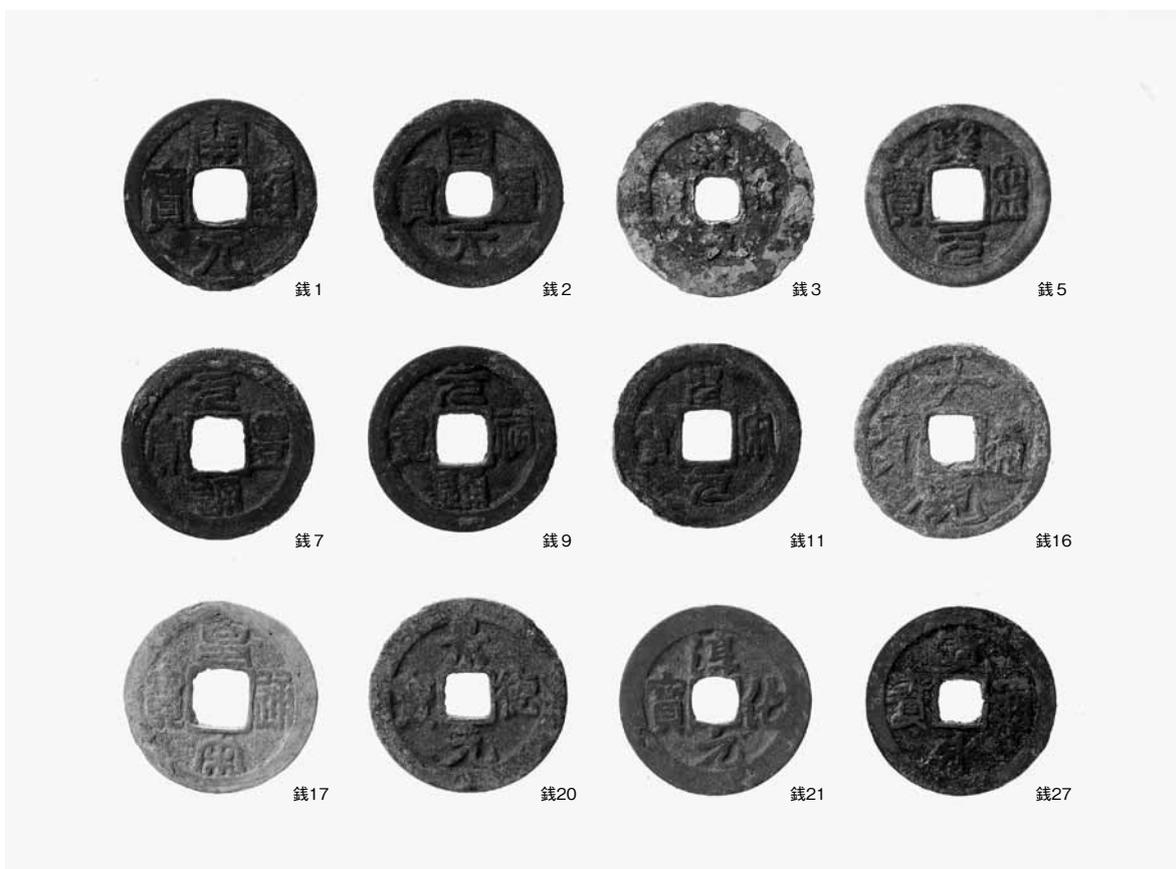




木製品



1 金属製品



2 錢貨

報 告 書 抄 録

ふりがな	とみのもりじょうあと							
書名	富ノ森城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2020-6							
編著者名	中谷正和・伊藤 潔・南 孝雄							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2021年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみのもりじょうあと 富ノ森城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よこおおじろくたんはた 横大路六反畑 ちない 地内	26100	1189	34度 55分 01秒	135度 43分 54秒	2020年1月 17日～2020 年7月17日	1,652m ²	都市計画 道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
富ノ森城跡	平城跡	鎌倉時代	建物、井戸、土坑、 土器溜、墓、溝	土師器、瓦器、須恵器、 輸入陶磁器、石製品、 木製品、金属製品		これまで未確認で あった、鎌倉時代 から安土桃山時代の 集落を確認した。		
		室町時代	建物、柵、墓、溝	土師器、瓦器、施釉陶 器、輸入陶磁器、瓦類、 石製品、銭貨				
		安土桃山時代	建物、柵、溝、 耕作溝、噴砂	土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、石製品、 金属製品				
		江戸時代	建物、溝、墓	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、石製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-6

富ノ森城跡

発行日 2021年2月26日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961